

# 矢倉口遺跡発掘調査報告書

—国道1号京滋バイパス関連遺跡発掘調査報告書第3冊—

1987. 3

滋賀県教育委員会

草津市教育委員会

滋賀県文化財保護協会

# 矢倉口遺跡発掘調査報告書

—国道1号京滋バイパス関連遺跡発掘調査報告書第3冊—

1987. 3

滋賀県教育委員会  
草津市教育委員会  
財団 法人 滋賀県文化財保護協会

## 序

国道1号京滋バイパス建設に伴う埋蔵文化財の調査は、本年度実施した、笠山南遺跡をもって、すべて完了しました。そして現在、その成果を順次整理して、報告書の刊行をすすめているところでありますが、このたび、昭和54年度から昭和57年度まで、4ヶ年をかけて現地調査を実施した、草津市矢倉口遺跡の調査成果がまとまり、刊行のはこびとなりました。

矢倉口遺跡は、調査時より、大規模な倉庫群の検出、木省、尺、檜扇などの出土により、その性格が注目されたところでありますが、その後の周辺地域における発掘調査の進捗により、東海道の要衝に所在する、規格性をもつ官衙的遺跡群としての性格が、さらに強まりつつあるところです。本報告が、今後の調査・研究の進展に寄与することを希望する次第であります。

昭和62年3月

滋賀県教育委員会

教育長　飯　田　志農夫

## 例　　言

1. 本書は一般国道（京滋バイパス）建設工事に伴う草津市矢倉口遺跡の発掘調査報告書で、昭和54年度から昭和57年度に発掘調査を、昭和59年度から昭和61年度に整理したものである。
2. 本調査は建設省滋賀国道工事事務所からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、勧滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては国道1号線の測量点No474（H. 100.867）を基準としている。
4. 本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長 服 部 正  
部 長 補 佐 田 口 宇一郎  
埋蔵文化財係長 林 博 通  
主 任 技 師 用 田 政 晴  
管理係主任主事 山 木 徳 横

勧滋賀県文化財保護協会

理 事 長 南 光 雄  
事 務 局 長 中 島 良 一  
埋蔵文化財課長 近 藤 滋  
調 査 二 係 長 大 橋 信 弥  
総 務 課 長 山 下 弘  
主 任 主 事 立 入 裕 子

5. 本書の編集および執筆は、大橋のほか、草津市教育委員会社会教育課技師谷口智樹、栗東町文化体育振興事業団技師平井寿一、同大崎隆志があたり、文末に分担を明記した。
6. 出土遺物や写真、図面については滋賀県教育委員会で保管している。

# 目 次

## 序

## 例 言

I.はじめに.....	1
II.調査経過.....	2
III.検出遺構.....	11
1.特別地区.....	11
2. Z地区.....	15
3. A地区.....	15
4. B地区.....	23
5. C地区.....	30
6. D地区.....	38
7. E地区.....	51
8. F地区.....	69
9. Z地区拡張部.....	70
IV.出土遺物.....	72
1.土器類.....	72
2.各遺構の土器.....	82
3.大器・木製品.....	88
4.錢貨・鉄製品.....	89
V.考察.....	90
1.遺物.....	90
2.遺構.....	92

## 挿 図 目 次

第1図 矢倉口遺跡位置図	1
第2図 周辺遺跡分布図	2
第3図 トレンチ設定図	3
第4図 調査風景	5
第5図 A地区遺構検出状況	7
第6図 B・C地区調査状況	8
第7図 特別地区遺構配置図	12
第8図 Z地区遺構配置図	13
第9図 A地区遺構配置図	16
第10図 S B01～S B03平面実測図	18
第11図 S B04～S B09平面実測図	19
第12図 S B10～S B14平面実測図	20
第13図 周溝状遺構(S X04)平面実測図	23
第14図 B地区遺構配置図	24
第15図 周溝状遺構(S X05)平面実測図	25
第16図 S B15、S B17、S B21平面実測図	29
第17図 井戸(S E01)平面・断面実測図	31
第18図 C地区遺構配置図	32
第19図 S B19、S B20、S B22、S B23平面実測図	34
第20図 S B44～S B46平面実測図	35
第21図 井戸(S E02)平面・断面実測図	36
第22図 井戸(S E02)井枠実測図	37
第23図 掘立柱建物跡S B24平面実測図(D区)	40
第24図 掘立柱建物跡S B25平面実測図(D区)	41
第25図 掘立柱建物跡S B26平面実測図(D区)	42
第26図 掘立柱建物跡S B27平面実測図(D区)	43
第27図 掘立柱建物跡S B28平面実測図(D区)	44
第28図 掘立柱建物跡S B29平面実測図(D区)	45
第29図 掘立柱建物跡S B30平面実測図(D区)	46

第30図 挖立柱建物跡 S B31平面実測図(D区).....	47
第31図 井戸跡 S E 05遺構平面及び断面図.....	49
第32図 井戸跡 S E 05第17層遺物出土状況図.....	50
第33図 挖立柱建物跡 S B32平面実測図(D区).....	53
第34図 挖立柱建物跡 S B33平面実測図.....	54
第35図 挖立柱建物跡 S B34平面実測図.....	55
第36図 挖立柱建物跡 S B35平面実測図.....	56
第37図 挖立柱建物跡 S B36平面実測図.....	57
第38図 挖立柱建物跡 S B37平面実測図.....	58
第39図 挖立柱延跡 S B39平面実測図.....	59
第40図 井戸跡 S E 06遺構平面図及び断面図.....	61
第41図 井戸跡 S E 06遺物出土状況図①(IV層-23層) .....	63
第42図 井戸跡 S E 06遺物出土状況図②(V層).....	66
第43図 S X23遺構平面図及び断面図.....	67
第44図 垂立柱建物跡 S B40平面実測図.....	70
第45図 遺構変遷図①.....	93
第46図 遺構変遷図②.....	97

#### 付図目次

- 付図 1 特別地区平面実測図
- 付図 2 Z 地区平面実測図
- 付図 3 A 地区平面実測図
- 付図 4 B 地区平面実測図
- 付図 5 C 地区平面実測図

## 図 版 目 次

- 図版一 遺構 1. B・C地区調査全景(北より)  
2. 特別地区全景(北より)
- 図版二 遺構 1. 特別地区全景(南より)  
2. Z地区中央近景(東より)
- 図版三 遺構 1. Z地区中央近景(西より)  
2. Z地区中央近景(東より)
- 図版四 遺構 1. Z地区西半遠景(北東より)  
2. Z地区東半近景(東より)
- 図版五 遺構 1. Z地区中央近景(東より)  
2. Z地区西半近景(南より)
- 図版六 遺構 1. Z地区SB01(南より)  
2. Z地区SB01(北より)
- 図版七 遺構 1. Z地区SB03(西より)  
2. Z地区SB03(東より)
- 図版八 遺構 1. Z地区SB02(東より)  
2. Z地区上坑上器出土状況
- 図版九 遺構 1. A地区東側試掘トレンチ(北より)  
2. B地区東側試掘トレンチ(北より)
- 図版十 遺構 1. B地区東側試掘トレンチ(北より)  
2. B地区東側試掘トレンチ(西より)
- 図版十一 遺構 1. B地区東側試掘トレンチ(南より)  
2. C地区東北端試掘トレンチ(北より)
- 図版十二 遺構 1. A地区全景(南より)  
2. A地区全景(南より)
- 図版十三 遺構 1. A地区東半全景(南より)  
2. A地区西半全景(南より)
- 図版十四 遺構 1. A地区遺構検出状況(北より)  
2. A地区遺構検出状況(北より)
- 図版十五 遺構 1. A地区遺構検出状況(南西より)

2. A地区遺構検出状況(南より)
- 図版十六 遺構 1. A地区S B 05近景(南より)  
2. A地区S B 05近景(南より)
- 図版十七 遺構 1. A地区S B 09遠景(北より)  
2. A地区S B 09近景(北より)
- 図版十八 遺構 1. A地区S B 11～S B 14近景(南より)  
2. A地区S B 14近景(南より)
- 図版十九 遺構 1. A地区S B 11～S B 13近景(南より)  
2. A地区S K 21土器出土状況(北より)
- 図版二十 遺構 1. A地区S K 09土器出土状況(北より)  
2. A地区S K 09上器出土状況(西より)
- 図版二十一 遺構 1. B地区全景(北より)  
2. B地区全景(北より)
- 図版二十二 遺構 1. B地区東半近景(北より)  
2. B地区西半近景(北より)
- 図版二十三 遺構 1. B地区S X 04、S X 05近景(北より)  
2. B地区S E 01近景(南より)
- 図版二十四 遺構 1. B地区S E 01近景(北より)  
2. B地区S E 01遺物出土状況(北より)
- 図版二十五 遺構 1. C地区全景(南東より)  
2. C地区全景(南東より)
- 図版二十六 遺構 1. C地区S B 22～S B 23・S E 02遠景(南より)  
2. C地区S B 44遠景(南より)
- 図版二十七 遺構 1. C地区S B 44近景(南より)  
2. C地区S B 23近景(南より)
- 図版二十八 遺構 1. C地区S B 44近景(南より)  
2. C地区S B 22近景(南より)
- 図版二十九 遺構 1. C地区S B 22近景(南より)  
2. C地区S B 45近景(東より)
- 図版三十 遺構 1. C地区S E 02全景(北より)  
2. C地区S E 02近景(南より)
- 図版三十一 遺構 1. C地区S E 02近景(南より)

2. C地区 S E 02近景(西より)
- 図版三十二 遺構 1. C地区 S E 02全景(南より)  
2. C地区 S E 02近景(南より)
- 図版三十三 遺構 1. D地区調査地遠景  
2. D地区遠景(南から)
- 図版三十四 遺構 1. D地区 S B 24  
2. D地区 S B 25
- 図版三十五 遺構 1. D地区 S B 26  
2. D地区 S B 27
- 図版三十六 遺構 1. D地区 S B 28  
2. D地区 S B 30
- 図版三十七 遺構 1. D地区 S B 31  
2. D地区 S E 05
- 図版三十八 遺構 1. D地区 S E 05土師器出土状況  
2. D地区 S E 05灰釉陶器出土状況
- 図版三十九 遺構 1. D地区 S E 05 山物  
2. D地区 S E 05 曲物
- 図版四十 遺構 1. D地区 S B 24上部器出土状況  
2. D地区 S D 07須恵器出土状況
- 図版四十一 遺構 1. E地区調査地遠景  
2. E地区全景(南から)
- 図版四十二 遺構 1. E地区 S B 32  
2. E地区 S B 33
- 図版四十三 遺構 1. E地区 S B 34  
2. E地区 S B 35
- 図版四十四 遺構 1. E地区 S B 36  
2. E地区 S B 37
- 図版四十五 遺構 1. E地区 S B 38  
2. E地区 S E 06
- 図版四十六 遺構 1. E地区 S E 06上部器出土状況  
2. E地区 S E 06曲物出土状況
- 図版四十七 遺構 1. F地区西部全景(南から)

2. F地区東部全景(南から)
- 図版四十八 遺構 1. G地区拡張部 S B40  
2. G地区拡張部南部全景
- 図版四十九 遺物 C002(S K07)、C005、C006、C007、C010(S K08)、H004、H012(S K07、S K08)、C012、C014(A地区包含層)、C035、C037、C039、C042、C044、C046(S K10)、C051(S K14)
- 図版五十 遺物 C053、C054(S K14)、H020(S B11)、C064、H022、H023(A地区柱穴内)、C123(B地区包含層)、C128(S D03)、C133、C135、C136、C137、C143(S D01)
- 図版五十一 遺物 C144、C150、C153(S D01)、C155(S X10)、C161、C162、C163、C165(B地区包含層)、H041、H043、H044、H047(S X 5 B)、H053(S X 5、4)、C168(S E01)
- 図版五十二 遺物 H058、C169、C170、C171(S E01)、C178(B地区包含層)、C202、C204(B地区包含層)、C214(C地区包含層)、A024、B004(C地区柱穴内)、C249、G003(S E02 I層)、C255(S E02 II層)、H018(S K10)
- 図版五十三 遺物 C254(S E02 II層)、C262、C263(S E02 II、IV層)、H073(S E02 I層)、H089、H088、H090、H093、H094、C268(S E02 III、IV層)、C273(C地区包含層)、Z003、Z005(小溝10)、Z030(小溝8)、C312(小溝29)
- 図版五十四 遺物 H123～H131、H134、H136、H137、H139、H142、H143、H150(S E05、17層(III層最上層))
- 図版五十五 遺物 H151～H153、H155～H163、H165～H168(S E05、17層(III層最上層))
- 図版五十六 遺物 H169～H172、H174、H176、H178～H180、H182～H184、H187～H180、H182～H184、H187、H193、H195、H203(S E05、17層(III層最上層))
- 図版五十七 遺物 H217～H221、B018、A056、A058(S E05、17層～20層(III層))
- 図版五十八 遺物 C346(S E05、1～9層(1層))、C354(S E05、10～16層(II層))、C374、C375、C388、C392、C395、C397(S E05、18～20層(III層))、C404(S D02)、C425、C426(S D01)、H244(S B28(P-10))
- 図版五十九 遺物 C281(S E06、1層(I層最上層))、H282、H289、H291、H296、H298、H302、H304～H308、H310、H311、H322、H323(S E06、23層(IV層最上層))
- 図版六十 遺物 H325、H326、H329、H335、H340、H341、H343、H345～H348、H356、H357、H359、H368(S E06、23層(IV層最上層)))

- 図版六十一 遺物 H1369、H372、H374～H379、H381、H385、H388～H390、H392～H394、  
H399(S E 06、23層〔IV層最上層〕)
- 図版六十二 遺物 H400～H402、H404、H405、B026(S E 06、23層〔IV層最上層〕)、C494(S  
E 06、29層〔V層最下層〕)、C460、C462、C470(S X23)、K002(S E 06、  
1層〔I層最上層〕)、A061(S B38(P-3))
- 図版六十三 遺物 1. H005、H007～H010(SK07、S K08)  
2. H013～H017(S K10)、H032、H033(S D01)
- 図版六十四 遺物 1. H049(S X 5 B)、C048(S K10)、B005～B007(S E 02、I層)  
2. C209、C205(B地区包含層)、H101(小溝21)、C173(S E 01)
- 図版六十五 遺物 1. G005、G008(S K08)、G006、G007、G009、G011(C地区包含層)  
2. Z地区出土丸瓦、平瓦
- 図版六十六 遺物 1. H246(S B26(P-9))、H265、H274～H277(D地区包含層(水田跡))、  
H279(S X23)、H412(S E 06、29層〔V層最下層〕)  
2. H222、H223、H227、H228(S E 05、17～20層〔III層〕)、H234、H235、  
H243(S K48)、H263、H267(D地区包含層(水田跡))、H278(S X23)
- 図版六十七 遺物 1. A055(S E 05、10～16層〔II層〕)、A057(S E 05、17層〔III層最上層〕)、  
A059(S E 05、18層～20層〔III層〕)、C455(D地区包含層)、Z042、Z043(S  
E 05、1～9層〔I層〕)  
2. C367(S E 05、10～16層〔II層〕)、C373(S E 05、17層〔III層最上層〕)、  
C390(S E 05、18～20層〔III層〕)、C423(S K48)、C405(S D08)、C  
440、C442、C445(D地区包含層)、C478(S D17)、C481(S B37(P-  
2))
- 図版六十八 遺物 1. B017、Z044(S E 05、10層～16層〔II層〕)、B019(S E 05、17層)、H  
224、B023、B024(S E 05、17～20層〔III層〕)  
2. C377(S E 05、18～20層〔III層〕)、C450、C453～C459(D地区包含層(水  
田跡))
- 図版六十九 遺物 1. C354(S E 05、10～16層〔II層〕)、C395(S E 05、18～20層〔III層〕)、C  
411(S K48)、C445(D地区包含層(水田跡))、C477(S D16)、C486(S  
E 06、15～22層〔II層〕)、C372(S E 06、17層〔III層最上層〕)  
2. C409(S K48)、C427(S D07)、C428(S B26(P-4))、C432、C436(S  
B25(P-8))
- 図版七十 遺物 1. C347(S E 05、1～9層〔I層〕)、C353、C363(S E 05、10～16層〔II

層)、C401(S E05、18~20層(III層))、C411、C419(S K48)

2. 鉄製品

図版七十一 遺物 1. 皇朝十二銭(表)

2. 皇朝十二銭(裏)

図版七十二 遺物 W001(S E02、層不明)

図版七十三 遺物 1. W014(S E05、20層)

2. W002~W005(S E05、20層)

図版七十四 遺物 1. W002~W005、W008~W014(S E05、20層)

2. W030~W038(S E05、20層)

図版七十五 遺物 1. W017(S E05、25層)

2. W016(S E05、25層)

図版七十六 遺物 1. W039~W042(S E05、20層)、W043~W045(S E05、23層)

2. W046、W046(S E05、20層)

図版七十七 遺物 1. W018、W019(S E05、18層)

2. W020(S E02、16層)、W021、W022(S E06、23層)

図版七十八 遺物 1. W023~W025(S E05、18層)

2. W026~W029、W048(S E05、20層)

図版七十九 遺物 1. W006、W007、W015、W049~W053(S E05、20層)、W054(S E02、層不明)、W055(S E05、18層)

2. W056(S E03、23層)、W009、W057(S E05、20層)、W058(S E02、層不明)、W060(S E05、層不明)

図版八十 遺構 D地区遺構平面図

図版八十一 遺構 F地区遺構平面図

図版八十二 遺構 F地区遺構平面図

図版八十三 遺構 G地区遺構平面図

図版八十四 遺構 特別地区・Z地区トレンチ断面図

図版八十五 遺構 Z地区・A地区トレンチ断面図

図版八十六 遺構 A地区・B地区トレンチ断面図

図版八十七 遺構 B地区・C地区トレンチ断面図

図版八十八 遺構 D~F地区トレンチ断面図

図版八十九 遺構 特別地区・Z地区遺構断面図

図版九十 遺構 Z地区・A地区遺構断面図

- 図版九一 遺構 A地区遺構断面図(1)
- 図版九十二 遺構 A地区遺構断面図(2)
- 図版九十三 遺構 A地区・B地区遺構断面図
- 図版九十四 遺構 B地区・C地区遺構断面図
- 図版九十五 遺構 C地区遺構断面図
- 図版九十六 遺構 D～E地区遺構断面図
- 図版九十七 出土遺物実測図 C001～C004(S K07)、C005～C010(S K08)、H001～H010、H012(S K07、S K08)
- 図版九十八 出土遺物実測図 C012～C033、A001(A地区包含層)、C035～C050、H013～H018(S K10)
- 図版九十九 出土遺物実測図 H016、H017(S K10)、C051～C055(S K14)、C056～C058(小溝32)、H019(小溝31)、C059、C060(S D02)、C061(S B14)、C062、C020(S B11)、C063～C071、H021～H023、A002(A地区柱穴内)、C072～C088(A地区包含層)
- 図版一〇〇 出土遺物実測図 C089～C119、A003、G001、H025、H029、B001、P001～P003(A地区包含層)、C121～C123、H028(B地区包含層)、C127～C129(S D03)、C130～C139(S D01)
- 図版一〇一 出土遺物実測図 C140～C153、A006、H032～H036、B002(S D01)、C154～C159、H038～H040(S X10)、C160～C165(B地区包含層)、H041～H048(S X5 B)
- 図版一〇二 出土遺物実測図 H049(S X5 B)、H053(S X5 A)、H051、H052(S K29)、H056、H057(S X4)、C167～C173、H158(S E01)、C174(S B18)、C175～C177、A007(B地区柱穴内)、C178～C201(B地区包含層)
- 図版一〇三 出土遺物実測図 C202～C212、A008～A013、H059、H060、B003、K002、K003(B地区包含層)、C213～C227、H064、H065、A014～A017(C地区包含層)、C228(S X10)
- 図版一〇四 出土遺物実測図 C229～C234(C地区包含層)、C235～C245(S X08)、C246(S B24)、C247、H066、A024、B004(C地区柱穴内)、G002、A018～A023(S X08)、C248～C253(S E02 I層)、C254、C255(S E02 II層)、C256～C263(S E02 III、IV層)
- 図版一〇五 出土遺物実測図 C265～C271(S E02 III、IV層)、H068～H076(S E02 I層)、

- H077～H082(S E02 II層)、H083～H095(S E02 III、IV層)、  
C272(S E02 V層)
- 図版一〇六 出土遺物実測図 H090～H096(S E02 III、IV層)、G003、G004、B005～B008(S  
E02 I層)、H1097(S E02 V層)、C273～C275、A026～A  
049(C地×包含層)
- 図版一〇七 出土遺物実測図 G005～C011、U011(C地区包含層)、H098、Z001(特別地区柱  
穴内)、C277～C280、C284(特別地区包含層)、C287・C289～C  
292、H099、H100(Z地区包含層)、C288(S K05)、C294(S B  
03)、C295、C296(Z地×柱穴内)、C300、C301(小溝15)、C306(小  
溝12)、C307、C308、A052(小溝9)、H102～H106、B009～B  
014、Z002(小溝10)、H101(小溝21)
- 図版一〇八 出土遺物実測図 Z003～Z015(小溝10)、H107～H111、Z016～Z032(小溝8)、  
C310～C312、Z033(小溝29)、C313(小溝27)、C314～C317、  
H113、Z034～Z036(小溝28)
- 図版一〇九 出土遺物実測図 C318、C319、Z037～Z041、P004(小溝28)、C321～C330、A  
053(Z地区包含層)
- 図版一一〇 出土遺物実測図 H114～H117、C331～C347、Z042、Z043、K001(S E05 1～9  
層(I層))
- 図版一一一 出土遺物実測図 H118～H122、A054、A055、B016、B017、C350～C369、Z  
044(S E05、10層～16層(II層))
- 図版一一二 出土遺物実測図 H123～H170(S E05、17層(II層最上層))
- 図版一一三 出土遺物実測図 H171～H210、B018～B020、C370～C373(S E05、17層(II層  
最上層))
- 図版一一四 出土遺物実測図 A056～A058(S E05、17層(II層最上層))、H211～H232、B  
021～B024(S E05、17～20層(III層))
- 図版一一五 出土遺物実測図 C374～C403、A059(S E05、18層～20層(III層))
- 図版一一六 出土遺物実測図 C425～C427(S D01)、C404～C406(S D02)、H223～H243、  
C409～C424(S K04)
- 図版一一七 出土遺物実測図 H251(S B25(P-5))、H252(S B25(P-7))、H258、C432、  
C433(S B25(P-8))、C431(S B25(P-9))、C428(S B  
26(P-4))、H245～H249(S B26(P-8))、H246(S B26(P-  
9))、C429(S B27(P-2))、C430(S B27(P-3))、H250(S

- B27(P-8)、H244(SB28(P-10))、H254~C256(SP2)、  
H257、C433(SP6)、H258、H259、C437~C439(SP7)、  
H260~H261(SP9)、H262(SP12)
- 図版一一八 出土遺物実測図 H263~H277、C440~C459、B025、Z045(D地区包含層(水田址))、C460(SX01)
- 図版一一九 出土遺物実測図 H278~H280、C461~C470(SX01)、C481(SB37(P-2))、  
H281、K002(SE06下層(I層最上層))、C470~C472(SD07)、  
C482、A061(SB38(P-3))、C480(SB38(P-1))、C  
484~C488、A062(SE06、5~22層(II層))、C476、C477(S  
D13)
- 図版一二〇 出土遺物実測図 H376~H411、B026、C489~C491(SE06、23層(V層最上層))、  
H412、C492~C494(SE06、29層(V層最下層))
- 図版一二一 出土遺物実測図 H328~H375(SE06、23層(V層最上層))
- 図版一二二 出土遺物実測図 H282~H327(SE06、23層(V層最上層))
- 図版一二三 木器・木製品 SE02、W-1(木履)、SE05(20層)、W-0~5(簾串)
- 図版一二四 木器・木製品 SE05(20層)、W-6、7(箸)、W-8(物指)、W-9(用途不明)、  
W-10(木杓及び把手)、W-11(部材)、W-12、13(檜扇)、W-15(木  
櫛)、W-15(木櫛)
- 図版一二五 木器・木製品 SE05(20層)、W-14(檜扇)
- 図版一二六 木器・木製品 SE05(25層)KKW-16、17(曲物)、SE05(18層)、W-18、19(曲  
物、底板)
- 図版一二七 木器・木製品 SE02(16層)、W-20(曲物、蓋板?)、SE06(23層)、W-21(曲  
物、蓋板)、W-22(曲物、底板)、SE05(18層)、W-23(曲物、蓋  
板)、W-24、25(曲物、底板?)、SE05(20層)、W-26(曲物、蓋  
板)、W-27~29、31(曲物、蓋板)、W-30(挽物、木皿)
- 図版一二八 錢貨・鉄製品 SE05(X-21、I-1、2)、SE06(X-1~21)

# I. はじめに

矢倉口遺跡は、草津市矢倉町に所在する遺跡で、大津市瀬田から草津市の東部にかけて南北に連なる湖南丘陵の北端近く、湖成段丘先端に立地する。遺跡の東、丘陵西麓には、岡田駅家推定地として知られる岡田追分遺跡が、北東には、本遺跡とは不可分の関係にある南平遺跡が所在している。

矢倉口遺跡は、昭和44年に実施されたバイパス路線決定に先立つ分布調査の際に発見され、昭和55年1月より昭和58年3月まで現地発掘調査を実施し、昭和59年度から昭和61年度に整理業務を行なった。調査面積は約14,000m<sup>2</sup>に達し、検出した遺構も、43棟におよぶ掘立柱建物跡をはじめ、5基を数える井戸跡など多数にのぼり、古墳時代前期から、平安時代後期に到る大量の土器、木履、尺などの木製品、皇朝十二銭、鉄製品が出土した。

矢倉口遺跡は、古代東山道、東海道の分岐点に位置し、交通上の要衝にあることが、従来より指摘されているが、本調査報告によって、その一端が明らかになったと考える。（大橋信弥）

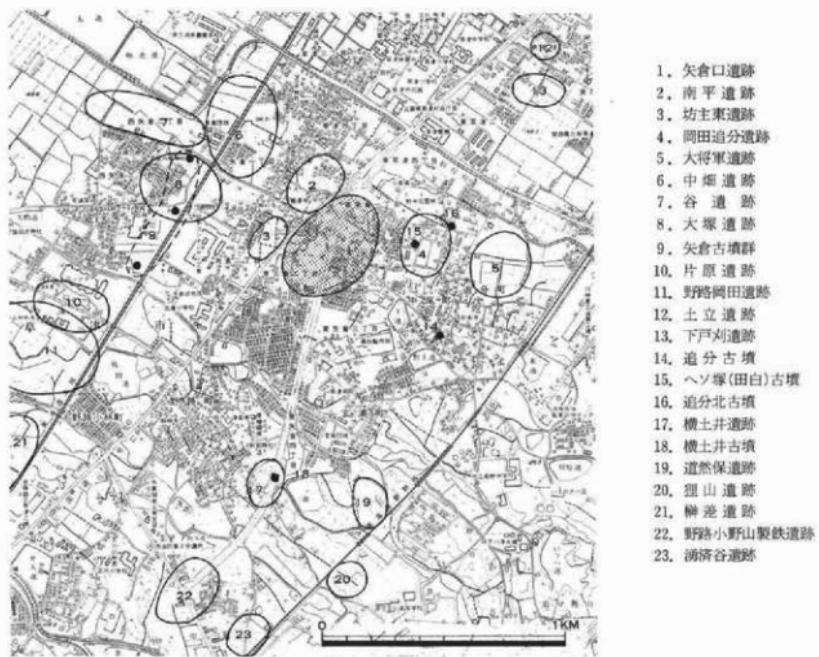


## II. 調査経過

調査地である京滋バイパス路線予定地は、緩やかに傾斜する丘陵先端部に開墾された水田地帯のなかに設定される。昭和45年度に実施された路線内の分布調査では、近隣の下水道工事により掘り上げられた土中より須恵器片等が採取されるなど、広範囲な遺跡が予想されていた。今回の調査では、それらの知見に基づき、市道東矢倉北9号線を北端として、日本電気硝子草津寮までの約12,000m<sup>2</sup>について調査計画が立てられ、市道の南側をA地区とし、以下、南側へ道路、水路により分断されるごとにE地区まで大区画を設定した。調査はA地区の試掘調査より始められたが、その結果、多数の遺構が検出されたため、さらに北側へ広がることを予想し新たに特トレ地区を設定した。また、市道については、地下道工事にともないZ地区として調査を実施した。

これらの調査によりかなり広範囲な遺跡の広がりが予想されたため、道路工事計画との調整を計りながら新たにF地区、Z-O地区を設け調査した。

調査にあたっての基準点は、京滋バイパス平面図のNo28地点の東西の境界杭を結ぶ線上で、東



第2図 周辺遺跡分布図



第3図 トレンチ設定図



第4図 A地区調査風景

側の杭より17mに第1仮基準点を設け、No27の北側の境界杭を東西に結ぶ線上で、東側の杭より20mに第2仮基準点を設けた。

そして、これらの点を結ぶ延長線をセンター基準線とし、第2仮基準点より10mまたは20m間隔の小区画を設定し、大区画の下に番号で表した。実測時にはさらに2m方眼に割り付けし、20分の1の実測図を作成した。高度は、国道1号線の測量点No474（H100.867）を基準とした。

調査は、昭和55年1月28日より開始され、54年度、55年度は特トレ、A、B、C、Z地区を継続して調査した。56年度はD、E地区、57年度はF、Z-O地区について調査を実施した。

調査方法は、包含層または遺構面に達するまでは重機（パワーシャベル）により削除し、以後は人手により精査した。基本的には大区画単位で調査したが、進捗度により次の予定地区での試掘調査を兼ねて土削除を先行させた。当初残していた小区画のアゼは、断面観察後にすべてを取り除き遺構検出の欠落を防いだ。なお、各地区の調査完了後は、遺構内を真砂で埋めもどし、遺構面についても厚さ20cmで覆い遺構保存に努めた。すべての調査が完了したのは昭和57年8月12日である。実質調査面積は約14,000m<sup>2</sup>に達した。

## A 地区

昭和55年1月下旬～同年6月中旬。

南東から北西への比較的緩やかな傾斜地上の水田域にあり、北側の特トレ地区と南側のB地区に比してやや高い舌状の微高地を形成する。水田間の段差も小さく、遺構の良好な遺存が期待された。

調査は、センター基準線西側に幅4mで小区画ごとに連続した試掘トレンチを設定し、層位に従い掘り下げた。耕土直下にて黄褐色粘質土の床土が認められ、須恵器、土師器片の出土があったが遺構は検出されなかつたためさらに掘り下げた。地表下30～40cmで白黄色粘土の地山と灰褐色土のビット、溝等が検出され、すべてのトレンチを拡張すると同時に検出作業を始めた。作業は、道構内の上質と地山上との色調の差が大きいため比較的容易であった。包含層は後世の水田開発により削平されたためか部分的にしか遺存せず、地山土についても地点により土質の変化がみられた。

調査の結果、古墳時代の土坑をはじめ、8～10世紀の倉庫群を中心とする掘立柱建物、土坑、溝、小ビット等多数の遺構が検出され予想以上の成果があったが、度々の降雨により作業が遅延し困難をきたした。なお、A地区南半は倉庫群の方位N-15°-Eに一致する遺構が多くみられ、北部では栗太条里N-33°-Eの方位をとる遺構がみられる。

昭和55年10月下旬

北東部残地調査

## 特トレ地区

昭和55年3月～同年6月中旬

A地区的検出状況により市道の北側への広がりが予想されたため新たに設定された地区である。周囲の盛土により旧水田の排水路を断たれたためか低濕化していたが、2m×2mの試掘トレンチによる予備調査で遺構が確認され、未買収地を残して拡張調査することになった。

遺構検出面はA地区より約40cm低く、さらに北側へ傾斜する。南東端の上位部分では削平されたためか遺構はほとんどみられず、中央から北部にかけては包含層も残り多数の遺構が検出された。一部の未買収地は、Z地区の調査時に拡張した。

## B 地区

昭和55年2月下旬～同年3月上旬

センター基準線の西側にトレンチを設定し試掘調査を実施した。その結果、A地区からの遺跡の広がりが確認され、遺物も採取した。

昭和55年6月下旬～9月下旬

立ち退き家屋の盛土が厚く、遺構面まで1m以上もの深いトレーニングとなった。遺構面はA地区より南側へ傾斜し、通称高砂道付近が微地形の谷と思われる。特にA地区から連続する南方向の溝はその先端で低湿化し、道路面からかなり深いものとなった。調査は、東側と西側の未取地を残して進められ、同時にA地区的埋めもどしと、B地区的表土の運土を行った。

検出された遺構はA地区に連続する倉庫群および建物群に加え、古墳時代の方形周溝墓、二重周溝をもつ住居跡等が発見され、当遺跡における新たな歴史的展開が加わった。

55年10月下旬

東側と西側の残地の調査により、建物群のまとまりが確認された。

### C 地 区

昭和55年3月上旬～3月下旬

センター基準線西半にて試掘調査を実施した結果、A、B地区と同様の建物群が広がる事が確認された。また、南側では低湿地か幅の広い溝状遺構が検出された。



第5図 A地区遺構検出状況



第6図 B・C地区調査状況

昭和55年9月中旬～56年1月下旬

北側は通称高砂道、南側、東側も高く盛土された宅地があり三方を閉ざされた水田地であるが、西側に広がる水田の形状から、もともとは高砂道を谷部とした南東から北西への緩い傾斜地であったと推察される。本格調査に入ってまもなく、水田の畦畔に水道管が埋設されていることなど全く予想だにせず、不覚にも重機で破損してしまい、隣接する民家に御迷惑をおかけしたこともあった。この稿を借りてお詫びしたい。

調査は試掘トレレンチの拡張より始め、検出と同時に遺構の掘り下げを行った。地山は黄白色かまたは明るい色調の粘質土で、削平されたためか包含層はほとんどみられなかった。しかし、まとまった建物群と井戸からの遺物は、A、B地区の倉庫群の様相と相まって、当遺跡の性格を示唆するものと思われ、特に井戸については慎重な調査を行った。調査途中で他地区の残地調査のため一時中断することもあり、調査面積の割りには長い期間を要した。

## Z 地 区

昭和55年12月上旬～56年3月中旬

市道下に埋設されているガス水管の移設を待ったが、移設が遅れたため先行して調査することとなった。市道は、調査が完了し埋めもどされたA、B地区に仮設道路が設けられた。

調査は、市道の地下化工事区间について、国道1号線側より工区別に1～6区まで小区画し、工期に合わせて調査した。道路面下120cmで北西に緩く下る遺構面に達し、建物跡、棚列、溝跡等を検出した。出土遺物には瓦器等の中世土器が含まれ、この期の溝の方位は栗太条里の方位を取り、棚列は倉庫群の方位に一致する。

#### E 地 区

昭和56年4月末～7月下旬

丘陵地の最先端で水田の段差も40cmと大きく激しい削平を受けているものと予想されていたが、段差直下以外では比較的良好な遺存状態であった。

調査は南端の雑地より掘開し、水田域へと進めた。包含層はほとんど認められず、丘陵地における水田開発の削平と整地の痕跡が顕著であった。地山は黄色粘質または白黄色粘質土でいわゆる山土である。東側の丘陵地からやや傾斜が緩む西側の水田下で建物群と井戸等の遺構が検出された。井戸は、最下層と中位付近に井戸祭祀と思われる多量の遺物が納置または投棄されており注目される。

#### D 地 区

昭和56年7月下旬より10月

元住宅地で、路線内ではすべて立ち退き済みであったが、西側に孤立した住宅の通路の確保のためC地区に仮設道路を設け、水路上に仮設橋を架けた。

地形的にはE地区と同様で、宅地造成以前は水田であったようである。建物群、井戸等が検出されており、特に井戸からは、扇、尺差し、曲物、建材等の木製品が良好な状態で出土し、中位では、廃棄時の祭祀跡とみられる土師皿の多量投棄がみられた。D地区の井戸の最下層の祭祀例もあるため、下層の堆積土を掘り上げ水漉しした。その結果、皇朝十二錢が見つかっており、井戸2例で同様の祭祀が行なわれていたことがわかった。

#### F 地 区

昭和57年8月上旬～下旬

E地区以南への遺構の広がりの有無を確認するため、社員寮のグラウンドの一部を調査した。その結果、遺構は全く検出されず、遺跡の南限であることを確認した。

## Z 地区

昭和57年8月上旬～下旬

市道と国道1号線との交叉点の拡幅工事にともない調査したものの、市道部分と、古川運送西側の地点とに2箇所の小トレンチを設けた。市道部分では遺構は検出されなかつたが、古川運送横では建物跡を検出した。狭小なトレンチ調査ではあったが、この調査により遺跡はより西側へ広がることが明らかとなった。

以上の調査によって広範囲にわたる遺跡であることが明らかとなった。特に、柱筋を揃え整然とした倉庫群と、井戸からの多種多様の遺物の出土は、官衙的性格を持つ遺跡であることを示唆し注目される。

(平井寿一)

### III. 検出遺構

#### 1. 特別地区

土坑（SK）や小溝群の他、多数のピット状遺構が認められる。

##### 土坑（付図1）

SK01：3.1m×1.0mの梢円形状を呈し、深さは約1.1mを測る。東西両端には径5.5、4.0mを測る不整円形状のピットが認められる。深さは各々、0.8m、1.7mを測り、土坑最深部の深さは約1.9mとなる。

SK02：1.1m×1.0mの不整円形状を呈し、深さは0.4mを測る。底中央部には径0.4m・深さ0.3ピットが認められる。土坑最深部の深さは0.7mを測る。

SK03：2.7m×0.8mの梢円形状を呈し、深さは約0.3mを測る。底中央には径0.5m・深さ0.4mを測るピットが認められ、土坑最深部の深さは0.7mを測る。

##### 小溝群(1)～(7)（付図1）

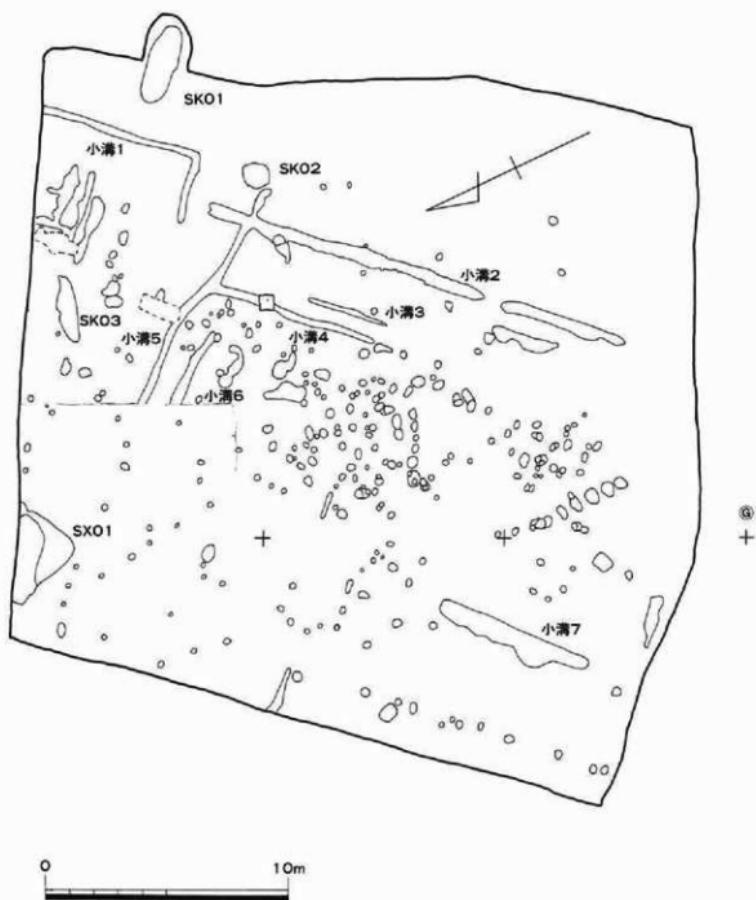
幅員0.3m～0.5m、深さ0.1mを測り、東西、南北方向に伸る小溝群。後世の削平の為、その残存状態は悪く、周囲には小溝の痕跡と思われるピット状遺構が認められる。その方位は栗太主条里とほぼ一致する。ただし、小溝群はすべて同一湖のものとは言えず、小溝(5)、(6)の様にやや方位を異にして、若干先行する類もある。埋土はいずれも灰色系砂質土層から成り、若干の須恵器、土師器片を包含する。

##### 不明遺構（付図1）

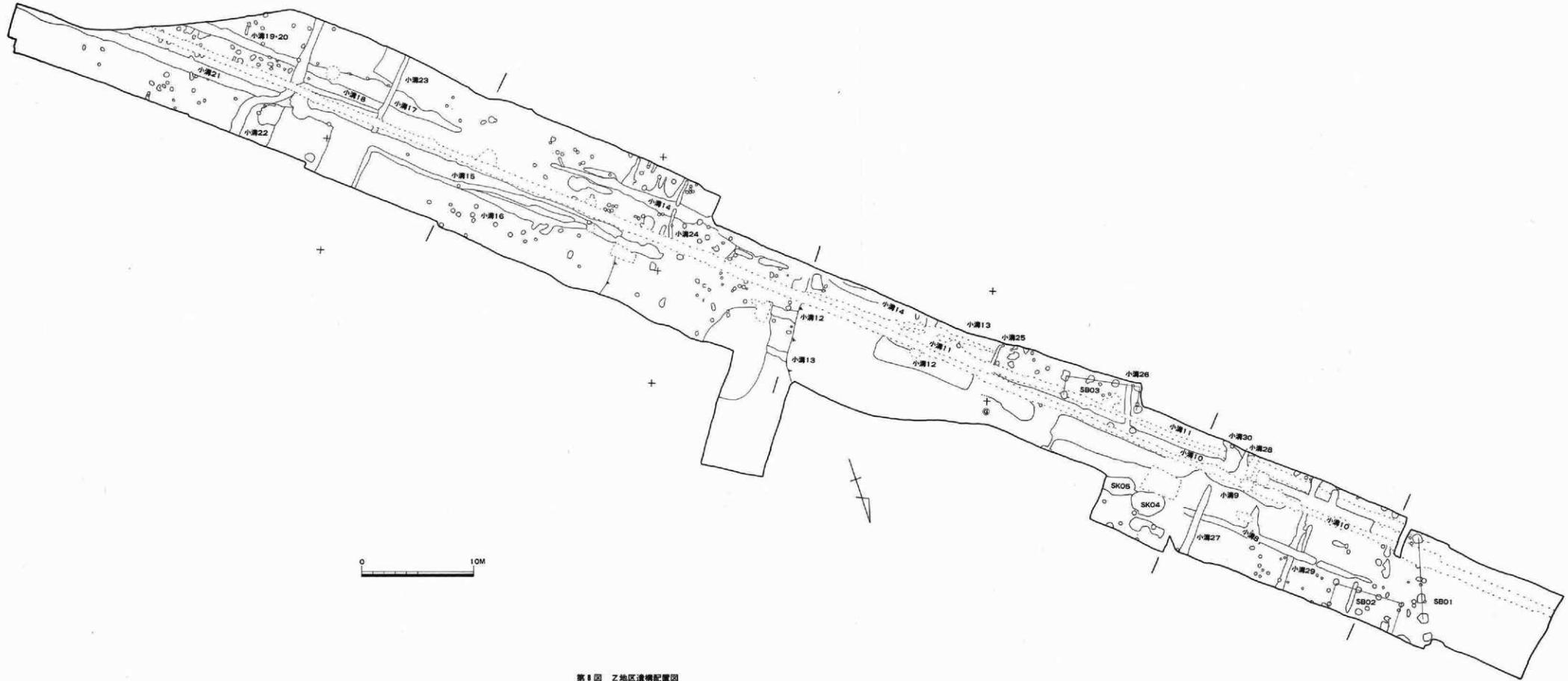
SX0.1：調査区北端で、一部確認した遺構。辺3.4m程度の方形状を呈するものと推測される。深さは調査範囲では約0.5mを測る。埋土は褐色系粘土層。若干の須恵器片が出土している。

##### ピット状遺構（付図1）

調査区中央部を主として、径0.2m～0.5mのピット状遺構が多数認められる。その多くは上述の小溝群の残骸と思われるが、中に確実に柱穴と成る類も存在する。例えば、調査区南東隅に見られる南北方向に並ぶピット群を衝列跡と考えることは充分に可能である。ただ、ピット状遺構の多くについて、明確な柱穴を抽出し、建物としてまとめることは難しく、課題として残さざるを得なかった。



第7図 特別地区造構配植図



第6図 Z地区造柄配置図

## 2. Z 地区

東西方向に細長い調査区。道路敷の為、後世の擾乱もはなはだしく、充分に遺構を捉え切れないと。明確な遺構としては、掘立柱式建物3棟や小溝群が認められる。

### 掘立柱建物

S B01(第9図・図版六)：捉え得たのは一柱列のみであり、横列であるのか、建物の一部とするのか明瞭にし得ないが、ここでは一応、建物の一部として説明を加える。確認したものは、東側列のみで、5間以上の規模を持つ。方位はN-15°-E。柱間寸法は約1.8m。柱穴掘り方は一辺0.8mの方形を呈し、柱穴径は0.2mを測る。

S B02(第9図・図版八)：東西3間×南北2間以上の建物。方位はN-52°-W。その規模は桁行6.4m×梁行2.0mを測る。柱間寸法は約2.0m。柱穴掘りかたは一辺0.4m～0.5mの隅丸方形～円形状を呈し、柱穴径は0.2mを測る。

S B03(第9図・図版七)：桁行3間×梁間2間の構造を取る東西棟の建物。棟方位はN-60°-W。中央に東柱の存在した可能性がある。その規模は6.4m×4.0mを測る。柱間寸法は桁行2.2m～2.4m、梁行2.0m。柱穴掘りかたは一辺0.6mの方形形状を呈し、柱穴径は0.2mを測る。

### 溝

小溝群(8)～(10)(付図2)：東西・南北方向に伸び、いざれも栗太主条里とその方位を一致させる。(8)～(9)は東西方向、(10)～(12)は南北方向。そのうち、(8)はL字形、(10)はS字形に屈曲する溝である。これら的小溝は相互に切り合い関係を持つものがあり、必ずしも同一期のものではない。南北方向の溝の中には(Z)・(A)地区の小溝と一緒にるものと考えて良いものもある。東西方向の小溝は当地区のみに集中して認められるものである。遺物には須恵器・土師器・黒色土器・瓦器等が見られる。中でも(8)・(10)からは多量の黒色土器・瓦器等が出土している。

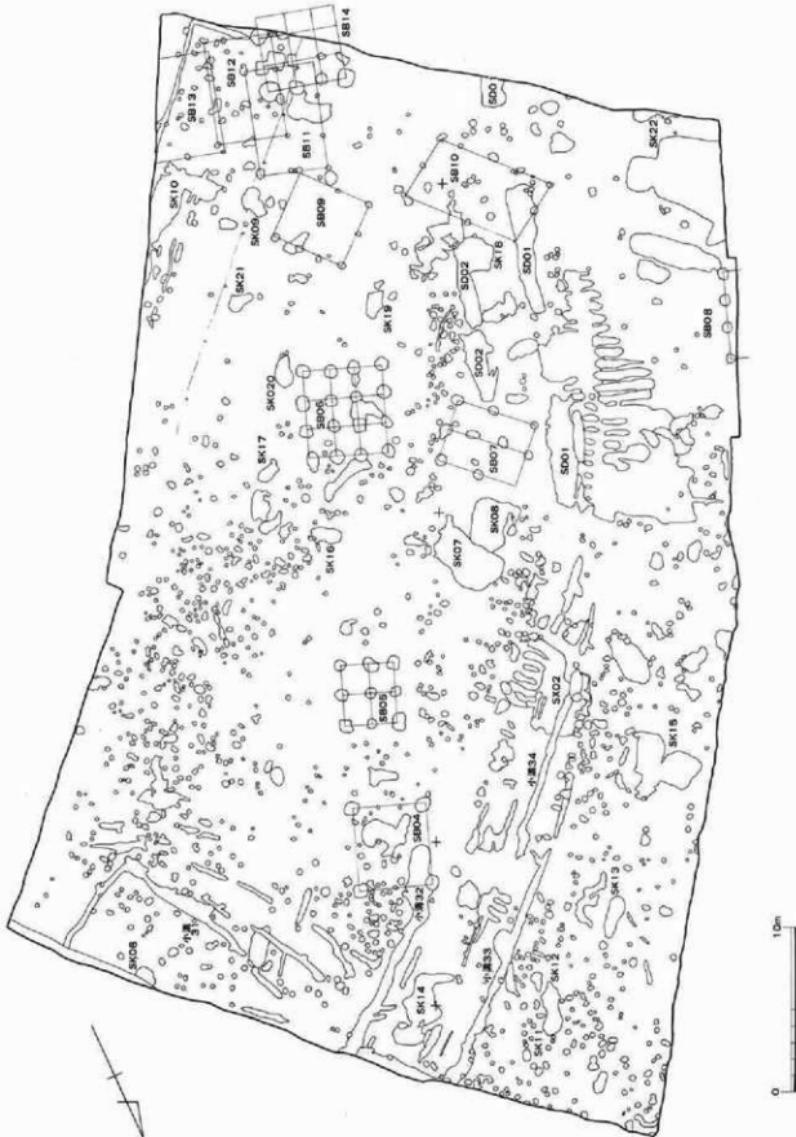
### 土 坑(付図2)

S K04・05：いざれも梢円形状のプランを持ち、各々3.0m×2.0m、2.8m×1.6mを測り、深さは共に0.1m。

その他、小溝(8)・(9)間や(10)の南、(10)の西には性格不明のたまり状遺構が認められるが、(8)・(9)等との時期的な前後関係については明瞭ではない。

## 3. A 地区

掘立柱建物、土坑、溝および小溝群の他、多数のピット状遺構が認められる。



第9図 A地区造構配置図

### 振立柱建物

S B04(第11図)：桁行1間×梁間1間の構造を持つ南北棟の建物。棟方位はN-20°-E。その規模は桁行4.9m×梁行4.4mを測る。その特異な構造から、いさか柱間寸法が拡張するくらいもないわけではないが、他に明瞭な柱穴は認められない。柱穴掘りかたは一辺0.9mの方形状を呈し、柱穴径は0.2mを測る。

S B05(第11図・図版十八)：桁行2間×梁間2間の総柱構造を持つ南北棟の建物。棟方位はN-15°-E。その規模は桁行3.5m×梁行3.3mを測る。柱間寸法は各々1.3m、1.2m。柱穴掘りかたは一辺0.7mの方形状を呈し、柱穴径は0.4mを測る。

S B06(第11図)：桁行3間×梁間3間の総柱構造を持つ南北棟の建物。棟方位はN-15°-E。その規模は桁行5.3m×梁行4.75mを測る。柱間寸法は桁行1.7m、梁行1.4~1.7m。柱穴掘りかたは一辺1.0mの方形状を呈し、柱穴径は30cmを測る。

S B07(第11図)：桁行2間×梁間2間、中央に2本の東柱を取る東西棟の建物。棟方位はN-55°-W。その規模はおよそ桁行4.9m×梁行3.8mを測る。柱間寸法は各々2.5m、1.8m。柱穴掘りかたは径0.4m~0.8mの不整円形状を呈する。

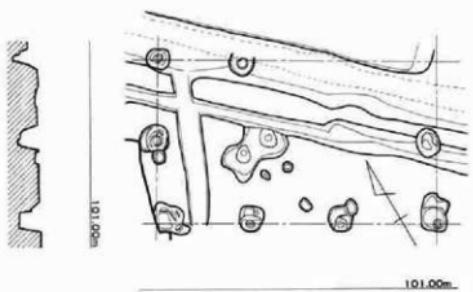
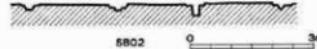
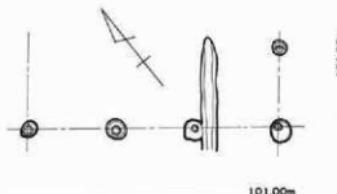
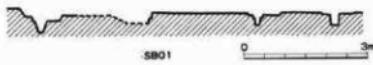
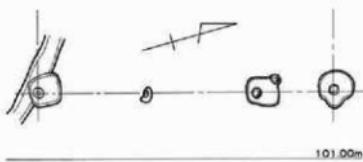
S B08(第11図)：調査区西壁中央部での東側列3戸のみの確認にすぎず、その規模、構造については明瞭でない。その方位はN-15°-E。規模は5.1m、柱間寸法は1.7mを測る。柱穴掘りかたは一辺70cmの方形状を呈する。

S B09(第11図・図版十七)：桁行3間×梁間2間の構造を取る東西棟の建物。棟方位はN-42°-W。その規模は桁行4.9m×梁行4.3mを測る。柱間寸法は桁行1.3m~1.6m、梁行1.8m~2.2m。柱穴掘りかたは径25cm~1.5mの不整円形状を呈する。

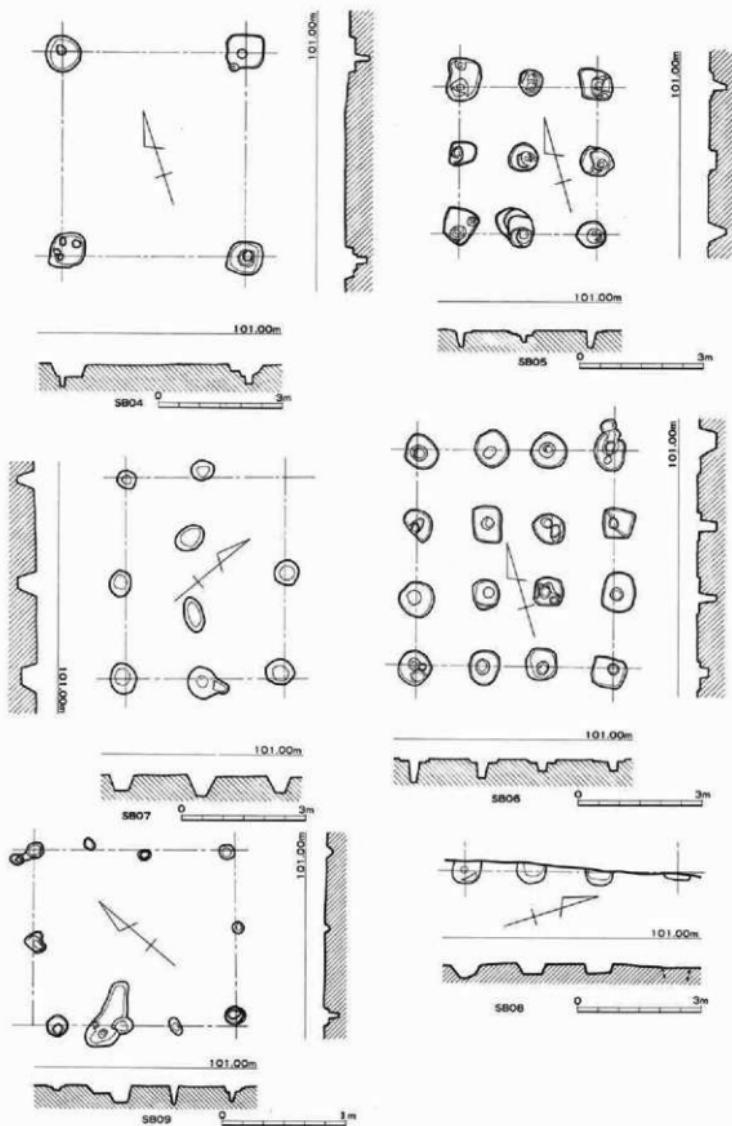
S B10(第12図)：桁行4間(2間)×梁間2間の構造を取る東西棟の建物。棟方位はN-42°-W。その規模はおよそ桁行7.0m×梁行4.5mを測る。北側列、南側列で間数が異なる他、全体の規格性はそれほど認め得ない。それは上述のS B09・10と同様である。柱間寸法は偏差が見られ、桁行北側列3.0m~4.0m、南側列80cm~2.1m。梁行では2.1m~3.0m。柱穴掘りかたは径20cm~2.4mの円形状を呈する。

S B11(第12図・図版十八・十九)：桁行3間×梁間2間の構造を取る南北棟の建物。棟方位はN-15°-E。その規模は桁行6.7m×梁行4.2m。柱間寸法は桁行1.9m~2.5m、梁行1.7m~2.2m。柱穴掘りかたには偏差が見られ、径30cm~1.8mの円形状を呈し、柱穴径は30cmを測る。

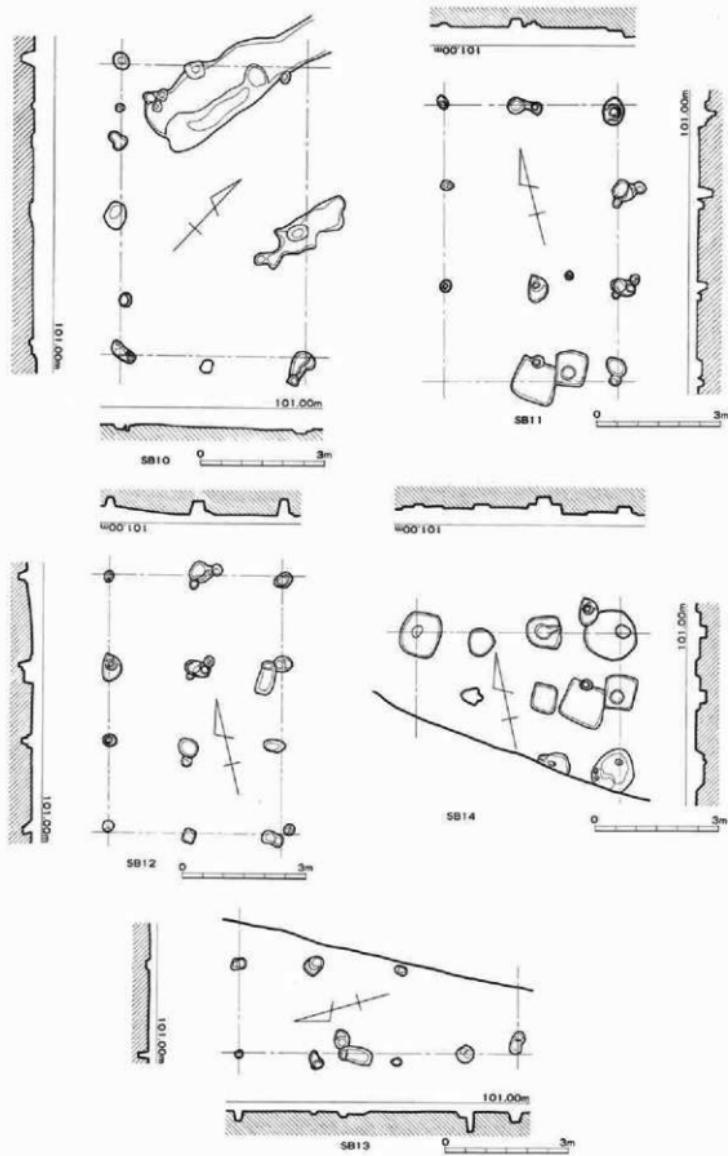
S B12(第12図・図版十八・十九)：桁行3間×梁間2間の総柱構造を取る南北棟の建物。棟方位はN-15°-E。その規模は桁行6.3m×梁行4.2mを測る。柱間寸法は桁行・梁行共に1.7m~2.2m。柱穴掘りかたには偏差があり、径25cm~80cmの円形状を呈する。柱穴径は20cmの円形状を呈する。S B11と切り合い関係を持ち、切り込む。北柱列中央柱穴より土師壺(H020)が出土している。



第10図 SB01～SB03 平面実測図



第11図 SB04～SB09 平面実測図



第12図 SB10～SB14 平面断面図

る。

S B13 (第12図・図版十八・十九)：調査区南東隅において部分的に確認したにすぎないが、東西2間以上×南北3間の建物が想定される。その方位はN-15°-E。規模は東西で2.2m以上、南北で6.7mを測る。柱間寸法は共に90cm～2.7m。柱穴掘りかたには偏差が見られ、径20cm～80cmの円形状を呈し、柱穴径は20cmを測る。

S B14 (第12図・図版十八)：調査区南東隅において確認された建物。一部B地区へ伸びる。桁行3間×梁間3間の総柱構造を取る南北棟の建物。棟方位はN-15°-E。その規模は桁行4.9m×梁行3.4mを測る。柱間寸法は桁行では1.5m、梁行では1.5m～2.0m。柱穴掘りかたは一辺60cm～80cmの方形形状を呈し、柱穴径は20cmを測る。S B11・12と切り合い関係を持ち、切り込まれる。

### 土坑（付図3）

S K06：調査区北東端において確認した土坑、1.3m×1.0mの楕円形を呈し、深さ18cmを測る。断面はすり鉢状を呈し、埋土は褐色系の2層から成る。遺物は上層境付近より、ほぼ完形の須恵器壺蓋・壺身等が出土している。

S K07・08：調査区ほぼ中央で確認した遺構。いずれも不整楕円形状を呈し、深さ15cm～50cmの土坑。07は4.4m×2.7m、08は3.0m×2.1mの規模を持つ。断面はすり鉢状を呈し、底面にはかなりの凹凸が見られる。埋土は共に褐色系の2層から成り、主に上層内より須恵器壺蓋・壺身、壺、甌、土師甌等が出土している。07・08は相互に切り合い関係を持つ様であるが、明瞭ではない。

S K09・10：調査区東壁際ほぼ中央で確認した遺構。いずれも不整楕円形状を呈し、深さ0.2m～0.3mを測る。その規模は2.1m×50cm以上(09)、1.3m×3.1m以上(10)を測る。断面はすり鉢状を呈し、埋土は褐色系で大別2層から成り、主に上層より須恵器壺蓋・壺身、壺、甌、土師甌等が出土している。ところで、09、10は相互に切り合い関係を持つ様であるが、明瞭に捉えられない。

S K11～22：その規模・形状は様々であるが、いずれもその埋土の堆積状況に特徴を有する。埋土はおおむね2層から成り、黒褐色粘土層内に地山と同質の淡黄灰色砂質土層のブロックが点在したり、島状に堆積することを例とする。遺物を出土するものも若干あり、いずれも黒褐色粘土層内より須恵器・土師器細片が認められる。形状において最も多いのは不整円形や楕円形状の類で、中には2基の土坑が重なり、T字形を呈するもの(S K19)もある。

### 溝（付図3）

S D01：A地区南半部からC地区まで、ほぼ正南北方向に延びる遺構。当遺構についてはここで一括して記述する。幅員・深さは後世の削平の為、各所で偏差が見られ、最も残存状況の良好なB地区南端においての計測値を見ると、各々4.1m・63.5cmを測る。溝は2段掘り構造から成り、A地区等で見られる形状、つまり $1.6\text{m} \times 7.8\text{m}$ 程度の楕円形状を呈し、深さ約20cm程度の土坑は溝の深い部分のみが残ったためである。その意味では溝とするより“堀”的な性格を持つ遺構と言える。当溝は未調査部分を挟んでC地区まで延びるものと考えられる。C地区北東部で確認された幅員7.8m・深さ43cmの2段掘りの溝がその南端に相当するものと見られるからである。埋土は大略褐色系の2層から成り、主に上層から、須恵器壺蓋・壺身・壺・甌等が出土している。

S D02：A調査区においてのみS D01と平行して認められる溝状土坑。2段掘りされた溝の痕跡と推定されるが、他の調査区ではまったく検出されず、その全容は明瞭でない。 $1.0\text{m} \times 7.9\text{m}$ の楕円形状を呈し、深さは26cmを測る。

小溝群(31)～(33)：特別・A地区で確認された小溝が本調査区においても認められる。いずれも栗太主条里にほぼ一致する方向に東西・南北に延びる幅 $0.2\text{m} \sim 0.4\text{m}$ 、深さ $0.1\text{m} \sim 0.4\text{m}$ の小溝である。その内、(31)は他と若干方位を異にし、先行するL字形の小溝である。埋土は灰色砂質土系で、須恵器・土師器片を含んでいる。

#### ピット群（付図3）

調査区北東部を中心に極めて多くのピットが認められる。その大半は上述の小溝群の痕跡と考えて大過ないものの、中に確実に柱穴と考えられるものがある。しかし、それを抽出し、建物としてまとめるることは難しく、課題として残さざるを得なかった。その内、S P01は径 $0.4\text{m}$ 、深さ $0.3\text{m}$ を測る土器埋納ピットで、上部より底部を欠損するものの完形に近い土師器壺が出土している。

#### たまり状遺構（付図3）

S X02・03：いずれも南北方向に延びる入溝とそこへ流れ込む小溝の痕跡と推定されるもの。S X03はS D01と一部重なり、正南北方向、02は条里方向にそれぞれ拡がる。深さは各々 $0.15\text{m}$ 、 $0.1\text{m}$ を測り、埋土は灰色砂質土系。これらの遺構から推察される大溝は多分に自然流路的なものであるが、その流路を付調査区を含めて復元するならば、以下の様に想定される。C地区、東西方向の入溝（S D01）から発し、S X08（たまり状遺構）、B地区S D03へと東西流し、S X03付近で若干方向を変化させ、東西方向の小溝群の痕跡で跡付けられる方向へと延びてゆく。この様に想定される大溝はS D01がその機能を停止した後の所産であることは切り合い関係や埋土、遺物から見ても明らかであるが、その下限については乙地区小溝(8)・(10)出土の遺物で示される時期

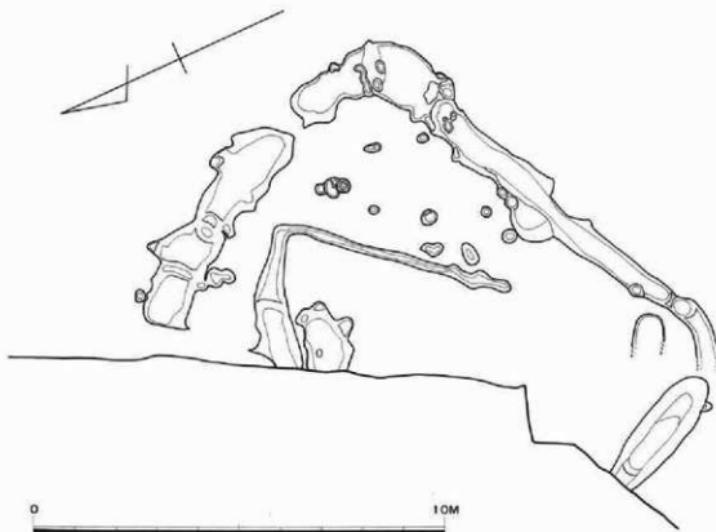
以前と言う以外明瞭にはし得ない。

#### 4. B 地区

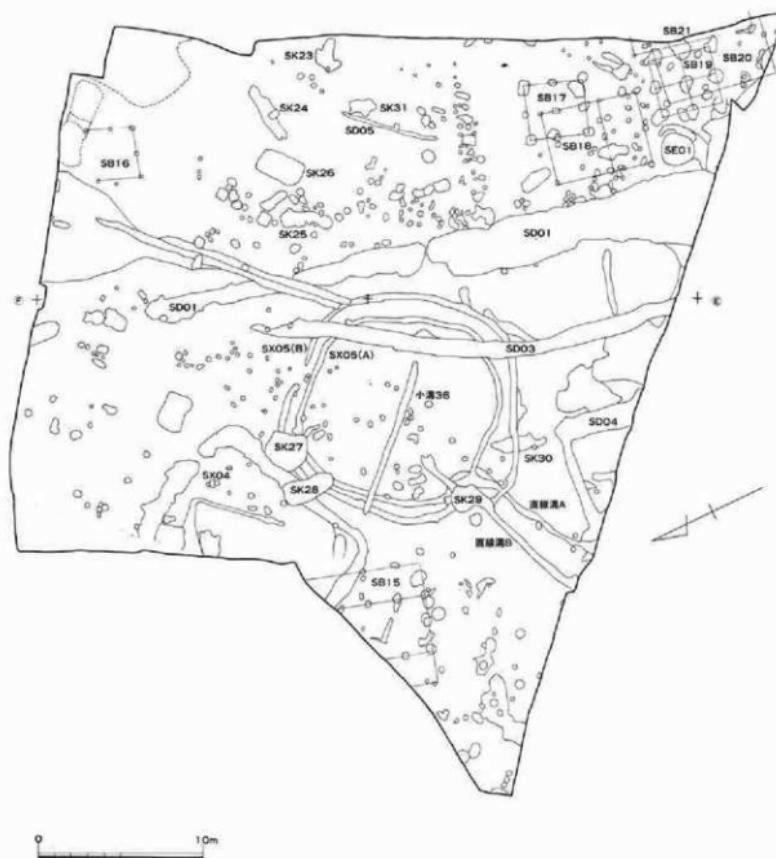
周溝状遺構や掘立柱建物、井戸等が認められる。

##### 周溝状遺構

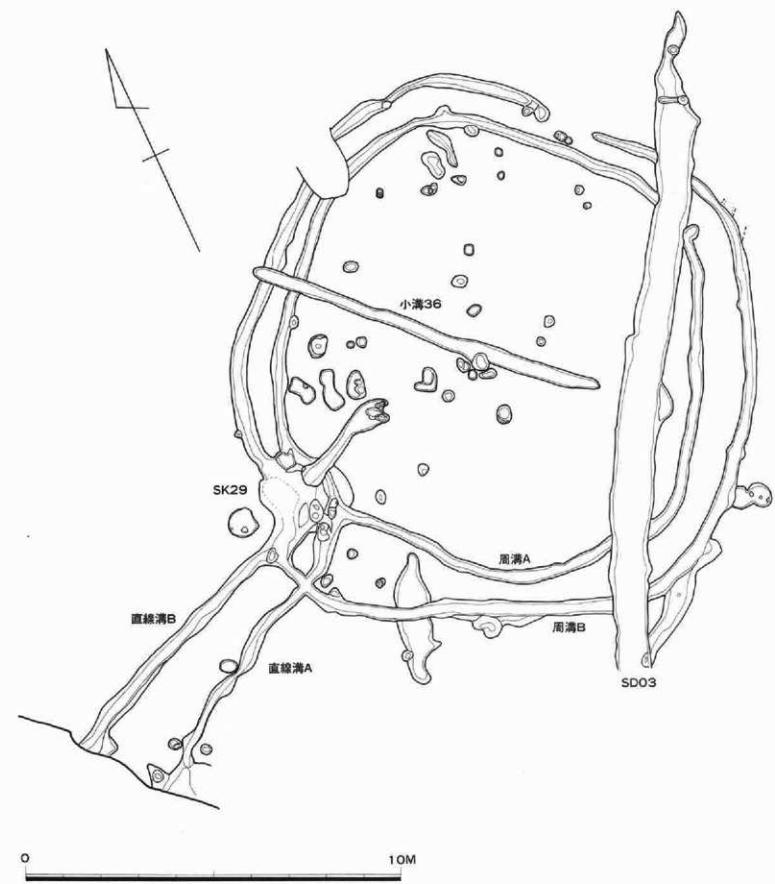
S X04 (第13図・図版二十三)：遺構全体の確認ではないが、方形状に溝で区画される遺構と推察される。台状部は現状一辻10.6m、周溝は、内肩が外肩に比して緩やかな逆台形状の断面を有し、現状幅員40cm～1.6m、深さ20cm～60cmを測る。溝底レベルには偏差が見られ、南辺溝中央部が最も深く、北辺溝中断部付近が最も浅い。その差は約0.3mを測る。おそらく、周溝がいくつかの橢円状の掘り込みの連続から成ることに寄因するものと思われる。周溝埋土は2層あり、上層は黒褐色粘質土、下層は南辺溝を除き、灰色砂層から成る。南辺溝では下層には黒色有機層が見られる。なお上・下層境に黄灰色地山ブロックの認められる部分もある。遺物は上下両層よりわ



第13図 周溝状遺構(SX04)平面実測図



第14図 B地区遺構配置図



第15図 周溝状造構(SX05)平面実測図

すかに古式土師器壺鉢片が見られるのみである。

S X05(第15図・図版二十三)：ややいびつな隅丸長方形状にめぐる周溝とその西端から西方向へ延びる直線溝のセットから成る遺構。周溝・直線溝は各々2条づつあり、外側の周溝と内側の周溝から延びる直線溝、内側の周溝と外側の周溝から延びる直線溝とはそれぞれ交差するが、その切り合い関係については明瞭に捉え切れない。内側の周溝(周溝A)は現状幅員20cm~60cm、現状深さ20cm~65cmを測り、11.3m×11.5mの隅丸長方形状にめぐる。それに連がる直線溝(直線溝A)は現状幅員35cm~90cm、現状深さ60cm~80cmを測る。ともにその溝底レベルには偏差がある。周溝Aでは東辺溝が最も浅く、北辺溝、特に直線溝Aとの合流部付近が最も深く、その差は約0.2m。直線溝Aでは周溝Aとの合流部付近が最も浅く、西端部へ行くにしたがい深さを増す。その差は約0.1mを測る。外側の周溝(周溝B)は現状幅員20cm~2.0m、現状深さ30cm~40cmを測り、14.0m×13.8mの隅丸長方形状にめぐる。ただし、東辺溝には幅1.2mにわたり途切れる部分がある。それに連がる直線溝(直線溝B)は現状幅員15cm~40cm、現状深さ40cm~60cmを測る。ただし直線溝Bは西方向だけでなく、東方向へも一部延び、周溝Bと交差するプランを取る。ともに溝底レベルには周溝A・直線溝A同様の偏差が見られ、周溝Bではその差は約0.5m、直線溝Bでは約0.15mを測る。ところで、周溝内には明らかに時期の異なる溝状遺構の他、各20cm~1.1mを測る円形状のピットがいくつか認められる。周溝に沿う様に分布する一群と中央部で方形状に分布する一群である。周溝ぎわの一群では周溝Aと切り合い関係を持つものもあるが、その時期的な前後関係については充分に捉え切れていない。また埋土の検討からもこれらのピットと周溝との関係については明瞭にし得ない。なお、周溝内には特に固くタタキしめられた痕跡や焼土痕等は認められなかった。出土遺物はいずれも古式土師器であり、ほぼ完形に近いものを含む小壺丸底塙数点の他、中壺壺、器台等が見られる。その大半は周溝B西辺溝より出土している。

#### 掘立柱建物

S B15(第16図)：部分的な確認に留まるが、桁行3間以上×梁間2間の身舎の東西2面に1間比を付す東西棟の建物と想定される。そうであれば棟方位はN-15°-Eとなる。その規模は桁行5.2m以上×梁行3.5m、庇を含めれば、9.9mを測る。柱間寸法は桁行・梁行は1.2m~1.7m、庇部分では3.0m。柱穴掘りかたは身舎部分では一辺40cm~1.1mの隅丸方形状、庇では径40cm~3.2mの円形状を呈し、柱穴径は20cmを測る。

S B16：桁行2間×梁間2間の構造を取る東西棟の建物。棟方位はN-16°-E。その規模は桁行3.0m×梁行2.8mを測る。柱穴径は26cmを測る。

S B17(第16図)：桁行2間×梁間2間の純柱構造を持つ南北棟の建物。棟方位はN-15°-E。その規模は桁行3.3m×梁行3.2mを測る。柱間寸法は40cm~1.2m。柱穴掘りかたは一辺20cm程度

の方形状を呈する。

S B18(第16図)：桁行3間×梁間2間の構造を取る南北棟の建物で、やや南に偏って東柱を1コ持つ。その規模は桁行5.9m×梁行4.2mを測る。柱間寸法は桁行80cmと2.5m、梁行2.2m。柱穴掘りかたは径50cmの円形状を呈し、柱穴径は30cmを測る。

S B19(第19図)：桁行2間×梁間2間の純柱構造を持つ南北棟の建物。棟方位はN-15°-E。その規模は桁行3.9m×梁行3.6mを測る。柱間寸法は桁行1.7m、梁行1.7m。柱穴掘りかたは一辺1.1m程度の方形状を呈し、柱穴径は30cmを測る。中央東柱には唯一柱痕が残存している。

S B20(第19図)：東西2間、南北3間の部分的確認にすぎず、その全体像は明らかではないが、純柱構造を取るものであろう。その方位はN-10°-E。規模は東西3.0m以上×南北6.8m以上を測る。柱間寸法は2.2m～3.0m。柱穴掘りかたは径60cm程度の円形状を呈し、柱穴径は20cmを測る。

S B21(第16図)：S B20同様、東西1間×南北2間の確認にすぎず、その全体像は明らかではないが、純柱構造を取るものであろう。その方位はN-10°-E。規模は東西1.3m以上×南北9.0mを測る。柱間寸法は2.0m～2.8m。柱穴掘りかたは径1.0m程度の円形状を呈し、柱穴径は30cmを測る。

### 土 坑(付図4)

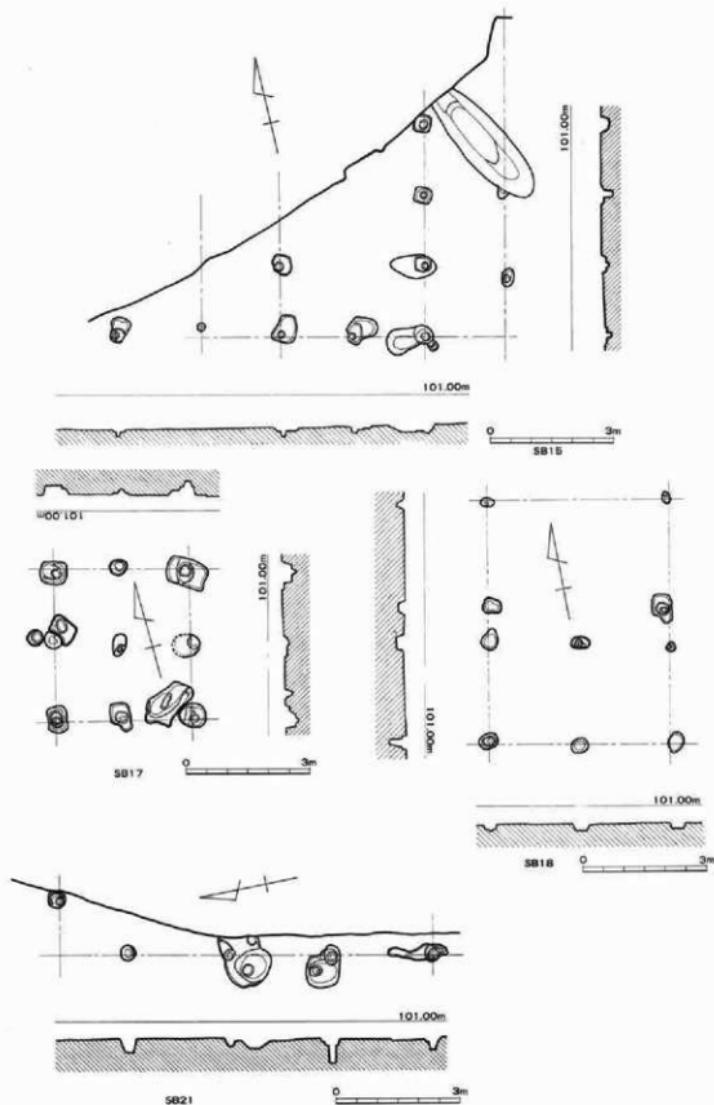
S K23～25：規模・形状には各々偏差が見られるが、いずれも不整円形・椭円形状のプランを持ち、埋土が黒褐色系粘土層と地盤と同質の汚黄灰色系砂質土層のモザイク状を呈する類。その内、23は径1.6m程度の不整円形状を呈し、深さは0.4mを測る。断面はすり鉢状を呈する。24は3.8m×2.0mの不整椭円形状を呈し、深さは最深部で約0.4mを測る。断面はすり鉢状。

S K26：2.8m×1.4mの長方形形状を呈し、深さは約0.1m。断面は台形状。埋土は褐色系。

S K27～31：いずれも円形もしくは椭円形状のプランを取る。断面はすり鉢状を呈し、灰褐色から暗褐色の埋土がレンズ状に堆積し、須恵器等の土器類を包含する。その内S K28は径1.6mの円形状を呈し、深さ70cmを測る。S K29は2.4m×3.0mの椭円形を呈し、深さ55cmを測る。

### 井 戸

S E1(第17図・図版二十三・二十四)：上面では径1.9mの円形状を呈するが、おむね一辺1.0mの方形状の掘りかたを持ち、深さ2.6mを測る井戸跡。板枠等は残存していない。埋土は3層に大別される。上層は灰色～灰褐色砂質土層、中層は黒灰色～黒色粘質土層、下層は灰色～青灰色粘質土層である。遺物は中、下層に多く見られ、須恵器壺蓋、壺身、甕等がある。また下層より



第16図 SB15, SB17, SB18, SB21平面断面図

曲物断片が出土している。

#### 溝 (付図4)

S D03：やや蛇行気味に南北方向へ延びる溝。幅員1.1m、深さ40cmを測る。断面はすり鉢状を呈し、埋土は灰色系砂質土層。

S D04：調査区南端で確認されたL字溝。一部はC地区へ延びる。幅員65cm、深さ1.1mを測る。断面はV字形を呈し、埋土は褐色系の2層から成り、上下層灰層より須恵器片(坏蓋、坏身)や土師器片(皿、高坏)が出土している。

S D05：幅員0.3m、深さ0.1mを測り、ほぼ正南北方向に延びる小溝。断面はすり鉢状を呈し、埋土は褐色系。なお、同様の小溝は他にも認められる。例えばS B17の北側で集中する小ピット群はこの様な小溝の痕跡と推測される。

小溝(36)：幅員40cm、深さ5cmを測り、ほぼ東西方向に一致して東西へ延びる小溝。断面はすり鉢状を呈し、埋土は灰色系。

#### 不明遺構(付図4)

S X06~07：いずれも調査区南端において部分的に確認した遺構の為、その形状・規模等判然としないもの。S X06は不整門形狀のプランを持ち、深さは約0.2mで、東端には幅0.1m、深さ0.4mの一段深い溝状の掘り込みが認められ、調査区外へ延びる。須恵器坏蓋、坏身が出土している。07は溜まり状遺構。深さは0.3mを測る。

### 5. C 地区

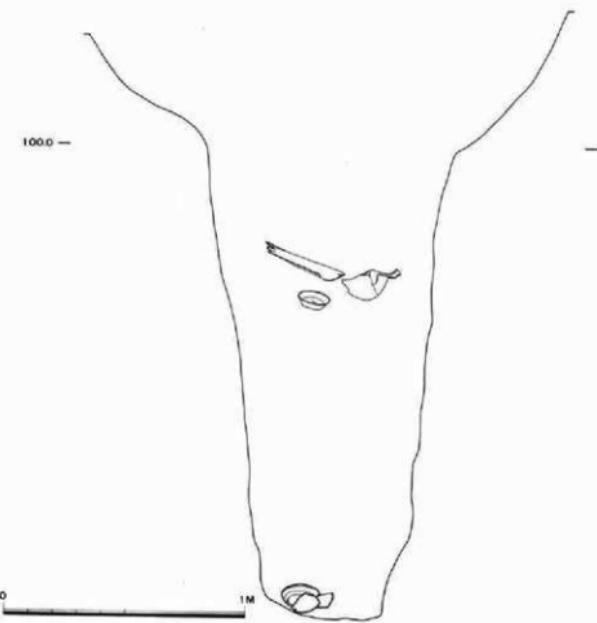
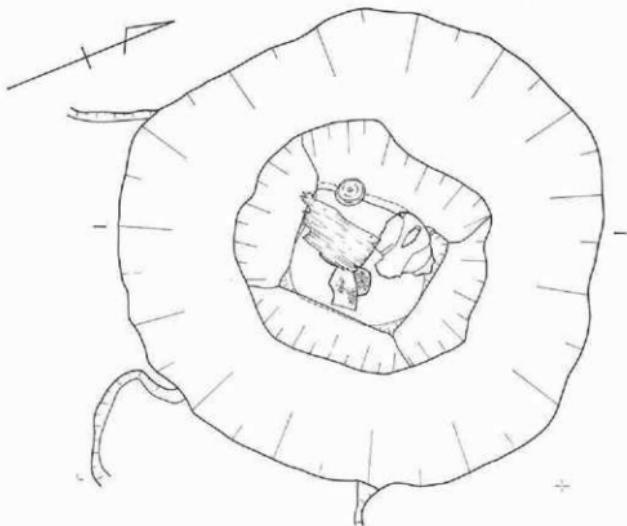
掘立柱建物や井戸、大溝等が認められる。

#### 掘立柱建物

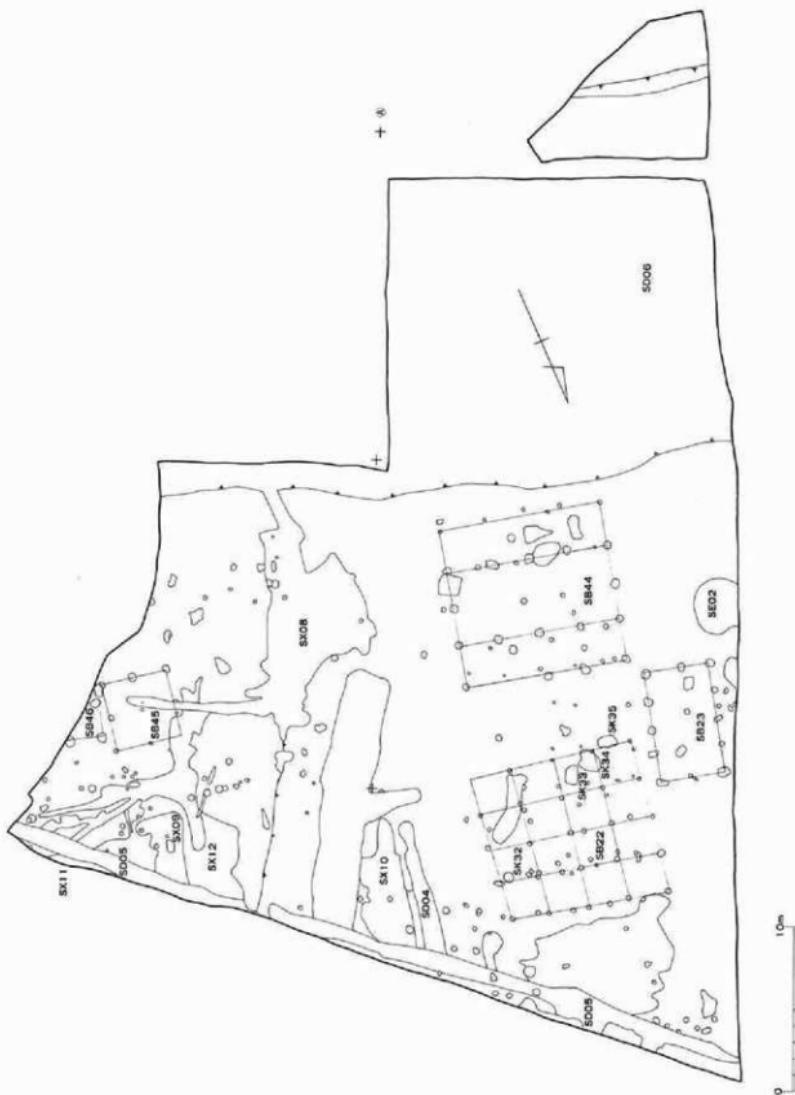
S B22(第19図・図版二十六・二十八・二十九)：桁行4間×梁間4間の總柱構造を取る東西棟の建物。棟方位はN-10°-E。その規模は桁行9.9m×梁行4.2mを測る。柱間距離はともに60cm～3.1mを測る。柱穴掘り方は径30cm～60cmの円形状を呈し、柱穴径は20cmを測る。

S B23(第19図・図版二十六・二十七)：桁行4間×梁間2間の構造を持つ南北棟の建物。棟方位はN-10°-E。その規模は桁行6.7m×梁行3.9mを測る。柱間寸法は1.6m～2.1m。柱穴掘りかたは隅丸方形もしくは不整形形状(一边20cm～90cm)を呈し、柱穴径は20cmを測る。

S B44(第20図・図版二十八)：桁行4間×梁間2間、中央に東柱を持つ身舎の南北面に一間庇を付す東西棟の建物。棟方位はN-15°-E。ただし、南面の此柱列は北面のそれに比して、小さ



第17図 井戸(SEO1)平面・断面実測図



第18图 C地区遗构配置图

く浅いことから、あるいは張り出し縁的構造を取った可能性もある。規模は桁行9.8m×梁行4.55mを測り、庇を含めば10mとなる。柱間寸法は桁行80cm～2.5m、梁行2.2m、庇行2.3m～5.0mを測る。柱穴掘りかたは身舎では隅丸方形もしくは不整方形で一辺40cm～60cm、庇では径35cm程度の円形状を呈する。柱穴底はおよそ径20cmの円形である。

S B45（第20図・図版二十九）：桁行2間×梁間2間の純柱構造の南北棟の建物。棟方位はN・15°-E。その規模は桁行4.2m×梁行4.15m、柱間寸法はともに1.8m～2.25mを測る。柱穴掘りかたは径30cm～80cmの円形もしくは不整円形状を呈する。

S B46（第20図）：部分的な確認であり、東西・南北2間以上の建物と言う以外明瞭ではない。その方位はN・15°-E。柱間寸法は2.3mと2.0m。柱穴掘りかたは一辺50cmの方形状を呈し、柱穴径は20cmを測る。

### 土 坑（付図5）

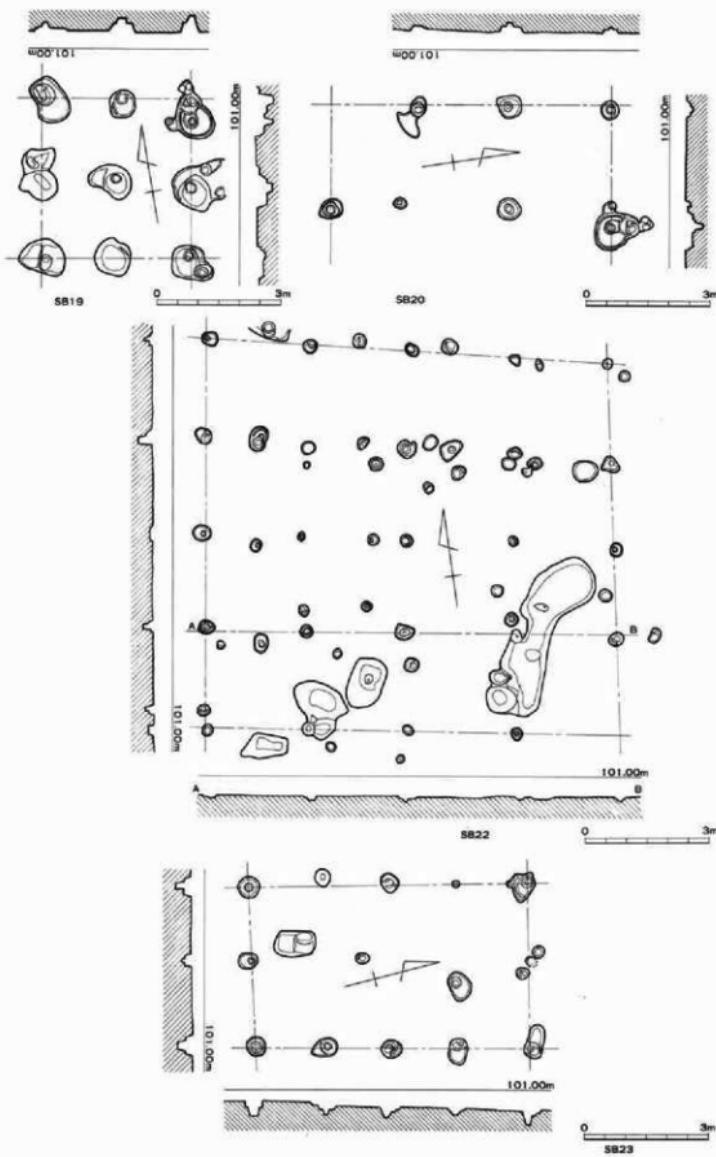
S K32：径60cmの円形状を呈し、深さ0.15mを測る。底より浮いた状態で灰釉鉢・黒色土器椀、土師器碗等が括して出土している。S B22に関わる土器埋納ピットで推定される。

S K33：1.3m×80cmの楕円形状を呈し、現状深さ0.5mを測る。底には径1.3mの円形ピットが見られる。埋土は淡褐色系の砂質土層である。遺物は認められない。

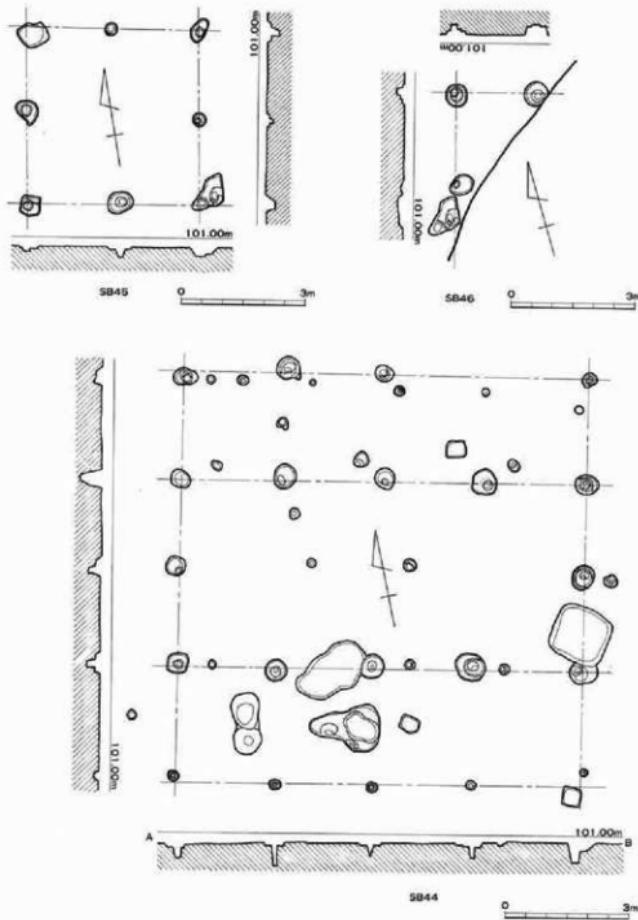
S K34～35：いずれも褐色系の埋土を有し、現状深さ0.1m～0.2mを測る土坑。形状は不整楕円形～方形状を呈し、断面はすり鉢状を成す。遺物はほとんど出土しない。

### 井 戸

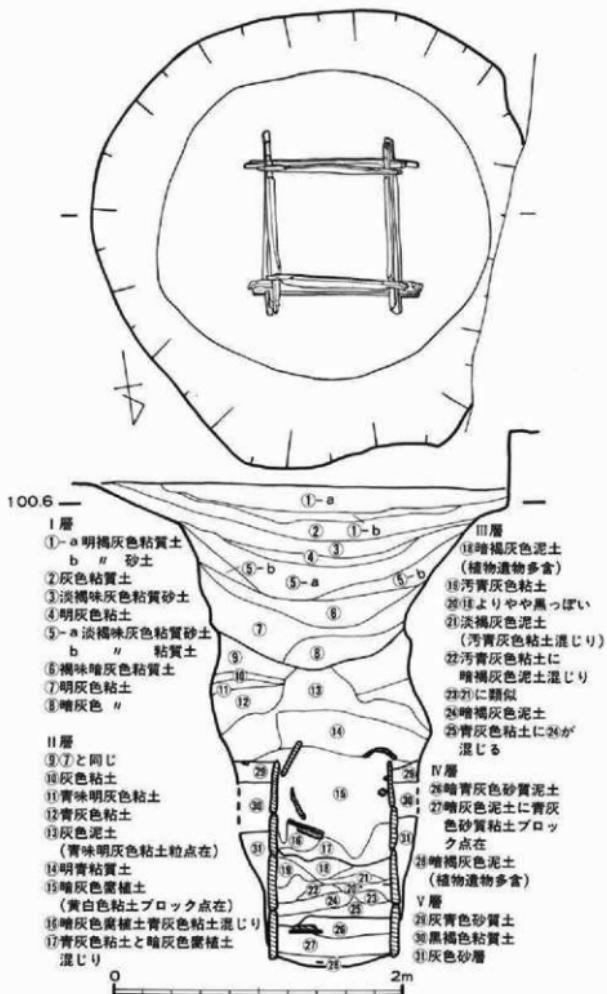
S E02（第21図・第22図・図版三十一・三十二）：深さ3.3mを測る、不整円形状の掘り方、ほぼ中央に板材を組んだ井戸枠を残す井戸。枠組みは一辺0.8mを測り、横板型に組まれる。板材は、現状では原位置を保もの=南北面5段、東西面4段の他=最上段において内側に倒れ込んだもの1段、枠内に落ち込み、残存していたもの4枚を合わせれば、東西面6段、南北面7段、高さ約2.0mまで井戸枠を復元し得る。井戸内の層位は4層に大別することができる。I層はレンズ状に堆積した灰褐色系の砂質土層、II層は一部暗灰色腐植土層をはさむ灰色～青灰色の粘土層、III層は暗褐色泥土と汚青灰色粘土から成る交互層。IV層は灰青色砂質土、黒褐色粘質土、灰色砂層から成る枠裏込めである。なお、調査時には湧水をほとんど見なかつたが、⑩層地山面が大きく抉られており、⑪層境あたりに当時の湧水最高点を求めることが出来る。I～III層からは多くの遺物が出土している。I層からは黒色土器甕、土師器甕、須恵器甕、II層下部からは須恵器広口甕、横瓶、土師器甕、III層からは須恵器甕、土師器甕、木履等が見られ、井戸の年代を考える内で有益な資料を提供している。



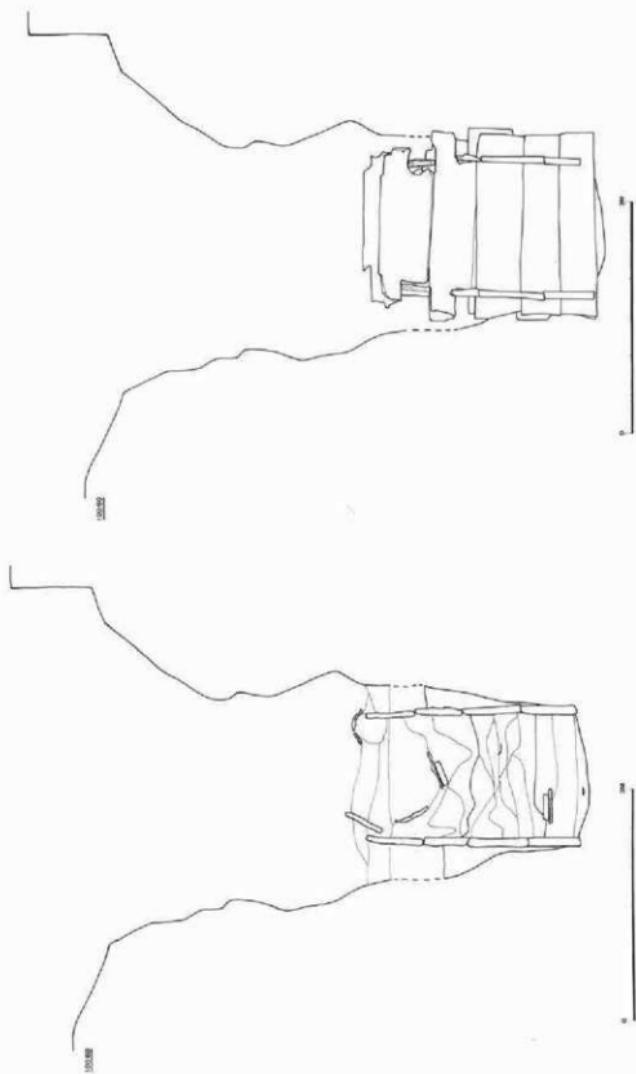
第18図 SB19, SB20, SB22, SB23平面実測図



第20図 SB44～SB46 平面実測図



第21図 井戸(ESO2)平面・断面実測図



第22図 井戸(SE2)実測図

## 溝 (付図 5)

S D05 : 調査区北端部を南北地割に平行して東西流する幅員1.1m、深さ40cmのV溝。断面すり鉢状を呈し、埋土は灰色砂質土系。

S D06 : 調査区南端を東流する幅24m、現状深さ10cmの大溝。埋土は灰色砂質土層。底には著しい酸化作用を残す。須恵器、土師器片が多く出土している。

## たまり状造構・周溝状造構 (付図 5)

S X08 : S D06から流出する南北溝、およびそこへ流れ込む東西小溝等の痕跡。深さは75cm。埋土は灰色砂質土系で、須恵器片、灰釉片が出土する。

S X09・10 : いずれも調査区北端に認められる不整円形状の浅い落ち込み。(深さ10cm弱)。埋土は灰色系。須恵器片(09)が出土する。

S X11 : 調査区北端で一部確認し得たにすぎないが、幅員2.7m、深さ10cmの溝が方形状にめぐる様である。埋土は褐色系。

S X12 : 調査区北端で確認し得た造構。幅員3.0m、深さ0.4mを測り、東端部はさらに一段溝状に落ち込む。(幅員1.2m、深さ0.6m)。B地区南端S X06と同一の造構である可能性もある。

(大崎隆志)

## B. D 地区

D地区では法線内約1,980m<sup>2</sup>を調査し、検出した造構は掘立柱建物跡8棟、井戸跡3基、溝跡6条、土坑5基のほか、多数のピット群である。トレンチの土層は表上下0.2~0.45mの耕上層とその下層に0.1~0.15mの黄味灰茶褐色粘質土の床土層が広がり、基本的にその下層が黄褐色粘質土(花崗岩風化土層の地山面)の造構面である。造構面は南北には概ね水平で、東西には現汎が三段の水出面になっているため、東部と西部では約1mの比高差が認められる。ただ、東部および西部で検出された柱穴底部での比高差が0.6~0.7m認められることから、当初から東西にかなりの勾配があったものと考えられる。造構面の絶対高は東部で102.5m、西部で101.46m、南部で102.2m、北部で101.87mを測る。

## 掘立柱建物

S B24 (第23図・図版三十四) : D地区北部で検出された総柱の建物で、方位をN-13°50'-Eにとる。南北2間で3.45m(約11.5尺)、東西で2間3.55m(約11.8尺)を測る。柱間寸法は南北列および西側列で1.775m等間、東側列で1.55m、1.9mと北側の柱間がやや広く作られている。柱掘方は、0.35~0.7mの長方形乃至正方形に近い矩形を呈しており、掘方埋土は黄味褐灰色及び淡

黄灰色粘質土で、1部の柱穴内に黒褐色粘質土とともに炭化物が含まれていた。検出された柱穴は0.15~0.24mで中央の束柱が最も細いものであった。

S B25 (第24図・図版三十四) : D地区中央東部で検出された南北棟の建物で方位をN-10°10' - Eにとる。梁行は2間で4.24m(約14尺)、桁行は4間で8.6m(約28尺)を測る。柱間寸法は梁行2.12m等間、桁行は東側列で2.15m等間西側列で北から2.15m、1.9m、2.4m、2.15mを測る。柱掘方は0.5~0.7mの矩形で、掘方埋土は褐色粘質土をベースにしている。検出された柱穴は0.24~0.3mである。また桁行東側列では巾0.3~0.4m、深さ0.5~0.7mの溝状遺構が掘方のほぼ中央を南北に走っており、板屏状の施設が設けられていた可能性がある。

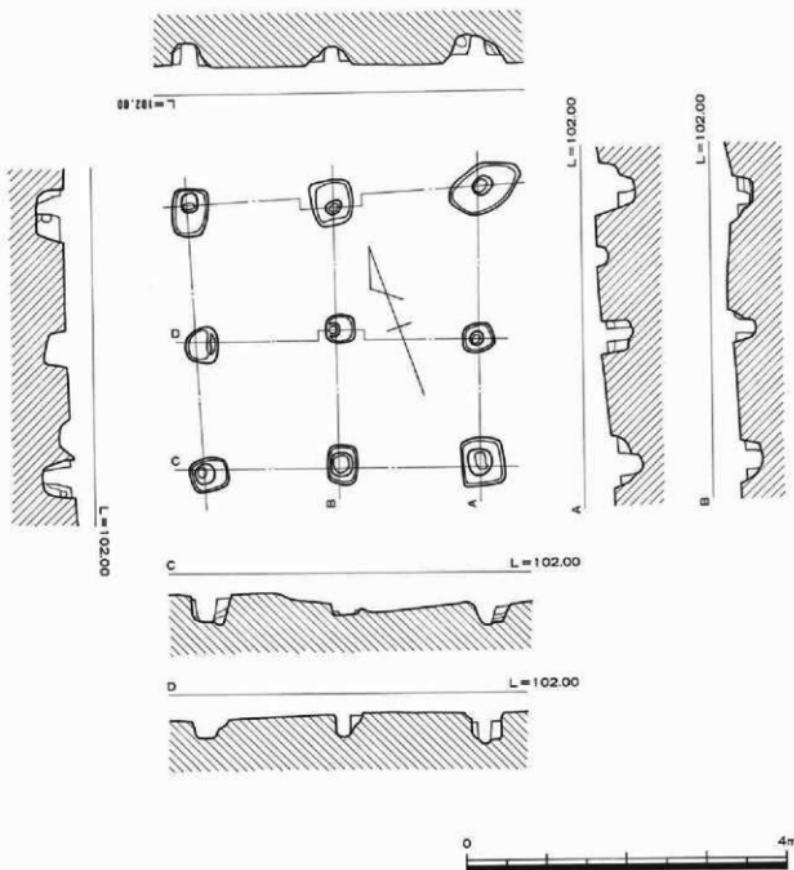
S B26 (第25図・図版三十五) : D地区中央部で検出された東西棟の建物跡で方位N-14°10' - Eにとる。梁行は2間で4.1m(約13.6尺)、桁行3間で6.3m(21尺)を測る。柱間寸法は梁行が東側列で2.05m等間と推察され、西側列では南から1.9m、2.2mと北側の柱間がやや広い。桁行は北側列、南北列とともに2.1m等間である。掘方埋土は黄味灰褐色粘質土で、検出された柱穴は0.3~0.45mを測る。

S B27 (第26図・図版三十五) : D地区中央部で検出された東北棟の建物跡で方位N-8°45' - Eにとる。梁行は2間で3.5m(約11.5尺)、桁行は3間(約20尺)を測る。柱間寸法は梁行が1.75m等間で、桁行が西側列で2m等間、東側列については柱穴が未検出であるため明確でない。掘方埋土は黄味灰褐色粘質土をベースにしており、柱掘方は0.3~0.5mの長方形を呈し、検出された柱穴は0.15m前後を測る。S B27は他の建物跡に比して掘方乃至柱穴も小型である。

S B28 (第27図) : D地区中央西部で検出された東西棟の建物で方位N-14°10' - Eにとる。S B28は2時期の建て替えが認められ、当初の建物はN-11°05' - Eの方位を取る。梁行は2間で4.2m(14尺)、桁行3間で北側列で6.9m(23尺)、南側列で7.05m(23.5尺)を測る。柱間寸法は梁行で2.1m等間、桁行は北側列で2.3m等間、南側列で東から2.3m、2.3m、2.45mと西側が広くなっている。柱掘方は0.5~0.8mの矩形で、掘方埋土は黄味灰褐色乃至は茶褐色粘質土である。検出された柱穴は0.21~0.24mで、四隅の柱穴が深く構築されていた。

S B29 (第28図) : D地区中央西部で検出された南北棟の建物で方位N-8°45' - Eにとる。梁行は2間で4.5m(15尺)、桁行は4間で9m(30尺)を測る。柱間寸法は梁行が南側列で2.25m等間、桁行が東側列で南から2.4m、2.1m、2.25m、2.25mで南側が広くなっている。西側列では南から2間分しか検出されていないが、2.25m等間である。柱掘方は0.4m前後の方形で、掘方埋土は黄味灰褐色粘質土をベースとしている。検出された柱穴は0.14~0.21mでS B27と同じく小型の建物である。

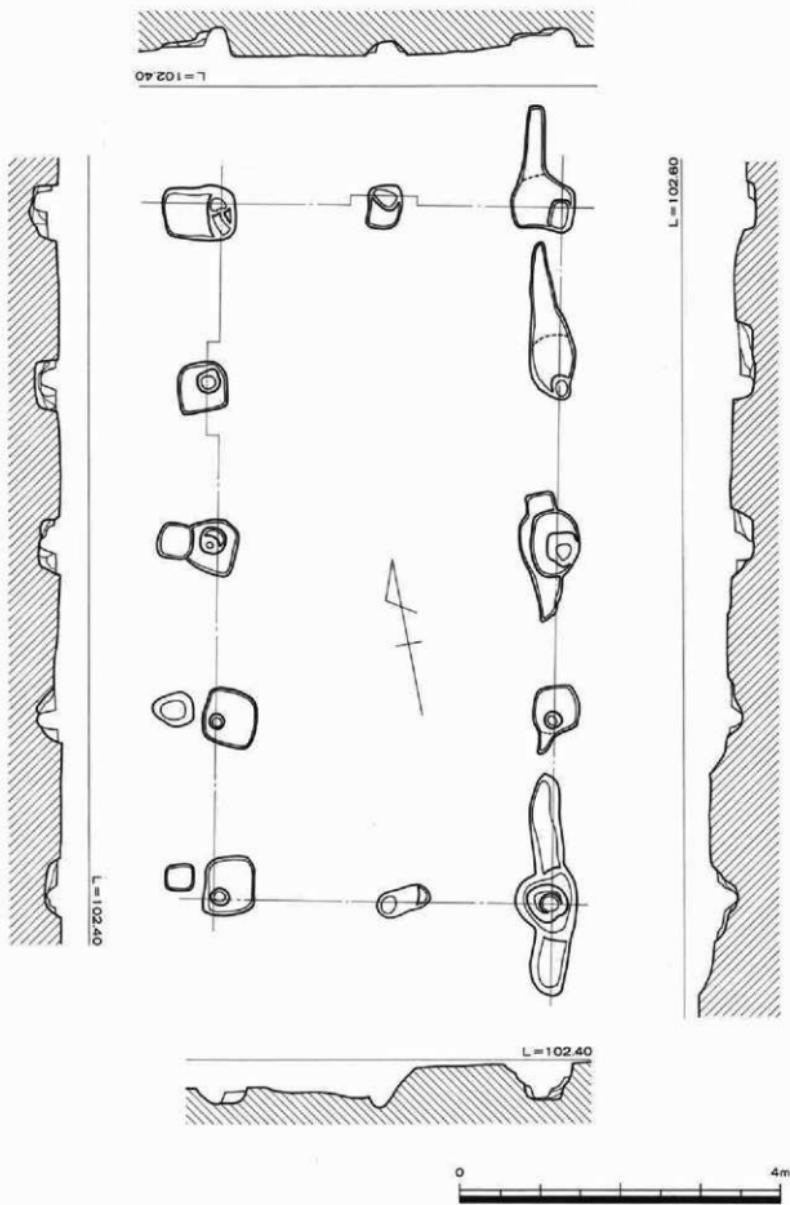
S B30 (第29図・図版三十六) : D地区中央西部で検出された南北棟の建物跡で方位N-9°



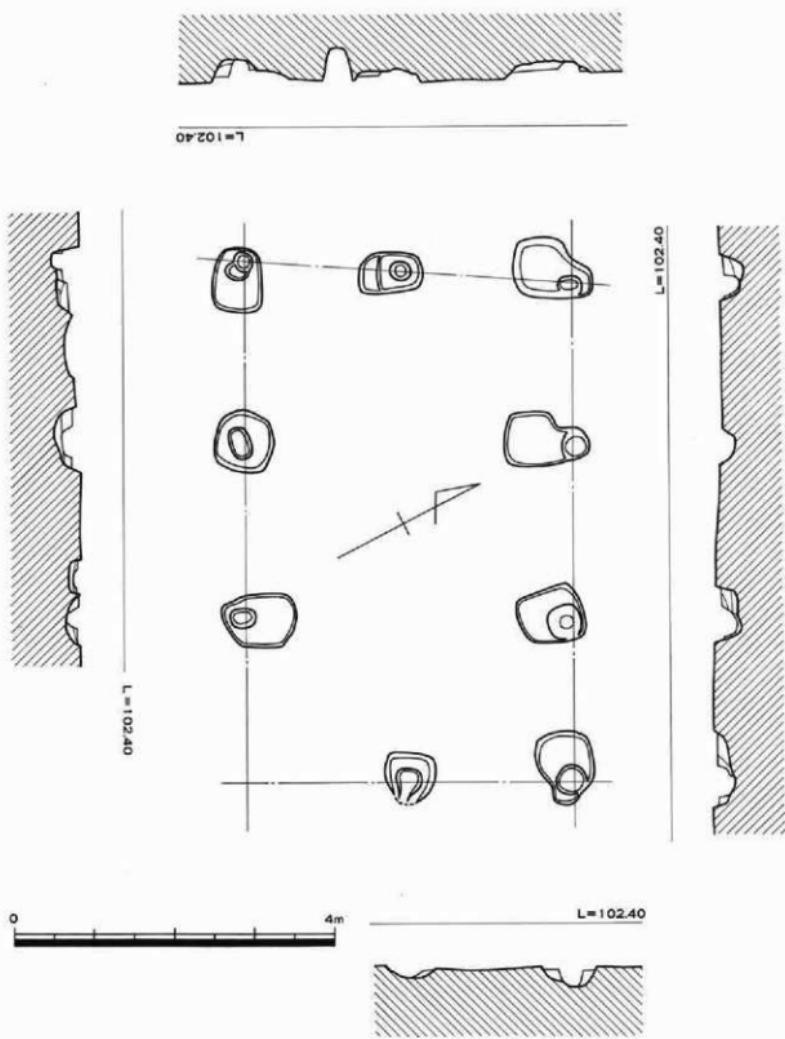
第23図 捜査柱建物SB24平面実測図

40°-E にとる。梁行は 2 間で 4.35m (14.5 尺)、桁行は 3 間で 6.15m (20.5 尺) を測る。柱間寸法は梁行が 2.1m と 2.25m で東側の柱間がやや広い。桁行は東側列のみしか検出されていないが、概ね 2.05m 等間を測る。柱掘方は 0.5~0.75m を測り、掘方埋土は黄灰色粘質土をベースとしている。検出された柱穴は 0.15~0.21m である。

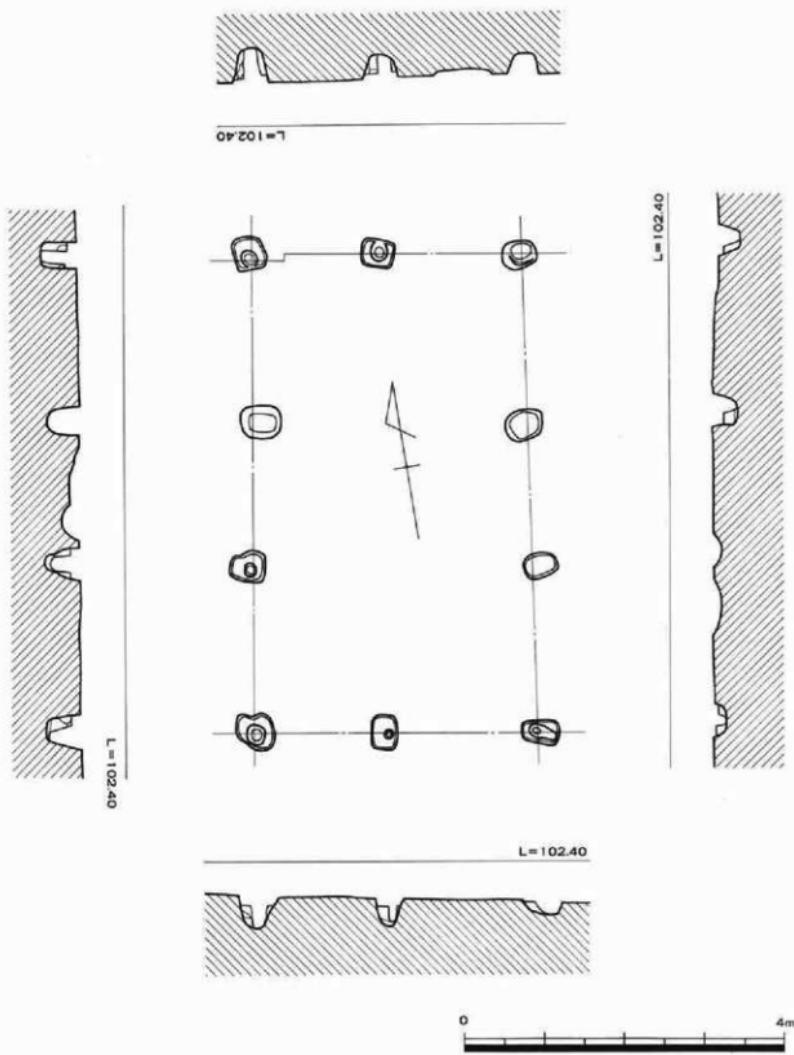
S B31 (第30図・図版三十七) : D 地区中央西部で検出された南北棟の建物で方位 N-14°05'-E にとる。S B31 は 2 時期の建て替えが認められ、当初の建物は N-10°30'-E の方位を取る。梁行は 2 間で 3.75m (12.5 尺)、桁行は 4 間で 7.65m (25.5 尺) を測る。柱間寸法は梁行で、東から



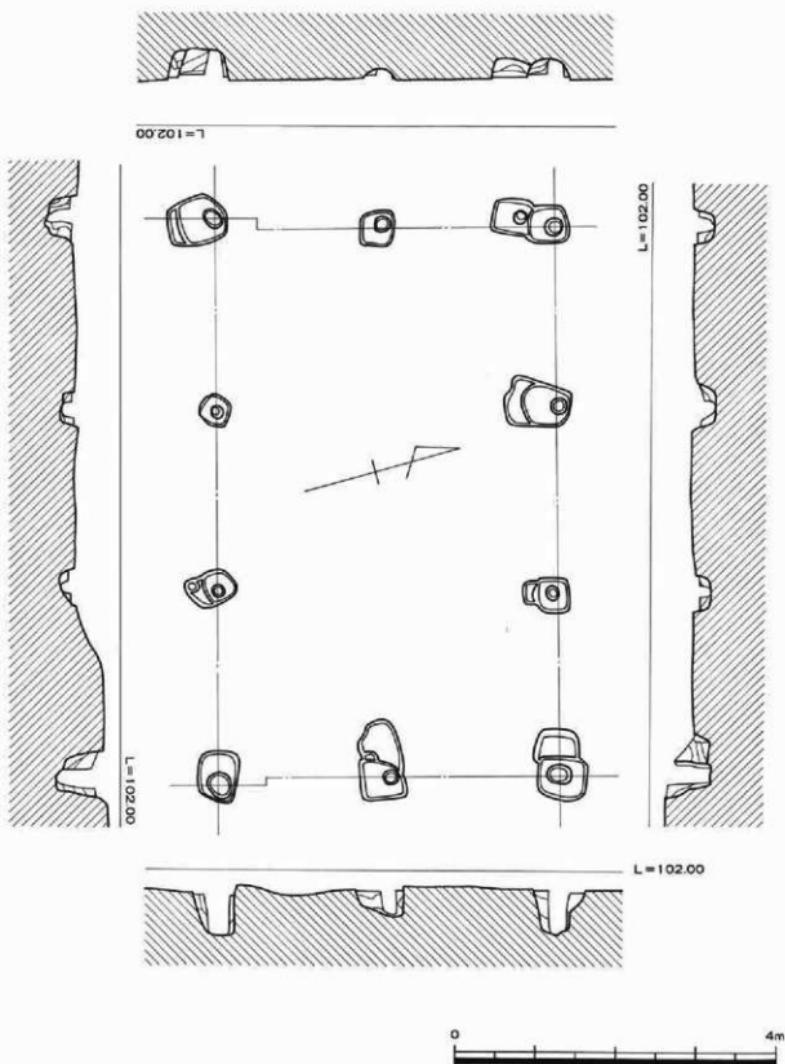
第24図 据立柱建物跡SB25平面実測図



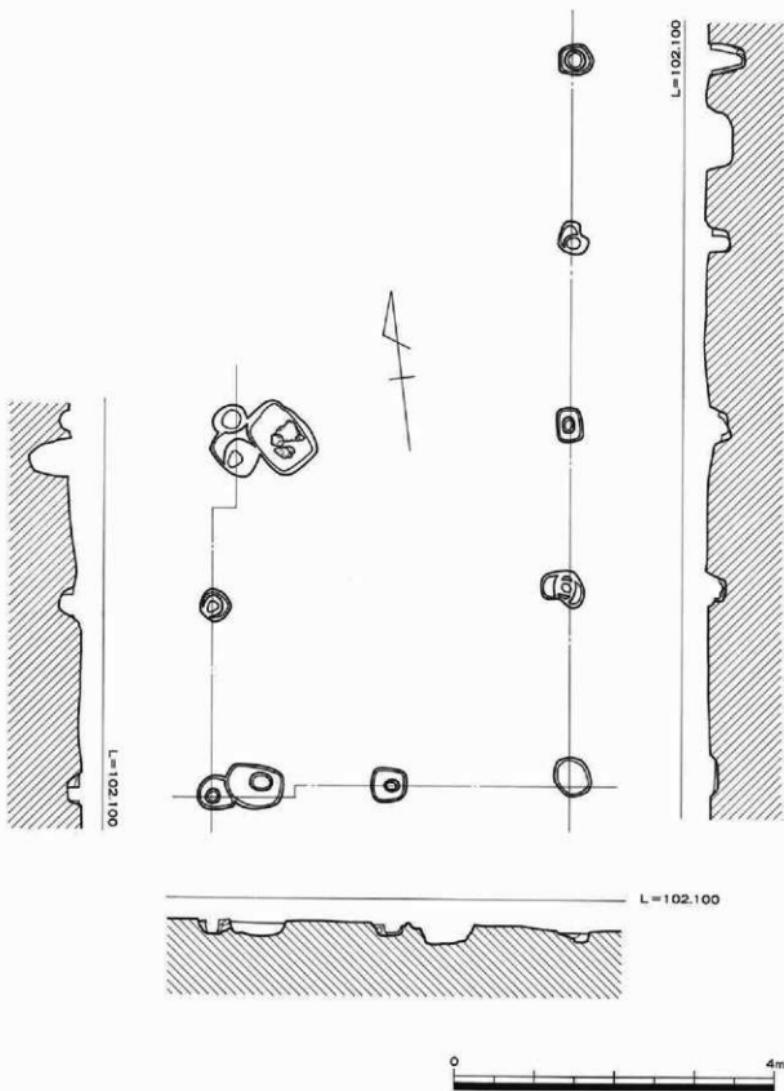
第25図 捨立柱建物跡SB26平面実測図



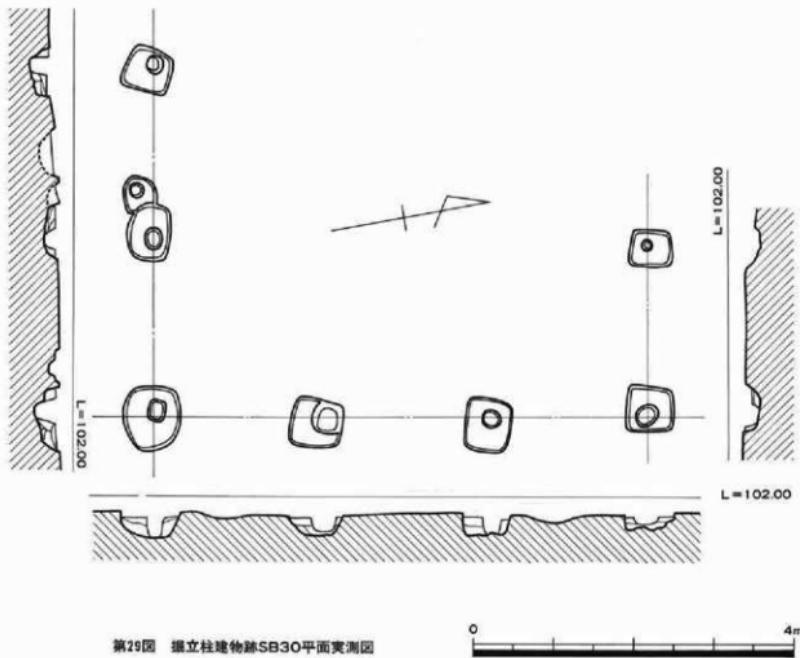
第26図 墨立柱建物跡SB27平面実測図



第27図 振立柱建物跡SB28平面実測図



第28図 捨立柱建物跡SB29平面実測図



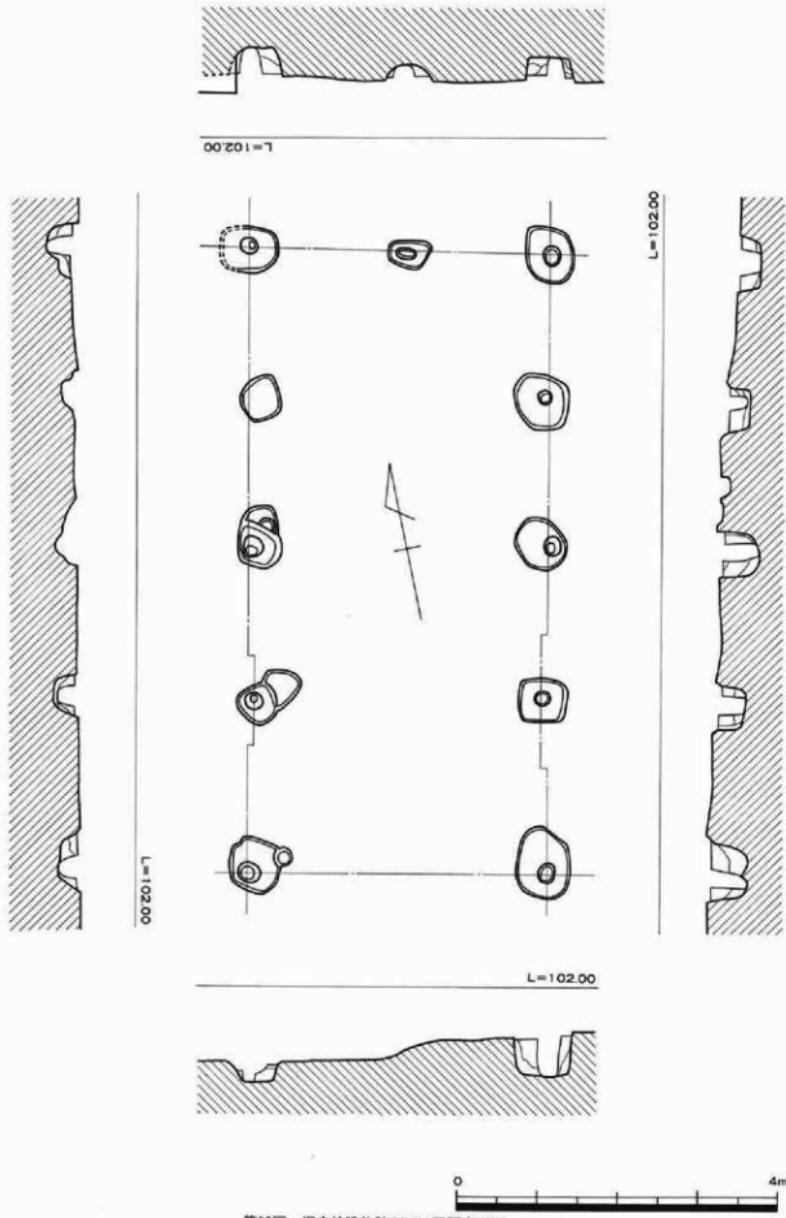
第29図 挖立柱建物跡SB30平面実測図

1.7m、2.05mで西側が広くなっている。桁行は南から2.1m、2.05m、1.8m、1.75mで、南側2間分がやや広くなっている。柱掘方は0.5~0.8mの矩形で、掘方埋土は黄味褐灰色粘質土で、一部の柱穴で黒褐色粘質土と炭化物が認められた。検出された柱穴は0.24m前後である。

### 井 戸

S E 03 : D地区北部中央で検出された井戸跡で、長径4.6m、短径3.5mの椭円形を呈する。深さは2.5m以上で、湧水が激しいため、底部までは掘開し得なかった。井戸内堆積層は大別してIII層に分類され、I層は茶褐色粘質土、II層は黄褐色粘質土層、III層は灰白色砂混粘質土層である。I層については人為的に埋設されたらしく、1層の堆積状況を呈するが、II、III層についてはレンズ状の堆積層が数層に分層されることから自然堆積である。なお、III層最下層で、染付、天目茶碗等の遺物出土していることから、近世乃至は近現代まで開口していたと推察される。

S E 04 : D地区北東部で検出された井戸跡で、東西3.2m以上、南北3.4m以上を測る。深さは1.2m以上で、北部が現状河川内に入っている、壁面の崩落が著しいため底部まで掘開し得なかった。井戸内堆積土は黄褐色粘質土で、土師器、須恵器等の細片以外明確な遺物は出土していない。



第30図 挖立柱建物跡SB31平面実測図

S E 05 (第31図・第32図・図版三十七・三十八・三十九) : D地区南西部、S B27の南側で検出された円形の素掘りの井戸跡で、南北4.5m、東西4.8m、深さ4.5mの規模を有する。さらに、S E 05の上面には南北7m、東西6.5m、深さ0.25~0.3mの十坑状の落ち込みを有する。井戸内堆積土はI~IV層に人削され、I・II層は黄褐色乃至は黄灰色粘質土で地山の流入土あるいは崩落土が大半であり、井戸底絶後の堆積である。III層は青灰色乃至黒緑灰色泥質土であり、ある時点まで機能していた可能性があるが、基本的に廃絶時の堆積層である。IV層はS E 05本来の機能時の堆積層で、明灰色乃至青灰色砂層の地山流入土である。井戸断面を観察すると、III層中位付近、深さ3mで著しく広がっている。これは、井戸の滯水状況が深さ3m付近まであり、滯水の上ド作用により井戸壁面が抉られたものと推察される。出土遺物はIII層が最も多く、III層最上層では90枚以上の土師器坏が一括して出土しており、中層からは齊串、尺、扇子、曲物等の木製品の他、流木、種子、鎌等の鉄製品、古錢(富貴通宝)等が認められた。また、西側肩部には、巾1mの階段上の落ち込みが検出され、これらの遺物も西側肩部を中心に出土している。

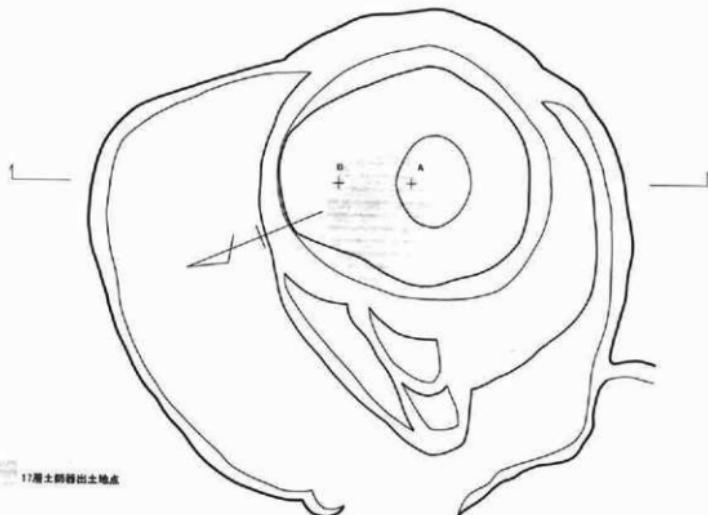
#### 溝 (図版四十・八十)

S D07 : D地区北部でS E 03に切られて検出された溝跡で、東西溝である。方位はN-14°30'~Eで、S B26、28と同一方向である。規模は幅1.8m、検出長2.5m、深さ0.28mで溝底部は概ね水平である。溝内堆積層は2層で、1層は茶褐色粘質土、2層が赤褐色粘質土である。いずれもレンズ状の堆積を呈し、自然堆積層である。絶対高は101.2m前後。

S D08 : D地区東部で検出された溝跡で、南北溝である。方位はN-14°10'~Eで、北部で検出されたS D07と直交する。規模は幅1.3m、検出長8m、深さ0.2~0.3mを測る。溝底部は2段になっており、北側が一段低くなっている。絶対高は、南部で102.38m、北部で102.07mを測る。溝内の堆積層は3層で1層が茶褐色粘質土、2層が明褐色粘質土、3層が灰褐色粘質土の自然堆積層である。

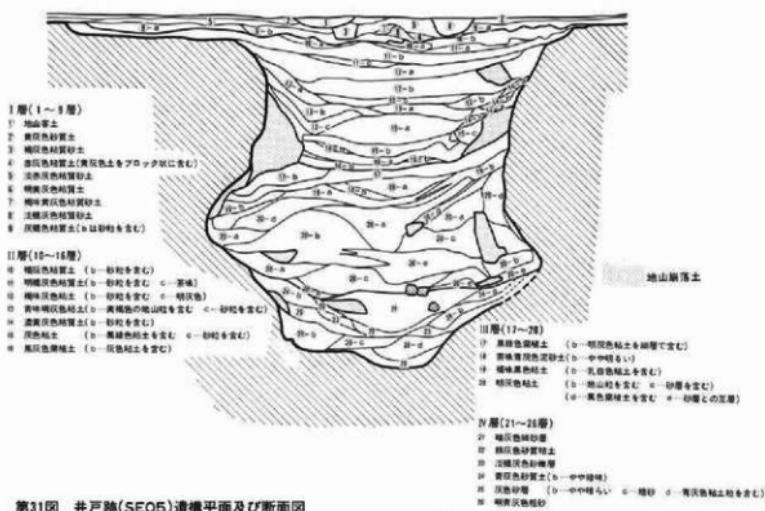
S D09 : D地区東部で検出された南北溝で、方位をN-23°~Eにとる。S D09は、地山の地形と平行しており、2時期の溝跡が検出されている。(古相をS D09a、新相をS D09bとする。) S D09は現状水田床土層下層で検出されていることから、それ以前の水田に関係する溝跡と考えられる。規模はS D09bが幅1m、深さ0.1~0.15m、S D09aが幅0.75m以上、深さ0.05~0.1mで、検出長は36m前後である。溝底部の絶対高は南部で102.5m、北部で101.78mと地山面の勾配と同じく、北側へ低く掘開されている。

S D10・11 : D地区南部中央を東西溝で方位をN-53°~Eにとる。S D10、11ともほぼ同一の規模を有し、幅0.5m、深さ0.1m前後である。検出長はS D10が13m、S D11が15mである。S D10は東部で検出されたS D09bから派生した溝で、S D11はS D09aから東西に派生した溝であ



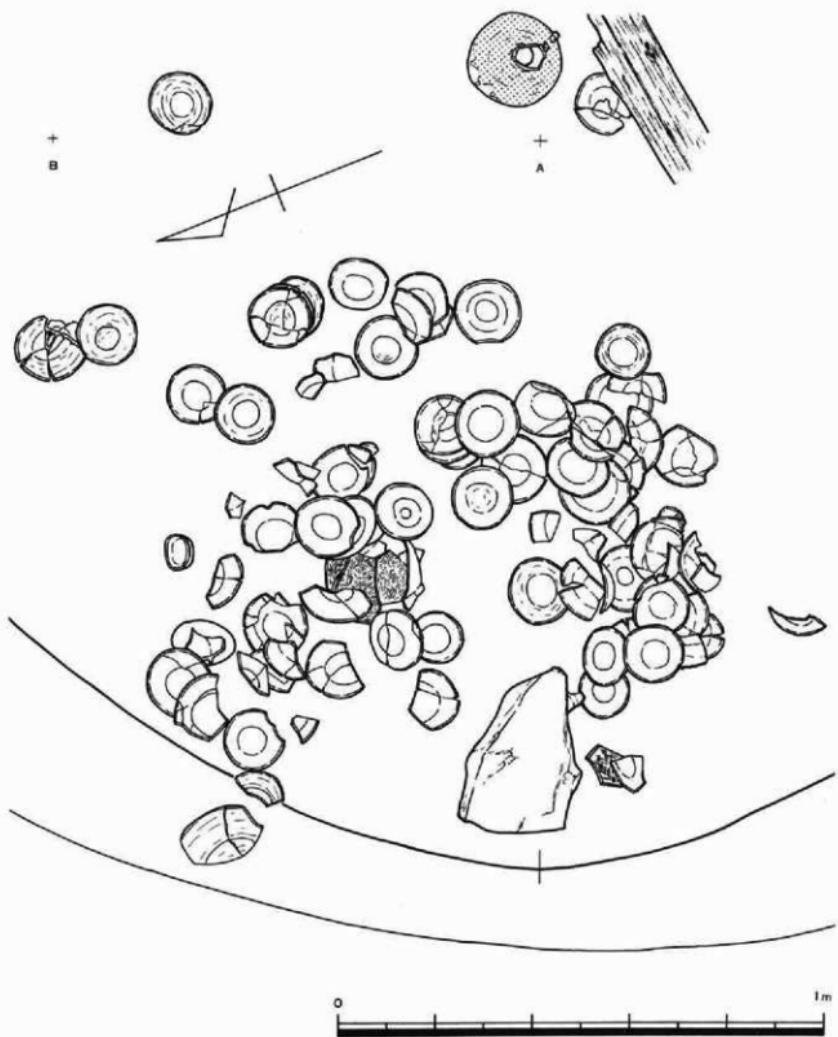
17層土器出土地点

L=102.350



第31図 井戸跡(SE05)遺構平面及び断面図





第32図 井戸跡 S E 05第17層遺物出土状況図

る。溝底部の絶対高は S D10が、東部で102.08m、西部で101.93m、S D11が東部で102.01m、西部で101.9mを測り、東から西へ低く掘開されている。

### 土 坑（図版八十）

S K45：D地区北東部で検出された土坑で、南北1.5m、東西1.0m、深さ1.5mの橢円形の土坑である。土坑内堆積層はV層に大別されるが、堆積状況は一時期の急激な堆積と考えられ、人为的に埋設されたと推察される。S K45については深さ1.5mまではほぼ垂直に掘開され井戸状を呈するが、堆積上においても滯水していた痕跡が認められず、性格等については明確でない。

S K46：D地区北東部、S K45の東で検出された土坑で、1辺1.3mの隅丸方形を呈し、深さ1.5mを測る。土坑内堆積層はV層に大別され、S K45同様一時期の急激な堆積と考えられ、人为的に埋設されたと推察される。

S K47：D地区中央西部で検査された径0.9～1.2mの不定形な土坑である。深さは0.28m前後で土坑内堆積層は2層に分類される。1層は橙味灰色粘質土で炭等の炭化物のほか、若干の焼上が包まれる。2層は灰褐色粘質土。

S K48：D地区南西部、S E05の西側で検出された溝状の土坑である。土坑西側については現状の水田により削平されているが、検出した規模は南北8.3m以上、東北2.5m以上、深さ0.28mを測る。土坑内堆積層は3層に分類され、1層褐灰色粘質土、2層淡褐色粘質土、3層濃黃褐色粘質土である。堆積状況は自然堆積で、東から西へ流入したことがわかる。

S K49：D地区中央部で検出された集石土坑で、規模は南北0.7m、0.7m以上の隅丸方形を呈し、深さは0.1m前後である。土坑内堆積層は暗褐色粘質土で、土坑中央に0.35～0.2m前後の花崗岩の割石が5個埋置されていた。

### 7. E 地 区

E地区では法線内約2,310m<sup>2</sup>を調査し、検出した遺構は掘立柱建物跡8棟、井戸跡1基、溝跡12条、土坑8基、壙列2条のほか多数のピット群がある。E地区的現状はD地区と同じ東西に三段の水田面となっており、東部と西部では約1mの比高差が認められる。また南部と北部においても約0.5mの比高差が認められ、南部が高くなっている。トレンチ内の土層は東部、中央部、西部地区においてやや様相が異なる。中央はD地区同様表上下0.2～0.3mの耕土層とその下層に0.1～0.15mの黄褐色粘質土の床土層が広がり、基本的にその下層が黄褐色及び赤褐色粘質土（花崗岩風化上層の地山面）の遺構面である。遺構面の絶対高は北部で102.4m、中央部で102.5m、南部は1段高くなっている。土層は、0.1～0.2mの耕土層及び

0.1~0.15mの茶褐色粘質土の床土層が広がり、その下層に灰褐色砂質上の包含層が存在する。包含層内からは寛永通宝のほか、天日茶碗等の近世陶器等が出土している。遺構面は黄褐色粘質上の地山面で絶対高は北部で103.5m、中央部で103.2m、南部で102.7mを測り、南部へ勾配を持つ。トレンチ西部は中央との比高差が0.4~0.6mの比高差が認められ、西部が1段低くなっている。土層は表上下0.1~0.2mの耕土層の下に中央部と同じく0.1~0.15mの黄味灰茶褐色粘質土が広がる。ただ、その下層に明黄灰色系と暗褐色系の粘質土が数層堆積しており、厚さ0.3~0.5mを測る。両層は鉄分およびマンガンの集積が著しく、滞水していた状況が窺え、さらに同層内にも吐糞状の高まりが認められることから、現状水面形成以前の水田面の可能性が考えられ少なくとも二期の水田面の存在が想定される。遺構面は黄褐色粘質土の地山面で、絶対高は、北部で102.8m、中央部で102.05m、南部で102.35mを測り、南部の段上で103.0mである。

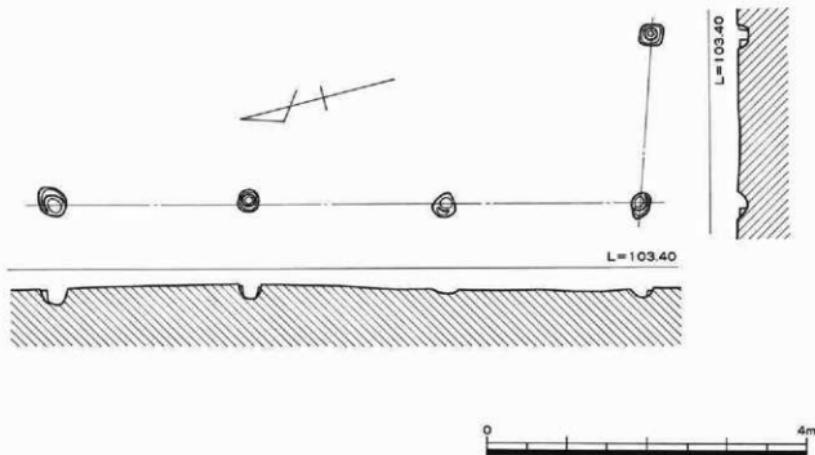
#### 掘立柱建物

S B32 (第33図・図版四十二) : E地区南東部で検出された南北棟の建物で方位をN-15°30' - Eにとる。梁行は1間以上で2.25m (7.5尺) 以上、桁行は3間で7.35m (24.5尺) を測る。柱間寸法は桁行西側列で2.45m等間である。柱掘方は0.2~0.5mの円形乃至は梢円形で、埋方塙土は黄味灰茶褐色粘質土である。柱穴はいずれも明確なものは検出されなかった。

S B33 (第34図・図版四十二) : E地区中央部で検出された南北棟の建物で方位をN-9°20' - Eにとる。梁行は2間で3.9m (13尺) 、桁行は3間で4.95 (16.5尺) を測る。柱間寸法は梁行は1.95m等間、桁行は西側列では1.65m等間、東側列では北から1.65m、1.25m、2.05mで南側が最も広く配列されている。柱掘方は、0.45m~0.7mの矩形で、埋方塙土は暗茶褐色粘質土をベースにしている。検出された柱穴は0.18~0.20mである。また、桁行中央列は南側に片寄って束柱が1基存在し、柱間寸法は2.05mを測る。

S B34 (第35図・図版四十三) : E地区中央部、S B33の南西に位置する南北棟の建物で、方位をN-10°20' - Eにとる。梁行は3間で4.95m (16.5尺) 、桁行が3間5.55m (18.5尺) で、南側に1間分、1.85mの此あるいは小屋的な施設を有するものと考えられる。柱間寸法は梁行が1.65m等間、西側列では南から2.25m、1.65m、1.65mと南側が最も広く配列されている。柱掘方は0.6~0.8mを測り、埋方塙土は暗茶褐色粘質土と灰褐色粘質土が板築状に構築されていた。検出された柱穴は0.24m前後である。また、S B34の南側にはやや柱間は広いが東側列と西側列の延長約2.4mの位置に2間分 (4.8m) の柱列が存在し、北側と同様の施設が北側にも存在した可能性がある。

S B35 (第36図・図版四十三) : E地区中央、S B34の北側で検出された南北棟の建物で、方位をN-8°50' - Eにとる。梁行は2間で3m (10尺) 、桁行2間以上4.6m以上を測る。柱間寸法は梁行で1.5m等間、桁行は東側列で南から2m、2.6m、西側列で南から2.3m、2.1mを測る。柱掘



第33図 挖立柱建物跡SB32平面実測図

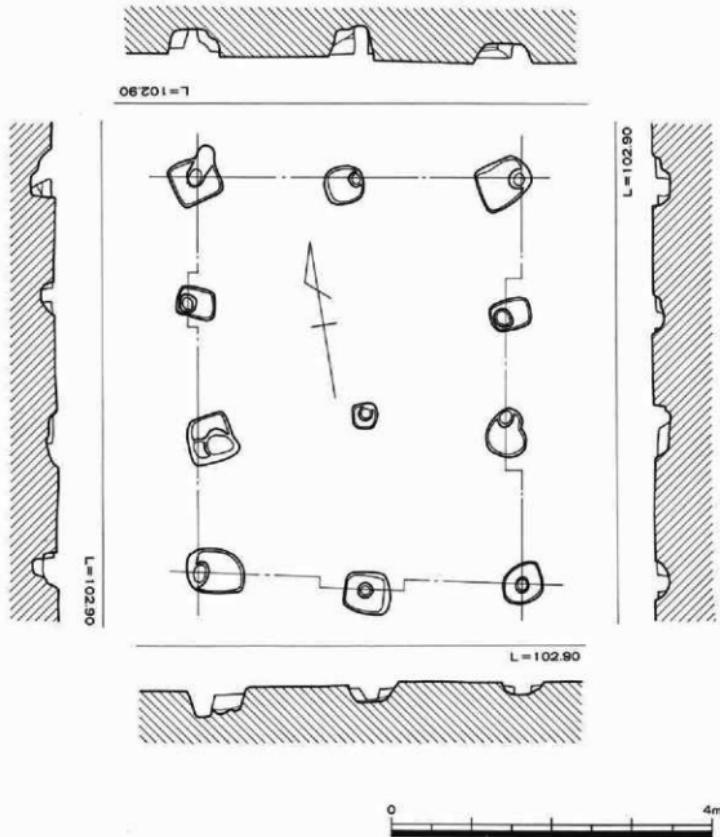
方は0.4m前後の矩形を呈するが、桁行西側列は0.25~0.3mの円形乃至は楕円形を呈する。埋方埋土は茶褐色粘質土で検出された柱穴は0.18~0.2mを測る。

S B36（第37図・図版四十四）：E地区中央、S B35の西側で検出された東西棟の建物で、方位をN-14°20' - Eにとる。梁行は1間以上で2.4m以上、桁行3間で4.65m（15.5尺）を測る。柱間寸法は桁行南側列は1.55m等間である。柱掘方は0.4~0.65mの隅丸方形乃至は長方形を呈し、掘方埋土は黄味茶褐色粘質土で、検出された柱穴は、0.18~0.2mを測る。

S B37（第38図・図版四十四）：D地区中央西部で検出された南北棟の建物で、方位をN-11°30' - Eに方位をとる。梁行は2間で4.95m（16.5尺）、桁行は4間で7.5m（25尺）を測る。柱間寸法は梁行の南側列、北側列とともに1.65mと3.3mで東側が広く配列されているが、東側の1間分は2分すると1.65m等間となるため、梁行は1.65m等間で3間の規模を有していた可能性がある。桁行は東側列では南から1.85m、2.05m、1.75m、1.85m、西側列では1.85m、1.5m、2.05m、2.1mを測る。柱掘方は0.5~0.95mの隅丸方形で、掘方埋土は暗茶褐色粘質土と灰褐色粘質土が版築状に構築されている。検出された柱穴は0.18~0.28mを測る。

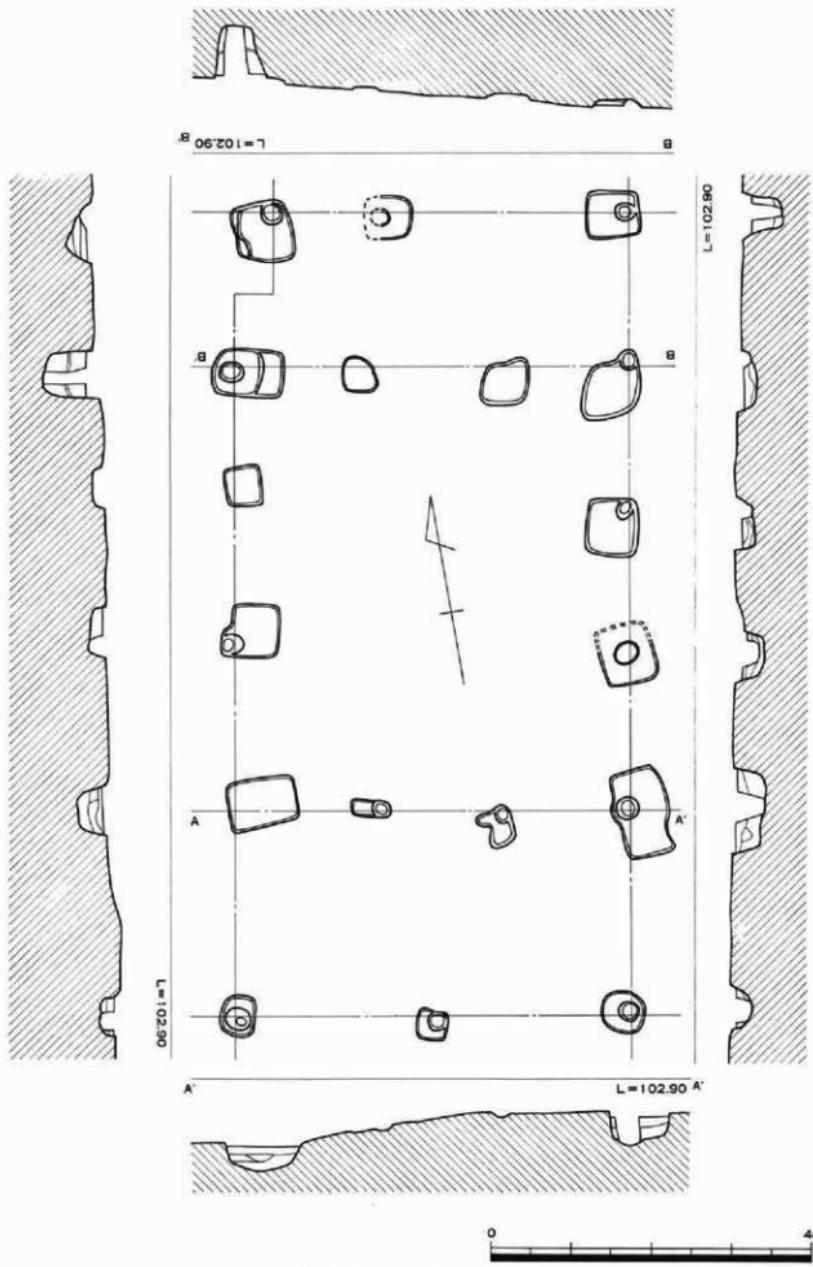
S B38（図版四十五）：E地区西部、S B37の北側で検出された建物で、方位をN-14°10' - Eにとる。南北2間以上、4.6m以上、東西1間以上、2.3m以上の規模を有する。柱掘方は0.35~0.55mの長方形乃至は正方形で、掘方埋土は暗灰褐色粘質土及び明灰色粘質土である。

S B39(第39図)：E地区南西部で検出された南北棟の建物跡で、東側に1間分の庇を持つ。方

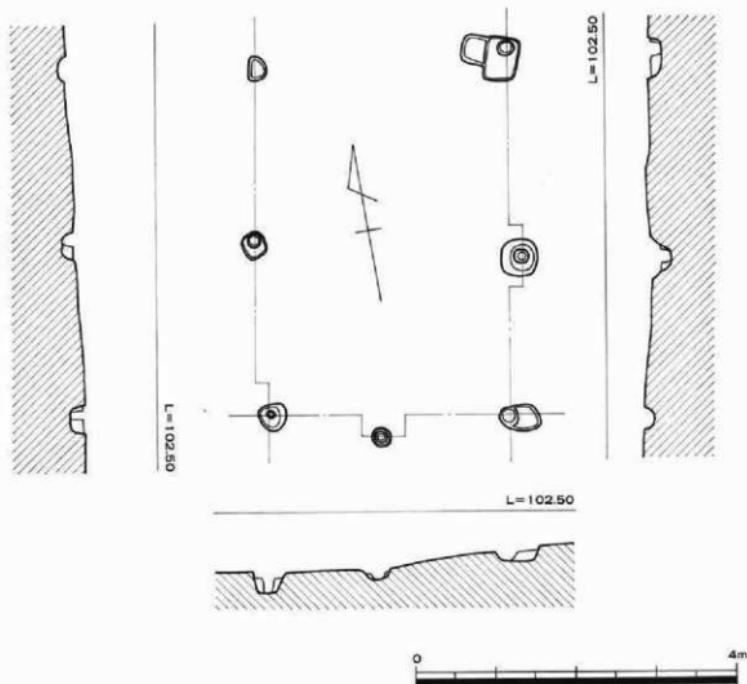


第34図 樹立柱建物跡SB33平面実測図

位はN-13°50'-Eにとる。身舎は梁行が南側列で3間、北側列で2間で4.8m(16尺)、桁行は3間で7.8m(26尺)を測る。柱間寸法は梁行北側列で2.4m等間、南側列は東から1.25m、1.9m、1.25mと中央の柱間が広く配列されている。桁行の柱間寸法は東側列および西側列ともに2.4m等間である。柱掘方は0.5~0.9mの隅丸方形で、掘方埋土は赤褐色粘質土及び灰褐色粘質土である。底部は桁行東側列との柱間寸法は2.5m南北は7.8mで2.6m等間である。柱掘方は0.35~0.4mの隅丸方形で、身舎の柱掘方に比して小形である。掘方埋土は赤褐色粘質土である。



第35図 捨立柱建物跡SB34平面実測図

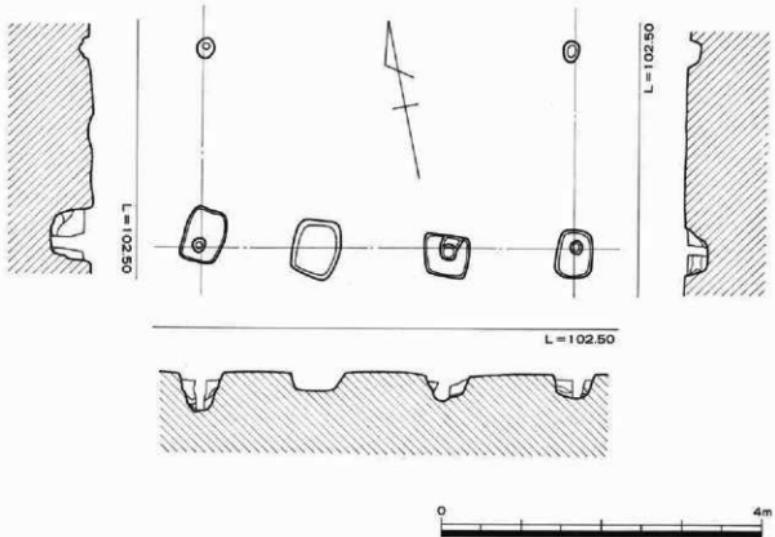


第36図 振立柱建物跡SB35平面実測図

検出された柱穴は、身舎四隅の柱穴が0.28m前後と他に比して大型であるが、他の柱穴は0.2m前後である。

### 井 戸

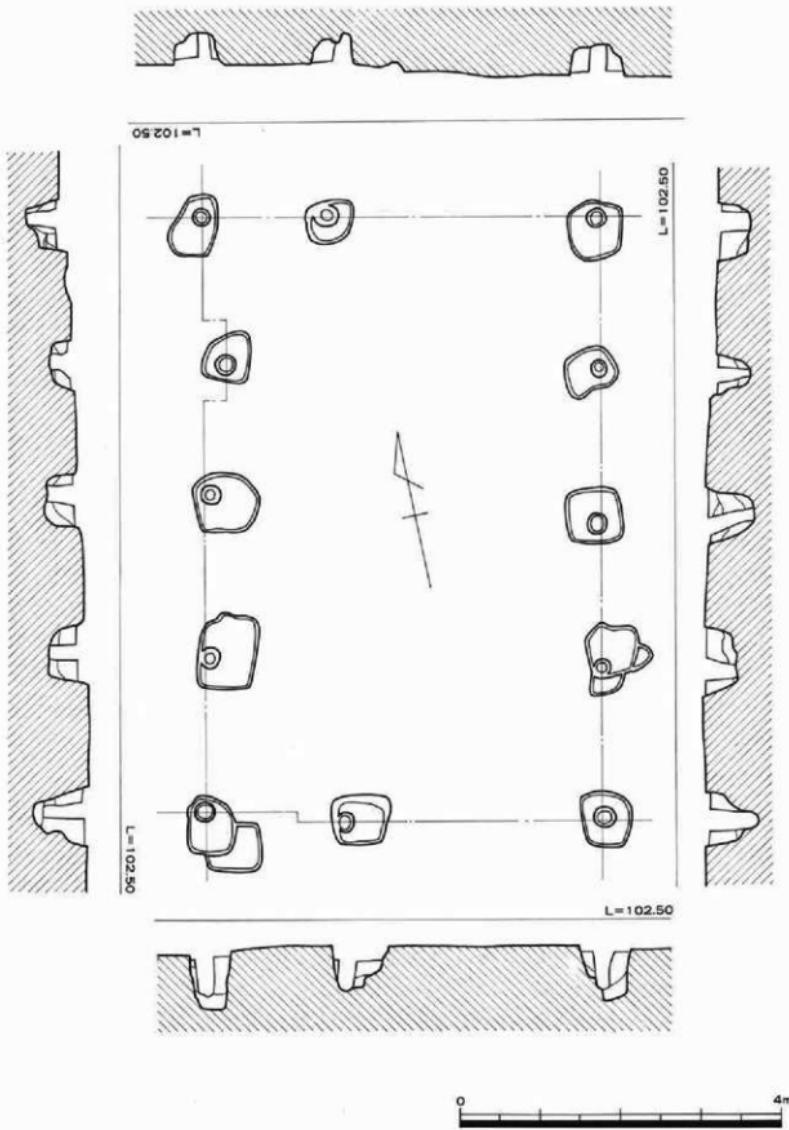
S E 06 (第40図・第41図・第42図・図版四十五・四十六)：E地区南東部で検出された円形の素掘りの井戸跡で、径2.4m、深さ4.5mの規模を有する。井戸内堆積土はI～V層に大別される。I層は井戸廃絶後に人為的に埋設されたらしく、I層下層に黒色土とともに炭が多量に出土している。I層からは、中世陶器と土師器皿が1枚出土している。II層は廃絶後の自然堆積層でレンズ



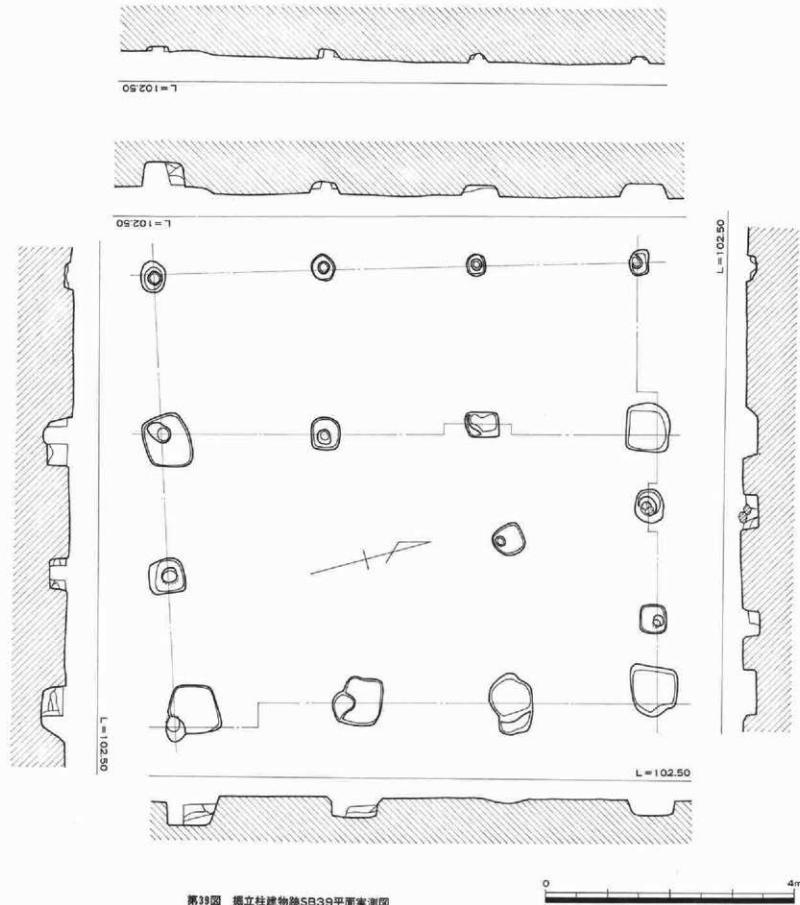
第37図 摺立柱建物跡SB36平面実測図

状に堆積した明褐色乃至黄褐色粘質土系の土層が数層認められた。III層は井戸崩壊時の堆積層で青灰色系の地山流入土とともに灰褐色粘質土の地山粘土塊が認められる。IV層は機能時から井戸廃絶時の堆積層で、青灰色乃至黒緑灰色泥質土で明瞭な腐植土層が認められる。V層は青灰色乃至明灰色砂層でS E 06本来の機能時の堆積層である。井戸断面を観察するとIV層中位付近、深さ3.3mで地山面が大きく抉られており、湧水最高点がこの付近であり、滯水の上下作用により大きく広がったものと考えられる。また、堆積土層もこの付近を境に泥質土から粘質土系の土層に変化する。出土遺物はIV層内から最も多くの出土を見、IV層最上層では120枚以上の土師器坏が一括して出土したほか、曲物、箸等の木器、木製品、桃等の種子が認められた。また、V層最下層、井戸底部中央からは、完形の須恵器壺1個体とともに壺下層より皇朝十二銭が20枚數きめられたように出土している。出土した皇朝十二銭は和銅開珎1枚、萬年通宝6枚、神功開宝14枚である。

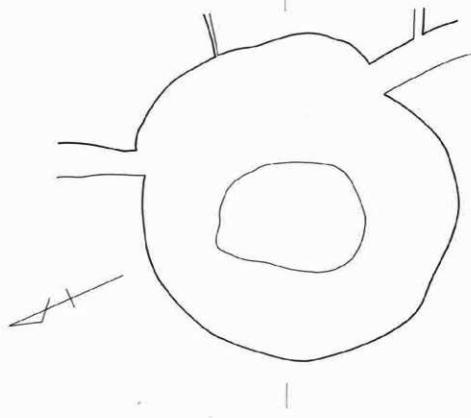
溝 (図版八十一)



第38図 据立柱建物跡SB37平面実測図



第39図 挖立柱建物跡SB39平面実測図



L=103.20

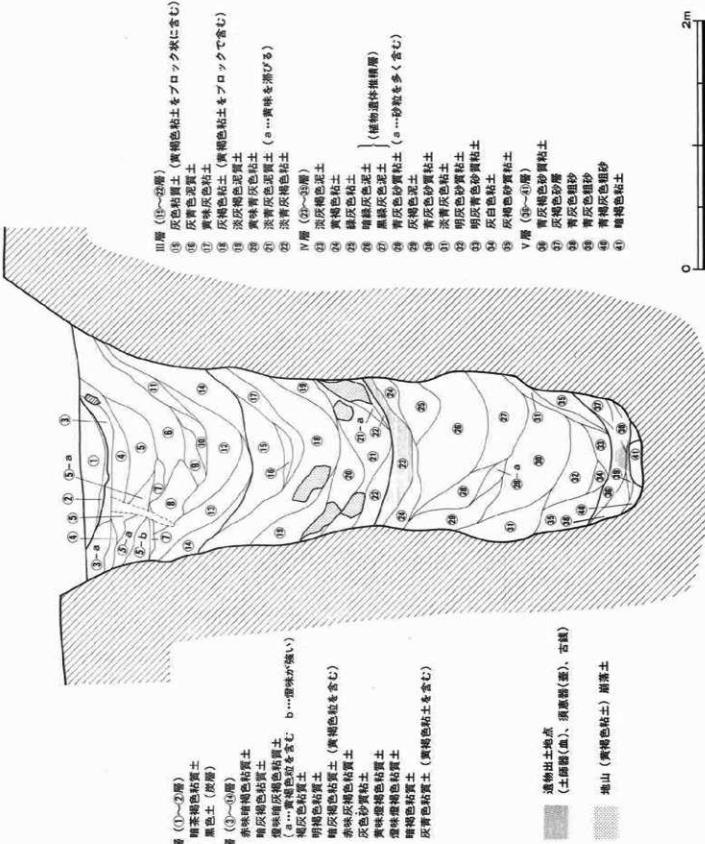
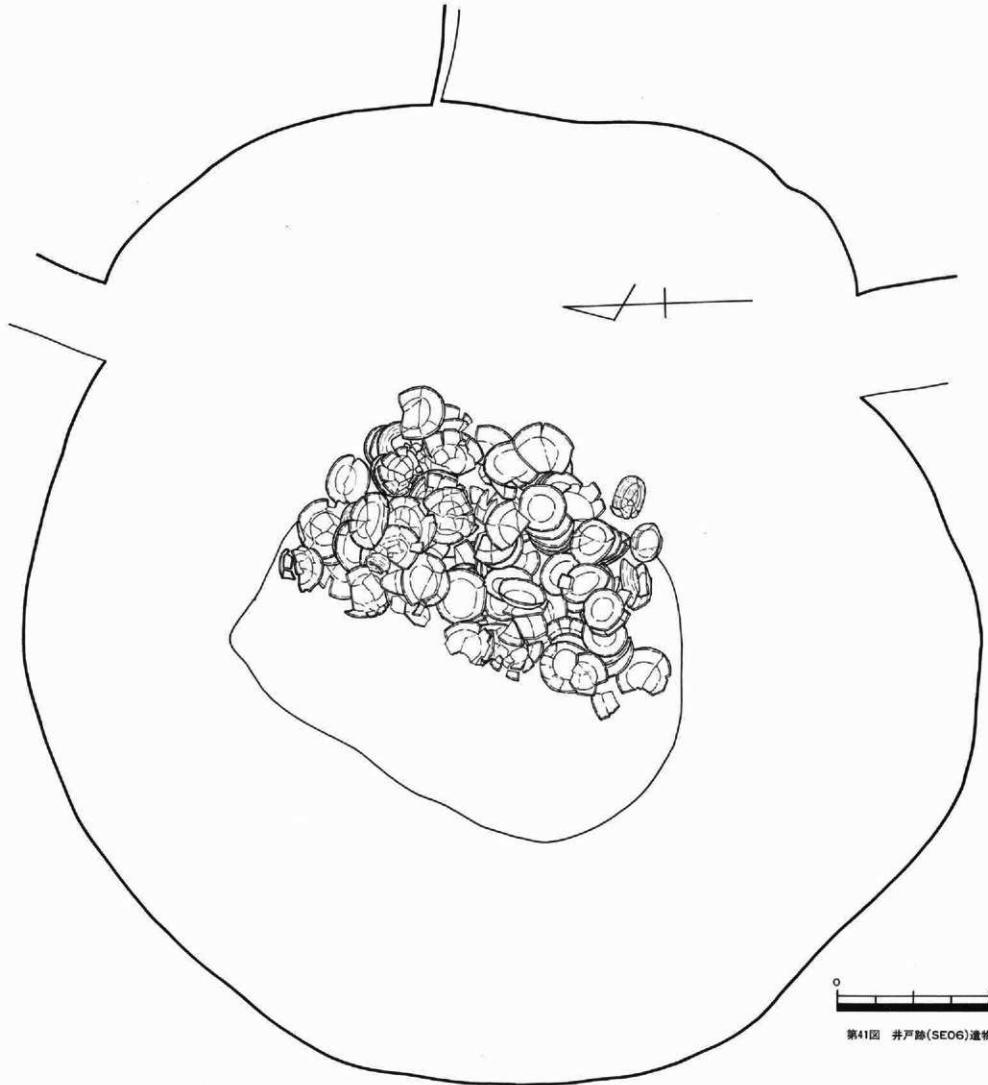


図40 井戸敷(5EOG)透視平面図及び断面図



第41図 井戸跡(SE06)遺物出土状況図① (Ⅳ層～23層)

S D13：E地区南部で検出された東西溝で、方位はN-14°-E～N-13°10'-Eにとる。規模は幅0.8～1.4m、検出長32.2m、深さ0.1～0.25cmのU字溝である。溝内堆積層は灰褐色粘質土と赤褐色粘質土の2層である。溝底部の絶対高は東部で103.25m、中央部で102.85m、西部で102.44mで東から西へ傾斜している。S D13はD地区検出のS D07と平行しており、その間の距離は106mで概ね1町である。また、D地区東部で検出されたS D08と直交する状況にある。

S D14：E地区南部、S B42の南側で建物に平行して検出した東西溝で方位をN-13°50'-Eにとる。S D14は2個所で分離しており、S B42身舎梁行南側列のほぼ中央で1個所分離している。規模は最大幅1.3m、最小幅0.3mで、深さは0.15～0.05mである。

S D15：S B42の底部部分に平行して検出された南北溝でN-14°-Eに方位をとり、S D014と直交して存在する。規模は幅0.55m深さ0.1mで、現存長は7.8mを測る。S D14、15は建物跡に平行して存在することから、建物を区画する機能を有していたと考えられる。

S D16：E地区東部で検出された南北溝で方位をN-23°-Eにとる。規模は幅0.9～1m、深さ0.25～0.30mで、検出長は29.5mを測る。S D16は北端でS D17と合流しており、灌漑用の水路と考えられる。溝底部の絶対高は南部で102.4m、中央部で102.25m、北部で102.6mで中央部へ流れ込む勾配を有する。

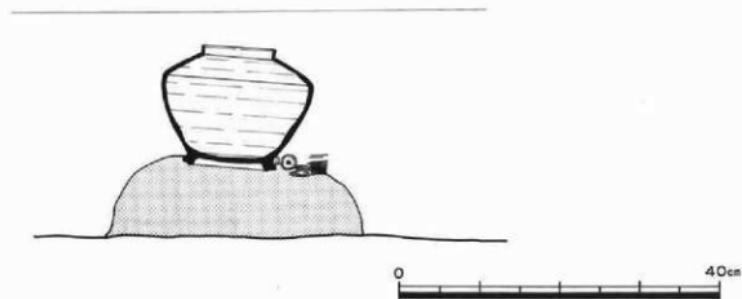
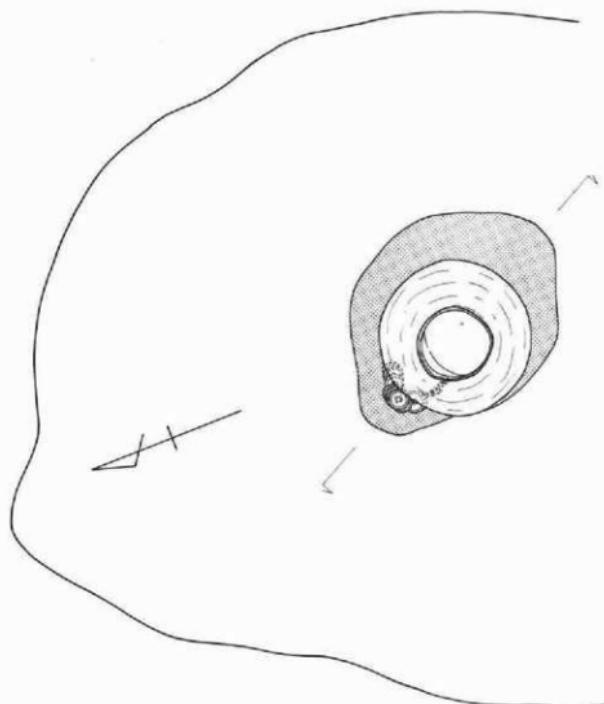
S D17・18：E地区北部で検出した東西溝でN-23°-Eの方位をもつ。規模はS D17が幅2m前後、深さ0.25m、S D18が幅1.0mで深さ0.15mで、約12m左へ流下した後、南へ直進に折曲し、S D21に合流するものと考えられる。溝底部の絶対高はS D17が東部で102.43m、西部で102.1mを測る。

S D19：E地区中央部で検出された溝跡で幅0.5m、深さ0.2m、検出長31.5mを測る。S D19はトレンチ南東部より南西方向に流下し、約9mの地点で南へ方向を変えている。さらに、南方へ11m流下した地点で、再び南西方向へと流れを変えている。S D19はS D20に切られて検出された。溝内底部の絶対高は東部で102.44m、中央部で102.44m、西部で102.22mでわずかながら南西方向に傾斜している。

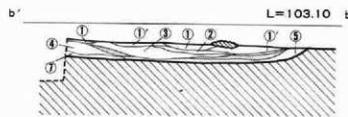
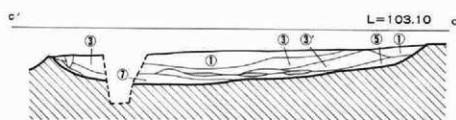
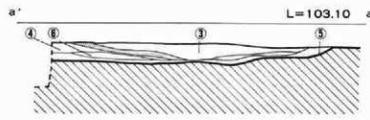
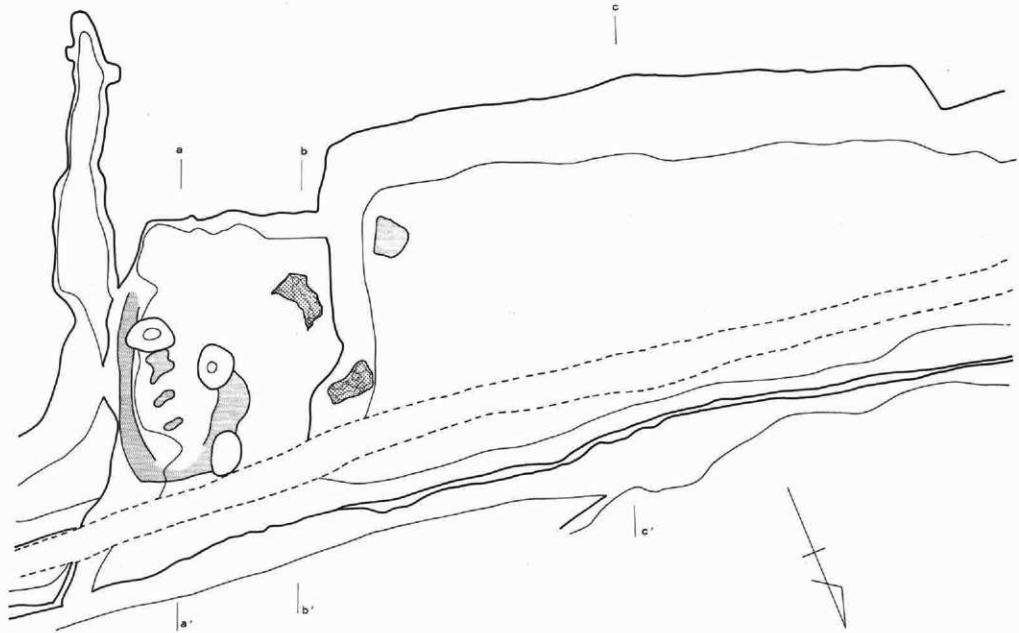
S D20：E地区中央で検出された溝跡で、幅0.25m、深さ0.1～0.2m、検出長15.5mを測る。S D20はトレンチ東部を南北に走るS D16から派生した溝で、S D16の溝底部が最も深くなる中央部よりN-14°10'-Eの方位で、南西方向に流下している。溝内堆積土は茶褐色粘質土で溝底部付近で灰褐色砂質土層が認められた。

#### 柵　　列（図版八十一）

S A01：E地区東部で検出されたN-11°30'-Eに方位を持つ南北に7間、12m以上の柵列である。柱間寸法は南から1m、2.1m、1.5m、1.5m、1.5m、2.5m、2.3mを測る。柱掘力は0.2～0.25



第42図 井戸跡(SE06)遺物出土状況図② (V層)



- |                |            |
|----------------|------------|
| ■ 焙土及び炭化物      | ■ 鉄 淬      |
| ① 淡褐色土         | ⑥ 淡灰褐色粘質土  |
| ② 暗褐色砂質土（炭を含む） | ⑦ 赤味灰褐色粘質土 |
| ③ 青味淡灰褐色粘質土    |            |
| ④ 赤褐色粘質土       |            |
| ⑤ 噴赤灰褐色粘質土     |            |



第43図 SX23 造構平面図及び断面図

mの不整形な円形乃至は橢円形で、掘方埋土は暗灰褐色粘質土である。検出された柱穴は0.1~0.15mの細いもので、柱穴底部もV字状になるものが存在することから、柱を打ち込んだ可能性がある。

### 土 坑

S K50 : E地区北部中央で検出された焼土坑で一辺0.7m、深さ0.4mを測る。上坑内堆積土は3層である。1層は黒褐色粘質土で炭化物及び焼土塊を若干包含する。2層、3層は赤褐色粘質土で2層には炭と焼土塊を包含している。上坑内からは土器、須恵器の細片が出土している。人為的に埋設された形跡は認められるが、土坑の用途、性格については不明である。

S K51~56 : E地区南東部で検出された上坑で、幅0.35~0.5m、長さ1.5m~2mの長楕円形を呈し、深さは0.15m前後を測る。S K7~12の6基の土坑は概ね等隔で平行に位置しており、烟等の畝状の遺構ではないかと推察される。土坑内堆積土は灰褐色砂質土層で坑底部に砂礫の堆積が認められた。

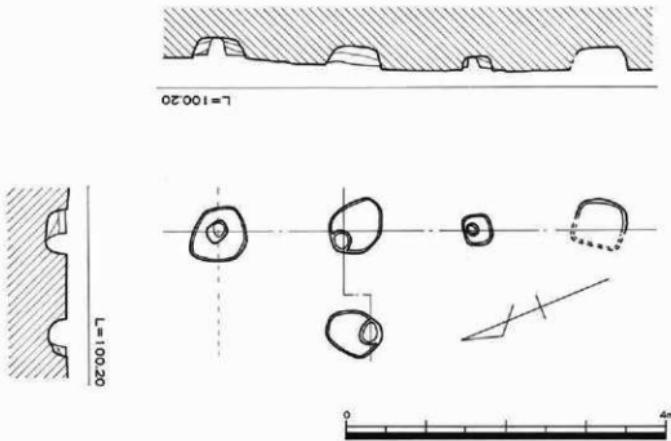
### 不明遺構

S X23 (第43図・図版八十一) : E地区南西部で検出された焼土坑で、規模は東西12m前後、南北幅1.9~4m以上で、土坑北部はS D07により削平されている。上坑の深さは0.4mで、土坑内堆積土は3層である。1層は黄味灰褐色粘質土、2層が暗赤褐色砂質土で2層と3層の境目付近に炭化物、焼土塊を包含する。3層は灰褐色粘質土で土坑底部との境目付近に炭化物、焼土塊を包含する。また、各層内からは鉄滓が多数出土しており、上坑肩部には二次的な焼成を受けた痕跡は認められないが、出土遺物の状況から大鍛冶等の製鉄に関連する土坑の可能性がある。

S X24~27 : E地区西部で検出された矩形を呈する落ち込みである。規模はS X24が南北11.6m、東西10.4m、深さ0.2m、S X25は南北11.5m、東西8.5m、深さ0.25m、S X26は南北10m、東西5.4m、深さ0.25m、S X27は南北10m、東西2m以上、深さ0.15mを測る。堆積土は2層に分類され、上層は明黄灰色粘質土、下層は暗褐灰色粘質土である。両層ともマンガンおよび鉄分の集積が著しく、滲水していた状況が窺える。S X24~27の境目付近はやや地山面が高くなっている、畦畔状を呈する。しかし明確な水口等の水利施設が検出されていないため確定視し得ないが、水田とすれば表面水型土壤に分類され乾田としての想定が可能である。

### B, F 地 区

F地区では法線内約1,100m<sup>2</sup>を調査し、検出した遺構は、上坑2基、ピット状遺構3基のみであ



第44図 掘立柱建物跡SB40平面実測図

った。トレンチの土層は表土下0.2mの造成土の下層に、0.1~0.15mの耕土層と0.05mの黄味茶褐色粘質土の床土が全面に広がる。遺構面は床土直下で検出され、赤褐色粘質土の地山面である。遺構面の絶対高は南部で103.43m、北部で103.4m、東部で103.37m、西部で103.36mで概ね水平である。

## 土 坑

S K57(図版八十二)：F地区南西部で検出された遺構で、径0.8m、深さ1.2m測る。ほぼ垂直に掘開され、土坑内堆積土は4層でいずれも黄褐色系の粘質土である。

## 9. Z区拡張部

B地区西部の国道1号線の側道側溝付け替えに伴なう調査で、調査面積は約120m<sup>2</sup>である。調査区は3区に分け調査し、北から1区とした。1区は表土下1.2mまで造成土で、それを除去すると黄褐色粘質土の地山面に達した。しかしながら、現状のガス管等の埋設により、かなり攢乱されしており、明確な遺構は検出されていない。2区は表土下0.15mの造成土の下層に、0.1~0.15mの耕土層と0.1~0.2mの橙褐色粘質土の床土が広がる。さらにその下層には、淡黄褐色粘質土の地山

面で、絶対高は北部で99.6m、南部で99.65mである。検出された遺構は南北に並ぶピット列で掘立柱建物と考えられる。3区では表土下1.2mの造成土の下層に0.15mの耕土層、0.05mの橙褐色粘質土の床上層が広がる。遺構面は北部では黄褐色粘質土であったが、南部は茶褐色砂質土で鉄分の集積が著しい。検出された遺構は近現代の井戸跡1基のみである。

#### 掘立柱建物

S B40(第44図)：2区で検出された南北のピット列で、検出長は5.1m(17尺)である。方位はN22°40'Eである。柱間寸法は1.7m等間で、柱掘方は0.3~0.6mの隅丸方形を呈する。掘方埋土は黄褐色粘質土で、検出された柱穴は0.21m前後である。ただ、南から2基目の柱掘方の東側に直交した位置で柱掘方が検出されていることから、南北1間以上(1.6m以上)、東西1間以上(1.3m以上の)建物跡になる可能性がある。

(谷口 智樹)

## IV. 出土遺物

今回の調査区から出土した遺物には上器類を主として、瓦、木器、木製品、古銭、鉄器、鉄滓が認められた。下器類としては古式土師器、須恵器、土師器、黒色土器、綠釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、國產陶器、瓦等がある。数量として最も多いのは須恵器、土師器であり、全体の約85%を占め、施釉陶器、輸入陶器が約7%、黒色土器が2.5%、瓦器約4.5%である。また、須恵器と土師器の比率を見ると、ほぼ均等している。

次に、出土地点を見ると、上軒器・須恵器・黒色土器については調査地全地区でほぼ平均して出土しているが、古式土師器はB地区のみで出土している。さらに、灰釉陶器についてはC地区からE地区にかけて比較的多くの出土を見ているが、D・E地区については綠釉陶器の出土はほとんど認められない。また、瓦器についてはZ地区で集中して出土しており、D・E地区では井戸跡上層より破片がわずかながら出土しているに過ぎない。輸入陶磁器もこれらと同様の様相を示している。瓦については約50点余り数えられるが、その大半が平瓦であり、D・E地区からはわずか3点で大半はA・B・C地区的出土である。土器・木製品についてはA地区からE地区的各井戸跡より出土しており、鉄滓についてはE地区で大量の出土があったほか、各地区的遺溝から平均して出土している。

遺物の時期については、大半が奈良時代から平安時代のもので、古墳時代の遺物・中世以降のものがわずかに認められる。

なお、器形分類については京滋バイパスに係る調査（矢倉口遺跡、横土井遺跡、野路小野山遺跡）の遺物におけるものであり、奈良・平安時代の遺物を中心に各時代の遺物の分類を行った。

また、分類の方法としては全体の形態の差によるものは人文字のアルファベットで、さらに、細部の形態及び調整等による差については<sub>1,2,3</sub>数字で、法量の差についてはI II IIIの数字で表示することを基本とした。

以下、上記の遺物についてその概略を記すこととする。

### 1. 土器類

古式土師器：古式土師器には小型丸底壺、器台、甕、壺などがある。

小型丸底壺：小型丸底壺については2種類認められ、小さな扁球形の体部に外上方へ比較的高く延びる口縁部を付するもの（H41・44）と球状の体部に若干外上方へ短く延びる口縁部を付するもの（H42・43・51・53）がある。H41は口径10.5cm、腹径7.0cm。調整は明瞭ではないが、一部焼成時の黒斑を残す。H42は口径9.0cm、腹径9.5cmで、体部内面に横方向の刷毛目痕を認める。

**甕**：H47は腹径21cmを計る壺体部。口縁部は欠損しているが、おそらく頸部より『く』の字に開き、端部を丸く納める類と思われる。体部内外面ともに刷毛調整。H48、56、57は口縁部が内湾して開き、端部内面を肥厚させるいわゆる布留式甕で、口縁部端面は内傾している。H56は16~17cm、H56は口縁部内外面に刷毛目痕をかすかに残す。

**壺**：H54は丸みのある肩部から直立気味に頸部が伸びる壺。口縁部は欠損しているが、直立した後、水平に短く外反し、さらに屈曲して外上方に開く類と思われる。頸部径は9.0cm。胎土はきめこまやかな良質のものである。

**小型器台**：H52は口径9.0cmを測る口型の受部を持つ小型器台で、口縁部は丸く納める。

**須恵器**：須恵器には壺身・蓋・皿・壺・甕・平瓶・高壺等がある。壺身については大別すれば高台の付くものと付かないものとに分けられるが、法量等によりさらに分類が可能である。また蓋については器形により大別して壺蓋・壺蓋に2種に分類され、さらに、壺蓋・壺蓋ともその形態等により細分が可能である。なお、形式の分類については古墳時代から中世の遺物を一括しており、例えば平城編年で須恵器壺Gに当るものについても壺Aに含んでいることを断っておく。壺・皿・碗については15以下のものを皿、25~39前後のものを碗、40以上のもの及び施釉陶器のタイプのものを碗とした。

**壺A**：壺Aは高台の付かない類で、口縁部が上方へ単純に立ち上がるものである。形態的には底部が丸みを残すもので口縁部が外反気味ないし直線的な外上方へ立ち上がるもの（C42・43・161・165・168・228・337……A<sub>1</sub>）、底部が平坦に近いが凹凸のあるもので口縁部が内湾ないし直線的に上方へ立ち上がるもの（C44・135・136・155……A<sub>2</sub>）、平坦な底部を有し、口縁部が外反ないし直線的に外上方へ立ち上がるもの（C9・137・169・249・259~262・373・376・378・404……A<sub>3</sub>）に細分される。壺Aは、法量によりさらに分類ができるよう、口径10cm前後のもの（A<sub>1</sub> I）、口径11~13.5cm前後のもの（A<sub>1,2,3</sub> II）、口径が14.5~15.5cm前後のもの（A<sub>3</sub> III）、口径17cm前後のもの（A<sub>3</sub> IV）の中小大の4種類があるようである。径高指数（口径÷高さ×100）をみると壺A、Iでは31前後のもの39前後のものがあり、壺A<sub>1</sub> IIでは28~30・32・39前後を測る。壺A<sub>2</sub>では壺A<sub>2</sub> IIで22・27・28・33前後とバラツキがある。壺A<sub>3</sub>では壺A<sub>3</sub> IIIで28・30前後を測る。壺A<sub>3</sub> IIでは基本的に3種類に分かれ、20・24~27・35前後のものがある。

**壺B**：壺Bは高台付くもので、口縁部が外上方へ単純に立ち上がるものである。形態的には高台が底部と体部の境目より内側に付くもの（C5・143・157・170・351・442・462・470・497……B<sub>1</sub>）、境目付近に付くもの（C144・145・149・214・253・263・265・266・268・269・331・395・397・405・426……B<sub>2</sub>）がある。

いずれも口縁部は外反気味あるいは直線的に外上方へ立ち上がる。坏Bは法量によりさらに分類ができるよう、口径10cm前後のもの(B<sub>1</sub>I)、口径が12~16cm前後のもの(B<sub>1,2</sub>II)、口径が18cm以上のもの(B<sub>1,2</sub>III)3種類があるようである。径高指数は坏B<sub>1</sub>ではB<sub>1</sub>IIが25前後、26~28前後、31前後のものがあり、坏B<sub>1</sub>IIIが36前後である。坏B<sub>2</sub>では坏B<sub>1</sub>Iで36前後、坏B<sub>2</sub>IIでは20以下、24前後、26~29前後、32~33前後、40前後とバラツキがあるが、26~33前後が最も多い。坏B<sub>2</sub>IIIは24前後である。坏B<sub>1</sub>には底部外面に墨青「毛」のあるもの(C497)がある。

坏C：体部から短い受部と低い立ち上がりを有するもの(C23)である。

■：皿は高台の付かないもの(皿A)のみで、底部は平坦な平底のものである。形態的には直線的に立ち上がる体部で、口縁端部が内側に肥厚するもの(C109)、端部が外側に肥厚しているもの(C341・445)、端部が単純に納まるもの(C54・150・412・415・472)の3種類がある。法量により細分が可能で口径15cm前後のもの(皿A I)、口径17~18cm前後のもの(皿A II)、口径19cm以上のもの(皿A III)の3種類がある。

坏蓋A：坏蓋Aには丸みを持つ天井部から外下方へ延びるもの、丸みを持つ天井部より屈曲して外下方へ口縁部が延びるもの(C167……坏蓋A<sub>2</sub>)がある。ただ、坏蓋A<sub>2</sub>については坏身とする見解もあることから坏蓋とするか坏身とするかについては今後の検討課題としたい。

坏蓋B：坏蓋Bは扁平な擬宝珠状のつまみを持つもので、天井部から口縁部にかけての形態により、坏蓋B<sub>1</sub>~B<sub>4</sub>に細分される。坏蓋B<sub>1</sub>は丸みを持つ天井部ないしは水平な天井部から外下方へ単純に延び口縁端部に続くもの(C2・51・75・76・79・81・128・131・133・169・179・219・258・335・338・357・365・366・390・419・421・423・451・453・461・463・464・476・479・481・482・492)で、端部が垂直に延びるもの内傾するものがある。坏蓋B<sub>2</sub>は水平な天井部が外下方に延びた後、口縁部付近が「て」状に屈曲するもの(C64・70・71・77・78・121・132・180・213・218・230・257・277・288・342・359・360・363・367・383・386・389・417・418・431・434・437・470)である。坏蓋B<sub>3</sub>は水平な天井部がそのまま横方向に延びた後、口縁端部がつくもの(C178・229・273・354・370・393・422・452・481)である。

坏蓋B<sub>4</sub>は水平な天井部からやや外下方に延びた後、菱形の口縁部が付くもの(C377・424)である。法量については坏蓋B<sub>1</sub>で口径にばらつきがあり口径による分類はやや問題があるが、12~16cm前後のもの(坏蓋B<sub>1,2,3</sub>II)、17~18cmのもの(坏蓋B<sub>1,2,3,4</sub>II)、20cm以上のもの(坏蓋B<sub>1,2,4</sub>III)とした。径高指数は坏蓋B<sub>1</sub>Iで10以下のもの、11.5~12.5前後のもの、13.5前後のもの、16.5前後のもの、坏蓋B<sub>1</sub>IIで18~20前後のものがある。坏蓋B<sub>1</sub>IIIでは11.5~12.5前後のもののみである。坏蓋B<sub>2</sub>Iでは11.5前後以下のものに集中し、10~11.5前後のもの、9.0~8.0前後のもの、6.0

以下のものがあり、わずかに13~14を測る天井部の高いものが存在する。坏蓋B<sub>3</sub>II・III・坏蓋B<sub>4</sub>II・坏蓋B<sub>4</sub>IIIでは5.0~7.0前後のものに限られるようである。

**坏蓋C**：坏蓋Cは宝珠状ないし擬宝珠状のつまみを持つもので、天井部から口縁部の形態により坏蓋C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>に細分される。いずれも、口縁内部にかえりを持ち、かえりの大きいものと小さいものがある。坏蓋C<sub>1</sub>は天井部が丸みを持ちそのまま口縁部に続くもの（C 1・39）、坏蓋C<sub>2</sub>は天井部が丸みを持ち、あるいは直線的に延びた後、口縁部端部が水平に延びるもの（C 35・36・37・38・40・41・68・72・73・126）である。口径は11.5cm前後のもの（坏蓋C<sub>1</sub>I）、口径は13cm前後のもの（坏蓋C<sub>1.2</sub>II）、口径は15.5~17.5cm前後のもの（坏蓋C<sub>1.2</sub>III）がある。径高指数は坏蓋C<sub>1</sub>が11と13.6、坏蓋C<sub>2</sub>は10以下のもの、16.5のものがある。

**坏蓋D**：丸みを持つ天井部に垂直に降りる口縁部がつくもので、天井部との境目に稜を持つ（C 163）。天井部には扁平なつまみが付く。

**椀A**：椀Aは平坦な底部から外上方に直線的に立ち上がるもの（C249）で、口径10.6cm、高さ4.4cmである。

**椀B**：椀Bは体部と底部の境目が丸みを持つ施釉陶器に見られるタイプで、輪高台のもの、平高台のもの（C477）がある。

**壺**は、全体の割るものはなく大半が体部片である。なお、壺・鉢等と類似した形態が存在するため体部にタタキ目等の成形痕を残すものをここでは壺として分類した。

**壺A**：頸部が外上方にのび、口縁端部が面を持ち下方に垂下するもの（C22・67・119・152・160・211・344・346・368・454）である。

**壺B**：頸部が外上方に短く立ち上がり、最大腹径が肩部付近にあるもので、鉢に近いもの（C271・347）である。

**壺C**：頸部が上肩へ立ち上がり、倒卵形の体部を有するもの（C345・456・457）がある。

**壺D**：壺A～C以外のもので、肩部から「く」の字に外上方へ比較的長く立ち上がる口縁部を持つもの（C49・118）で、体部は長球形（C173）のものがある。

**壺A**：長頸壺（C151・244・246・385）で、外上方に延びた頸部に単純な口縁部が付くものと口縁部に面（C246・151）を持つものがあると思われる。なお、体部下端のものでC204・205・233・341・233・241・416はこれに含まれるものと考えられる。

**壺B**：いわゆる薺壺タイプの短頸壺である。短く上方に立ち上がる口縁部に扁平な丸みを持つ体部が付くもので、最大腹径は体部上部付近で丸みを持ち、高台の付くもの（C242・314・494）で

ある。

**壺C**：短頸壺で短く上方に立ち上がる口縁部に逆台形の体部が付くもので体部と肩部に明瞭な稜のつくもの（C 7・8・254・270・420・469）である。

**壺D**：細頸壺（C114）でいわゆる淨瓶及び水瓶である。

**壺E**：小平壺で倒卵形の体部から上方に延びる頸部に単純な口縁部あるいは口縁端部に面を持つもの（C123・388・392）である。底部に糸切り痕を残すものがある。

**壺蓋**：水平な天井から下方へ垂直に延びる口縁部がつくもの（C375・489）で、一段の宝珠つまりを持つもの（C375）がある。

**鉢A**：丸く内窵して立ち上がる体部から口縁部に続くいわゆる鉄鉢形の鉢で、口縁端部が外方につまみ上げたもの、単純に終わるもの、口縁部内側が肥厚するもの（C48・124・159・208・429）がある。

**鉢C**：丸みを持つ体部から外上方に延びる口縁部がつく鉢で、口縁外端部が肥厚する（C427）。

**鉢D**：バケツ型の鉢で、口縁部がやや外反する。このタイプの鉢は高台の付くもの（C460）、高台のつかないもの（C488）が認められるようである。

**鉢E**：厚手の平底の底部から外上方に延びる体部がそのまま口縁部に続くもの（C349）である。

**鉢F**：平底の底部から外上方に直線的に立ち上がる体部及び口縁部が付くもので、口縁外端部が玉縁状呈する（C207）。

**瓶**：平底の底部から上方に延びるバケツ型のものと考えられる。底部には中央に円形の穿孔が1ヶ所、その周辺に梢円形の穿孔が4ヶ所認められる。（C10）。

**平瓶**：いずれも把手を持たないので底部がやや丸みをもつもの（C425）、平底のもの（C312）がある。

**横瓶**：横円形の体部中央に外反する口縁部の付くもの（C255）である。

**円面鏡**：円面鏡の脚部片（C206）で、鏡部の外側に1条の突帶を有する。

**土師器**：土師器類には壺・椀・皿・壺・甌・高壺等がある。壺については大別すれば高台の付くものと付かないものとに分けられるが、法量等によりさらに分類が可能である。なお、壺・椀・

皿はここでは奈良時代から平安時代に属すると考えられるものについては16前後以下のものを皿、17~25前後のものを壺、30以上のものを瓶とし、いわゆる中世以降のものについては全て皿として取り扱うこととする。また、成形及び調整は全体の判明するものを記した。

**壺A**：壺Aは高台の付かないタイプで、口縁部の形態等により細分できる。壺A<sub>1</sub>は平坦な底部から外上方に立ち上がる口縁部の付くもので口縁端部が外反するものとしないものがある。いずれも口縁内端面が肥厚する。壺A<sub>1</sub>は法量により細分され、口径では14cmのもの（H122・224……A<sub>1</sub> I）、16~17cm前後のもの（H77・78・90・94・238・244・258……A<sub>1</sub> II）、20cm前後のもの（H89・237・240……A<sub>1</sub> III）の3種類が認められる。径高指数は17~23前後を測る。成形及び調整は口縁部外面は横ナデでヘラ磨きの明顯に分かるのではない。また底部外面は未調整のもの、底部外面をヘラ磨きするもの（H89・90・94）がある。口縁部内側は底部との境目付近まで横ナデで底部内面にハケ日痕を残すもの（H244）がある。暗文のあるものは1段の斜放射文のもの（（H77・78・89・244）1段の斜放射文と底部内面に螺旋文のあるもの（H90・94）がある。壺A<sub>2</sub>は平坦な底部から外上方あるいは上方へ内弯気味に立ち上がる口縁部を持つもので、口縁端部は丸く納まる。壺A<sub>2</sub>は口径で13.5cm前後のもの（H84・86……A<sub>2</sub> I）、14.5cm前後のもの（H87……A<sub>2</sub> II）の2種類に分類されそうであるが個体数が少ないため明確でない。径高指数は22~24前後を測る。成形及び調整は口縁部外面から底部内面まで横ナデで、底部外面は未調整である。壺A<sub>3</sub>はやや丸みを持つ底部から内弯気味に立ち上がる口縁部の外端部をつまみ出すもの（H14・80）で、口径は12cm前後である。成形及び調整は口縁部外側上部から底部内面まで横ナデで、口縁部外面下部から底部にかけて未調整である。壺A<sub>4</sub>は凹凸のある平底の底部から外上方に立ち上がる口縁部が付くもので、口縁部が外反気味のもの、内弯気味のもの、直線的のものと一様でない。成形及び調整は口縁部外面から底部内面にかけて強いナデ（回転台によるナデ）が大半を占め、凹凸も著しいもの、そうでないものがある（H22・64・69・70・116・120・121・127・262・123~206・211~221・282~399）。底部外面は未調整でヘラ切りと考えられる痕跡を残すものがある。口径は12~13.5cmに集中し、径高指数は22~24前後を測る。壺A<sub>5</sub>は平坦な底部から外上方へ直線的に立ち上がる口縁部をもつもので器壁が比較的薄い（H68・74・75・251）。成形及び調整は口縁部外面から底部内面まで横ナデで底部外面は未調整である。口径は12cm前後、14cm前後、16cm前後の3種類があるが個体数が少ないため明確でない。径高指数は17~26前後である。

**壺B**：壺Bは高台の付くもので、壺部の形態により細分できる。壺B<sub>1</sub>は底部からやや丸みを持ち、内弯しながら外上方に立ち上がる口縁部を持つもの（H165・207・208・209・222・400・401・402・407）である。口径は12.5~13.5cm前後のもの、14~15.5cm前後のもの、16.5cmのものが、径高指数は18~22前後、24~29前後がある。壺B<sub>2</sub>は平坦な底部から外上方に直線的に立ち上がる

口縁部を持つもの（H73・403・404・405・406・407）である。口径は12～13.5cmで、径高指数は18～24とばらつきがある。成形及び調整は坏B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>とも口縁外面から底部内面まで強いナデ（回転台によるナデ）で、底部外面は坏B<sub>1</sub>では横ナデで、坏B<sub>2</sub>は高台付近は横ナデを施すが、そのほかは未調整である。坏B<sub>3</sub>平坦な底部から外上方に外反気味に立ち上がる口縁部を持つもの（H71・241）で、口径は17cm前後で、径高指数は15～16.5前後である。成形及び調整は全体に横ナデで、回転台成形及び調整ではないと考えられる。

**皿A**：皿Aは高台を持たないもので、口縁部等の形態により細分できる。皿A<sub>1</sub>は平坦な底部から内弯気味に外上方へ立ち上がる口縁部を持つものあるいは口縁端部が外反するもので、口縁端部内面が肥厚するもの（H38・39・79・223・233・235・247・253・257）、しないもの（H91・92・93・119・227・228・229・231・255）がある。口径は13cm前後のもの（皿A<sub>1</sub>I）、15cm前後のもの（皿A<sub>1</sub>II）、18～19cm前後のもの（皿A<sub>1</sub>III）、20～21cm前後のもの（皿A<sub>1</sub>IV）、24cm前後のもの（皿A<sub>1</sub>V）、径高指数は10以下のもの、11～14前後のもの、15～17前後のものがある。成形及び調節は口縁部外面は横ナデでヘラ磨きの明瞭に分かるのはない。また、底部外面は未調節で、口縁部内側は底部との境辺付近まで横ナデのもの、底部内面まで横ナデを施すものがある。また、底部外面は未調整のもの、底部外面をヘラ磨きするもの（II93）がある。暗文のあるものは1段の斜放射文のもの（H91・229・79・223）のみである。皿A<sub>2</sub>は丸みを持つ底部からそのまま外上方へ内弯気味に立ち上がる口縁部を持つもの（H99・226・278）で、18.5～24cmを測る。径高指数は11～16。成形及び調整は口縁部外面から底部内面にかけて横ナデで、底部外面は未調整のものと一部ヘラ削りを施すもの（II278）がある。皿A<sub>3</sub>は丸みを持つ底部から外上方へ延びる口縁部を持つもの（H104・105）で口径は13cm前後と17cm前後がある。径高指数は16及び20。成形及び調節は口縁部外面も1段もしくは2段の横ナデ、内面は全て横ナデ、底部外面は未調整である。皿A<sub>4</sub>は平坦な底部から内弯気味に立ち上がり、口縁端部を外方へつまみ出すタイプ（H102・103・104・105・106・108・109・111）である。口径は11cm前後、14cm前後、17～18cm前後、20cm以上があるが、20cm以上のものについては小破片であるため問題がある。径高指数は10以下と12～17のものがある。成形及び調節は口縁部外面を1段もしくは2段の横ナデで、内面は横ナデ、底部外面は未調整である。

**椀**：椀は形態により2種類に分かれる。

**椀A**：椀Aは丸底から内弯して立ち上がり、口縁部が内傾するもの（II251）で、口径9cm高さ6.8cmを測る。椀Aの調整は剥離著しいため明確でないが、ナデ調整と思われる。

**椀B**：椀Bは半底の底部から内弯して立ち上がり、口縁部に続くもの（H66・88）で、口径は14～15

cm、高さ4cm前後を測る。成形及び調節は口縁部外面から底部内面にかけて横ナデ調整、底部外面は未調整のものとヘラ磨き(H88)を施すものがある。

**甕**：甕には15cm以下の小型のものと23cm以上の大形のものがある。

**甕A**：甕Aは長胴の体部を持つもので、口縁部の形態により甕A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>に分かれる。甕A<sub>1</sub>は単純「く」の字になるもの(H13・6・10・16・17・30・80)で口縁端部をつまみ上げるものがある。甕A<sub>2</sub>は受け口状の口縁部のもの(H4・7・12・19・22・23)である。成形及び調整は外面は縦ハケ調整で内面はハケ調整のほかヘラ削りを施すものがある。また、甕A<sub>2</sub>では口縁部外部の肩部との境目に指頭圧痕を残すものがある。

**甕B**：甕Bは球胴の体部を持つもので、甕Aと同じく口縁部の形態により甕B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>があるが器形の判るものは甕B<sub>1</sub>(H1・5・10)のみである。成形及び調整は外面は縦ハケ調整で内面はハケ調整のほかヘラ削りを施すものがある。

**甕C**：甕Cは甕Bに把手の付くもので甕Aと同じく甕C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>があるが、器形の判るものは甕C<sub>1</sub>(H18・58)のみである。成形及び調節は外面は縦ハケ調整で、内面はハケ調整のほかヘラ削りを施すものがある。

**壺A**：壺Aは短頸壺で短く上方に立ち上がる口縁部に扁平な丸みをもつ体部が付くもの(H412)である。最大腹径は体部上部付近で丸みを持ち、高台の付くものと付かないものがある。成形及び調整は外面は横方向のヘラ磨き、口縁部内部は横方向のヘラ磨きで、体部内面は横方向ヘラ削りである。

**壺B**：壺Bは逆台形の体部に短く上方へ立ち上がる口縁部をもつもの(H232)である。肩部と体部の境目に明瞭な棱が付き、高台のつくものと付かないものがある。成形及び調整は側離者しいため不明瞭であるが、外面については、横方向のヘラ磨きが施されているようである。

**高坏**：高坏は全容を知り得るものはなく、脚柱部(H32・33)、脚部(H40)、受部(H259)の破片が出上しているのみである。脚柱部、脚部はいずれも面取りをするもので8面のもの、11面のものがある。

**土釜**：口縁部が短く上方に立ち上がるもので、口縁部直下に鉢が付く。体部は方形気味で丸味を持つ底部と思われる(H76)。

**黒色土器**：黒色土器には碗・皿・壺・が認められる。黒色土器碗にはいわゆる内面黒色の黒色土

器A類、内外面黒色の黒色土器B類がある。皿については内面黒色のもののみで、甕は内外面黒色のものである。黒色土器には碗・皿・について、形態上高台の付かないもの（A形態）、高台の付くもの（B形態）が一般に認められるため器形分類についてはこれに基づく。なお、黒色土器A・B類の表示については、A類=a・B類-bとして表示することとする。

**碗 a B**：内面黒色の土器で、碗a B<sub>1</sub>は大型の深碗タイプ（B 2・4・5・26）である。法量は口径が13.6～16.7cm、高さ4～5cmを測る。成形及び調整は体部内面が横方向の、内面の見込みが平行の丁寧なヘラ磨きで、口縁端部内側に1条の沈線を有する。外面は体部上半が横ナデ、体部下半が指押さえの痕跡を残すものである。碗a B<sub>2</sub>は口径が13.5～15.5cmの大型の厚手の深碗タイプ（B 9～13）と口径が8cmの深碗タイプ（B 14）である。摩滅しているため成形及び調整は明確でないが、体部内面が内面の見込みから口縁部にかけて放射状のヘラ磨きを施し、外匝は体部上半が横方向のヘラ磨きないし横ナデ、体部下半が未調整のものと思われる。口縁部内側に1条の沈線を有する。碗a B<sub>3</sub>は浅碗タイプのもの（B 19・24）で、口径は12.5cm・14.3cmで高さは3cm前後を測る。成形及び調整は内面が丁寧な横方向及び鉤方向の丁寧なヘラ磨きである。外面は体部下半まで横ナデで、ヘラ磨きは認められなかった。口縁端部内側には沈線を有さない。

**碗 b B**：内外黒色の土器で、薄手の大型の深碗タイプ（B 18・20）である。法量は口径が17.2cm高さ4.8cm（B 18）を測る。成形及び調整は体部内面が横方向のヘラ磨きで、内面見込みは平行の丁寧なヘラ磨きである。外面は体部上半が横ナデ、体部下半が指押さえの痕跡を残す。口縁端部内側に1条の沈線を有し、体部内面には溝状ないし螺旋状の暗文を施している。

**皿 a**：平坦な底部から外上方に直線的に延びる体部・口縁部の付くもの（B 21・22）である。成形調整は内面が横方向のヘラ磨き、外面は口縁端部を横方向のヘラ磨きを施すもの（B 22）、横ナデ調整のものがある。

**甕 b**：肩部から「く」の字に屈曲する口縁部が付くもの（B 6～8）で、口縁端部内部が肥厚する。成形及び調整は横ナデを基調とし、口縁部の一部を横方向のヘラ磨きを施すものがある。体部は内外面指押さえの痕跡を残す。口径は17cm・22.5cm・28.3cmのものがある。

**緑釉陶器**：緑釉陶器には碗皿類のほか、三足の托状のもの（？）がある。なお、碗皿類の高台についてはすべて碗に含め、貼付け高台のもの（a類）、削出し高台のもの（b類）とした。また胎土には褐色系で軟質のもの（G 1～3・7～11……I類）、灰色の硬質のもの（G 4～6……II類）がある。

**椀**：高台のつくもので、体部から丸みを持って立ち上がり口縁部が外反し、丸く納めるもの（G 3・4）がある。高台は貼付けの輪高台で、逆三角形ないしは逆台形で有段になるもの（G 1・2・6・7……a<sub>3</sub>）がある。調整は内外面とも横ナデで、釉調はややくすんだ黄緑色を呈する。施釉方法は刷毛塗りと思われる。また、底部内面に1条の沈線（G 6・7・8）を有するものがある。

**灰釉陶器**：灰釉陶器には椀・皿・壺・瓶・盤があるが、大半は椀皿類である。全体の分かるものは少ないため、椀・皿の高台については一括し、貼付け高台のもの（a類）、削出し高台のもの（b類）とした。胎上は灰白色ないしは黄色灰白色系の堅緻なもの（A 7～11・13～16・24・他……I類）、白味の強い灰白色で磁器質に近いもの（A 55～57・61・62他……II類）、灰味の強い灰白色で須恵質に近いもの（A 3・4・6他……III類）がある。

**椀**：高台のつくもので、底部から丸みを持って立ち上がり口縁端部が外反し、尖り気味に納まるもの（A 24・39・45）、口縁端部が外反しないで丸く納まるもの（A 8）がある。高台のわかるものはA 24のみで、貼付けの輪高台で断面長方形の高いもの（a<sub>2</sub>）である。成形及び調整は口縁部上半がロクロ調整、下半および底部外面をロクロヘラ削りである。施釉方法は刷毛塗りと思われる。なお、A 24は無釉のものであり、当初から施釉されない、いわゆる無釉陶器と思われる。

**皿**：高台のつくもので、底部から丸みを持ち直線的に立ち上がり口縁端部が外反するもの（A 2・5・4）、口縁部中央で稜の付くものA 61、口縁部内面中央付近で有段になる段皿タイプのもの（A 5）がある。高台のわかるものは（A 61）のみで、貼付けの輪高台で断面方形の高いもの（a<sub>2</sub>）である。成形及び調整は口縁部上半がロクロ調整、下半および底部外面をロクロヘラ削りである。施釉方法は刷毛塗りと思われる。底部内面にはトチンの痕跡が残る。

**椀皿**：高台は貼付けの輪高台のみで、逆三角形を呈するもの（A 13……a<sub>1</sub>）、方形ないし逆台形を呈するもの（A 1・7・10・14・15・25・26・32・35・36・41・42・44……1 a<sub>2</sub>）、高台は逆台形で有段になるもの（A 21・C 108……a<sub>3</sub>）、断面が三日月状になるもの（A 6・11・12・16・19・20・22・27～31・33・34・37・38・46・53……a<sub>4</sub>）がある。a<sub>2,4</sub>類の高台には高台高が高く幅の狭いもの、高台高が低く幅の広いものがある。施釉方法は刷毛塗りと漬け掛けのものが認められる。

**壺瓶**：壺は卵形ないし球形に近い体部に外反する頸部及び口縁部がつく長頸壺（A 55～58）で口

縁端部に面を持つもの（A55・56・58）と持たないもの（A57）があると思われる。また、A17・51・54等の高台はこの類に含まれると思われ、A58は肩部に把手をもつ。成形及び調整は明瞭なロクロ水挽き痕を残す。施釉方法は刷毛塗り（A57・56・58）が認められ、釉の垂下するものがある。A47は双耳壺（瓶）の破片。A49は台付きの壺（花瓶）肩部とおもわれ、肩部に1条の突帯を有する。（A23・52・59）は長頸壺ないしは水瓶と思われる頸部片。

盤：A48は三足ないしは四足の盤と思われる脚部片。

輸入陶磁器：輸入陶磁器には白磁（P1・2）と青磁（P3・4）がある。P1は大きな玉縁を呈する白磁碗。P3・4は青磁碗でP3・4は外面に花卉文、P4は内面に櫻書きによる草花文を施している。

瓦器には椀と皿がある。また、胎上は灰白色・黄灰色のものがあり、焼成によるものか比較的柔らかいものが多い。

椀：椀は丸みを持つ体部の深椀で、口径では10.5cmのもの（Z2・34）、口径が12～14cm前後のもの（Z1・3・4～8・14～19・30・43）、15cm以上のもの（Z20・33・42・44）がある。摩滅が著しいため成形及び調整が不明なものが多いが、明確なものでは口縁部・体部の内面が横方向のヘラ磨き、見込み部分は螺旋状のもの（Z5・30）である。外面は口縁端部が横方向の粗いヘラ磨きないし横ナデ、それ以外は未調整である。また、口縁端部内面には1条の沈線を有するものと持たないものがあり、後者は12.5cmのものに限られる。

皿：平坦な底部に外上方に短く立ち上がる口縁部を持つもので、口径7～9cmのもの（Z31・40・41）、13.2cm（Z32）がある。調整は内面は横方向のヘラ磨き、見込みはジグザク状のヘラ磨き口縁部は横ナデ底部は未調整である。

国産陶器には口縁部が【N】字状を呈する壺（K1・3）、鉢（K2）がある。

（人崎隆志・谷口智樹）

## 2. 各遺構の土器

各遺構の土器については遺物の出土状況が比較的良好であったものに限り略記することとする。略記した遺構はA地区SK08・SK10・SD01・B地区SX05・SD04・SE01・SE02・特別

地区小溝08・Z地区小溝10・D地区S E05・S D07・E地区S X23・S E06である。

**S K08出土の土器**：土師器では壺A<sub>1</sub>（H 6）・A<sub>2</sub>（H 4・7）・B<sub>1</sub>（H 3・5・10）、須恵器には坏A<sub>3</sub>（C 9）・坏B<sub>1</sub>（C 5）・壺C（C 7・8）台付壺（C 6）・瓶がある。壺A<sub>2</sub>は近江型の壺、壺A<sub>1</sub>・壺B<sub>1</sub>については大和型に近い。須恵器坏B<sub>1</sub>・壺Cについては平城宮 S D1900 A～平城宮 I<sup>(1)</sup>の土器に類例が認められる。壺A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>・B<sub>1</sub>については井口・柏原遺跡の6期ないしは7期に当たるものと考えられ、6期は平城宮I、7期平城宮IIに概ね比定されており<sup>(2)</sup>、このことからSK 8の土器群は7世紀末～8世紀第1四半期に納まるものと考えられる。

**S K10出土の土器**：土師器には壺A<sub>1</sub>ないしはB<sub>1</sub>（H15）・壺C<sub>1</sub>（H18）・坏A<sub>3</sub>・A<sub>4</sub>（H13・14）、須恵器には坏蓋C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>（C35～40）・坏A<sub>1</sub>（C42・43）・坏A<sub>2</sub>（C44）・坏B（C46）・壺D（H49）・鉢A（C48）・台付壺（C47）がある。坏蓋はかえりを有するもののみであるが、かえりも小さく器高も低くなることから雷丘東方遺跡 S D110～飛鳥IV期<sup>(3)</sup>・陶邑編年III～3形式<sup>(4)</sup>に該当すると考える。また、坏A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>も雷丘東方遺跡 S D110・井口・柏原遺跡4期～飛鳥IV期に類例が、鉢A・壺Dについては山の神遺跡第2号窯の遺物に類例<sup>(5)</sup>が認められ、土師器壺C<sub>1</sub>は藤原宮 S E1235<sup>(6)</sup>に類例が認められる。このことからSK 10の土器群については7世紀第4四半期に納まるものと考えられる。なお、坏A<sub>4</sub>については混入遺物であろう。

**S D01出土の土器**：遺物は大半が溝上層より出土している。須恵器にはB<sub>1</sub>（C131・133）・坏蓋B<sub>2</sub>（C132）・坏A<sub>2</sub>（C135・136）・坏A<sub>3</sub>（C137）・坏B<sub>1</sub>（C143）・坏B<sub>2</sub>（C145・144・149）・皿A・壺E（C151）・広口壺（C152）、土師器には壺A（H34・35・36）・高坏（H32・33）・黒色土器碗a・B（B 2）・灰釉陶器碗皿類（A 6）がある。須恵器蓋B<sub>1</sub>・坏蓋B<sub>2</sub>・土師器壺Aについては平城宮 S D820～平城宮III<sup>(7)</sup>の土器類にする。坏A<sub>2</sub>・A<sub>3</sub>・壺Eは陶邑T K - 304窯～IV形式<sup>(8)</sup>・飛鳥藤原宮 S D1400～飛鳥V・平城宮I<sup>(9)</sup>に類似する。また須恵器坏B<sub>1</sub>・坏B<sub>2</sub>・皿A等は井口・柏原遺跡13期～平城宮 S D650 A<sup>(10)</sup>に、灰釉陶器については折戸53号窯及び<sup>(11)</sup>薬師寺西僧房遺跡<sup>(12)</sup>の碗皿（高台）に類似する。このことから一様ではないが、前者については8世紀初頭から中葉、後者については9世紀中葉から10世紀後半代のものと考える。

**S X05出土の土器**：出土遺物は古式土師器のみで布留式壺（H48）・小型丸底壺（H41・42・44・53）がある。小型丸底壺には口縁部径が体部径を越え、高めの口縁部を持つもの（H41・44）、口縁部径と体部径を等しくする低めの口縁部を持つもの（H42・43・53）がある。調整は前者では口縁部にヘラ磨きを、体部はヘラ削りを施している。布留式壺（H48）については口縁部のみで

あるが、口縁内端部の肥厚が内傾しているものである。いずれも奈良県上ノ井手遺跡井戸S E30下層の土器<sup>(13)</sup>と類似することから布留式でも新相に当たるものと思われる。

**S X10出土の土器**：須恵器には壺A<sub>2</sub>（C155）・壺B<sub>1</sub>（C157・158）・鉢A（C159）、土師器には皿A<sub>1</sub>III（H38）・皿A<sub>1</sub>v（H39）の17cm・24cm前後の2種・高壺脚裾部片がある。壺A<sub>2</sub>・壺B<sub>1</sub>については井口・柏原遺跡9・10期＝平城宮IV・Vに、鉢A・皿Aについては平城宮SK219ないしはSK870＝平城宮IV・V<sup>(14)</sup>の土器群に類似する。以上から、S X10出土の土器群は8世紀第3四半期から8世紀第4四半期に納まるものと考える。高壺脚裾部については平城宮出土のものと比較すると、平城宮出土の高壺は平城宮編年を通して高壺脚裾端部を内側に巻き込むのが基本であるが、S X10出土の高壺脚裾端部は外反気味につまみ上げるのを特徴としている。今後類例の検討が必要であるが、近江系の特徴かもしれない。

**S E01出土の土器**：S E 1の埋土はI～III層に大別され、III層からの一括資料を考える。遺物は須恵器では、壺蓋A<sub>2</sub>（C167）・壺A<sub>1</sub>（C168）・壺A<sub>3</sub>（C169）・壺B<sub>1</sub>（C170）・壺（C172・173）・平瓶（C171）がある。壺A<sub>1</sub>・壺B<sub>1</sub>は平城宮SD1900A＝平城宮Iの遺物に類似する。平瓶については陶凹TG70窓－陶邑IV-1形式の遺物<sup>(15)</sup>と類似する。以上からS E 1の出土遺物は8世紀第1四半期でも早い段階（8世紀初頭）に位置づけられよう。

**S E02出土の土器**：S E 1の埋土はI～V層に大別される。遺物はI層・II層・III・IV層の遺物に分類できる。

第I層の上器：第I層中層で比較的まとまった形で出土し、土師器には壺A<sub>1</sub>（H68・69・70）・壺A<sub>2</sub>（H74）・壺B<sub>2</sub>（H72・73）・壺B<sub>3</sub>（H71）・土釜（H76）、黒色土器には椀a・B<sub>2</sub>（B 5）・壺b（B 6・7・8）、綠釉陶器には碗（G 3・4）がある。土師器壺A<sub>1</sub>・壺B<sub>2</sub>は近江国守跡W-6B地区土坑2<sup>(16)</sup>および野洲町富波遺跡<sup>(17)</sup>・赤野井遺跡B区SK-3<sup>(18)</sup>等に類例があり、いずれも平安時代とされている。黒色土器椀a・B<sub>2</sub>は平安宮左兵衛跡SD01出土遺物－10世紀中葉<sup>(19)</sup>、八日市市内堀遺跡SK01<sup>(20)</sup>と類似し、黒色土器壺b中B 6は平安宮左兵衛跡SD01出土遺物に類例が認められる。黒色土器壺b中B 7・8については平城宮SD650B=9世紀末から10世紀初頭<sup>(21)</sup>に形態的には類似するが、後者については外面調整等にヘラ削き調査を用いているのに対し、前者は口縁部の一部を除きナデ調整もしくは指頭圧痕を残すなど調整の簡略化が認められる。以上のことから第I層の土器については平城宮SD650Bより新相を示すと思われ、10世紀第1四半期から第2四半期前に位置付けたい。土釜は摂津型と思われるもので10世紀から11世紀のものであろう。

第II層の土器：第II層上層では土師器皿A<sub>1</sub>（H92）がある。第II層下層では須恵器には壺A<sub>3</sub>（C262）・壺C（C254）・横瓶（C255）がある。上師器は皿A<sub>1</sub>は平城宮S K870・2113=平城宮Vに類似する。須恵器壺A<sub>3</sub>（C262）・壺C（C254）・横瓶（C255）のうち壺A<sub>3</sub>はS K820=平城宮III・壺C・横瓶については平城宮S D485=平城宮II<sup>(22)</sup>に類例を認められるが、横瓶については平城宮S D485出土のものに比して体部が扁平なこと、体部外面の調整が前者は叩き目を明瞭に残しているのに対し、後者は叩き目をナデ消していることからすれば後出するタイプと考えられる。

第III・IV層の土器：土師器には壺A<sub>1</sub>（H89・90・94）・椀B（H88）・皿A<sub>1</sub>（H91・93）、須恵器壺B<sub>2</sub>（C263・268）がある。壺A<sub>1</sub>・皿A<sub>1</sub>では調整手法はa<sub>o</sub>手法にあたるもの1点（H91）、a<sub>s</sub>手法にあたるもの4点（H89・90・93・94）とa手法のみである。また、内面の暗文についても1段放射と螺旋暗文のもの3点（H90・91・94）、1段放射のもの1点（H89）、暗文を持たないもの1点（H93）と暗文を持つものが主流を占める。以上から平城宮S D820・S K2101=平城宮IIIに器形・手法において類似するものと考えられることから8世紀中葉前後に比定されよう。

小溝10出土の土器：土師器には皿A<sub>5</sub>（H102～106）、黒色上器には椀a B<sub>2</sub>（B 9～14）・瓦器には椀（Z 2～15）がある。なお、黒色土器椀a B<sub>2</sub>はいわゆる近江型の黒色土器であり、口径13.5cm～15.5cmの大型のものと8cmの小型のものがある。上師器皿A<sub>5</sub>・黒色土器椀a B<sub>2</sub>は野洲町北松遺跡6次調査S K01出土の土器<sup>(23)</sup>に類似するが、小溝10の土師器皿については口縁部外面を2段ナデ調整するものが主流であるのに対し、S K01では1段ナデが主流である。また、黒色土器についても椀a B<sub>2</sub>ではS K01のものと比して器高が高いようである。以上から、小溝10出土の上師器皿・黒色上器椀については北松遺跡6次調査S K01出土の上器に先行するものと考える。瓦器椀は川越後一氏の編年によれば第II段階A型式=12世紀初めないしは第II段階B型式=12世紀後半に当たるものと考えられる<sup>(24)</sup>。なお、黒色土器椀a B<sub>2</sub>は森隆氏の編年によればII-2段階<sup>(25)</sup>に当たるものと考えられる。以上から小溝10出土の上器については12世紀初めから後半に位置するものと考える。

小溝08出土の土器：土師器には皿A<sub>5</sub>（H107～111）、瓦器には椀（Z 16～29）、皿（Z 31・32）がある。土師器皿A<sub>5</sub>は小溝10と同じく2段ナデを主流としており、瓦器椀も川越後一氏の編年による第II段階A型式ないしは第II段階B型式に当るものと考えられる。以上から小溝08出土の上器については小溝10とほぼ同時期と考えられ、12世紀初めから12世紀後半に位置するものと考える。

S E 05出土の土器：S E 05の埋土はI層からIV層に大別されるが、比較的良好な出土状況が認め

られたのはIII層のみである。

第I・II層出土の土器：第I・II層出土の土器には須恵器壺A<sub>1</sub>（C337）・壺B<sub>1</sub>・壺B<sub>2</sub>（C331・351）皿A（C341）・蓋B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>（C335・365・366・338・342・354・359・360・363・367）・甕A・B・C（C344・368・346・347・345）・壺等がある。土師器には壺A<sub>1</sub>（H122）・壺A<sub>2</sub>（C114～117・120・121）、III.A（H119）・瓦器には碗（Z42～44）、国産陶器（K001）等がある。流入遺物であるため土器様相は一様でないが、最も新しい遺物として瓦椀器があり川越編年III段階△型式に当るものと考えられることから12世紀後半前後まで井戸S E05は開口していたものと思われる。また、須恵器壺AのうちC346・368は胎上が磁器質に近いもので、C346のタタキ目についても深めの粗いもので古墳時代以降にみられる須恵器とは異にするものと思われる。

第III層出土の土器：第III層上層（17層）・第III層中層（18～20a層）・第III層下層（20bc層）に分かれ、第III層上層、第III層下層では良好な出土状況が認められた。

第III層上層の上器には土師器壺A<sub>4</sub>（H1123～207）、壺B<sub>1</sub>（H208～210）、須恵器壺A<sub>5</sub>（C371）・蓋B<sub>3</sub>（C370）・壺E（C372）・黒色土器椀a B<sub>2</sub>（B19）・椀b B（B18）・灰釉陶器長頸壺（A57）がある。土師器壺A<sub>4</sub>・壺B<sub>1</sub>は回転台成形によるもので、底部外面にヘラ切り痕を残す等須恵器と類似した成形をとる。土師器壺A<sub>4</sub>・壺B<sub>2</sub>は近江国守跡W-6B地区土坑2および長浜市森・八角堂遺跡33・34トレンチ<sup>(23)</sup>、守山市赤野井遺跡B区SK-3に類例があり、長浜市森・八角堂遺跡では共伴遺物が平城宮S D650Bに類似することから9世紀後半に比定されている。黒色土器椀a B<sub>2</sub>は平城宮S D650=9世紀末から10世紀初頭の椀Bに類似しており、灰釉陶器長頸壺については体部のみであるが、その形態は黒窯9号窯式<sup>(27)</sup>に類似する。壺Eについては底部片であるが、京都府魚崎市篠西長尾3号窯山上の壺A bに類似<sup>(28)</sup>し、当窯は1000年前後に比定されている。以上のことから第III層上層の土器群については9世紀末から10世紀初頭の一群と考えられる。なお、土師器壺A<sub>4</sub>は口径12.4～13.5cmで13cm前後に多く集中する。

第III層下層の上器には土師器壺A<sub>6</sub>（H215～217・219～221）、壺B<sub>1</sub>（H222）・須恵器壺B<sub>2</sub>（C395・397）・壺G（C392）・灰釉陶器壺（A56・58）がある。また、同層からは富寿神室（818年）が出土している。土師器壺A<sub>6</sub>・壺B<sub>1</sub>は回転台成形によるものと思われるが、体部外面のナデの痕跡は比較的穏やかである。灰釉陶器壺A58はS K715=平城宮VII=825年前後の須恵器把手付瓶に類似<sup>(29)</sup>するが、高台の形態がA58は低く扁平であることからS K715の把手付瓶より後出するものと考える。また、東海地方の編年と比較すると灰釉陶器壺A56・58の体部形態は井ヶ谷78号窯式に類似するが、A58頸部から口縁部にかけての形態は黒窯14号窯式に類似する<sup>(30)</sup>。須恵器壺B<sub>2</sub>は平城宮S D650Bに類似し、壺Gは魚崎市篠小柳1号窯=9世紀中頃に類例<sup>(31)</sup>が認められ

るが、平城宮 S D650B にも同形態のものがある遺物的にはやや時期差があるが、第III層上層の土器群より遡ることは確実であるため、9世紀中葉から9世紀後半の一群と考えられ、その中でも9世紀中葉に近い段階と考えたい。

**S D07出土の土器**：出土したのは須恵器のみで壺B<sub>1</sub>（C426）・鉢C（C427）・平瓶（C425）がある。壺B<sub>1</sub>・鉢Cは平城宮 S D485=平城宮II<sup>(32)</sup>に、平瓶については飛鳥藤原宮 S D1400=飛鳥V=平城宮Iの上器に類似する。以上から S D07の土器群は8世紀第1四半期前後の1群と考えられる。

**S X23出土の土器**：土師器には皿A<sub>2</sub>（H278）・壺B<sub>1</sub>（H279）、須恵器には壺B<sub>1</sub>（C462）・蓋B<sub>1</sub>（C461・463・464）・蓋C（C469）・壺底部（C468）・鉢D（C460）等がある。土師器壺B<sub>1</sub>・須恵器蓋Cは平城宮 S K485=平城宮IIに類似する。土師器皿A<sub>2</sub>は平城宮 S K311b=平城宮VII<sup>(33)</sup>、須恵器壺底部は平城宮 S K820=平城宮IIIの壺Lの底部に類似する。鉢Dについては平城宮 S D485=平城宮IIの鉢C、平城宮Q地区整地層=平城宮IIIの鉢E<sup>(34)</sup>にバケツ型のものとして類例があるが、いずれも高台をもたないものである。S X23の鉢Cは体部の形態からすると平城宮Q地区整地層に近い。以上から S X23は8世紀中葉ないし9世紀前半の土器群と考える。

**S E06出土の土器**：S E06の埋土はI層からV層に分かれる。そのうちまとめて土器が出土したのはIV層最上層（23層）、V層最下層（29層）である。

IV層最上層の土器には上師器壺A<sub>1</sub>（H282～399）・壺B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>（H400～411）、黒色土器椀a B<sub>1</sub>（B26）、須恵器蓋B<sub>2</sub>（C490）、壺蓋（C489）、壺B<sub>2</sub>（C491）がある。黒色土器椀a B<sub>1</sub>は鞍内型の黒色土器椀で10世紀代のものである。須恵器については小破片であり混入物と思われるため比較資料とはならないが、土師器壺A<sub>1</sub>・壺B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>についてはS E02第I層出土のものと類似した形態をとるが、やや後出する様相を壺B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>においては認められることから10世紀第2四半期以降と考える。

IV層最下層の土器には土師器壺A（II412）、須恵器壺A（C494）・蓋B<sub>1</sub>（C492）・壺底部（C493）があり、共伴遺物として皇朝12錢（利銅開珎=初鋤年702年・萬年通寶=760年・神功開寶=765年）がある。IV層最下層の土器については共伴した神功開寶よりその上限を765年に置くことができる。平城編年によれば平城宮IVにあたるが、平城宮検出の当時期の遺物に須恵器壺Aの良好な資料が見当たらないため、平城宮V以降のものと比較した場合、平城Vの須恵器壺Aについては肩部がなで肩で体部が球形に近く、最大腹径が体部中央付近にある。IV層最下層の須恵器壺

Aについては肩部がはり、最大腹径が体部上半に位置することから平城宮IIIのものに近いが、神功開寶の初鑄年代から当該期には遡らない。以上のことからIV層最下層の土器群は平城宮IVの一群に比定され、実年代として765年から平城宮Vの780年の間と考える。

### 3. 木器・木製品

木器・木製品はC地区S E02、D地区S E05、E地区S E06からの出土であるが、今回報告したもの以外に、建築部材と思われるものや細板の札状のものがあるが、墨書き認められるものはない。また、S E05からは両端を削った桃等の種子、瓢箪等の出土も見られた。

**S E02の木器：**木器には木履（W1）、曲物蓋板（W20）、建築部材（W58）等がある。木履（W1）は長28.3cm、幅6.9cm、高さ5.6cmを測る。側壁の一部を少くがほぼ完形のもので爪先木口を平坦にし、被甲の内側および中央に刻線を入れている。平城宮等の出土のものに比較して雖の厚いものである。底部には爪先より段を持つことから前歯が付いているものと思われる。第III・IV層の上器＝8世紀中葉と共に伴。曲物蓋板（W20）、建築部材（W58）は第II層から出土している。W20については把手等の痕跡は認められないが、板側面には木釘等の痕跡がないことから曲物蓋板と考えられる。直徑19.5cm、厚さ0.8～1.2cmで中央がやや膨らみを持つ。

**S E05の木器：**木器は大半が18～20層（III層）からの出土である。III層については上層を9世紀末から10世紀初頭、下層を9世紀中葉前後と考えられることから、III層出土の木器・木製品についても9世紀中葉前後から9世紀末前後のものと考える。斎巾（W2～5）、箸（W6・7・59）、物指（W9）、檜扇（W12・13・14）、木櫛（W15）、曲物（W16・17・39～41・46・47）、曲物底板（W18・19・24・25）、曲物蓋板（W26～29・30・31）、木皿（W30）、把手及び木棒状木製品（W10）、札状木製品（W9）、部材（W11）がある。斎巾（W2～5）には圭頭状を呈するものの（W2・4・5）、方頭状を呈するもの（W3）があり、削りかけはいずれも上端木口付近から切り込んでいる。削りかけの回数は1回のもの（W3）、2回以上のもの（W2・4・5）がある。W2は残存長16.6cm、幅1.8cm、厚0.25cm、（W3）は残存長16.4cm、幅1.4cm、厚0.35cm、W4は長15.7cm、幅2.35cm、厚0.15cm、（W5）は残存長14.4cm、幅1.7cm、厚0.2cmを測る。箸（W6・7・59）には断面が方形を呈するもの（W6）、刃形を呈するもの（W7・59）がある。またW59は先端は細く尖り氣味に加工しており、本・木の区別を付けているようである。W6は残存長22cm、厚0.4cm、W7は21.7cm、0.4cmを測る。物指（W9）は扁平な細板に刻線をいれて目盛りとしたもので、残部中央にXの刻線を入れている。目盛りは1寸刻みのもので、1寸の長さは2.95～3.15cm前後でややばらつきがある。残存長20.5cm、幅2.4cm、厚0.45cmを測る。檜扇（W12・

13・14) は要孔がいずれも1孔の物である。W12・13は親骨で1対になるもので、冊状の細板の上部と下部を丸く加工している。要孔は1孔で上部に2孔の綴口がある。法量はW12が長22.4cm、幅2.4cm、厚さ0.25cm、W13は残存長14.8cm、幅2.6cm、厚さ0.25cmを測る。W14は閉じた状態で出土し、計9枚の扇骨がある。要孔は1孔であるが上部の綴口については明確でない。親骨は1枚出土しており、舟形を呈し、下部を丸く加工する。長さ25.6cm、最大幅2.1cm、厚さ0.25cmを測る。中央骨は上部の広がる逆長台形のもので、残存長24.8cm、最大幅2.3cmで、厚さ0.1cm以下である。その他の扇骨も上部の広がる逆長台形のもので、残存長24.1~19.6cm、厚さ0.1cm以下である。木櫛(W15)は方形の横櫛で、左辺がやや丸みを持つ。残存長5.2cm、残存高2.1cm、厚さ0.65cmを測る。曲物(W16・17・39~47)側板と底板を木釘で止める釘接合山物で、側板はいずれも一列の櫛反織である。ケビキは内面上部では斜格子状に下部では左ドカリ斜方向にいれている。W16は径24.4cm、残存高16.4cm、W17は径28.2cm、高14.8cmを測る。曲物底板(W18・19・24・25)、曲物蓋板(W26~29・30・31)については板側面に大釘痕を持つものを曲物底板とした。蓋板のうちW26には板中央に方形の孔があることからつまみが付いていたものと思われる。木皿(W30)は径20cm、高0.8cmの低いものである。

S E 06出土の木器：曲物底板(W22)・蓋板(W22)、側板(W43~45)がある。いずれも23層(IV層最上層)で出土している。ことから10世紀中葉前後のものである。

#### 4. 錢貨・鉄製品

錢貨・鉄製品はD地区S E 05、E地区S E 03からその大半が出土しているが、E地区包含層から寛永通宝が1枚、鉄製品ではないが、鐵滓がE地区S X 23等各地区の遺溝から土してある。

S E 05出土の古銭・鉄製品：錢貨には富寿神寶(X21)が1枚出土しており、径2.3cmを測る。鉄製品には鎌(I 1)、刀子(I 2)がある。鎌は残存長17.8cm、幅3cmで弓状を呈する。基部から約5cm付近まで木質が付着していることからこの付近まで柄が付いていたものである。刀子は刃部が流葉形を呈し、残存長19.2cm、刃部長12cmを測る。

S E 06出土の錢貨：いずれも29層(V層最下層)からの出土で、和銅開珎(X 1)1枚、萬年通寶(X 2~7)6枚、神功開寶(X 8~20)13枚がある。萬年通寶は径2.65cm前後で、字体は概ね同一である。神功開寶は径2.5cm前後のもの(X 8~19)、2.65cm(X 20)がある。前者と後者では明らかに字体が異なり、前者は「功」が「功」に、「開」が「開」になっているが、後者は当用漢字と同じ字体である。和同開珎は径2.3cmで新和同と呼ばれるものである。

(谷口智樹)

## V 考 察

### 1. 遺 器

今回の調査では、主に古墳時代前期から12世紀中葉前後の土器が出土している。量的には奈良時代から平安時代の上器が圧倒的に多く、当時期では須恵器49.7%、上師器が41%、黒色土器が1.5%、綠釉陶器1.2%、灰釉陶器6.6%で、須恵器・土師器が9割以上を占めている。人形の遺物が包含層等の出土で一括りに乏しいこと、また、SE05・06のように出土状況が特異であるため問題はあるが、須恵器については形態の特徴から8割以上のものが8世紀から9世紀中葉のものである。特に、供膳形態である壺皿類についてはほとんどがこの時期に属し、10世紀以降のものには貯蔵形態である壺壺類に概ね限られる。また、土師器は6割以上のものが9世紀中葉以降のものであり、壺類が大半を占めている。このことから類推すれば、当遺跡においては少なくとも8世紀から9世紀代にかけて須恵器が主流を占めているのに対して、9世紀中葉以降については逆転して土師器が主流となる。この傾向は供膳形態である壺皿類に顕著に認められ、9世紀中葉以降の土師器壺類は回転台成形による上師器である。こうした状況について翼淳一郎氏は土師器生産において畿内を唯一の例外として、ほぼ汎日本的に8世紀後半にロクロの導入=須恵器と同一形態・手法のロクロ土師器が認められ、須恵器生産の衰退・変質と密接な関係を持っていることが指摘されている<sup>(36)</sup>。近江においてもロクロ上師器の存在について提示されていたが<sup>(37)</sup>近年、森隆氏によりロクロ（須恵器生産に用いられたロクロをさす）上師器について綱年等の試案がなされている。森氏は湖西地方に見られるロクロ水挽き成形・回転糸切り未調整の土師器についてロクロ土師器と呼称されているため、混同を避けるため湖東地方にみられるロクロ上師器については回転台土師器として区別されており、ここでもこの分類に従うこととする。回転台上師器は粘土紐巻上げ回転台成形、底部ヘラ切り未調整、低火度酸化焰焼成を特徴とし、壺を基本形態とするのが一般的で、9世紀に出現し、9世紀後半から10世紀中頃に盛行して11世紀には急速に減少消失するものとされ、また、10世紀代には灰釉陶器の影響を持つ有高台形態のものが出現するとされている<sup>(38)</sup>。

当遺跡においても回転台土師器と考えられる土器がSE02第I層、SE05第III層最上層及び下層、SE06第IV層最上層から出土している。各出土遺物の年代については共伴遺物からSE02第I層を10世紀第四半期から第2四半期前後、SE05第III層最上層を9世紀末から10世紀初頭、SE05第III層下層を9世紀中葉から後葉、SE06第IV層最上層を10世紀第2四半期以降に一応比定でき、当遺跡における回転台土師器の変遷としてはSE05第III層下層→SE05第III層上層→SE02第I層→SE06第IV層最上層となる。

各時期の土器の特徴を見していくとSE05第III層下層の土器で高台の付かない壺A、高台を持つ

坏B<sub>1</sub>がある。坏A<sub>4</sub>は口径13~13.5cm前後で器高は3.3cm前後、坏B<sub>1</sub>は口径16.5cmで器高5.1cm(坏部のみ4.3cm)で成形は比較的丁寧で口縁外側の凹凸は少ない。また坏B<sub>1</sub>は口縁端部が内弯するのを特徴とし、高台は長方形の安定したものがつく。S E 05第III層最上層の上器は坏A<sub>4</sub>・坏B<sub>1</sub>があり、坏A<sub>4</sub>は完形に近いものが90枚以上出土している。坏A<sub>4</sub>は口径13~13.5cm前後で器高は2.4~3.3cm前後であるが、口径13cm、器高3cm前後に集中する傾向にある。坏B<sub>1</sub>は口径14.3~15.4cmで器高4.5~4.8cm(坏部のみ3.5~4cm)で、成形は比較的丁寧であるが、口縁外側の凹凸の戸立つものが多い。S E 05第III層最下層の七器と比較すると坏A<sub>4</sub>においては口径・器高における変化はほとんど認められないが、口縁部外面に凹凸を持つ上器の増加という成形調整の手法に変化が認められそうである。坏B<sub>2</sub>は法量・形態的に変化が認められる。口径・器高が縮小の傾向に、また、形態的に内弯する口縁端部が直線的になり、高台にも断面逆三角形のもの、高台高くが高くなるものが見られる。なお、坏B<sub>1</sub>のうち黒色土器と同じく口縁部内面横方向、底部見込みに平行のヘラ磨きを施すもの(H208)があるが、炭素の吸着は認められない。S E 02第I層・S E 06第IV層最上層では坏A<sub>4</sub>と坏B<sub>1</sub>・坏B<sub>2</sub>があり、S E 06第IV層最上層で120枚以上の出土があった。坏B<sub>2</sub>は坏B<sub>1</sub>が楕円状の形態であるのに対し、底部と口縁部の境に明瞭な屈曲をもつIII状のもので、S E 05第III層最上層まではみられなかったタイプである。坏A<sub>4</sub>は口径10.4~13.7cm、器高2.4~3.5cmとかなりばらつきが認められるが口径12.5cm、器高3cm前後が最も多い。成形・調整は口縁部外面に凹凸を持つ上器が大半を占め、器壁の著しく細くなる部分を持つものがあるなど粗悪な製品が多い。S E 05第III層最上層と比較すると口径において縮小化の傾向が、成形・調整の粗悪化の傾向が見える。坏B<sub>1</sub>は口径12.7~14.1cm、器高3~4.2cm(坏部のみ2.5~3.7cm)で、口径・器高とも縮小しており、高台はS E 02第I層では断面三日月状で安定したもの、S E 06第IV層最上層では断面逆三角形ないしは半円形の低いものに、坏B<sub>2</sub>はS E 02第I層では断面逆三角形の安定したもの、S E 06第IV層最上層では断面逆三角形ないしは半円形の低いものと相違が認められることからS E 06第IV層最上層の土器群はS E 02第I層より後出するものであろう。

この様に矢倉口遺跡における9世紀中葉から10世紀第2四半期前後の回転台十師器の変遷については時期が新しくなるに従い坏A<sub>4</sub>・坏Bとも法量の縮小化、成形・調整手法の粗悪化(簡略化)の傾向が認められる。ただ、坏A<sub>4</sub>は坏Bに比して変化の度合いが緩やかであると思われ、形態的特徴を見出すのは困難ではないかと考えられるが、S E 05第III層最下層では内弯ないし直線的な口縁部を持つのに対し、S E 06第IV層最上層では外反気味の口縁部を持つものが比較的多いようである。法量的にはS E 06第IV層最上層で口径10.4cmと明らかに縮小化しているものがあるのに對し、13.5cm前後の従来通りのものも存在する。しかしながらS E 05第III層最下層・最上層では12~13.5cm=4寸、高さ3~3.3cm=1寸の上器として規格性が認められる。このことは生産当初、一定の規格のもとに生産されていたものが、量産化の方向に進むに従い、規格性が失われつ

つ縮小化の道を辿り、成形・調整の粗悪な製品となるものと思われる。壺Bは内弯気味の口縁部と長方形の高台（S E 05第III層最下層）→直線的な口縁部と逆三角形長方形の高台（S E 05第III層最上層）→直線的で浅い口縁部と低い逆三角形・半円形の高台（S E 06第IV層最上層）と形態的に明らかな変化が認められる一方、法量においても縮小化の傾向は顕著である。また、壺B<sub>1</sub>についてはS E 05第III層最下層で口径16.5cm=5寸の土器であり、壺A<sub>1</sub>同様、生産当初は一定の規格のもとに生産されていたのも推測され、S E 05第III層最上層期まではある程度意識されていたものと解される。なお、壺Bの出現について、森氏は10世紀以降に求められているが<sup>(38)</sup>、当遺跡ではS E 05第III層最下層・最上層の例から少なくとも9世紀中葉から9世紀末の間には存在しているものと考えられ、近江国守跡W-6B地区土坑2に見られる壺Bの豊富な形態は10世紀以前、灰釉陶器の普及に伴い、その形態模倣による機種分化の現れではないかと推察され、皿状の壺部をもつ壺B<sub>2</sub>もこれに従い、出現てくるのではないだろうか。

以上、矢倉口遺跡の回転台上師器の変遷を略記してきたが、回転台上師器についてはいわゆる畿内以外に認められるロクロ土師器（近江においても湖西地方等北部には認められる）と異なるタイプであることは確かである。しかしながら、ヘラ切りなどが認められるものがあることからすれば、須恵器生産と同一手法の土師器が存在したことは認めざる得ないのではないかと思われる。ただ、回転台上師器と同一形態で、底部未調整のものでヘラ切りの痕跡を明かに持たないものも存在することも確かなことであって、こうした上器についても回転台土師器に含むべきか否かは、今後、近江における9世紀以降の土器の系統的な研究が進むのを待たざるを得ない。

なお、回転台土師器の時期決定に用いた遺物が黒色土器・灰釉陶器等の不安定なものが多いため各遺構の時期については前後する可能性がある。今後の資料の増加、研究の進展を待ちたい。

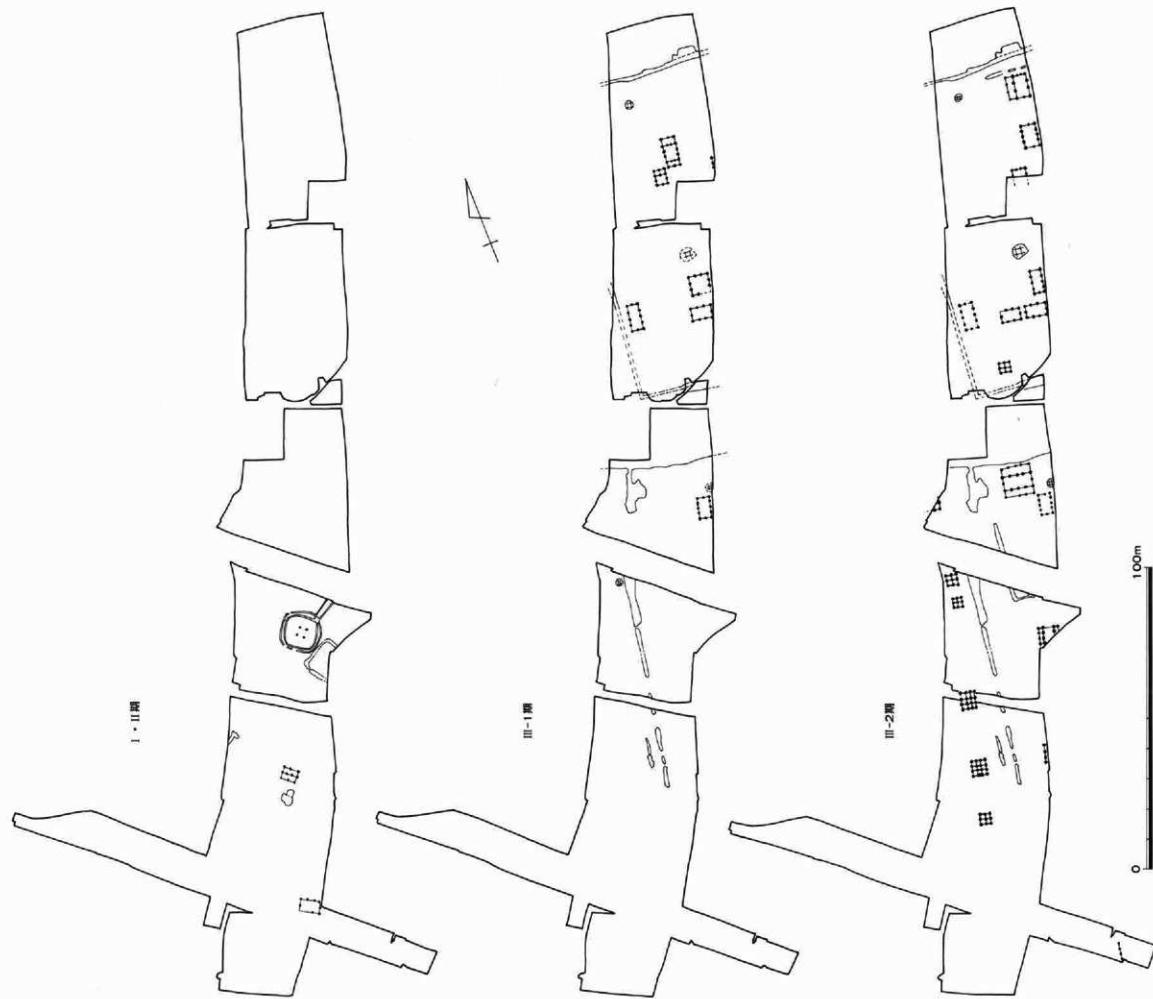
## 2. 遺構

遺構は大きくIV期に分類することができる。なお、掘立柱建物跡については時期決定し得る遺物が希少であるため、各遺構との関連からある程度その時期を判断した。

### I期の遺構

I期の遺構はC地区S X 04、一辺10.6m、S X 05、11.3×11.5m（周溝A）の方形周溝状遺構で、時期は布留式（新相）併行期である。当時期の遺構はC地区以外では検出されていないが他地区の包含層より当該期の遺物が出土していることから当時期の遺構が存在していたことが推察される。なお、S X 05・S X 04の性格については方形周溝墓等の墳丘に想定し得るか否かは明確ではない。

第43圖 遺構文面圖(1)



## II期の遺構

II期の遺構の遺構はB地区S K07・08・09・10の土坑群で、時期は7世紀末を中心とした時期である。I期同様、他地区の包含層より当該期の遺物が出土していることから当該期の遺構が存在していたことは推察されるが、明確な住居遺構は未検出である。ただ、周辺の調査でN 30°～40°-Eの方位を持つ掘立柱建物跡が7世紀後半代に比定されることから、Z地区S B03、A地区B07がII期の遺構群になる可能性がある。

## III期の遺構

正東西南北方向に近い方位を持つ遺構群で、時期は8世紀から10世紀代に比定される段階で掘立柱建物跡等、最も多くの遺構が検出されている。III期の遺構は各遺構の出土遺物及び切り合いでから少なくともIII-1期からIII-4期の小期に分類されるものと考える。

### III-1期の遺構

III-1期の遺構にはA～C地区S D01・02、B地区S E01、C地区S D06・S B23、D地区S B25・S B28a・S B30・S B31a・S D07・08・(S E05)、E地区S B33・S B34・S B37・S D13・S E06がある。掘立柱建物跡はN-9°～11°-Eの方位を持つ一群でD・E地区ではS D07・S D8・S D13により1町域の区画溝が認められる。なお、S B30・S B31aについてはS B31aの西側例のみで柱穴の重複が認められるのみであり、S B30柱例とも一致することからS B30が3間×3間の建物になる可能性がある。

### III-2期の遺構

III-1期の遺構はZ地区S B01、A地区S B05・S B06・S B08・S B14、B地区S B15・S B17・S B19、C地区S B44・S B46・(S B22)、D地区S B24・(S B25)・S B26・S B28b・S B31b・S E05、E地区S B36・S B38・S B39・S E06がある。A～C地区S D01・02は8世紀中葉前後の上器と9世紀中葉から10世紀後半の遺物が、D・E地区ではS D07・S D8・S D13についてはS X23との関連から9世紀前葉代まで存在していた可能性があることから、当該期の遺構を構成する主要な遺構と考える。掘立柱建物跡はN-14°～15°-Eの方位を持つ一群で、A～C地区的倉庫群は柱列を揃えるほか、D地区ではL字状ないしはコの字状に配列するなど企画性が認められる。

### III-3期の遺構

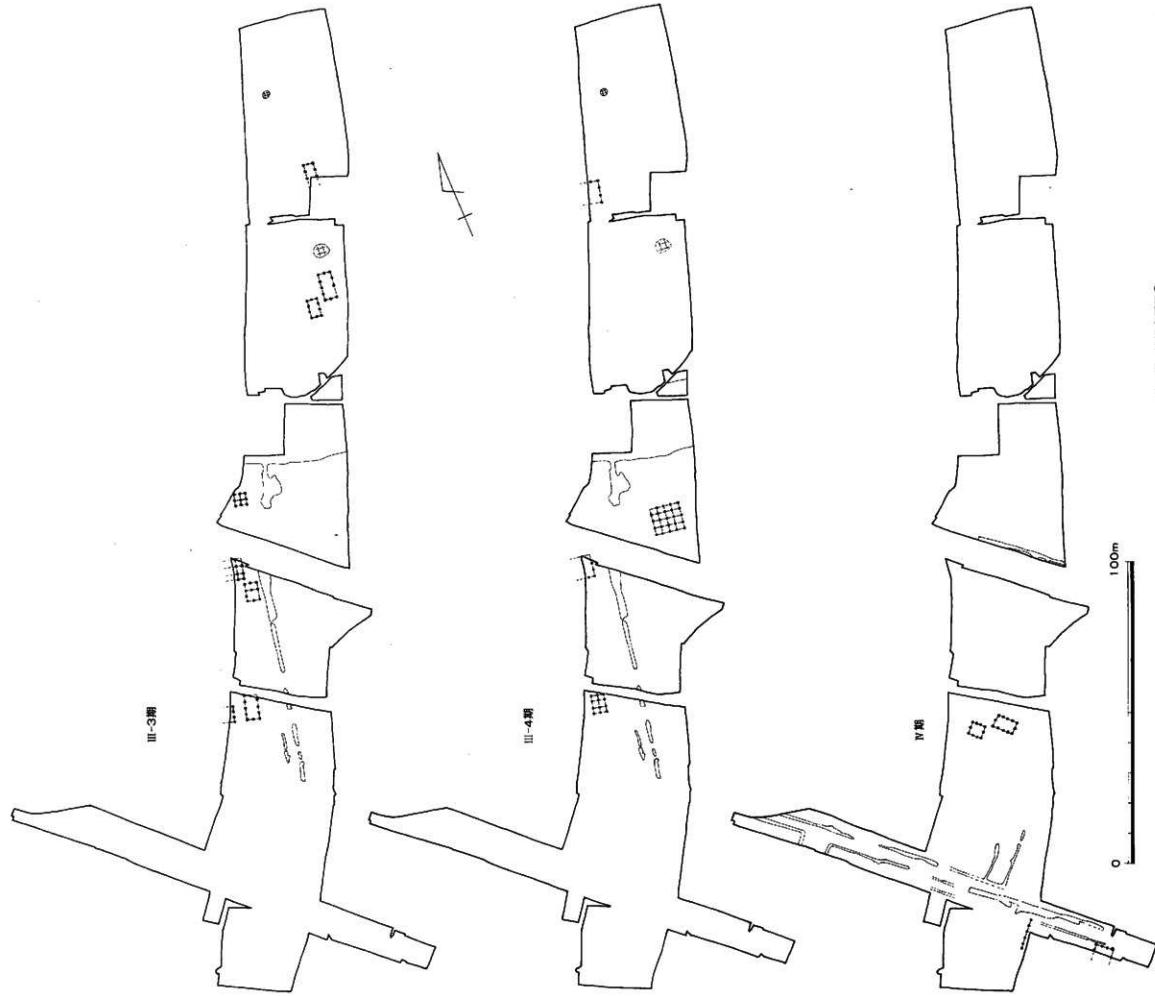
III-3期の遺構はA地区S B11・S B13・B地区S B118・S B20、C地区S B45、D地区S B27・S B29・S E05、E地区S B35・S E06がある。掘立柱建物跡はN-9°～15°-Eの方位を持つ一群で、A～C地区的建物群はS D01・02・06に規制された形で構成されているようである。D・E地区ではS D07・S D8・S D13については当該期には機能していないものと考えられる。

### III-4期の遺構

III-4期の遺構はA地区S B12、B地区S B21、C地区S B22、A~C地区S D01・02、E地区S B32・S E06がある。掘立柱建物跡はN-10°~15°-Eの方位を持つ一群で、A~C地区の建物群はS D01・02・06に規制された形で構成されているようである。

III期の遺構は前述したとおり8世紀から10世紀中葉の遺構群である。当該期の掘立柱建物群のうち、遺物により時期が確定し得るものはIII-4期のS B12(H20)が10世紀中葉、III-4期のS B22(S B22関連遺構SK32の一括土器・II166・B4・A24)が10世紀前半、III-1期のS B28a(H244=平城宮III)が8世紀中葉以外明確なものはない。しかしながら上記建物跡から推測するとIII-1・2期属する埴物群は大型の方形の堀方を主流とすること、III-3・4期に属する埴物群は小型の円形の堀方を持つことが考えられる。S B12、S B28aについては柱穴内から出土であることから建物廃絶期、S B22は建物建築の際の地鎮にかかる土器埋納坑からの出土であることから埴物建築当初の時期を提示しているものと考える。また、建物の切り合い関係からはIII-2期S B14→III-3期S B11→III-4期S B12、III-2期S B26→III-3期S B27、III-2期S B31b→III-3期S B29の古新が可能である。これらのことから同一時期の建物群がほぼ同一の方位を取るとすれば、上記のようにIII-1~4期の建物群の分類はある程度可能と考える。建物跡以外の遺構ではA~C地区S D01・02については出土遺物からIII-1~4期に、C地区S E02は井戸機能時半ばと考えられるIII層から8世紀中葉の土器が、廃絶時期と考えられるII層上層で8世紀後半の上器が出土していることからIII-1・2期に存在したことが考えられる。D地区S D07・08、E地区S D13は区画溝として関連する遺構と推察され、各溝からの出土遺物より8世紀前半から9世紀前半=III-1・2期に存続していたものと理解される。D地区S E05は機能時半ばと考えられるIII層下層より9世紀中葉前後の土器が、廃絶時期とされるIII層上層から9世紀末から10世紀初頭が出土していることからIII-3期には少なくとも使用されており、埋土堆積状況からすればIII-1期から使用されていた可能性がある。E地区S E06は井戸底より8世紀中葉の遺物が、廃絶時期を示すIV層最上層より10世紀中葉の遺物が出土していることからIII-1~4期に使用されていたものと考えられる。以上のことから、III-1期は8世紀中葉前後、III-2期は8世紀後葉から9世紀中葉前後、III-3期は9世紀後葉から10世紀の早い段階、III-4期は10世紀前葉から中葉前後に比定されよう。なお、S E05、06については出土遺物からすれば少なくとも1世紀半もの長期にわたり使用されていたことになり、井戸の存続時期については再考する必要があるかもしれない。

第16図 連携実習図②



#### IV期の遺構

IV期の遺構は栗太主条豆（N-33°・E=真北から）と方位を同じくする一群で、Z地区小溝8～30、S B02、A地区S B09・S B10がある。これらの遺構のうち時期の明確なものは小溝8・10で12世紀前半から後半の遺物が出土していることから、他の遺構もほぼ当該期のものと考えられる。S B02・S B09・S B10はN-41°～45°-Eの方位を持つ建物群である。

また、Z地区検出の東西方向に延びる小溝8～21はほぼ2～2.4mの幅で、調査区西端から直線的に延びていることから12世紀代の古道の可能性がある。

以上、矢倉口遺跡の遺構についてはI期からIV期の時期が想定できたが、I・II期については遺構そのものが少ないため、周辺の調査の進展を待たざる得ないものの、当遺跡において据立柱建物による集落が構成されるのは7世紀後半代に遡る可能性がある。今回の調査で最も多く検出されたのはIII期の遺構群である。III期の遺構群はほぼ正東西南北方向に方位を持っており、追分町周辺に認められる異方位条豆=N-8°-Eと概ね一致する。さらに、III期の遺構群はIII-1・2期の一群とIII-3・4期では建物構成上大きく異なる。III-1・2期では2期で顕著な様相を呈し、A～C区においては堀状の形態を持つS D01・02の東側に柱筋を揃えた倉庫群が調査区内では1列に配置されており、西側では検出遺構の総数は少ないが両面庇を持つ建物等が規格性を持って配置されている様である。D・E地区ではS D07・08・13の溝により区画されていることが予測され、S D07・13の間がほぼ106m=1町であることからその規模は1町域四方を持つものと考えられる。さらに、区画溝内に存在する建物群はD地区で、L字状ないしこの字状の配列が、E地区では建物間の柱筋を揃えるなど規格的配置が認められる。しかしながら、III-3・4期では建物方位をほぼ正東西南北に持つ南北棟のみであり、A～C地区ではS D01・02の存在に規制された形で位置する以外、明確な規格性は認められない。また、D・E地区では1町域の区画溝は消滅し、建物そのものも小規模であり、A～C地区同様、明確な規格性は認められない。さらにIII-1・2期に属する遺物では木造、物指、檜扇等の木製品、墨書き土器、円面鏡、卓朝12銭など特異な遺物が出土している。

このように、III-1・2期の遺構群は建物配置および遺物において特殊な状況が顕著であり、一般にいわれる官衙的色彩の強いものあるいは貴族等の邸宅跡とされる状況にある。特に、A～C区に見られる倉庫群の配置状況は古代郷倉跡とされている高島郡弘川遺跡に類似するものであるが、郷倉跡とする確証はない。今後の周辺の調査、さらに国衙以外の地方官衙施設の研究の進展を待ちたい。

また、異方位条豆=N-8°-Eと概ね一致する建物群を持つ遺跡は、単に矢倉口遺跡における状況だけでなく、隣接する司出追分遺跡、南平遺跡、坊主東遺跡の堀立柱建物群においても同様

の結果が得られており、このことからすれば追分町から矢倉一帯において広く異方位条里が存在したことが窺われるとともに、矢倉口遺跡周辺の古代集落が建物方位に一定の規格性を有する都市的景観を備えた集落群であったと理解される。ただ異方位条里の成立時期についてはIII-1期の時期が8世紀前半から中葉であることから8世紀の早い段階に存在していたことは確実であるが、それ以前に遡るものか、さらに異方位条里の成立の起因が何によるものなのかは現時点では明確な回答を持たない。しかし、当地周辺は古代東山道・東海道の分岐点に当り、足利健亮氏によれば分岐した東海道が当遺跡を通過しているとされている<sup>(39)</sup>ことから、異方位条里の成立及び矢倉口周辺の集落成立の起因については古代官道との関連を考慮しておかなければならないであろう。

（谷口智樹）

## 註

- (1) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告書IV』1978年
- (2) 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会「伊香郡高月町井口・柏原遺跡」「国道365号線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II」1984年3月
- (3) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』昭和46年
- (4) 財団法人大阪文化財センター『陶邑IV』1976年
- (5) 大津市教育委員会「大津市埋蔵文化財発掘調査報告書(9)／山の神遺跡発掘調査報告書」昭和60年3月
- (6) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』1978年
- (7) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告VII』1976年
- (8) (3)と同じ
- (9) (6)と同じ
- (10) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告VI』1974年
- (11) 愛知県教育委員会「付・猿投塚の編年について」「愛知県古墳跡群分布調査報告(III)」1983年3月、小牧市教育委員会「小牧市篠岡古墳群／桃花台ニュータウン遺跡調査報告III」昭和56年
- (12) 奈良国立文化財研究所『昭和49年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』昭和50年3月
- (13) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」「考古学雑誌」第60巻第2号 1974年
- (14) (7)と同じ
- (15) 財団法人大阪文化財センター『陶邑II』1978年
- (16) 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会「史跡近江国衛跡調査概要」1978年
- (17) 森 隆「滋賀県における古代末・中世土器」「中近世土器の基礎研究II」日本中世土器研究会

1986年12月

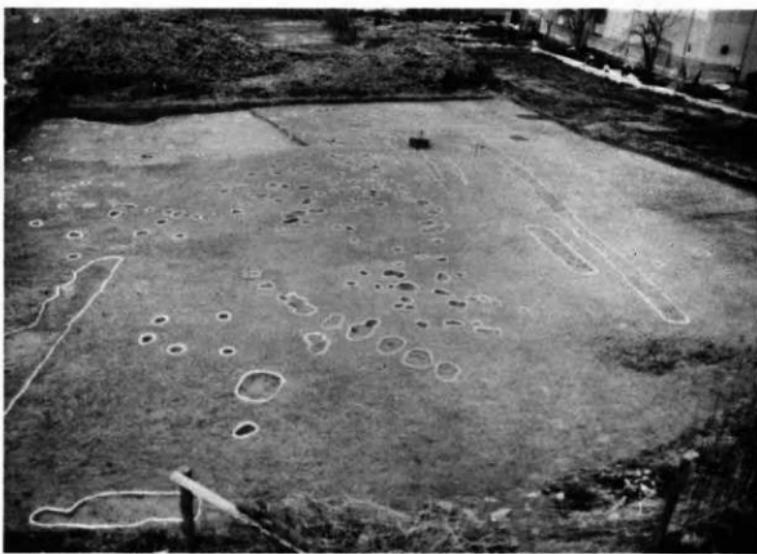
- (18) 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会「守山市赤野井遺跡」『昭和51年度滋賀県文化財調査年報』昭和53年3月
- (19) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所「X. 平安宮左兵衛府跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978-II / 平安京発掘調査概報』1978年10月
- (20) 八日市市教育委員会「堀内遺跡発掘調査報告書」1983年
- (21) (10)と同じ
- (22) (10)と同じ
- (23) 森 隆『第4回中世土器研究集会』添付資料参照
- (24) 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈良國立文化財研究所創立30周年記念論集 1983年
- (25) (10)と同じ
- (26) 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会「ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書IX-1」1984年
- (27) (10)と同じ
- (28) 財団法人京都府埋蔵文化財センター「篠塚跡群I」『京都府遺跡調査報告書』第2冊1984年
- (29) (7)と同じ
- (30) (10)と同じ
- (31) 石井清司「篠塚跡群出土の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第7号財団法人京都府埋蔵文化財センター 1983年3月
- (32) (10)と同じ
- (33) (7)と同じ
- (34) 奈良國立文化財研究所『平城宮発掘調査報告IV』1965年
- (35) 異淳一郎「古代窯業産業の成立と展開—西日本を中心として」『文化財論叢』奈良國立文化財研究所創立30周年記念論集 1983年
- (36) 滋賀県教育委員会・高島郡新旭町堀川遺跡調査報告』『滋賀県文化財調査報告』第5冊 昭和48年
- (37) (10)と同じ
- (38) (10)と同じ
- (39) 足利健亮「第3章条單と莊園 3. 古代の交通」『草津市史』第1巻 草津市 昭和56年



B・C地区調査全景(北より)



特別地区全景(北より)

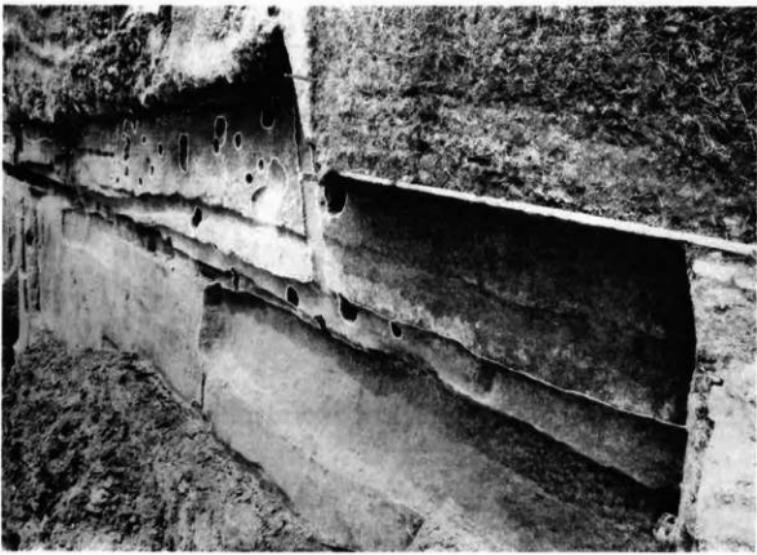


特別地区全景(南より)

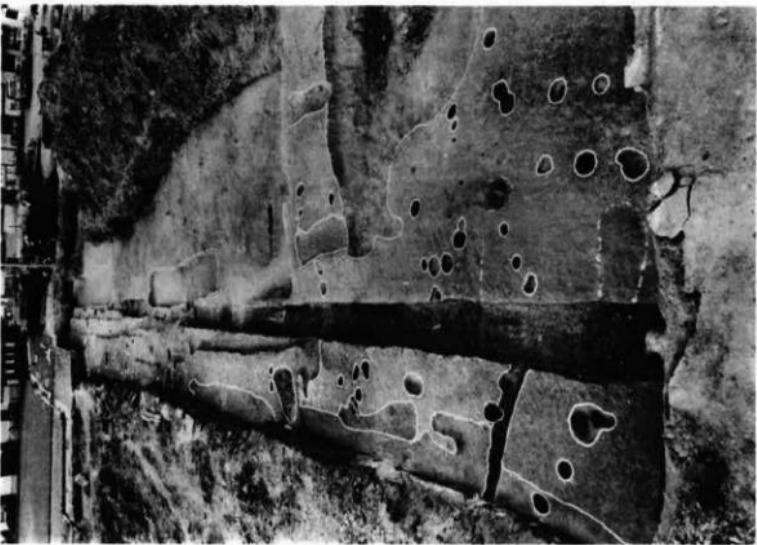


Z地区中央近景(東より)

Z地区中央近景(西より)



Z地区中央近景(東より)





Z地区西半遠景(北東より)



Z地区東半近景(東より)



Z地区中央近景(東より)



Z地区西半近景(南より)



Z地区S B01(南より)



Z地区S B01(北より)



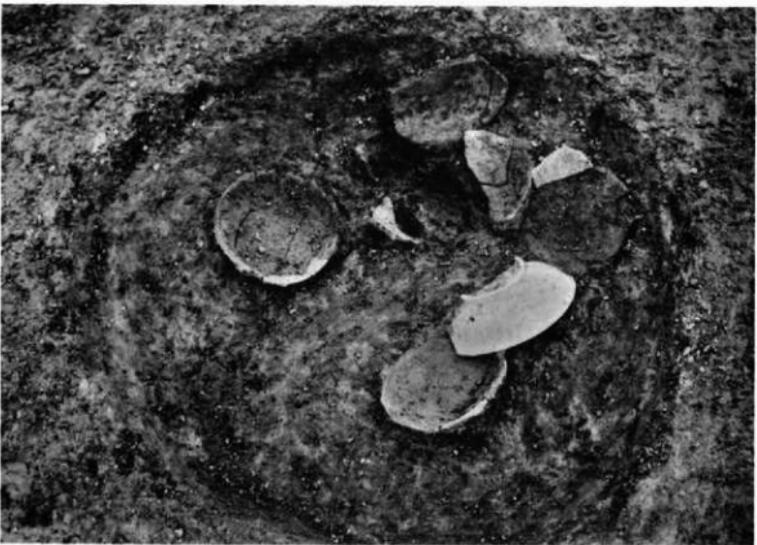
Z地区SB03(西より)



Z地区SB03(東より)



Z地区S B02(東より)



Z地区土坑土器出土状況



A地区東側試掘トレンチ(北より)



B地区東側試掘トレンチ(北より)



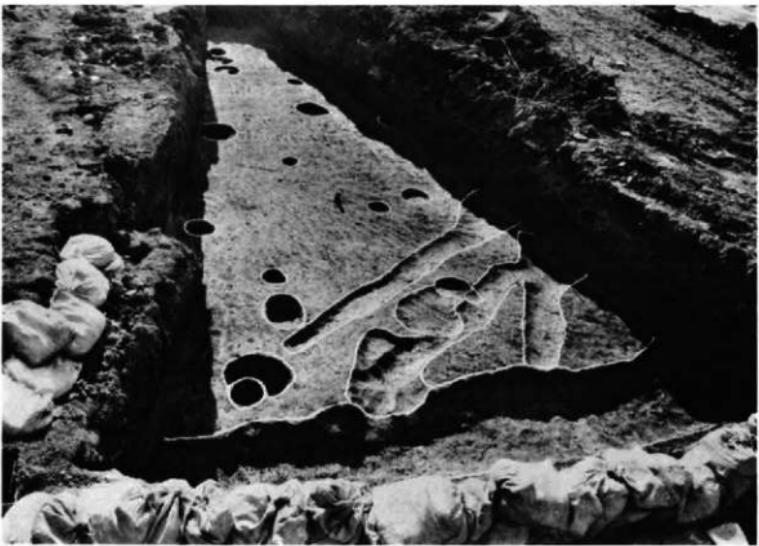
B地区東側試掘トレンチ(北より)



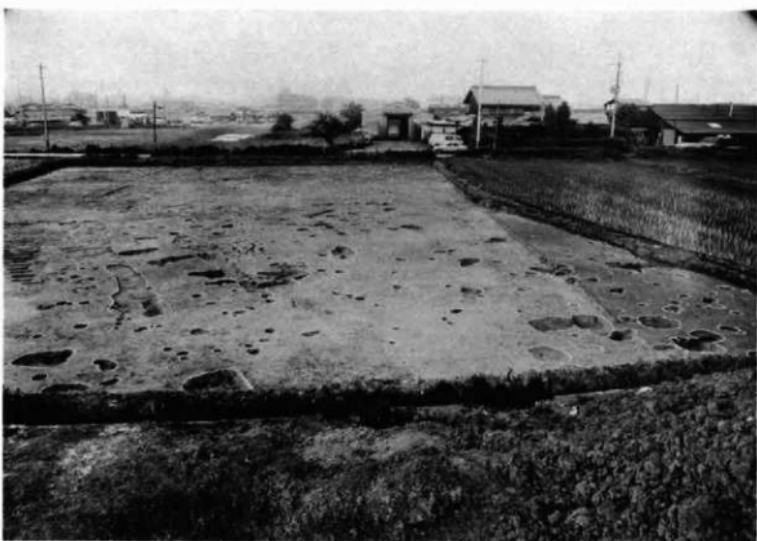
B地区東側試掘トレンチ(西より)



B地区東側試掘トレンチ(南より)



C地区東北端試掘トレンチ(北より)



A地区全景(南より)



A地区全景(南より)



A地区東半全景(南より)



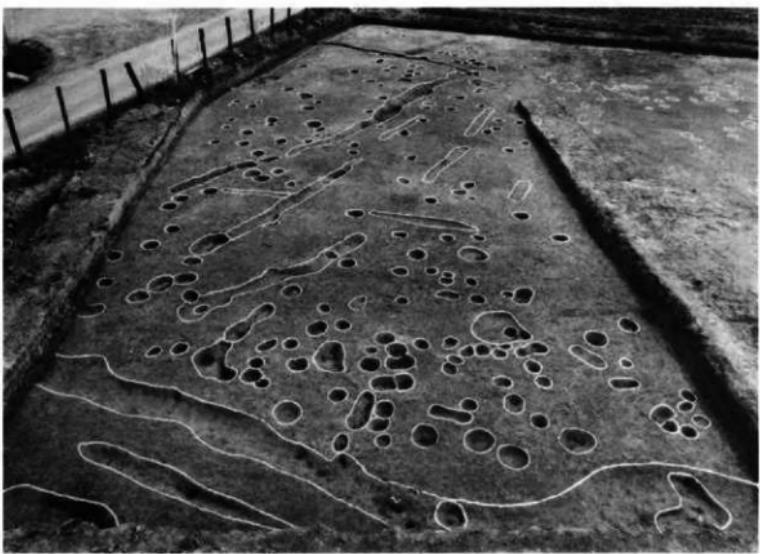
A地区西半全景(南より)



A地区遺構検出状況(北より)



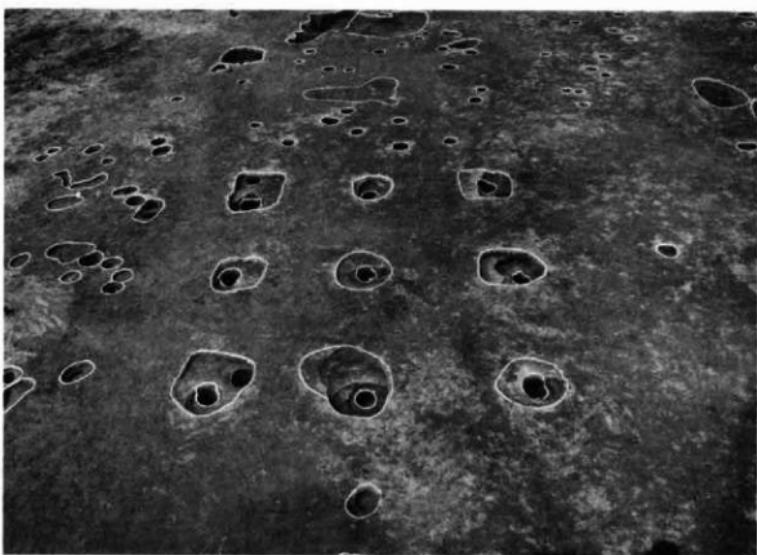
A地区遺構検出状況(北より)



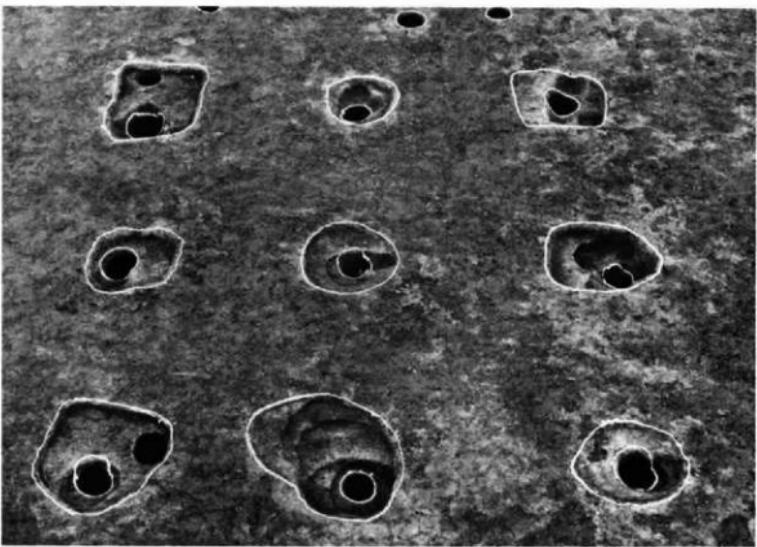
A地区遺構検出状況(南西より)



A地区遺構検出状況(南より)



A地区S B 05近景(南より)



A地区S B 05近景(南より)



A地区S B09遠景(北より)



A地区S B09近景(北より)



A地区SB11～SB14近景(南より)



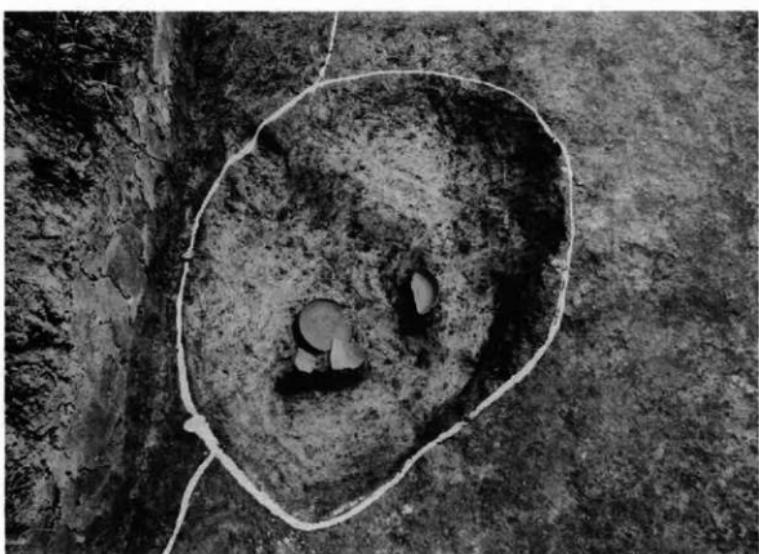
A地区SB14近景(南より)



A地区SB11～SB13近景(南より)



A地区SK21土器出土状況(北より)



A地区SK09土器出土状況(北より)



A地区SK09土器出土状況(西より)



B地区全景(北より)



B地区全景(北より)



B地区東半近景(北より)



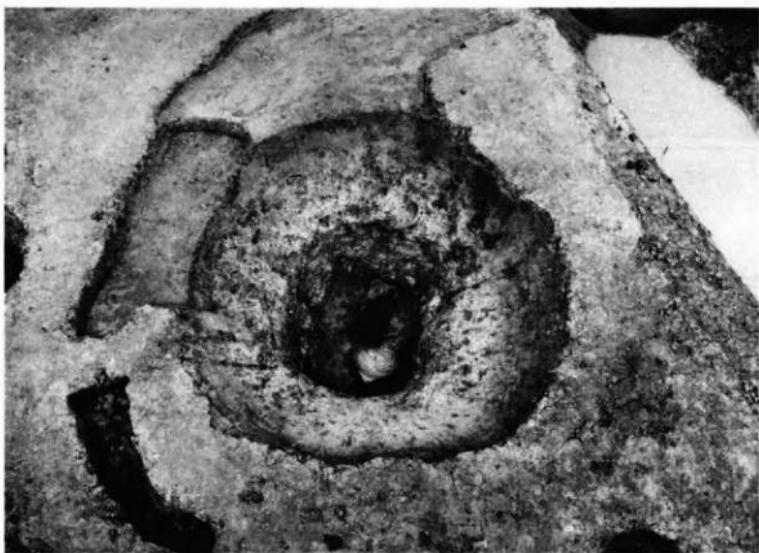
B地区西半近景(北より)



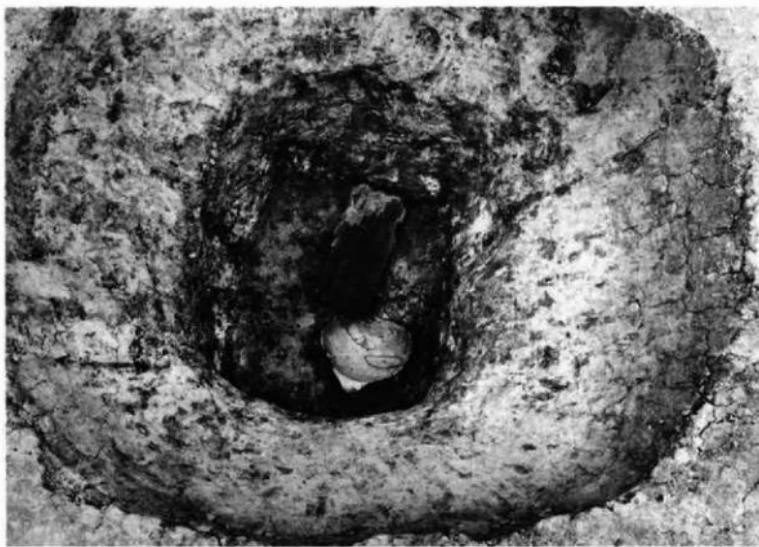
B地区SX04、SX05近景(北より)



B地区SE01近景(南より)



B地区 S E01近景(北より)



B地区 S E01遺物出土状況(北より)



C地区全景(南東より)



C地区全景(南東より)



C地区SB22～SB23・SE02遠景(南より)



C地区SB44遠景(南より)



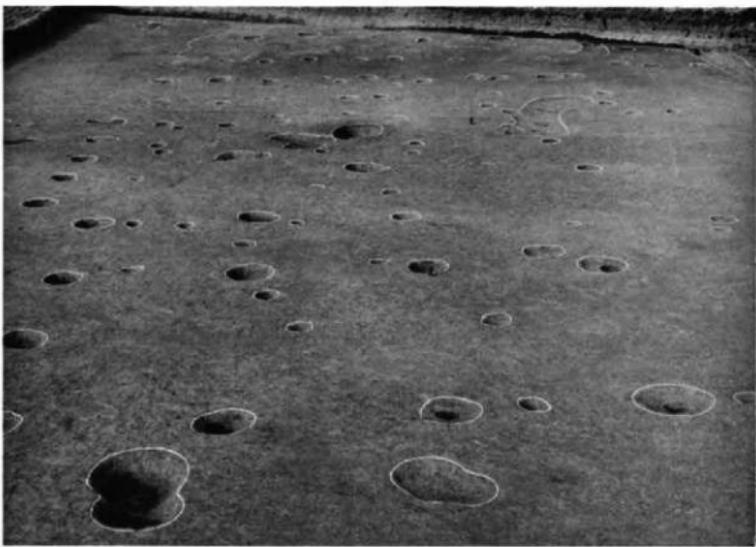
C地区S B44近景(南より)



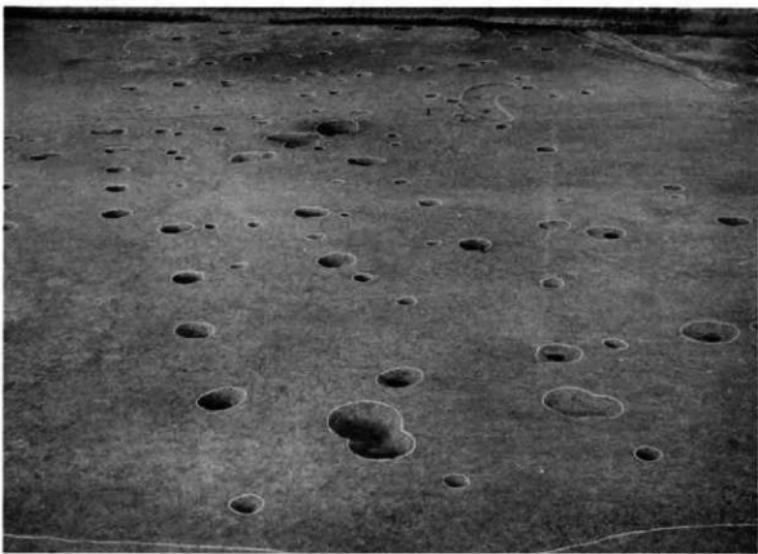
C地区S B23近景(南より)



C地区S B44近景(南より)



C地区S B22近景(南より)



C地区S B22近景(南より)



C地区S B45近景(東より)



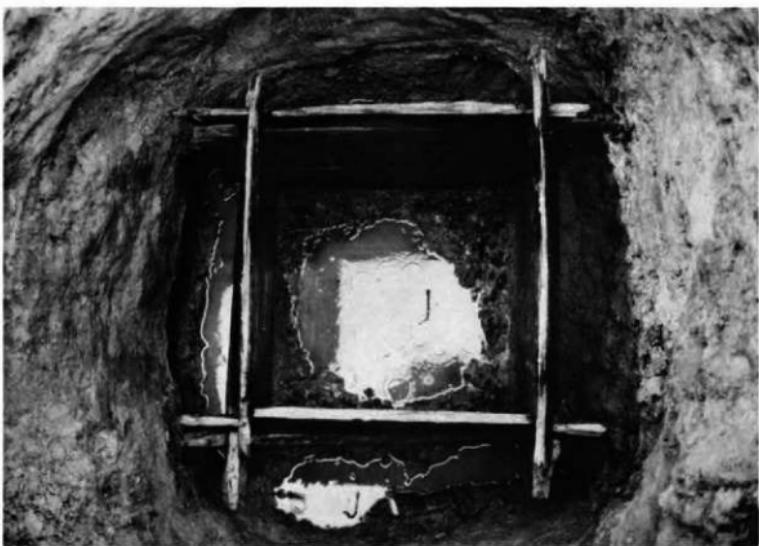
C地区S E 02全景(北より)



C地区S E 02近景(南より)



C地区S E 02近景(南より)



C地区S E 02近景(西より)



C地区SE02全景(南より)



C地区SE02近景(南より)



D地区調査区遠景



D地区遠景(南から)



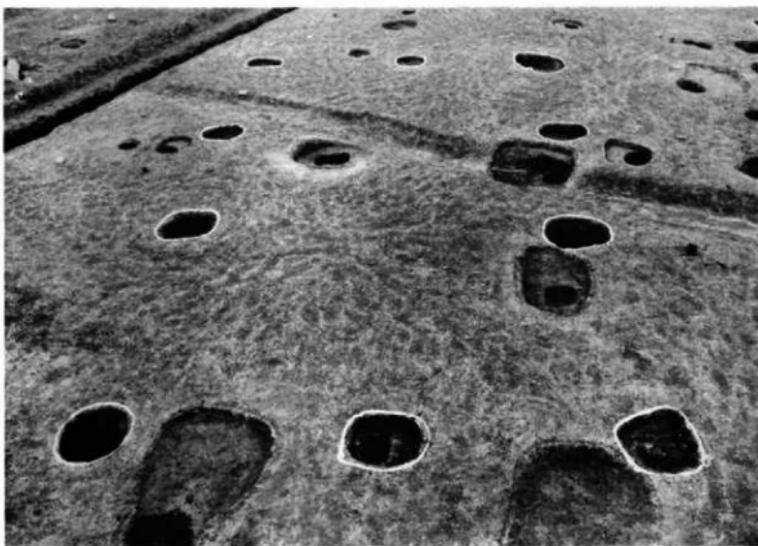
D地区 S B24



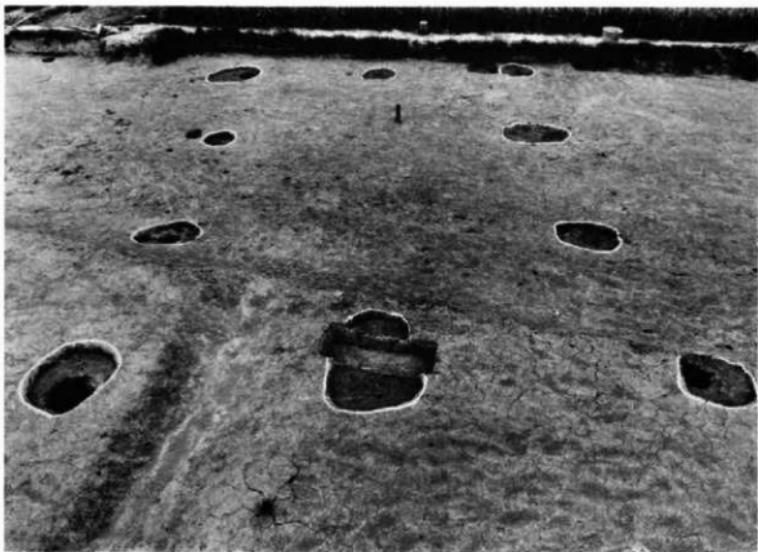
D地区 S B25



D地区 S B26



D地区 S B27



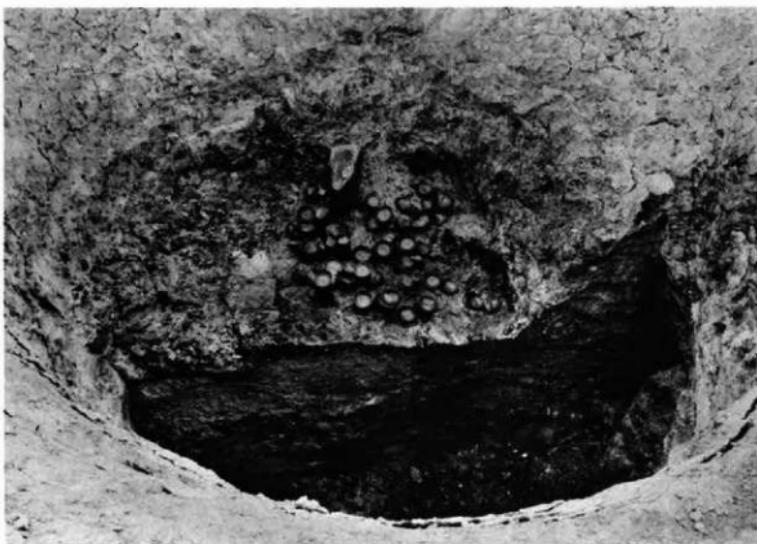
D地区 S B28



D地区 S B30



D地区 S B31



D地区 S E05



D地区S E 05土质器出土状况



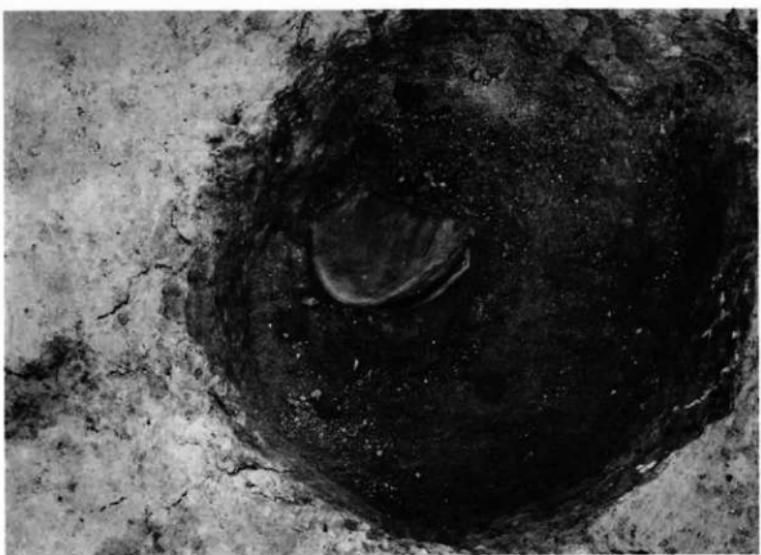
D地区S E 05灰釉陶器出土状况



D地区S E 05 曲物



D地区S E 05 曲物



D地区S B24土质器出土状况



D地区S D07质器出土状况



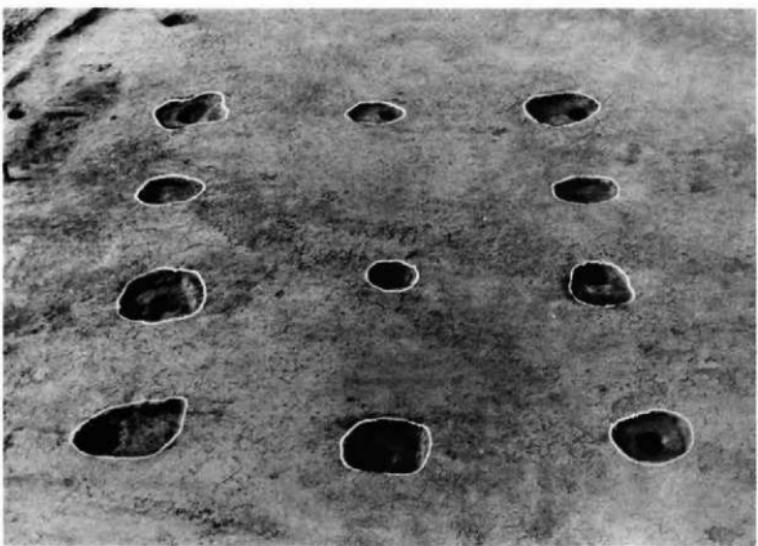
E地区調査地遠景



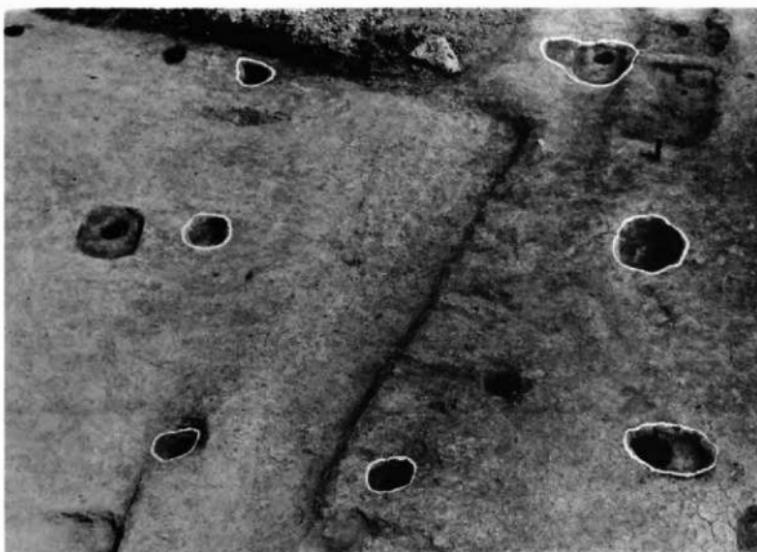
E地区全景(南から)



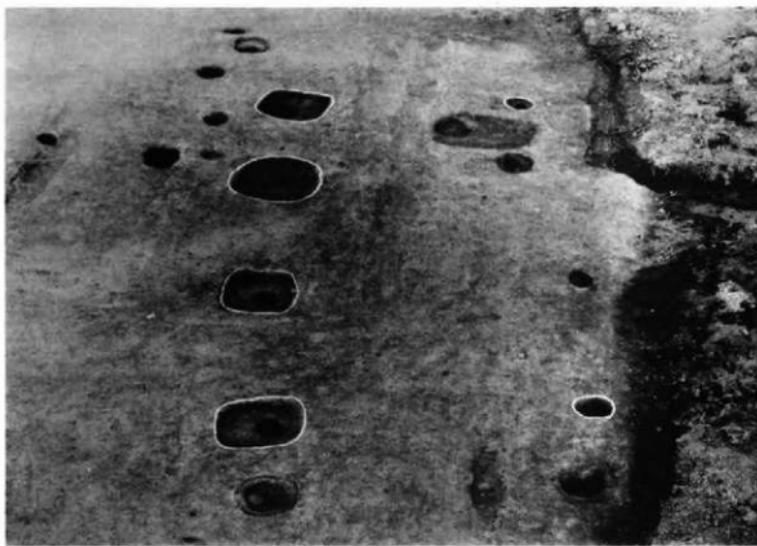
E地区S B32



E地区S B33



E 地區 S B 34



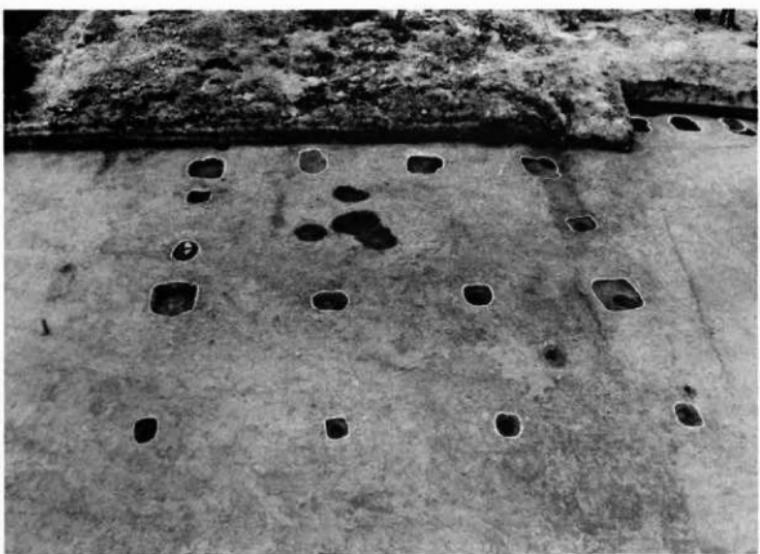
E 地區 S B 35



E 地區 S B36



E 地區 S B37



E 地區 S B 38



E 地區 S E 06



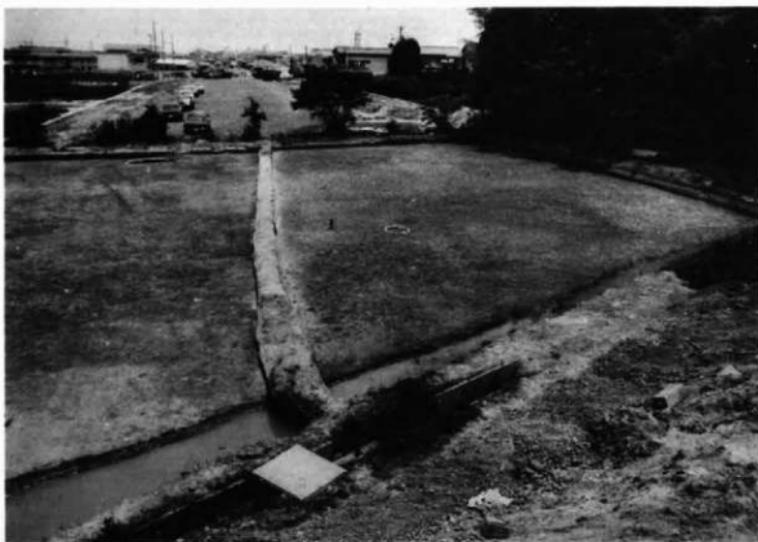
E 地區 S E 06 土師器出土狀況



E 地區 S E 06 曲物出土狀況



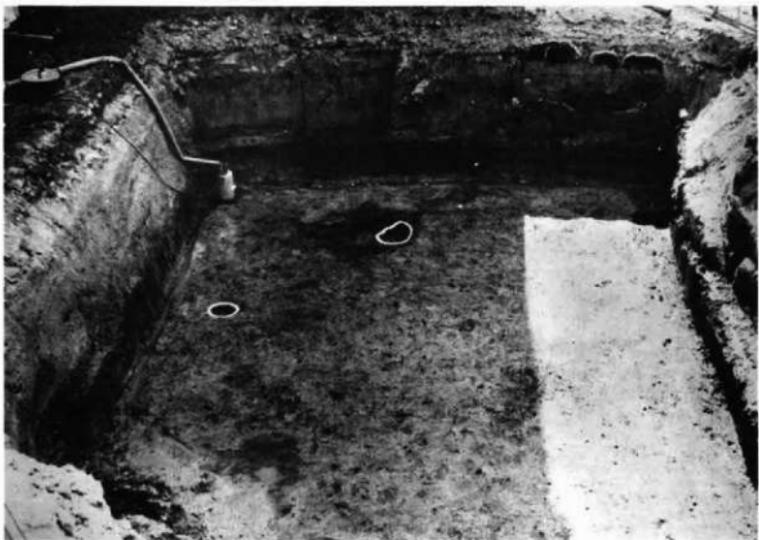
F地区西部全景(南から)



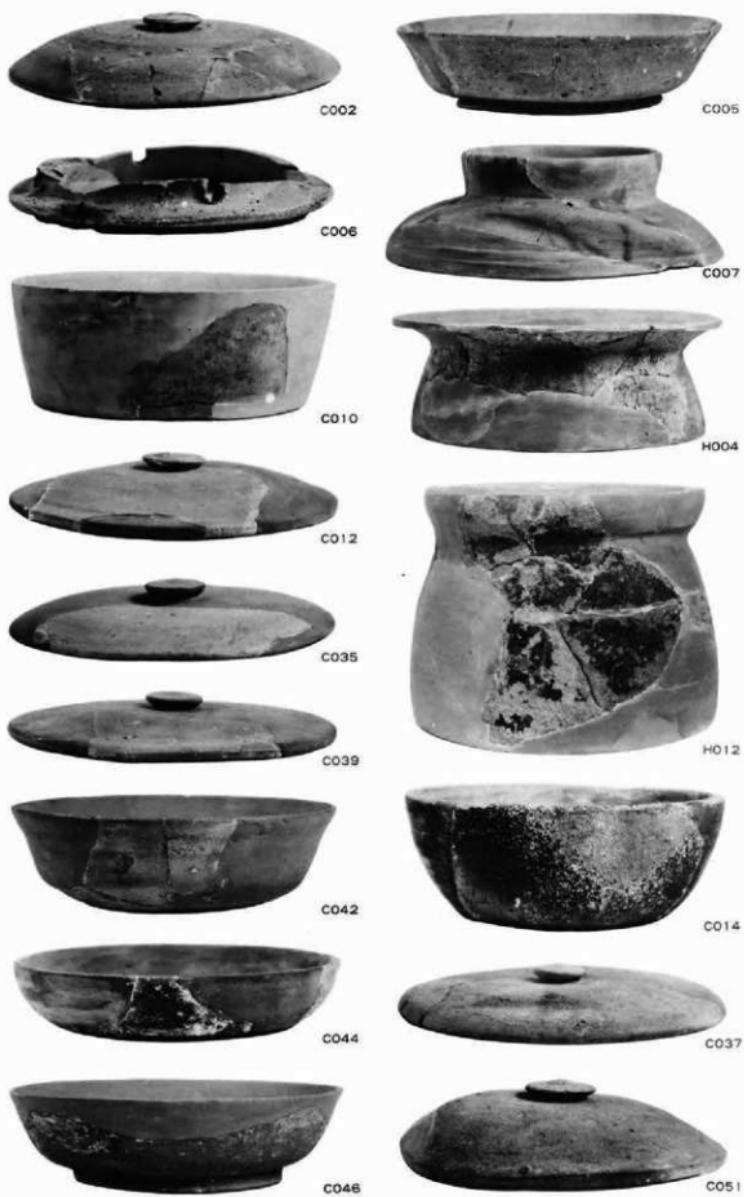
F地区東部全景(南から)



G地区扩张部掘立柱建筑物跡 S B40



G地区扩张部南部全景



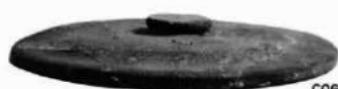
C002(S K07)、C005、C006、C007、C010(S K08)、H004、H012(S K07、S K08)、C012、C014(Δ  
地区包含層)、C035、C037、C039、C042、C044、C046(S K10)、C051(S K14)



C053



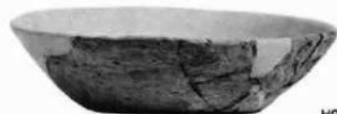
C054



C064



H020



H022



H023



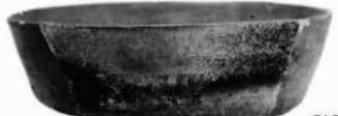
C133



C135



C128



C136

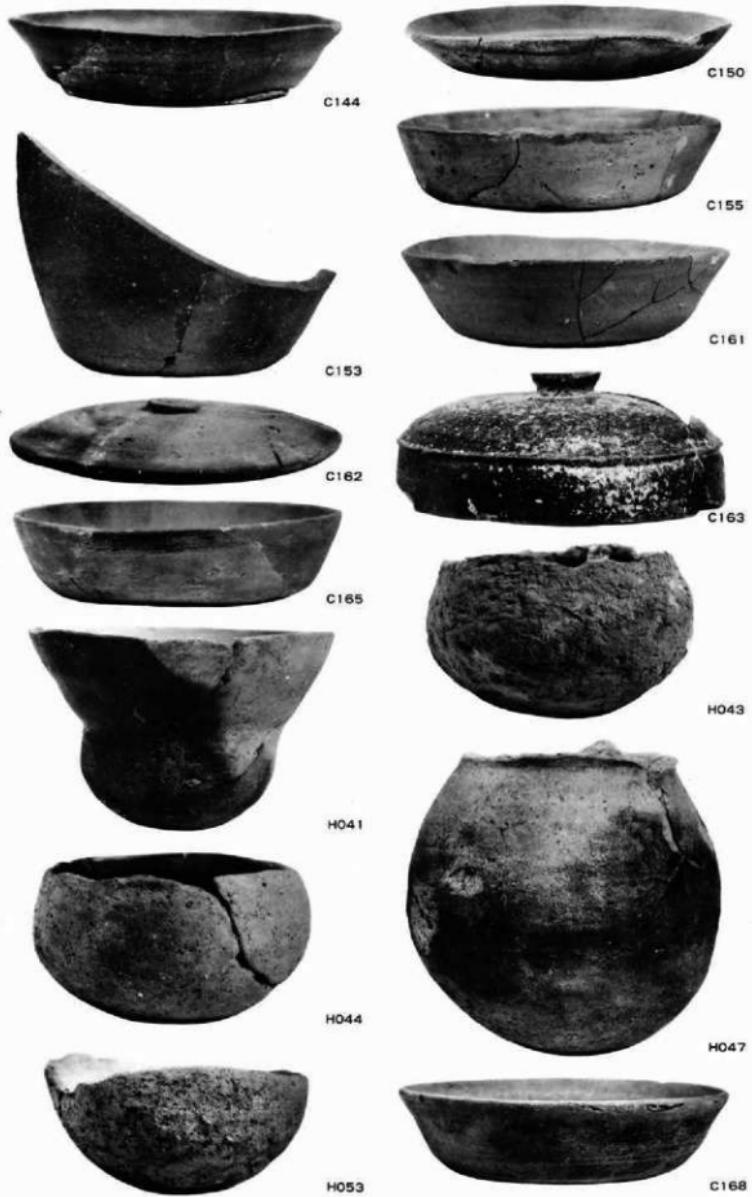


C143



C137

C053, C054(S K14), H020(S B11), C064, H022, H023(A 地区柱穴内)、C123(B 地区包含屑)、C128(S D03)、C133、C135、C136、C137、C143(S D01)

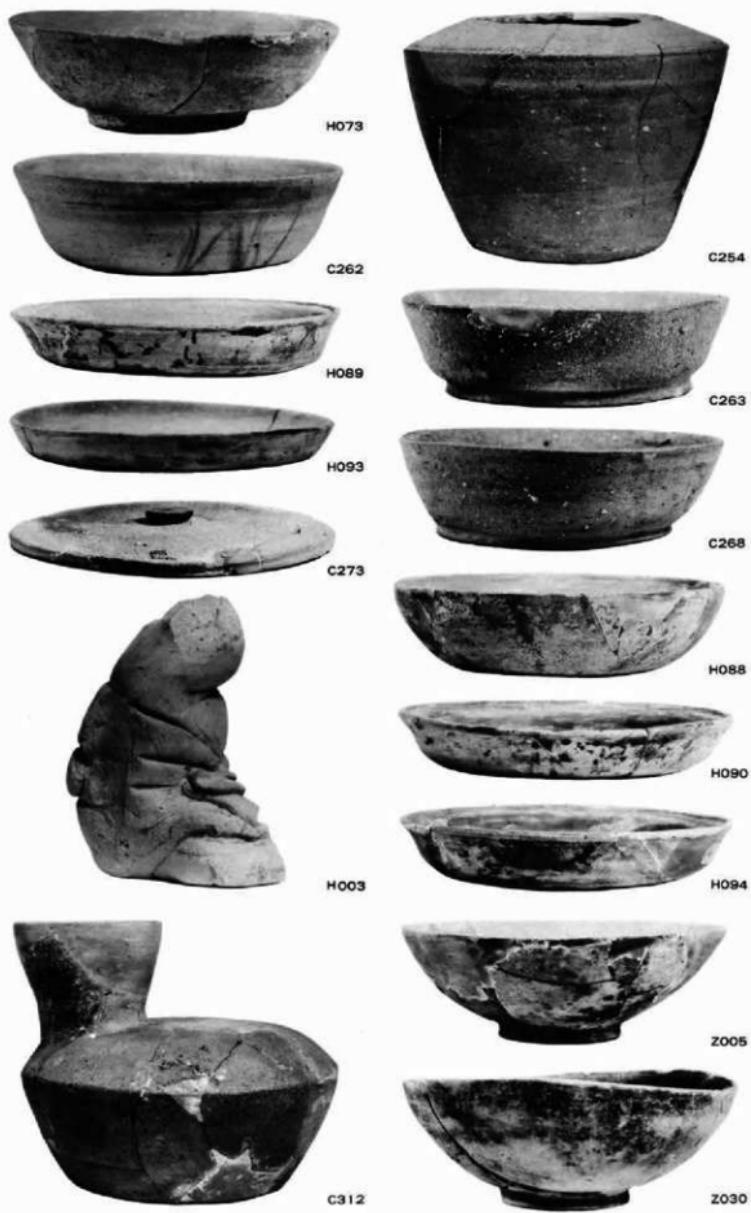


C144, C150, C153(S D01), C155(S X10), C161, C162, C163, C165(B地区包含層), H041, H043, H044, H047(S X 5 B), H053(S X 5, 4), C168(S E01)



H058、C169、C170、C171(S E01)、C178(B地区包含層)、C202、C204(B地区包含層)、C214(C地区包含層)、A024、B004(C地区柱穴内)、C249、G003(S E02 I層)、C255(S E02 II層)、H018(SK10)

圖版五十三 遺物



C254(S E02 II層)、C262、C263(S E02 II、IV層)、H073(S E02 I層)、H089、H088、H090、H093、H094、C268(S E02 III、IV層)、C273(C地區包含層)、Z003、Z005(小滿10)、Z030(小滿8)、C312(小滿29)



H123



H131



H124



H134



H125



H136



H126



H137



H127



H139



H128



H142



H129



H143



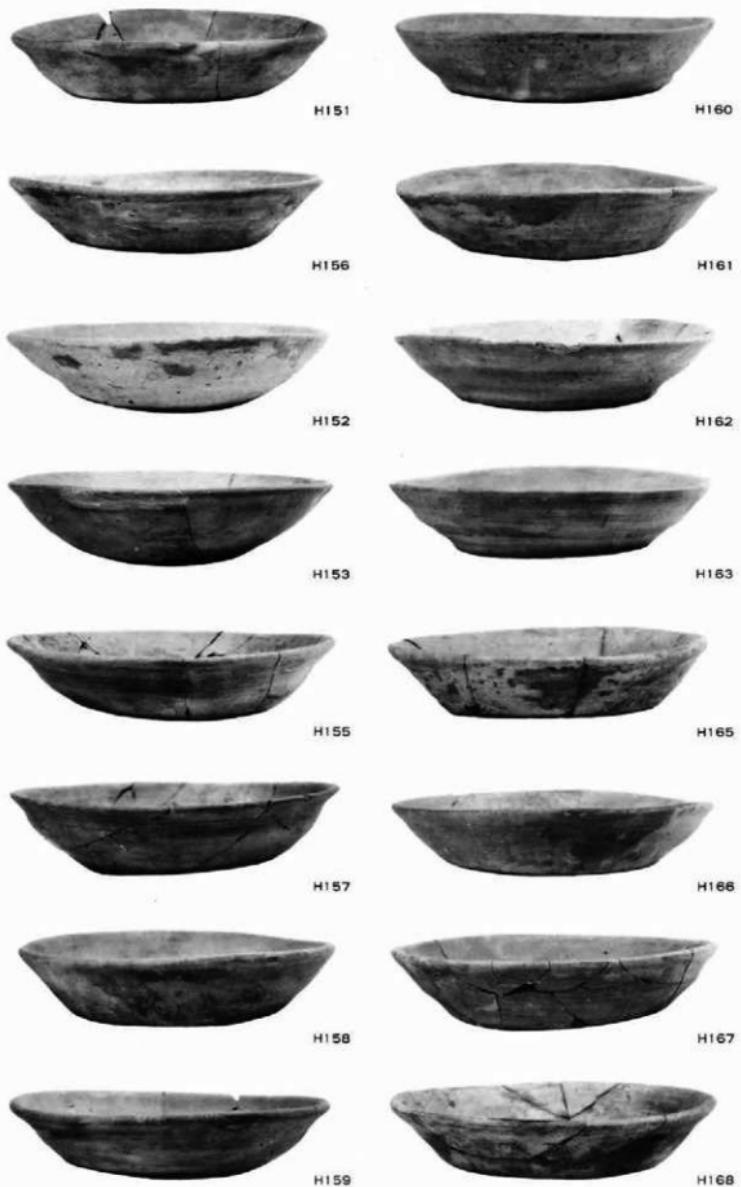
H130



H150

H123~H131、H134、H136、H137、H139、H142、H143、H150(SE05、17層(III層最上層))

圖版五十五 遺物



H151~H153、H155~H163、H165~H168(S E 05. 17層(Ⅲ層最上層))



H169



H180



H170



H182



H171



H183



H172



H184



H174



H187



H176



H193



H178



H195



H179



H203

H169~H172, H174, H176, H178~H180, H182~H184, H187~H180, H182~H184, H187, H193, H195, H203 (S E 05, 17層(Ⅲ層最上層))



H215



H210



H216



H209



H217



H207



H221



B018



A058

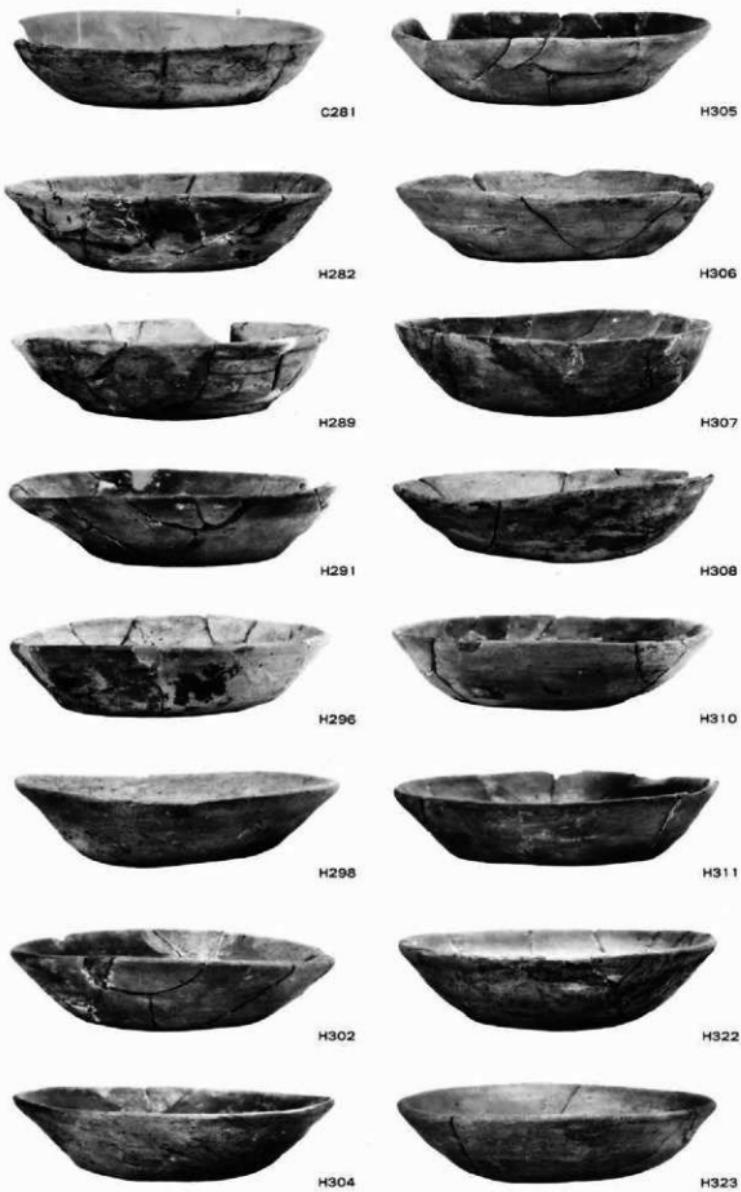


A056

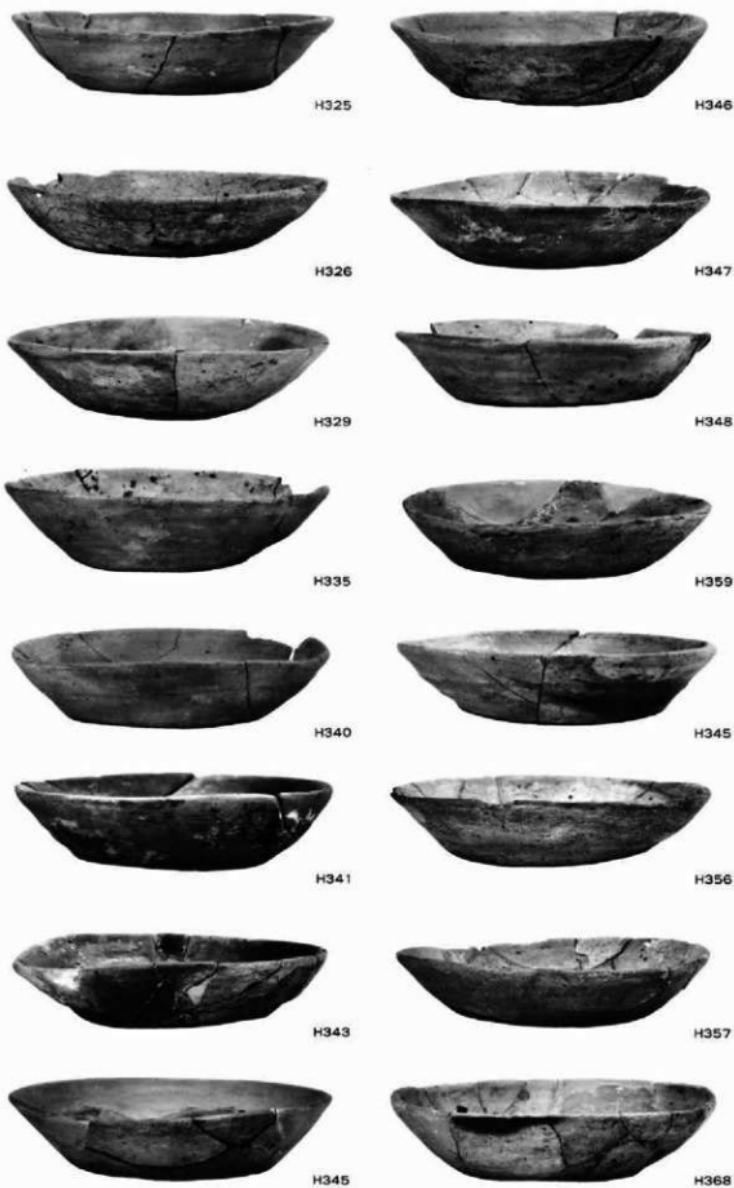
H207~H221, B018, A056, A058(S E05、17層~20層(III層))



C346(S E05, 1~9層[I層])、C354(S E05, 10~16層[II層])、C374、C375、C388、C392、C395、  
C397(S E05, 18~20層[III層])、C404(S D02)、C425、C426(S D01)、H244(S B28(P-10))



C281(S E 06、1層[I層最上層])、H282、H289、H291、H296、H298、H302、H304～H308、H310、  
H311、H322、H323(S E 06、23層[IV層最上層])



H325, H326, H329, H335, H340, H341, H343, H345~H348, H356, H357, H359, H368(S E06,  
23層〔IV層最上層〕)



H374



H385



H369



H388



H372



H389



H375



H390



H376



H392



H378



H393



H379



H394



H381



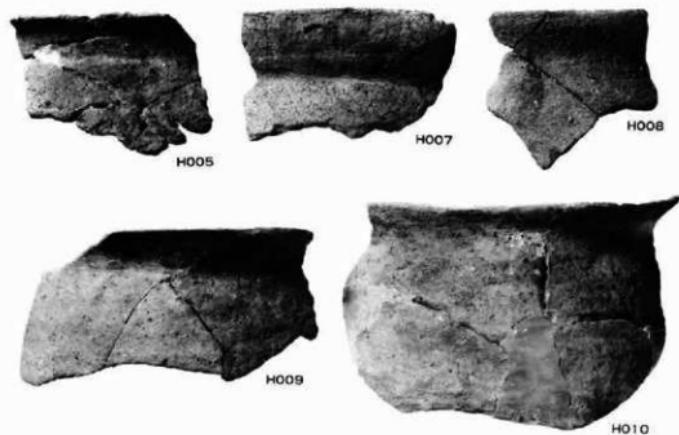
H399

H369, H372, H374~H379, H381, H385, H388~H390, H392~H394, H399(S E 06, 23層最上層)

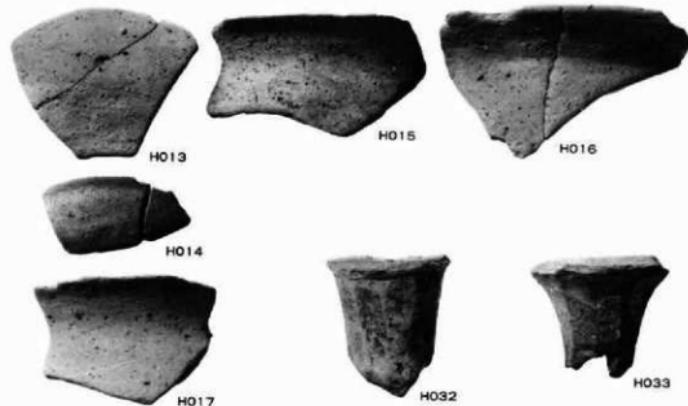
圖版六十二 遺物



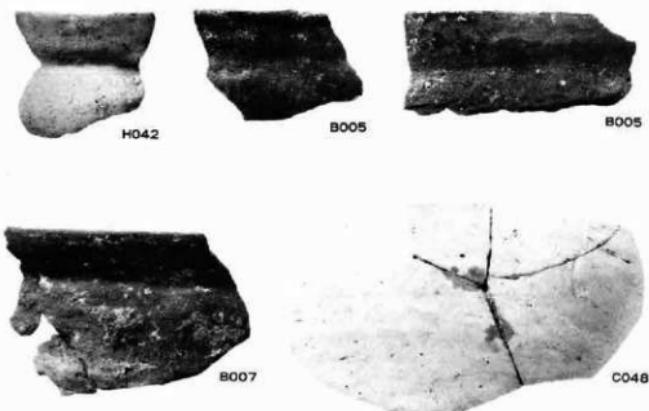
H400～H402、H404、H405、B026(S E06、23層〔IV層最上層〕)、C494(S E06、29層〔V層最下層〕)、C460、C462、C470(S E01)、K002(S E06、1層〔最上層〕)、A061(S B38(P-3))



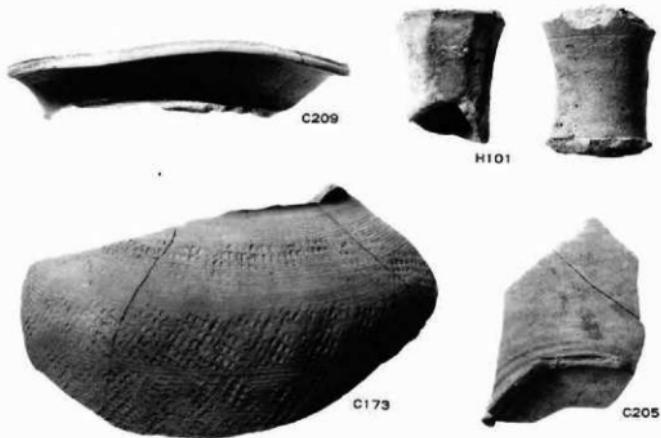
H005, H007~H010(SK07, SK08)



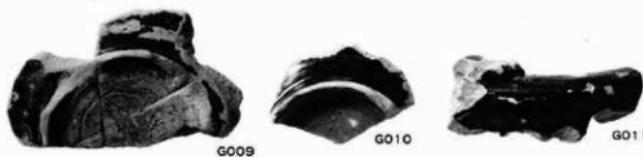
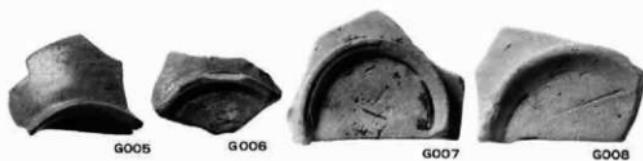
H013~H017(SK10), H032, H033(SD01)



H042(S X 5 B)、C048(S K10)、B005、B007(S E02, I層)



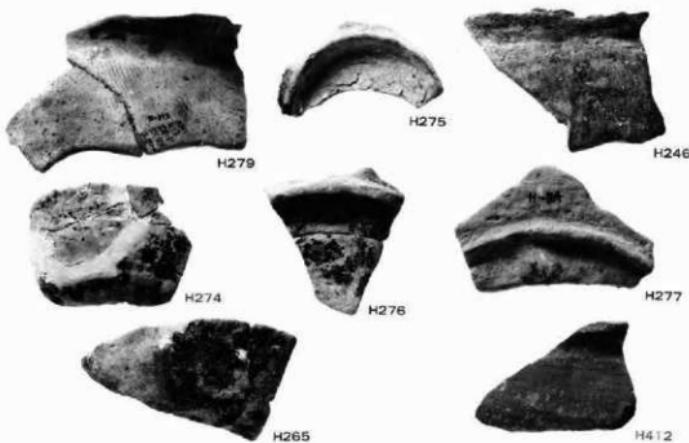
C209、C205(B地区包含層)、H101(小溝21)、C173(S E01)



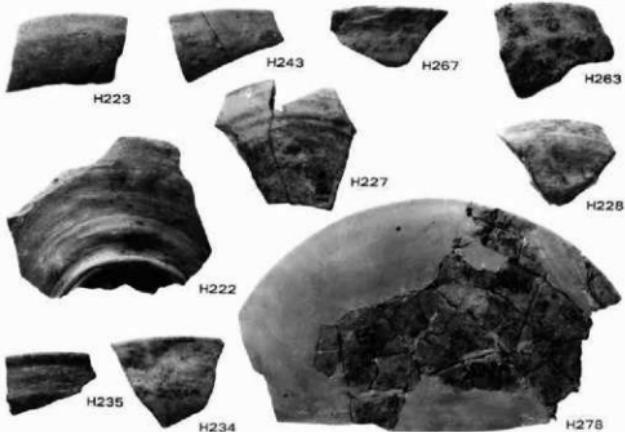
G005、G008、G006、G007、G009、G011(C地区包含層)



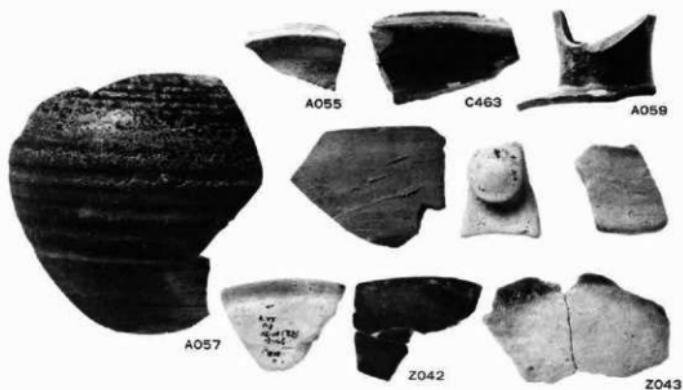
Z地区出土九瓦、平瓦



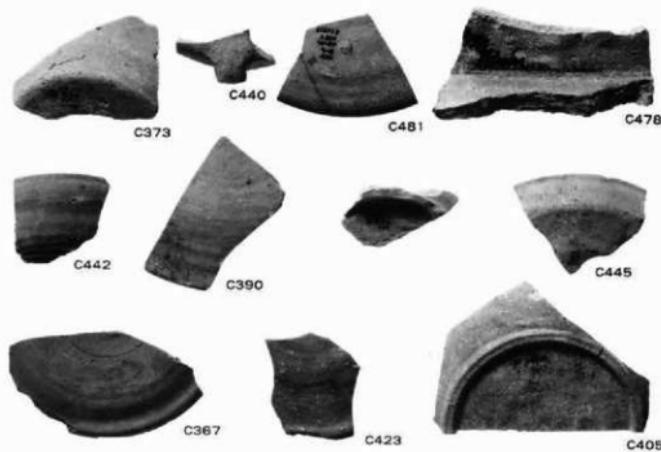
H246(S B26(P-9))、H265、H274~H277(D地区包含層(水田跡))、H279(S E01)、H412(S E06, 29層(V層最上層))



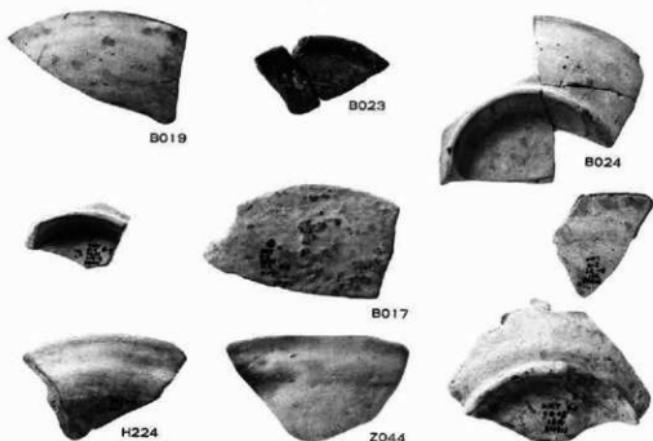
H222, H223, H227, H228(S E05, 17~20層(Ⅲ層))、H234, H235, H243(S K04)、H263, H267(D地区包含層(水田跡))、H278(S X01)



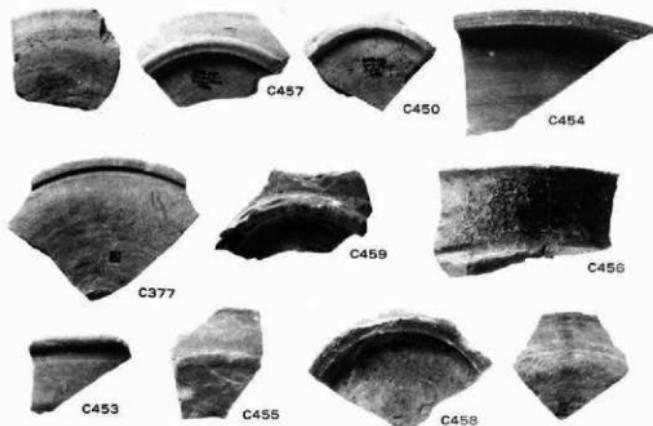
A055(S E05、10~16層(II層))、A057(S E05、17層(III層最上層))、A059(S E05、18層~20層(III層))、  
C463(S X23)、Z042、Z043(S E05、1~9層(1層))



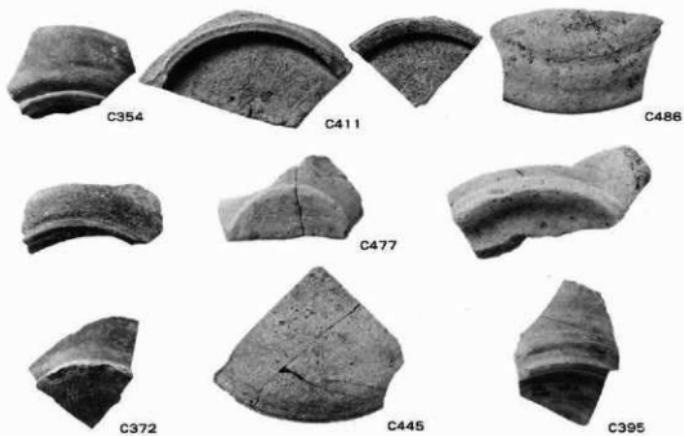
C367(S E05、10~16層(II層))、C373(S E05、17層(III層最上層))、C390(S E05、18~20層(III層))、  
C423(S K04)、C405(S D02)、C440、C442、C445(D地区包含層)、C478(S D10)、C481(S B37(P-2))



B017、Z044(S E05、10層～16層[II層])、B019(S E05、17層)、H224、B023、B024(S E05、17～20層[III層])



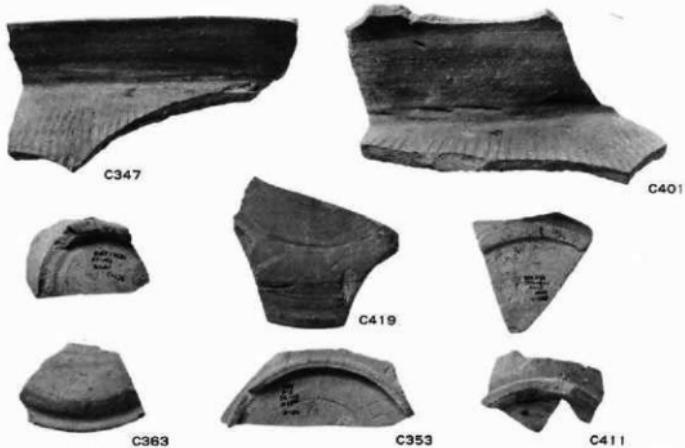
C377(S E05、18～20層[III層])、C450、C453～C459(D地区包含層[水田跡])



C354(S E05、10~16層〔II層〕)、C395(S E05、18~20層〔III層〕)、C411(S K04)、C445(D地区包含層〔水田跡〕)、C477(S D13)、C486(S E06、5~22層〔II層〕)、C372(S E06、23層〔IV層最上層〕)



C409(S K04)、C427(S D01)、C428(S B26〔P-4〕)、C432、C436(S B25〔P-8〕)



C347(S E05、1~9層(I層))、C353、C363(S E05、10~16層(II層))、C401(S E05、18~20層(III層))、C411、C419(S K04)



鐵製品



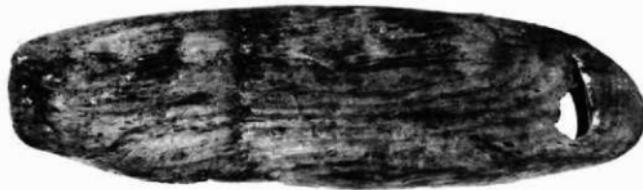
皇朝十二錢(表)



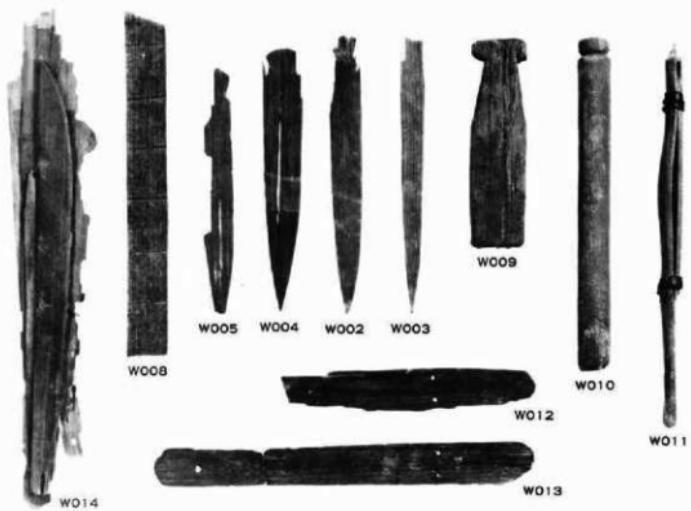
皇朝十二錢(裏)



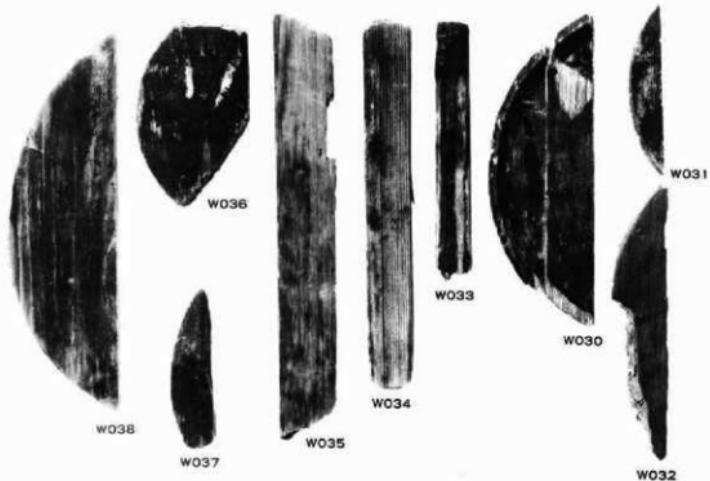
W001



W001(S E02、層不明)



W002～W005、W008～W014(S E05、20層)



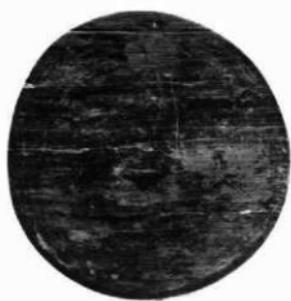
W030～W038(S E05、20層)



W008(S E02、20層)

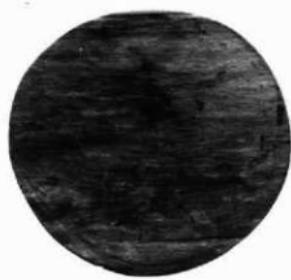


W014(S E05、20層)



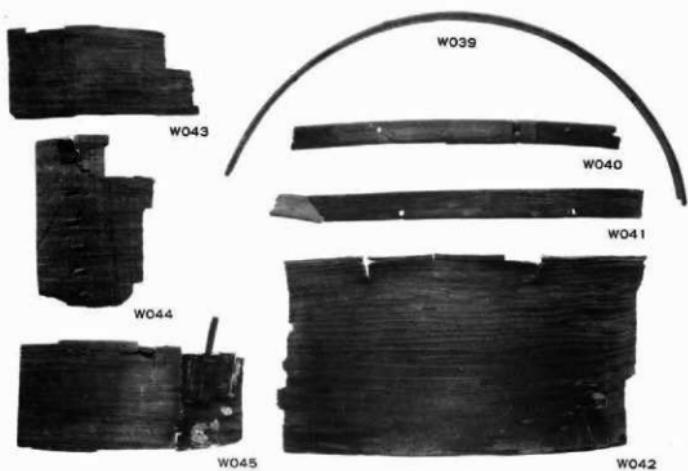
W017

W017(S E05、25層)



W016

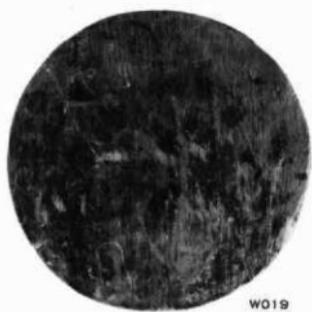
W016(S E05、25層)



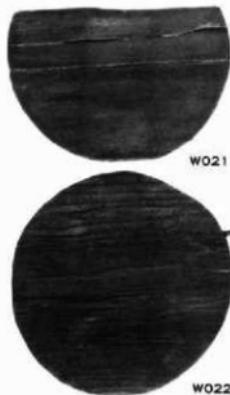
W039~W042(S E05、20層)、W043~W045(S E03、23層)



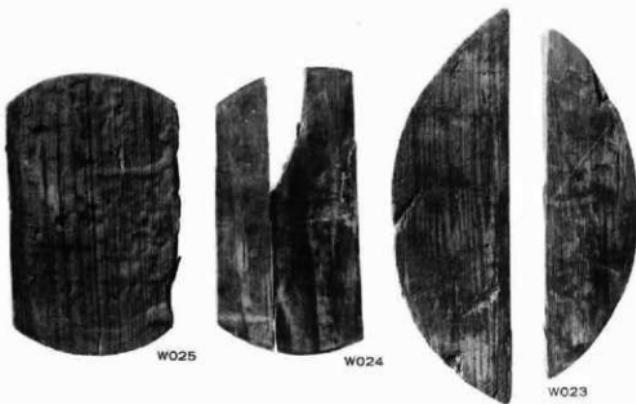
W046、W046(S E05、20層)



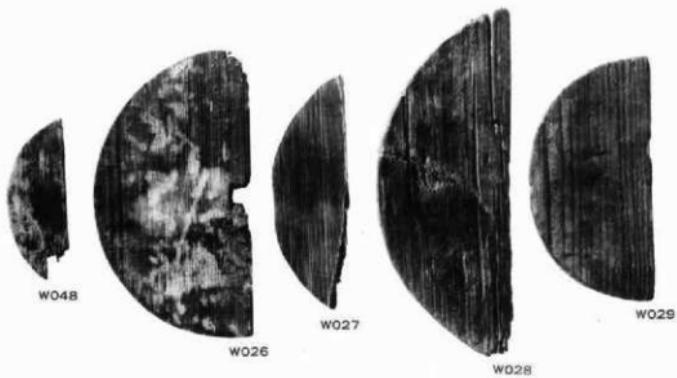
W018, W019(S E05、18層)



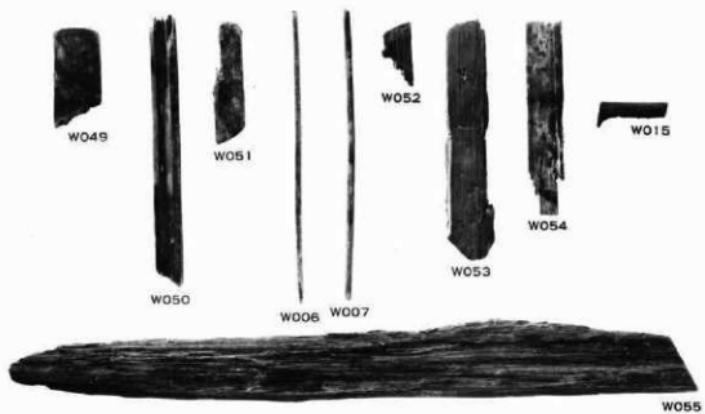
W020(S E02、16層)、W021、W022(S E06、23層)



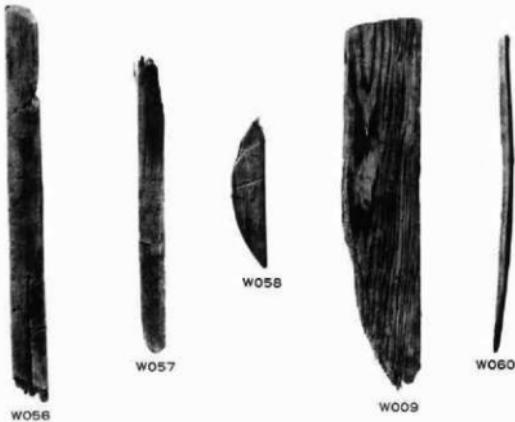
W023～W025 (S E 05. 18層)



W026～W029、W048 (S E 05. 20層)



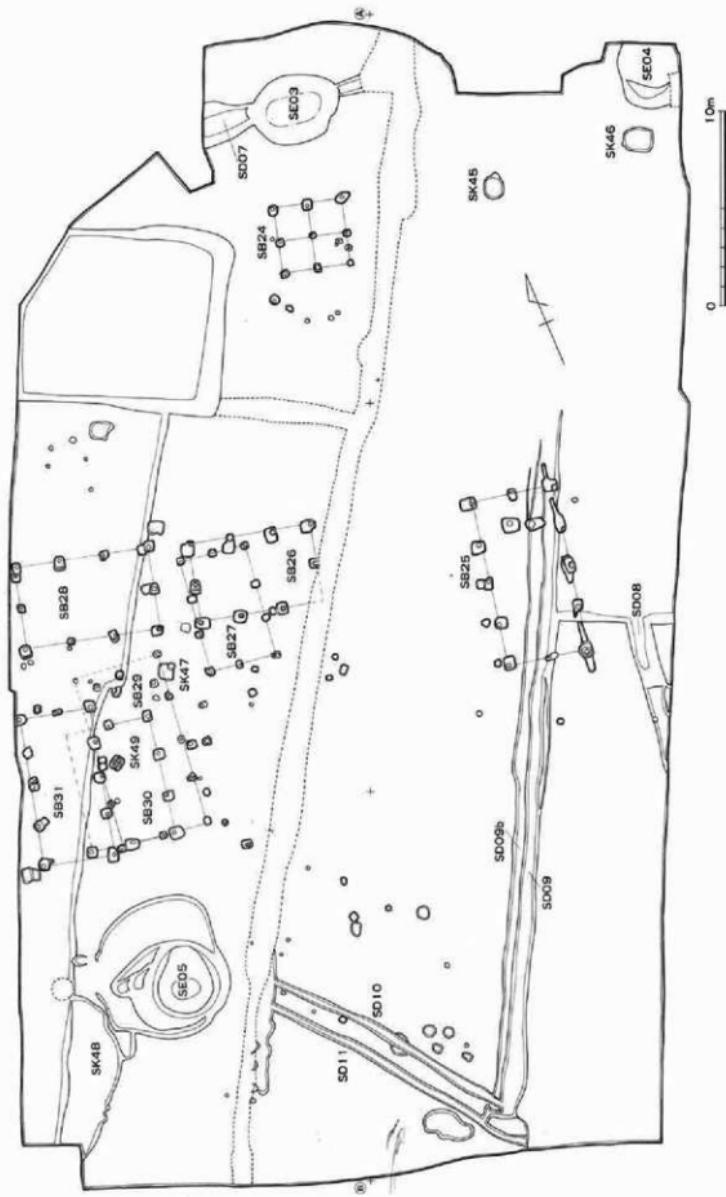
W006、W007、W015、W049～W053(S E05、20層)、W054(S E02、層不明)、W055(S E05、18層)

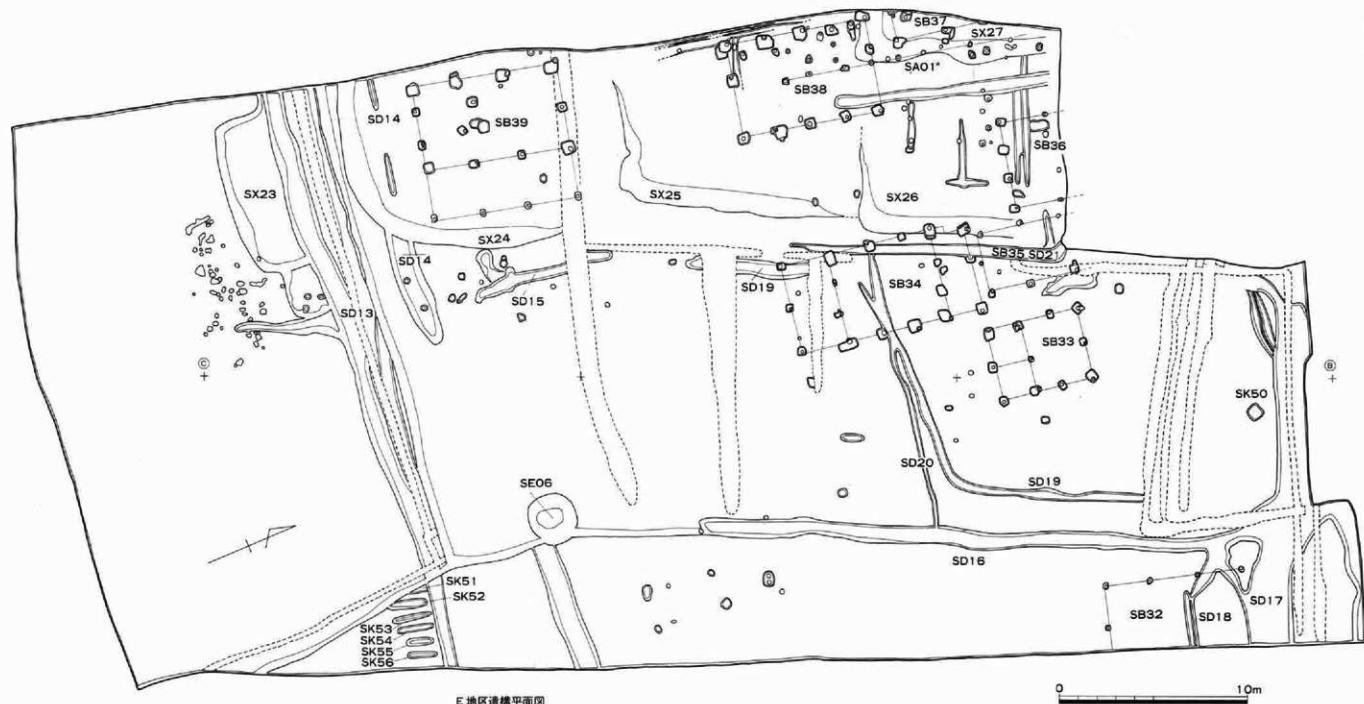


W056(S E03、23層)、W009、W057(S E05、20層)、W058(S E02、層不明)、W060(S E05、層不明)

図版八十 造構

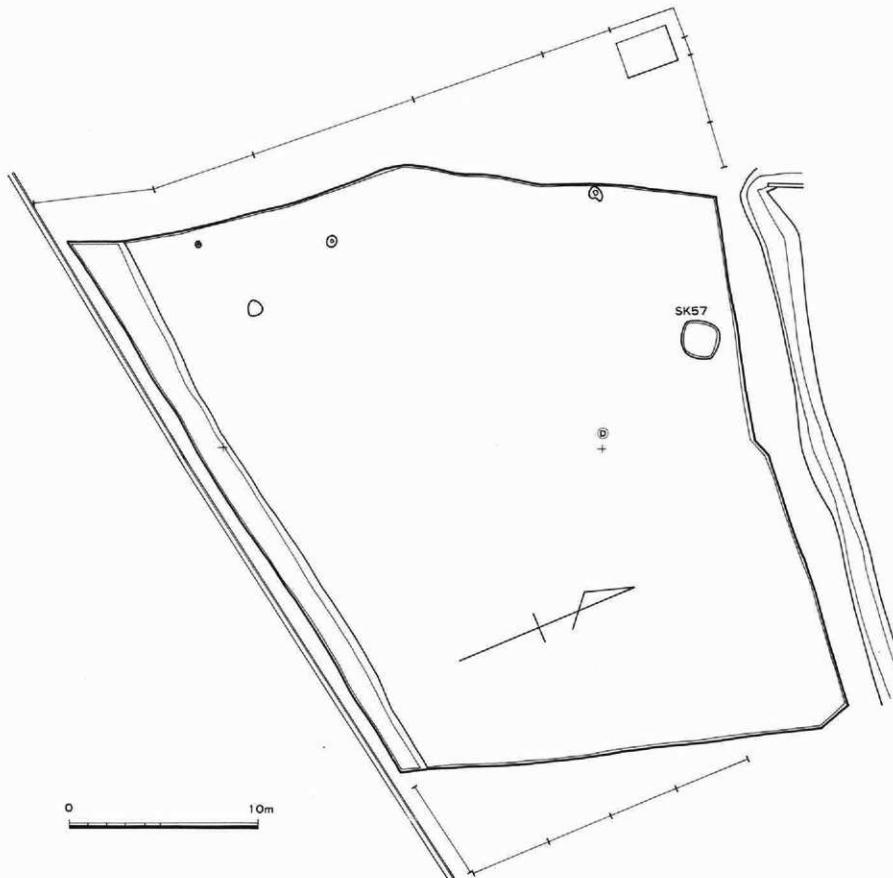
D地区遺構平面図



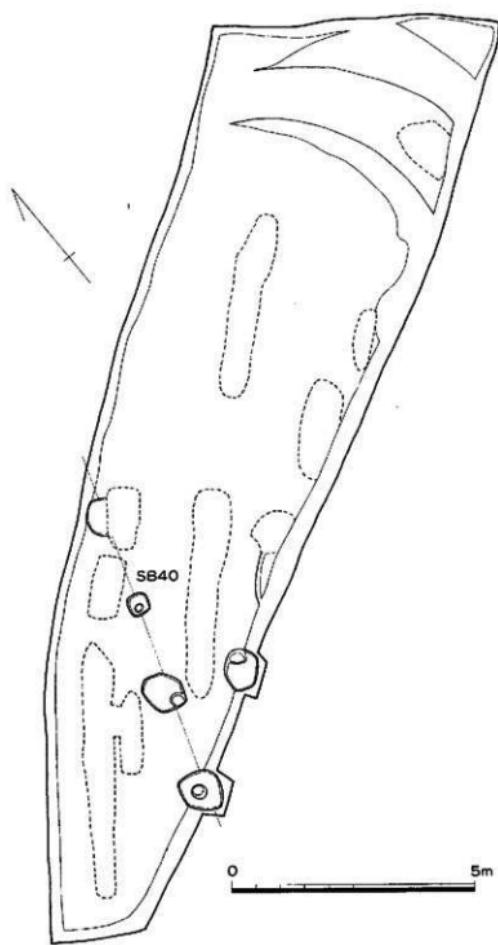


E地区造構平面図

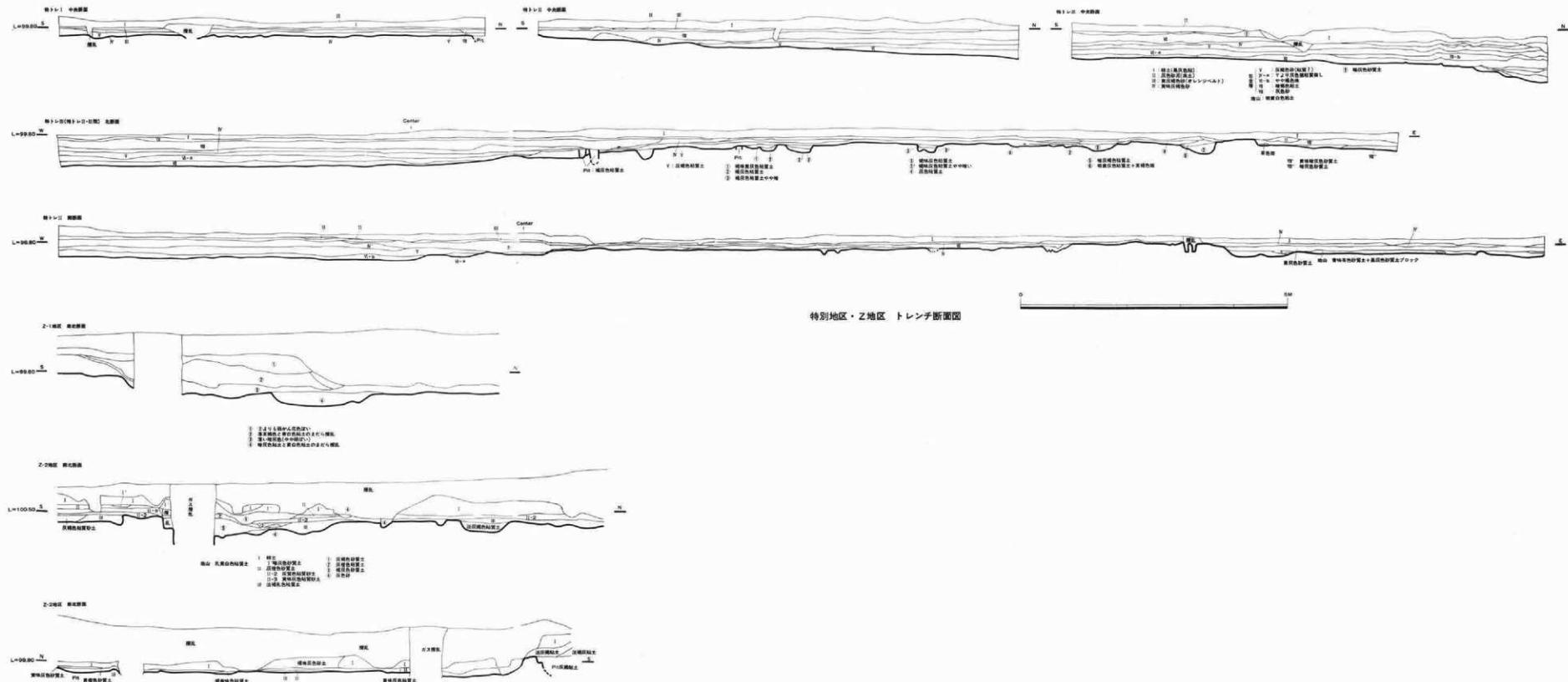
圖版八十二 遺構

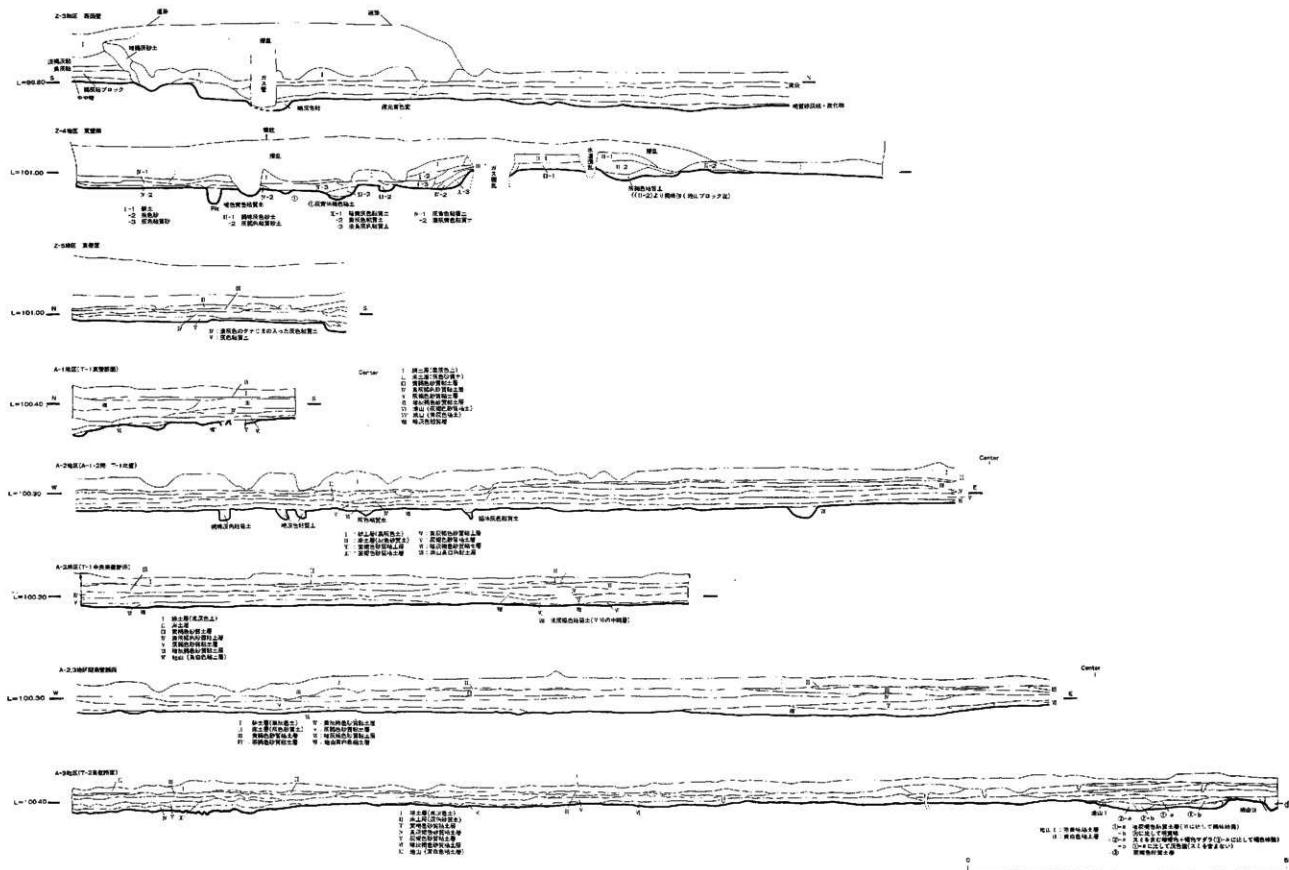


F地区遺構平面図

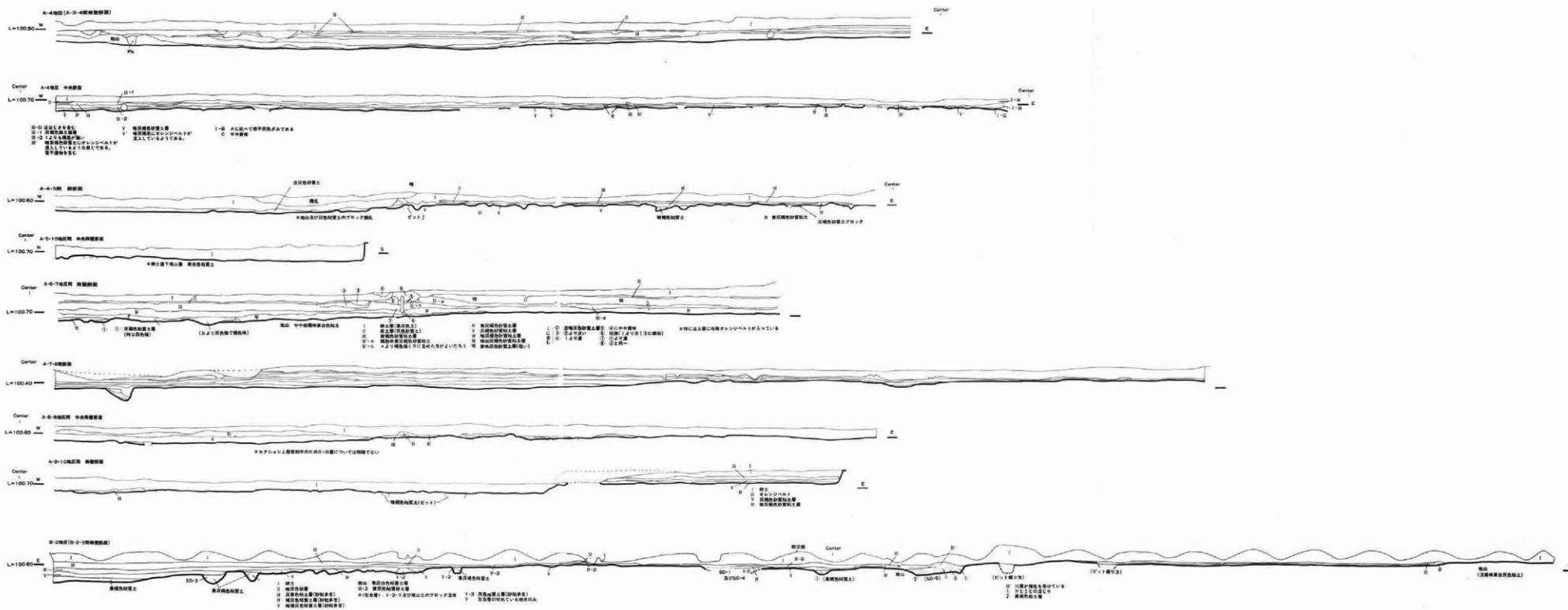


Z拡張部造構平面図

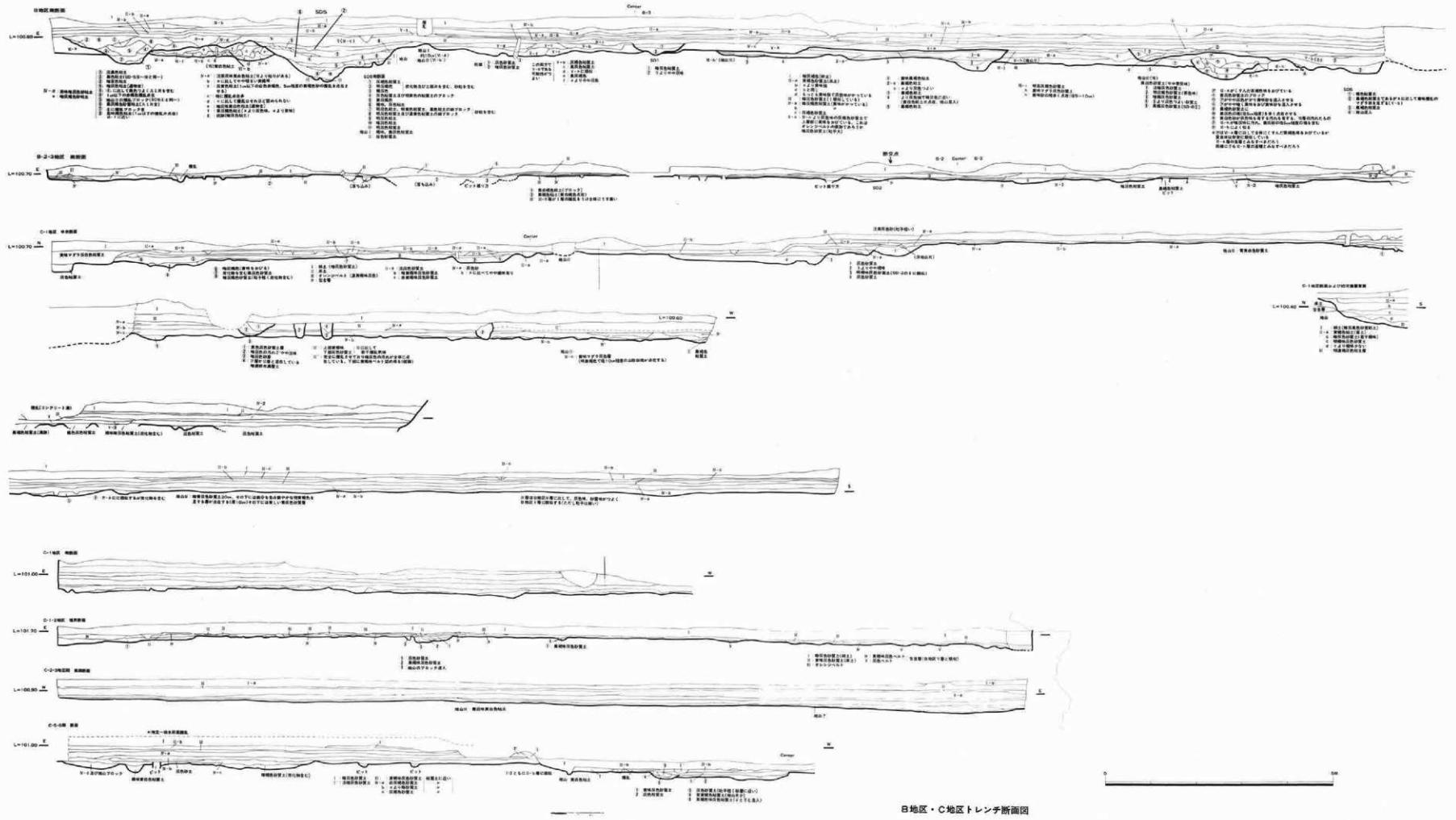




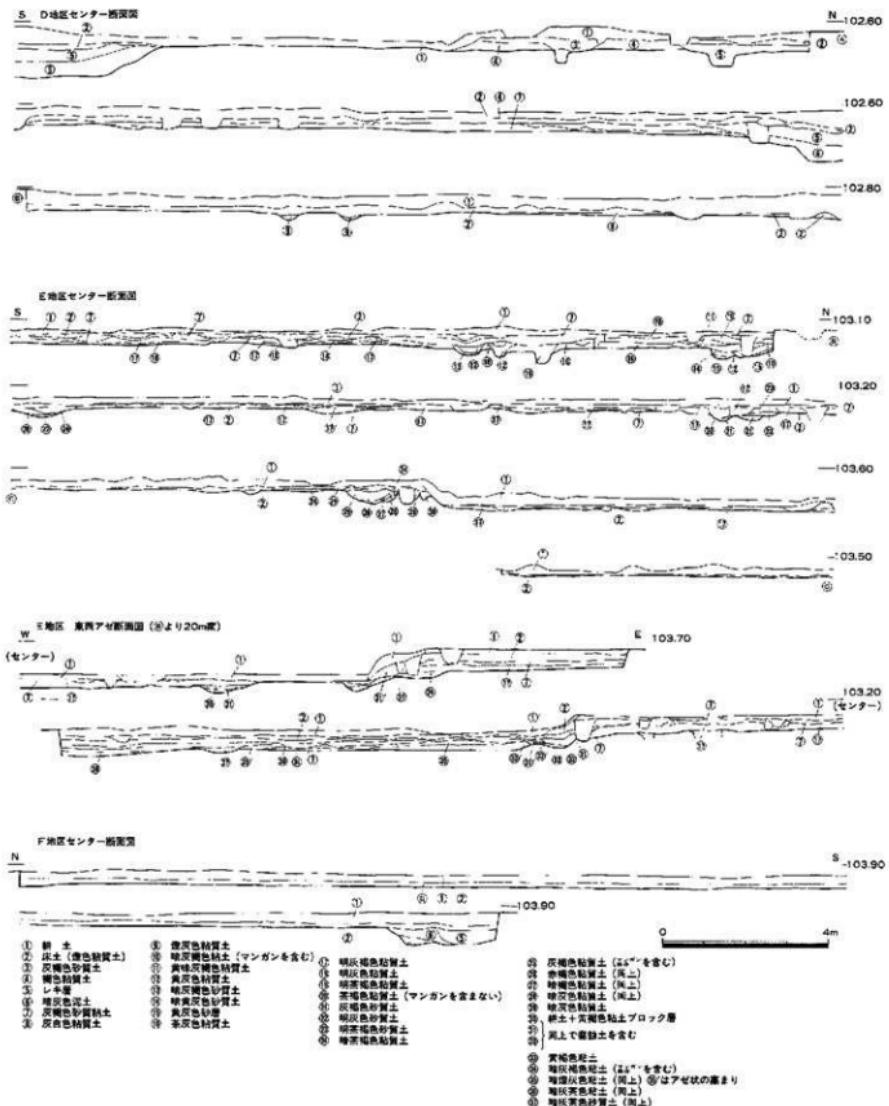
Z地区・A地区 トレンチ断面図



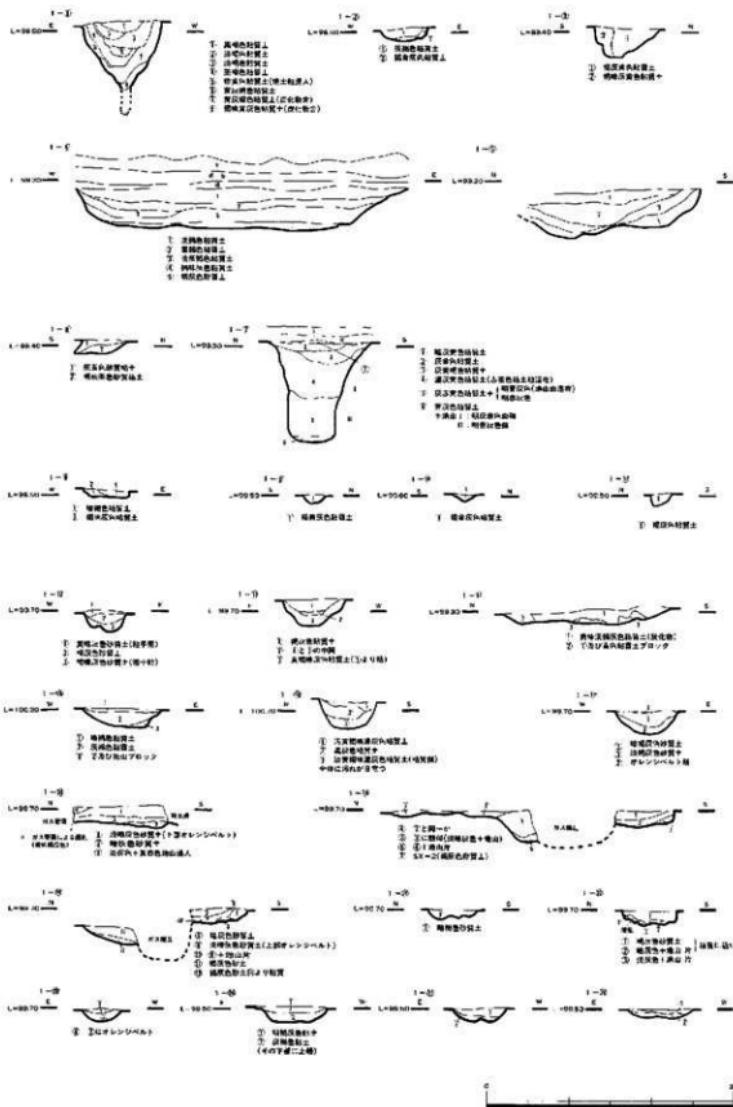
A地区・B地区トレンチ断面図



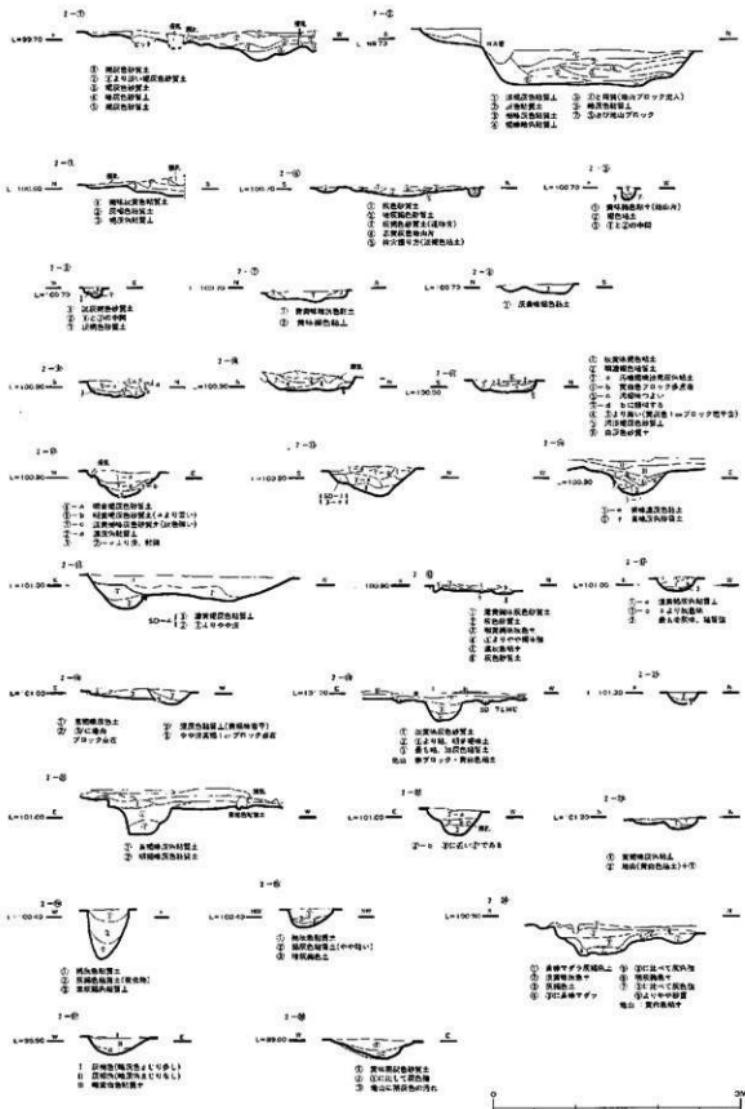
B地区・C地区トレンチ断面図



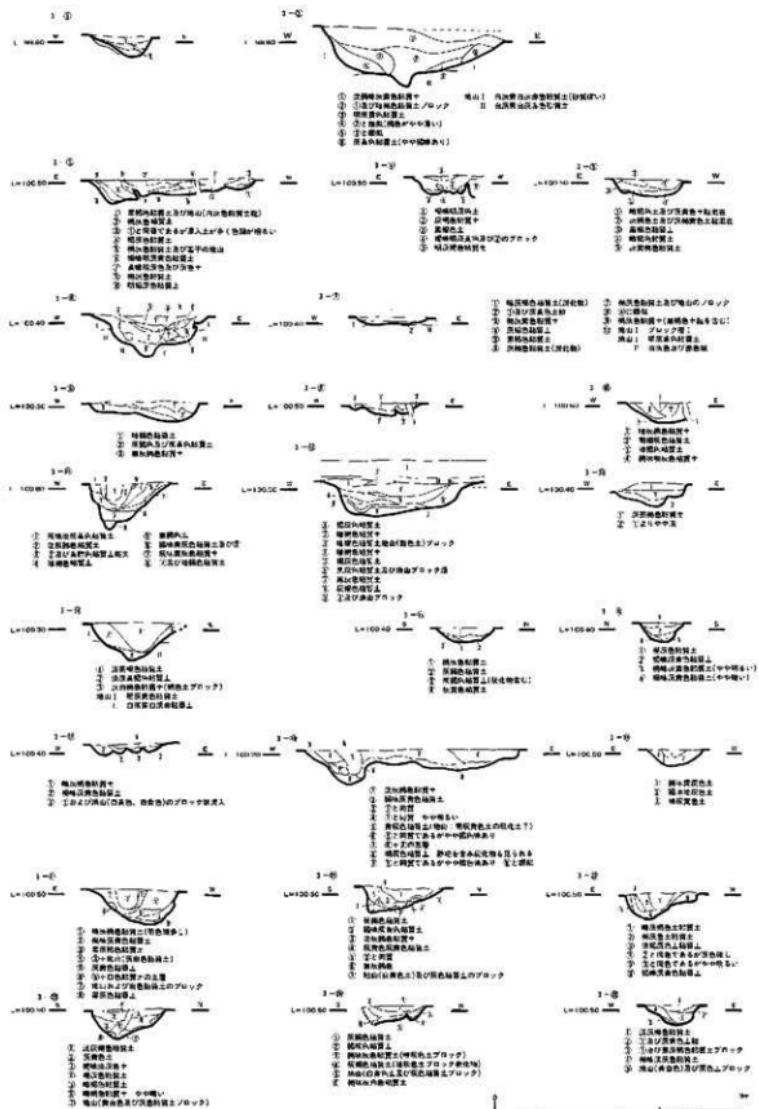
D～F 地区トレンチ断面図



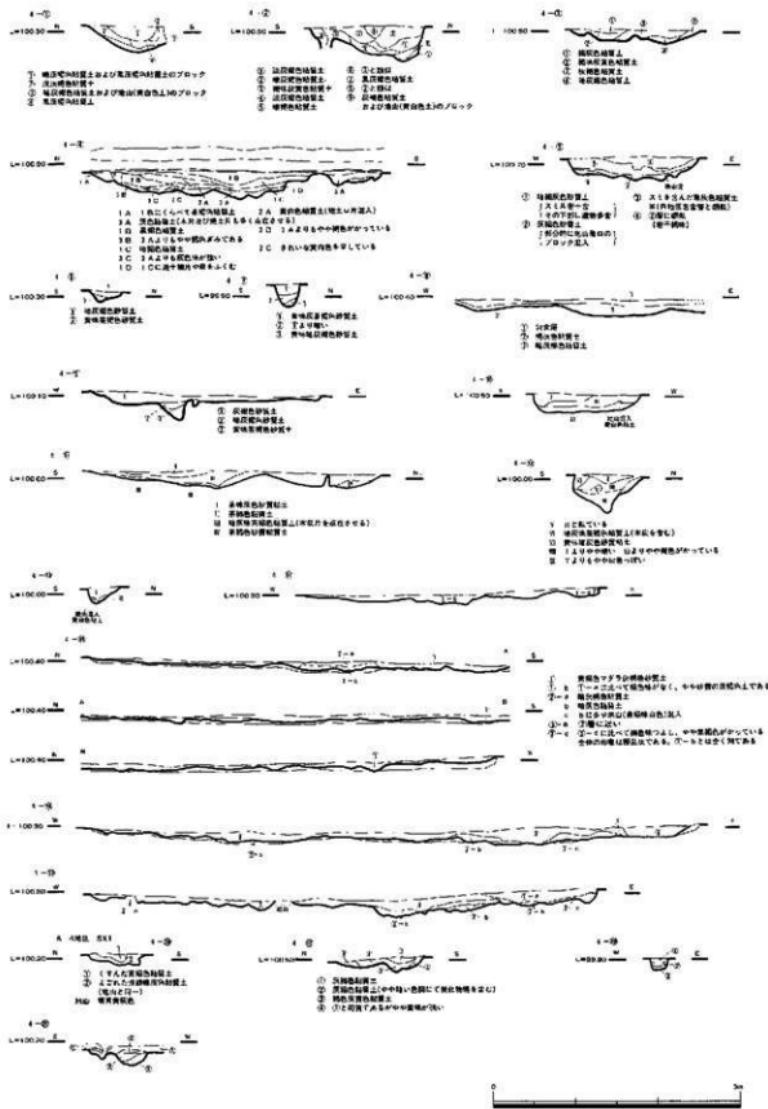
特別地区・Z地区遺構断面図



Z 地区・A 地区造構断面図

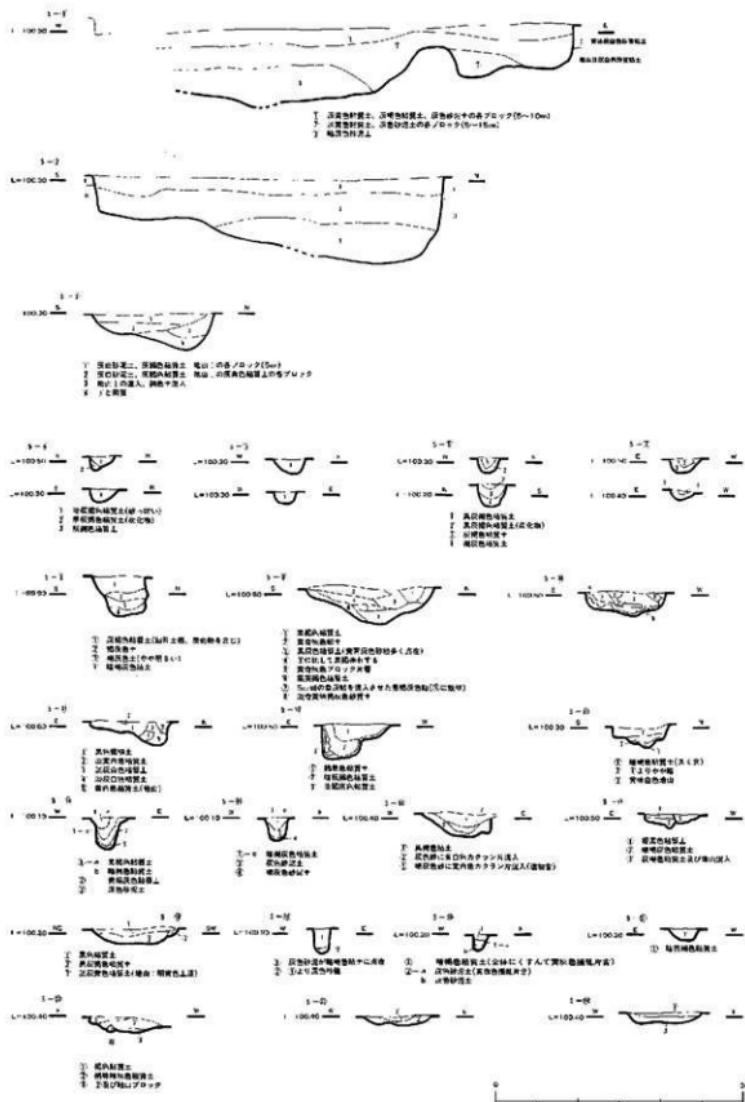


A 地区透播断面图(1)

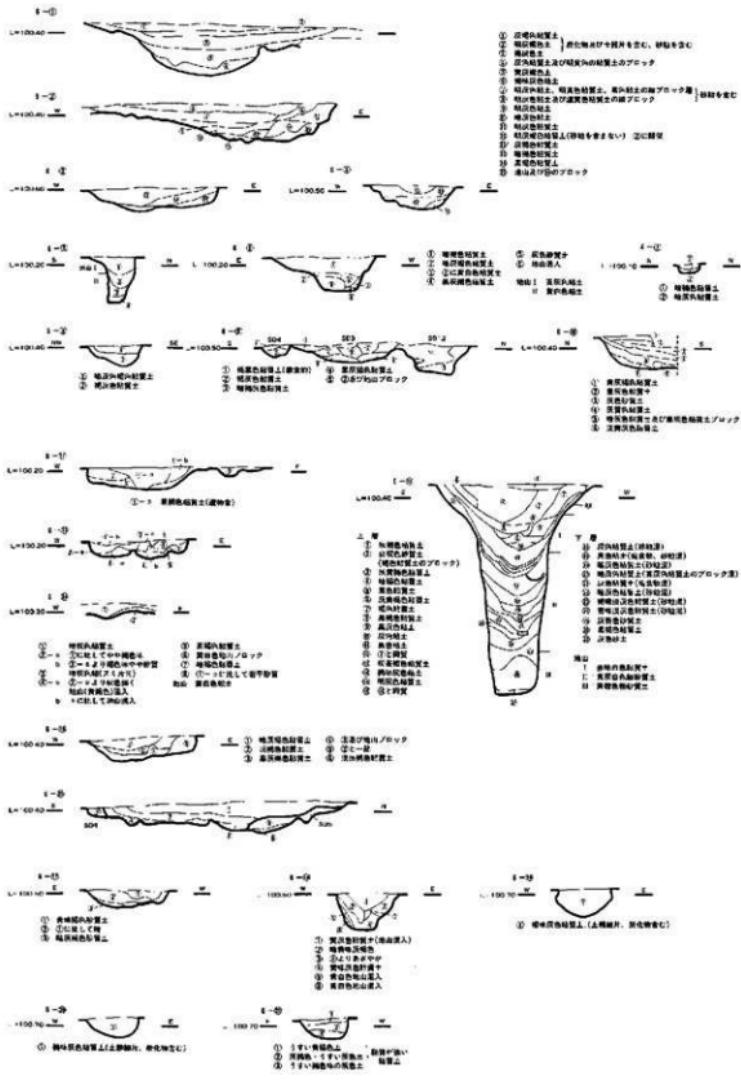


A 地区造構断面図(2)

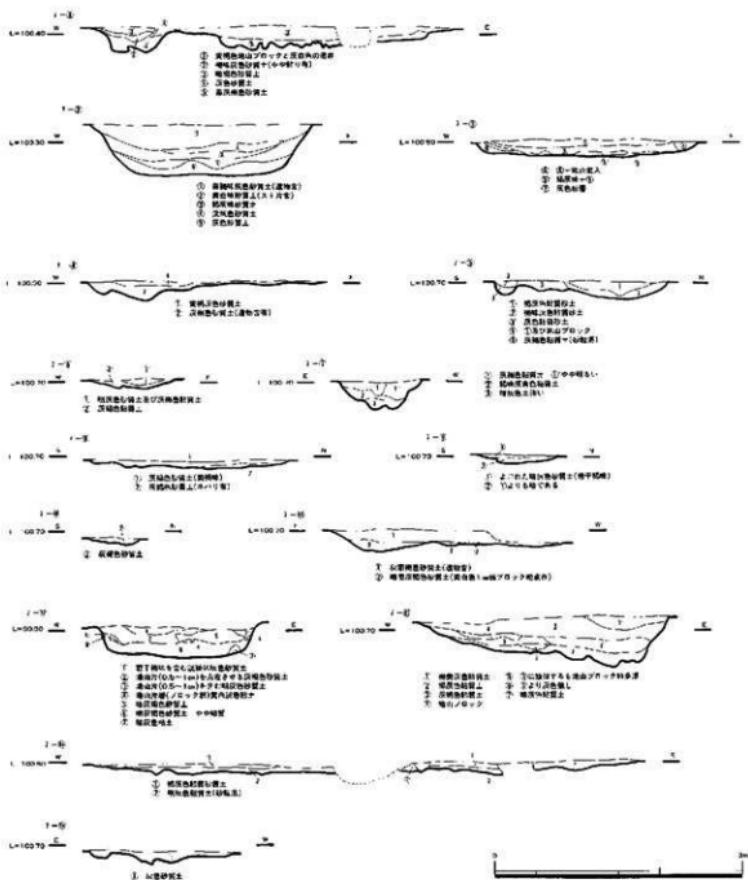
図版九十三 遺構



A地区・B地区遺構断面図

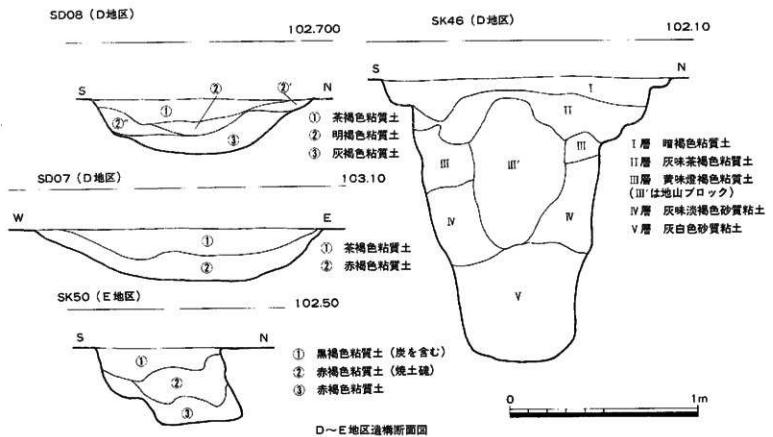
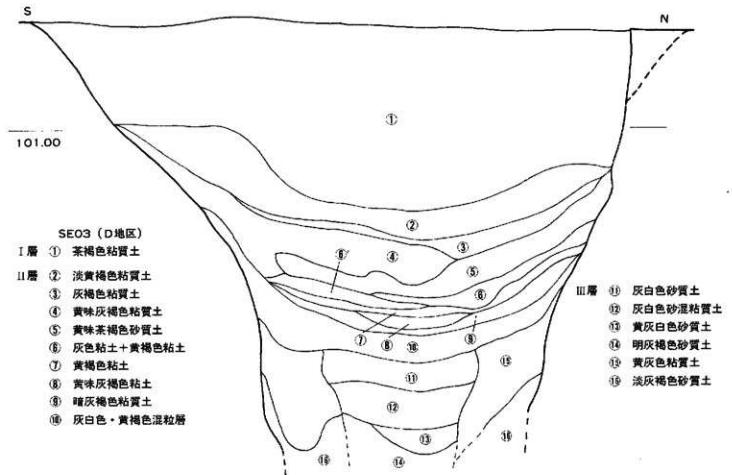


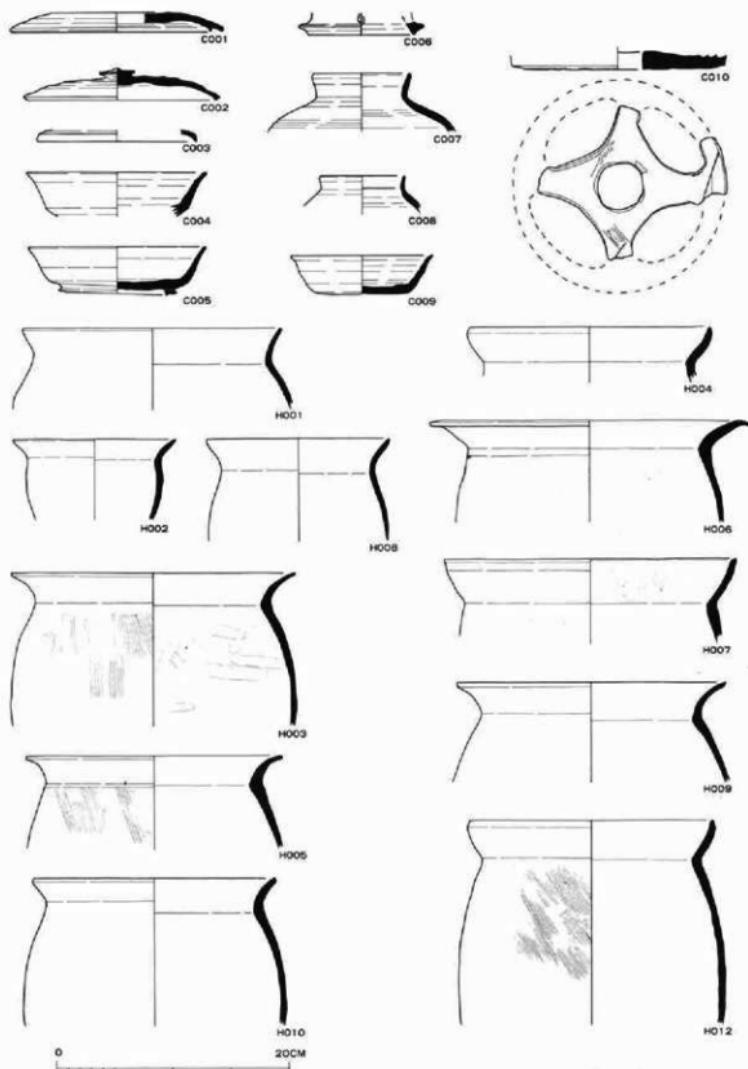
B地区・C地区造構断面図



C地区遺物断面図

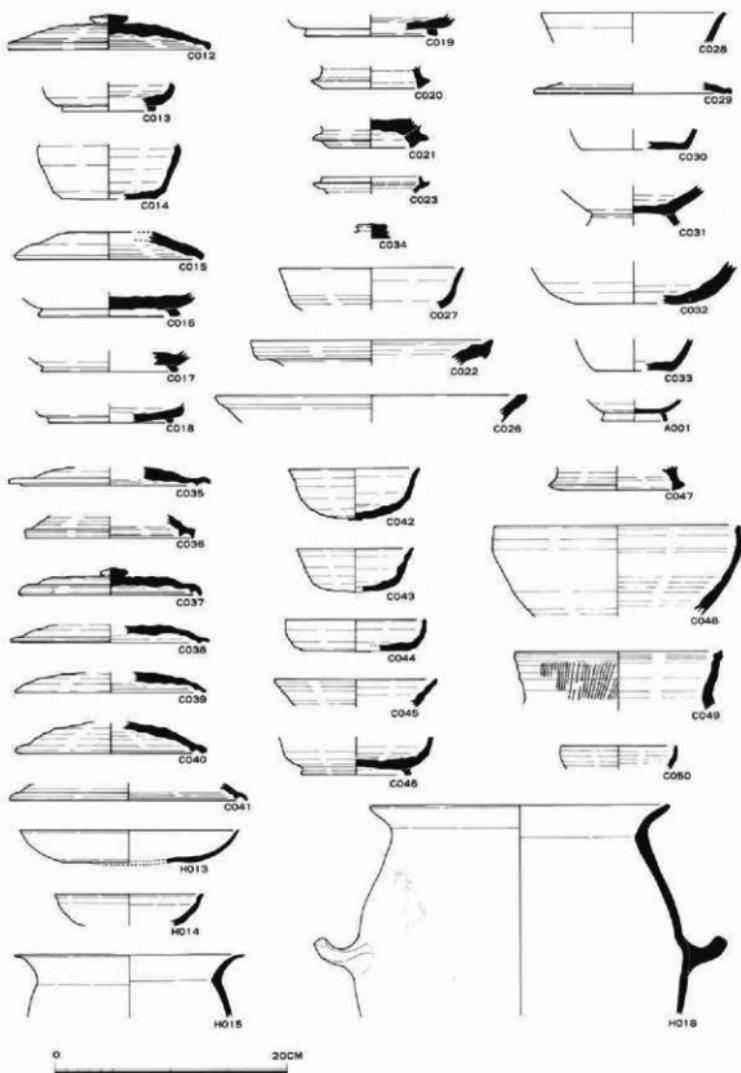
図版九十六 造構



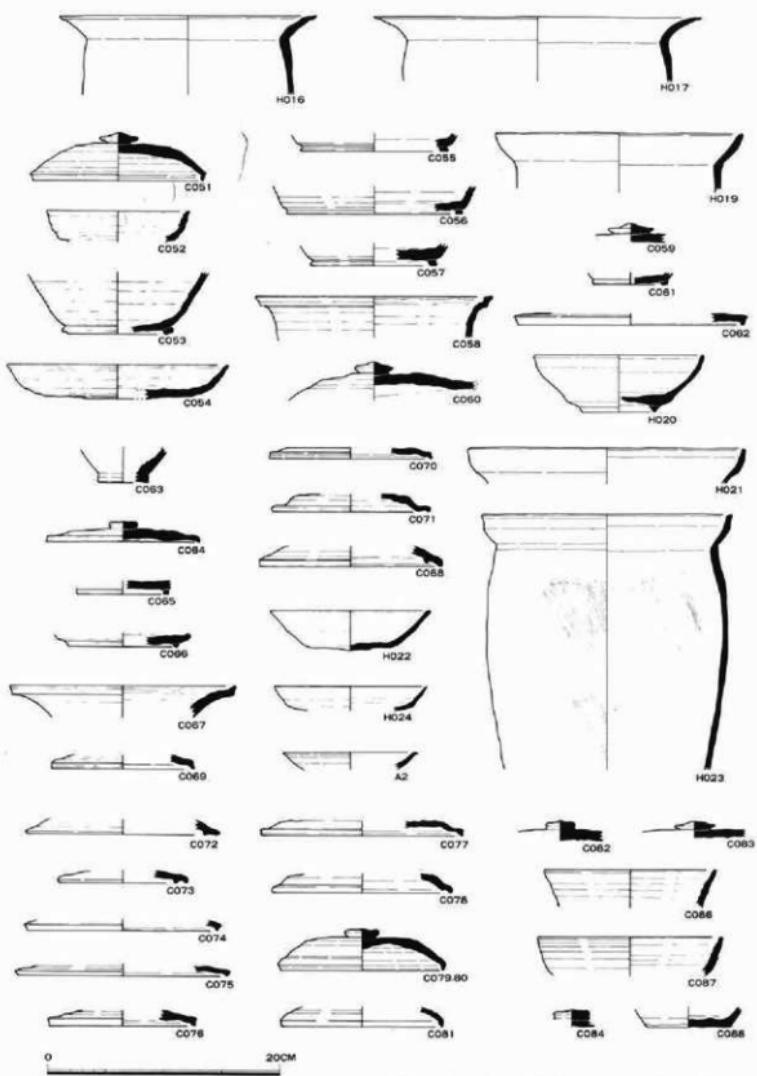


C001~C004(SK07)  
C005~C010(SK08)  
H001~H010·H012(SK07·SK08)

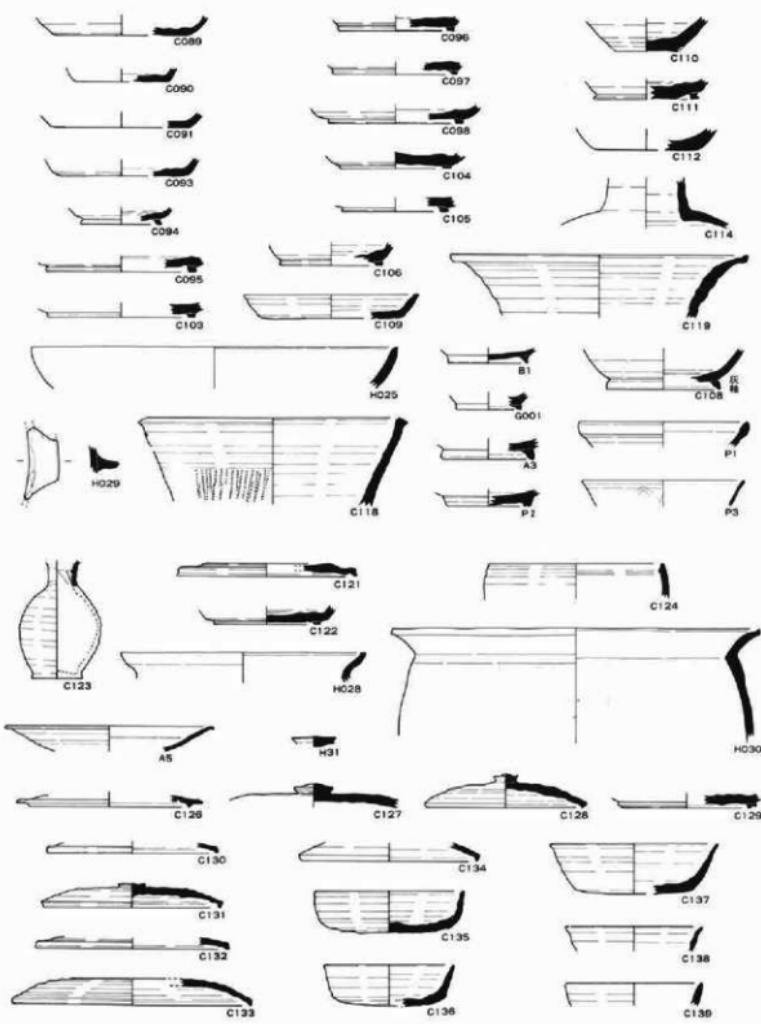
図版九十八 出土遺物実測図



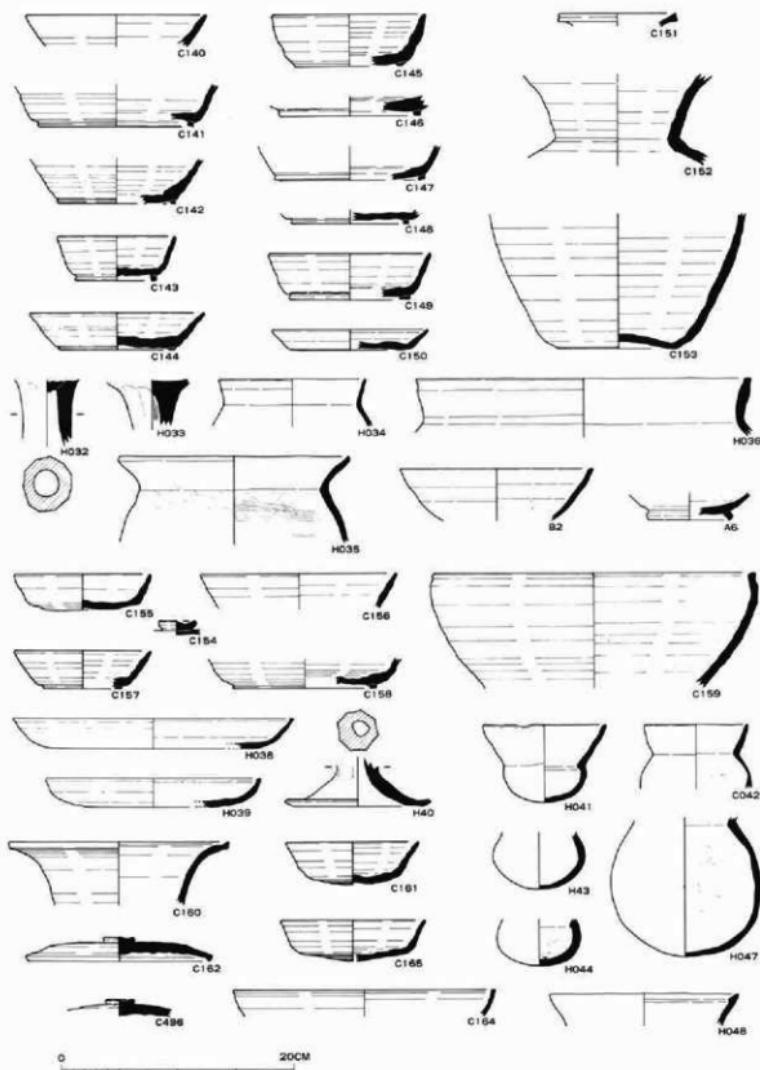
CO12～CO33・A001(A地区包含層)  
CO35～CO50・H013～H018(SK10)



H016-H017(SK10)・C051～C055(SK14)  
 C056～C058(小満32)・H019(小満31)  
 C059・C060(SD02)・C061(SB14)  
 C062・H020(SB11)  
 C063～C071・H021～H023・A002(A地区柱穴内)  
 C072～C088(A地区包含層)

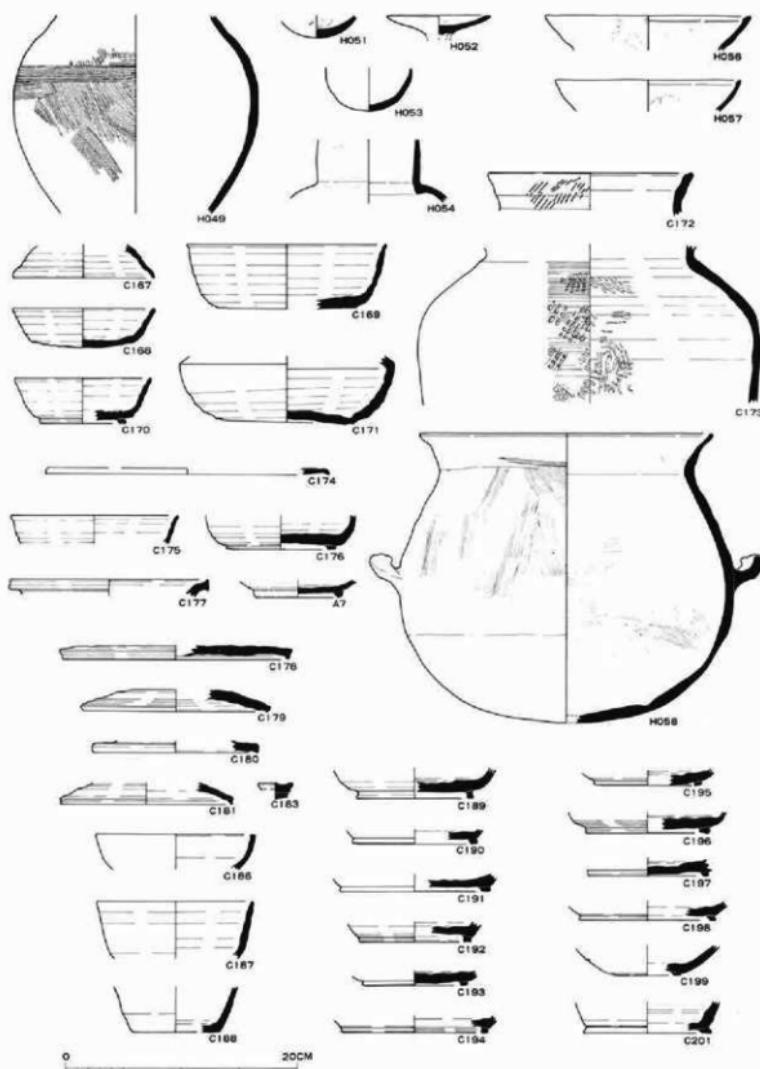


C089~C119・A003・G001・H025・H029・B001  
P001~P003(A地区包含層)  
C121~C123・H028(B地区包含層)  
C124・HO30(SD01)  
A005・C125・C126( B地区包含層)  
C127~C129(SD03)・C130~C139(SD01)

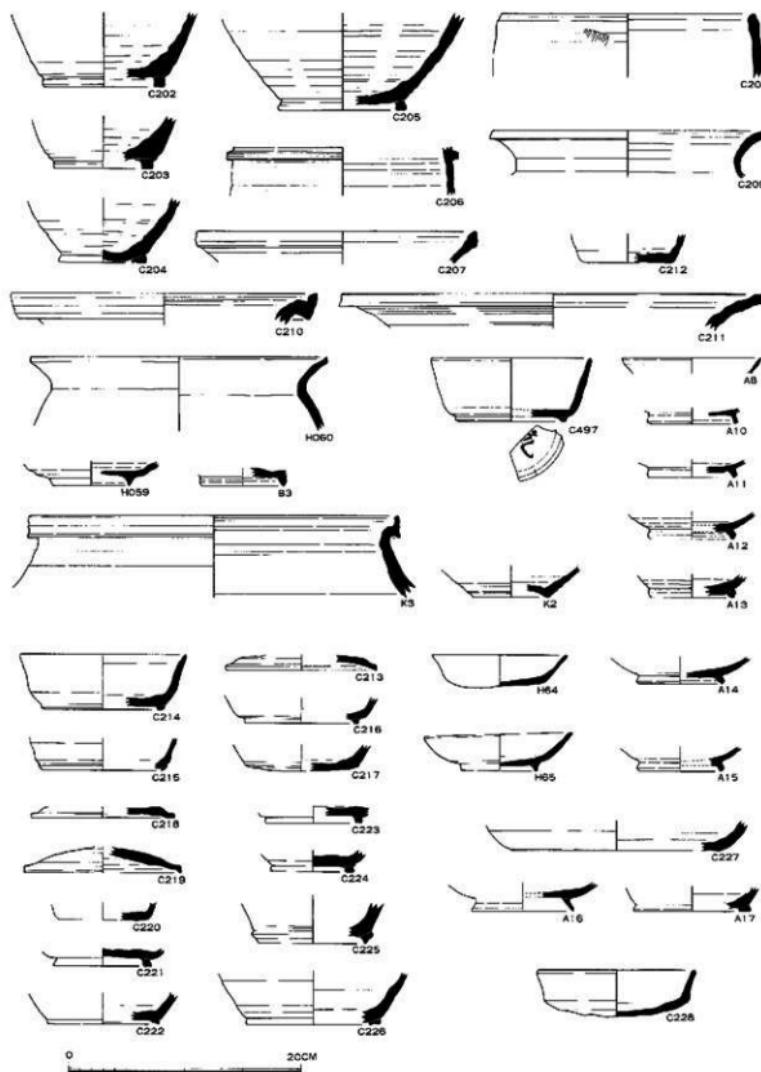


C140～C153・A006・HO32～HO36・B002(SD01)  
C154～C159・HO38～HO40(SX10)  
C160～C162・C164・C165(B地区包含層)  
HO41～HO48(SX5B)

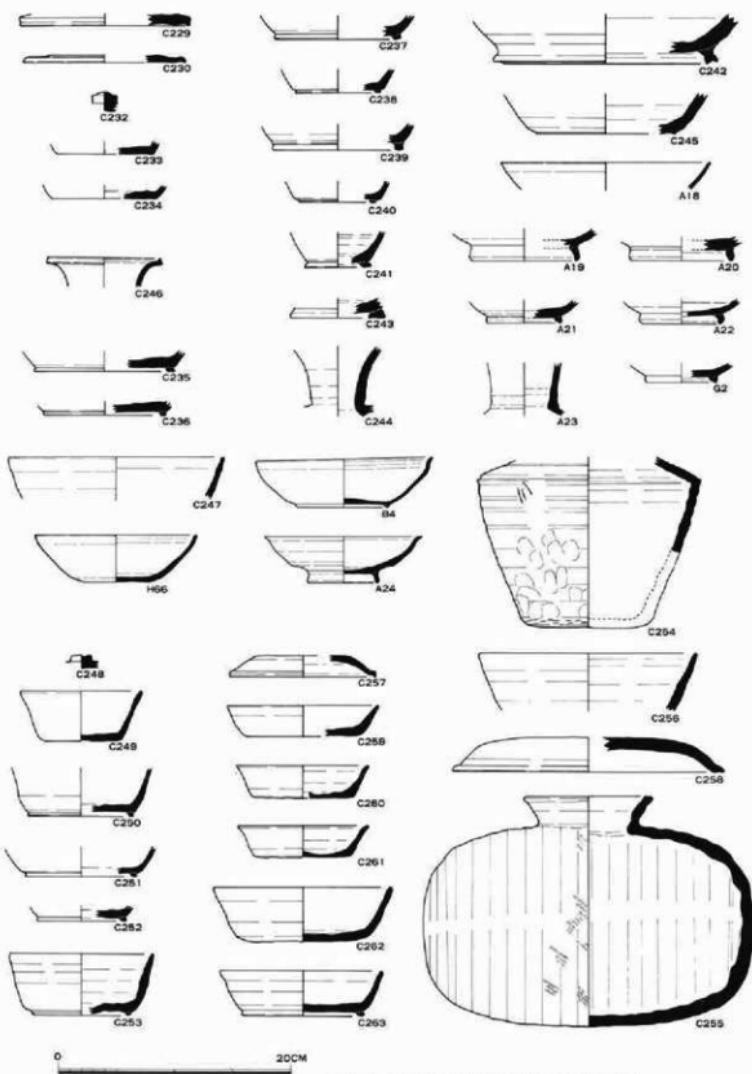
図版一〇二 出土遺物実測図



H049(SX5B)-H053(SX5.4)  
 H051-H052(SK29)-H056-H057(SX4)  
 C167-C173-H058(SE01)  
 C174(SB18)-C175~C177-A007(B地区柱穴内)  
 C178~C201(B地区包含層)

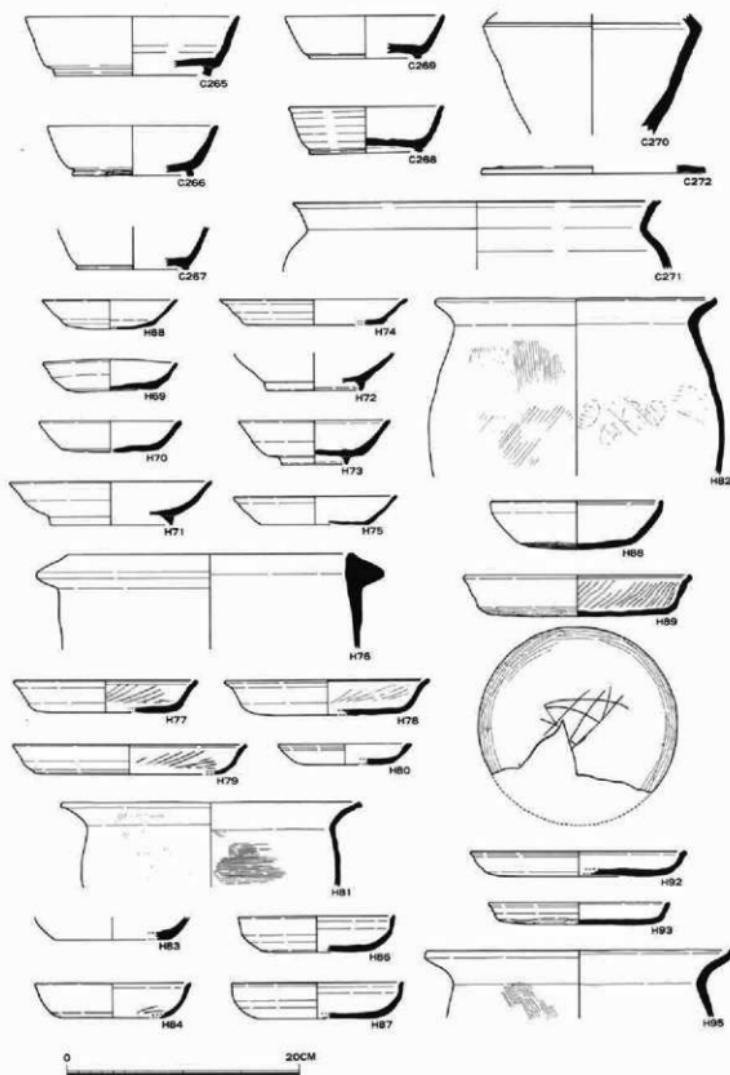


C202~C212・A008~A013・H059・H060・B003  
K002・K003( B地区包含層)  
C213~C227・H064・H065・A014~A017( C地区包含層)  
C228(SX10)

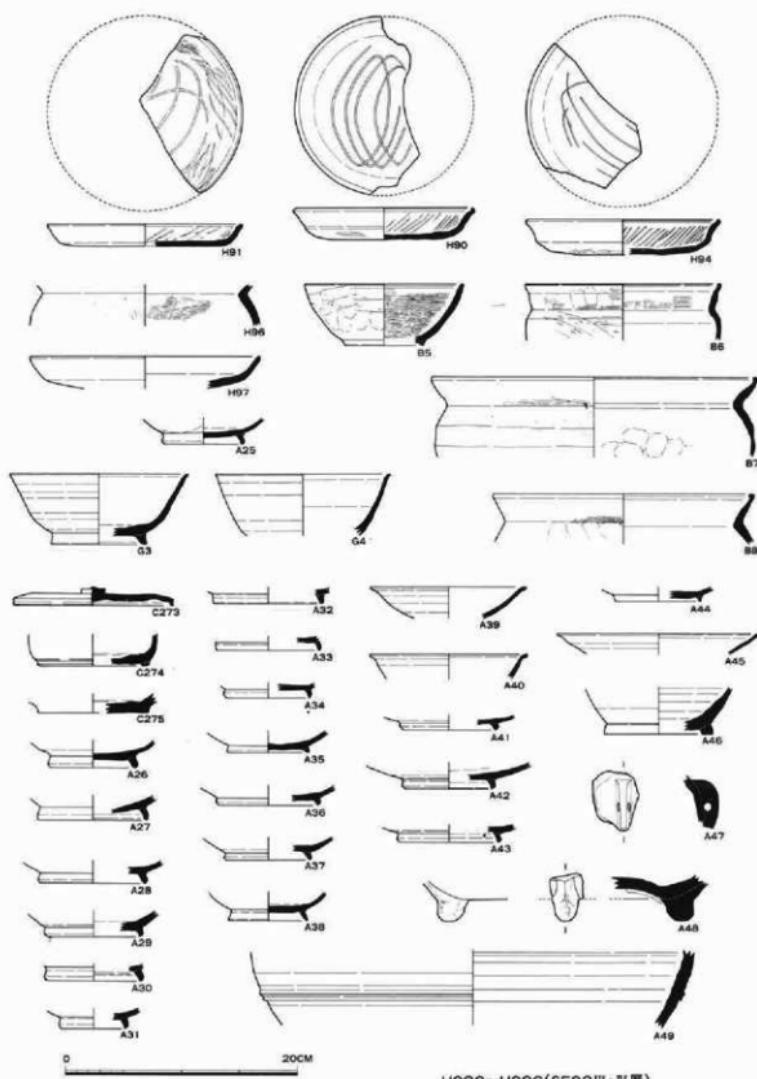


C229~C234(C地区包含層)・C246(SB44)  
 C247・H66・AO24・B004(C地区柱穴内)  
 C235~C242・GO02・AO18~AO23(SX08)  
 C248~C253(SE02Ⅰ層)・C254・C255・C262(SE02Ⅱ層)  
 C256~C261(SE02Ⅲ~Ⅳ層)  
 C263(SE02Ⅲ~Ⅳ層)

図版一〇五 出土遺物実測図

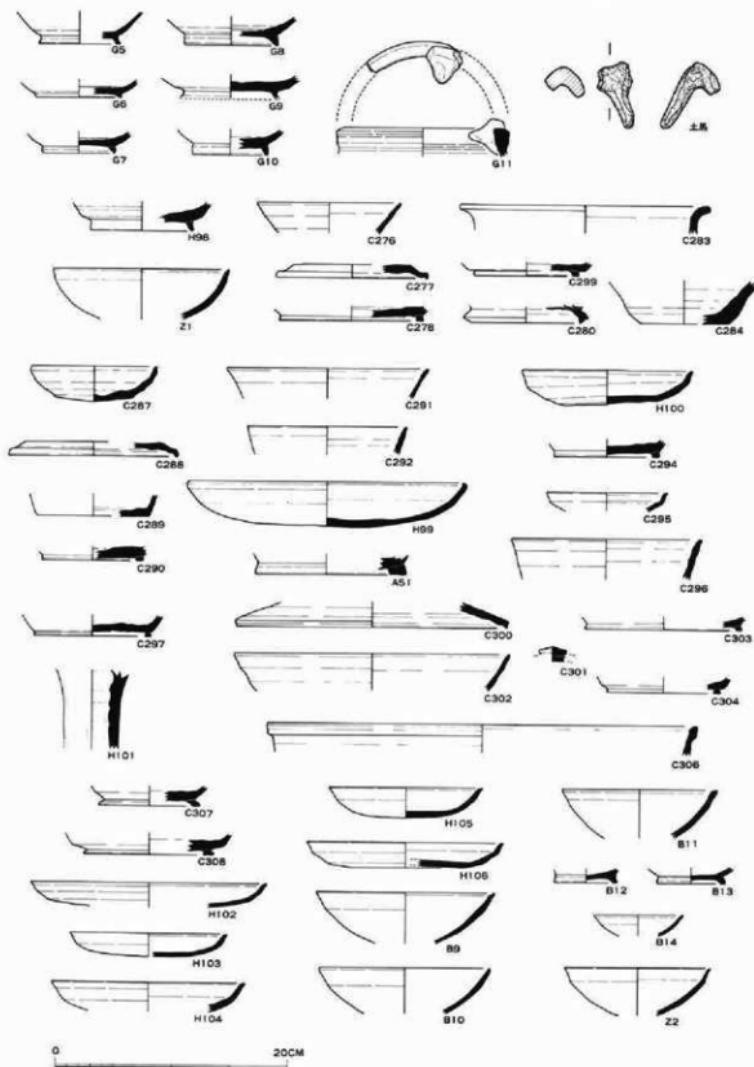


C265～C267・C269～C271(SEO2Ⅱ～Ⅲ層)・C268(SEO3Ⅲ・Ⅳ層)  
 H068～H076(SEO2Ⅰ層)  
 H092(SEO2Ⅱ層)  
 H077～H082(SEO2Ⅱ～Ⅲ層)  
 H83～H91・H93～H95(SEO2Ⅲ・Ⅳ層)  
 C272(SEO2Ⅳ層)

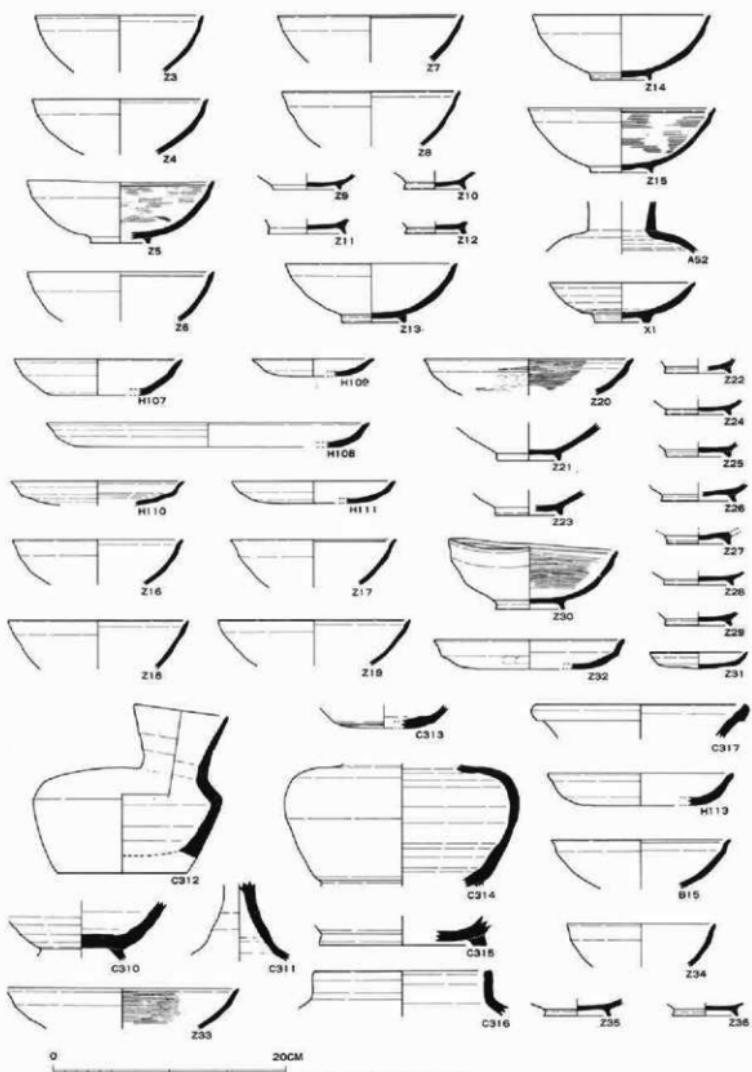


H090~H096(SE02 III・IV層)  
G003・G004・B005~B008(SE02 I層)  
H97(SE02 V層)  
C273~C275・A026~A049(C地区包含層)

図版一〇七 出土遺物実測図



G005~G011・U001(C地区包含層)・H098-Z001(特別地区柱穴内)  
 C276(小溝6)・C277~C280・C284(特別地区包含層)  
 C287・C289~C290・H099・H100(Z地区包含層)  
 C288(SK05)・C294(SB03)・C295・C296(Z地区柱穴内)  
 C300・C301(小溝15)・C306(小溝12)  
 C307・C308・A052(小溝9)  
 H102~H106・B009~B014・Z002(小溝10)・H101(小溝21)



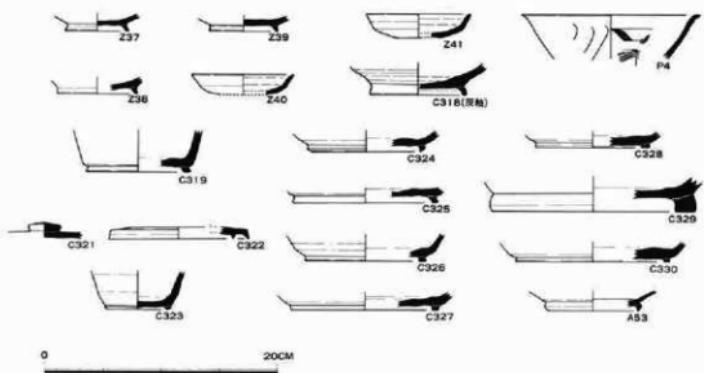
2003～Z015(小溝10)

H107～H111・2016～Z032(小溝8)

C310～C312・Z033(小溝29)

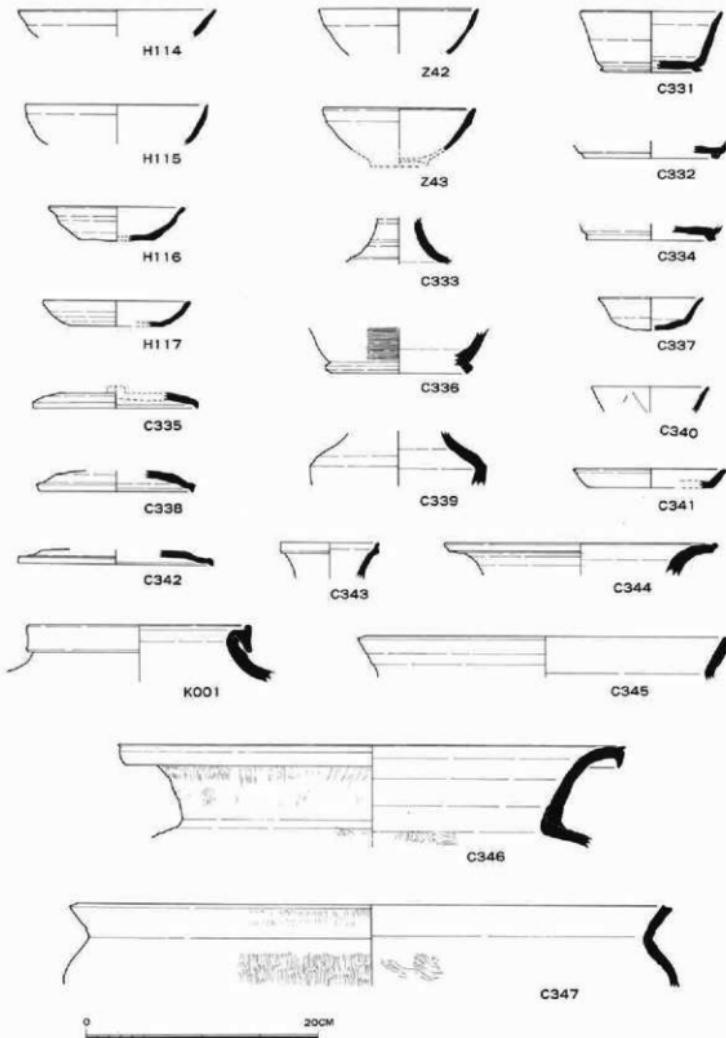
C313(小溝27)・C314～C317・H113・Z034～Z036(小溝28)

図版一〇九 出土遺物実測図



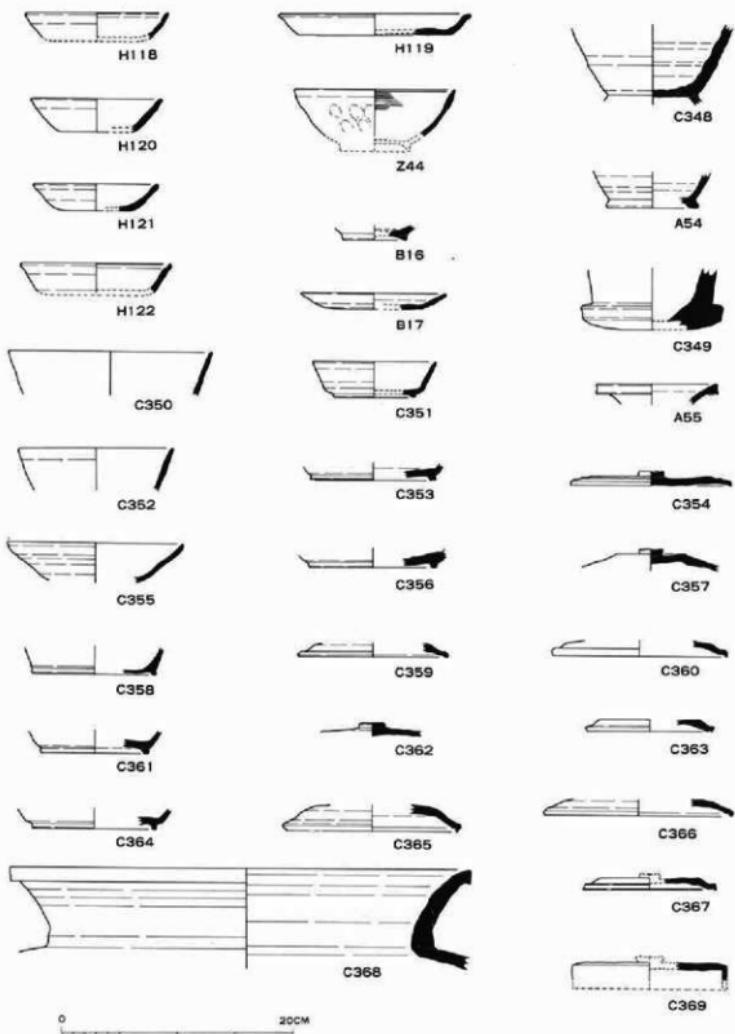
C318・C319・Z037～Z041・P004(小溝28)  
C321～C330・A053(Z地区包含層)

図版一〇 出土遺物実測図



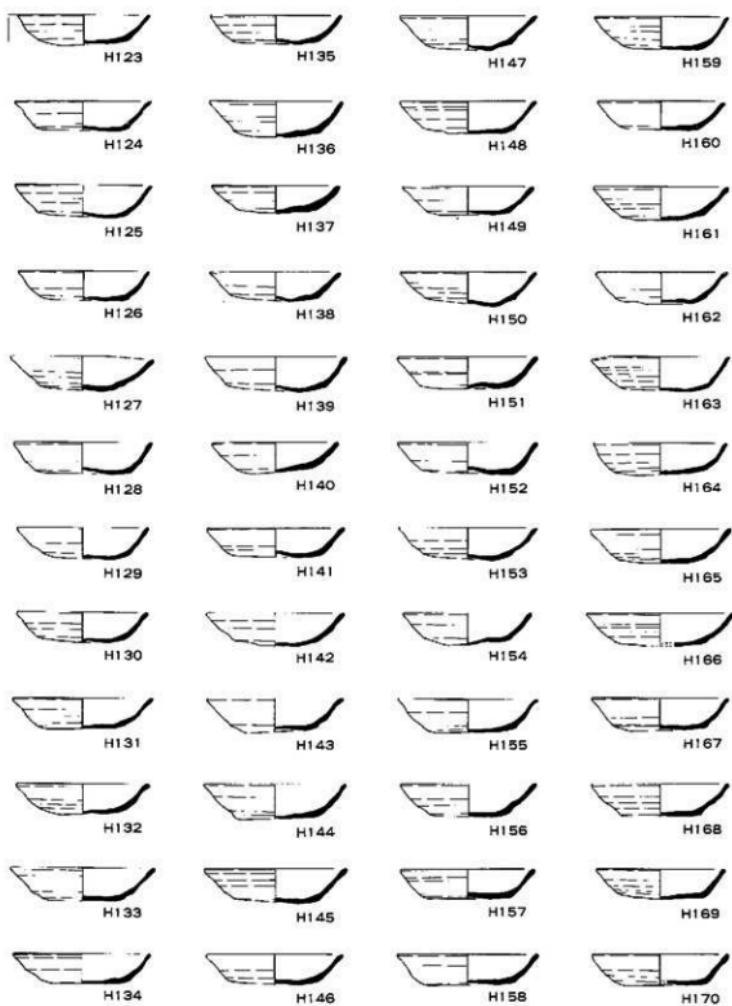
H114~H117・C331~C347・Z042・Z043  
K001(SE05 1~9層(1層))

図版一一一  
出土遺物実測図



H118~H122・A054・A055・B016・B017  
C350~C369・Z044(SE05 10層~16層〔II層〕)

図版一二 出土遺物実測図

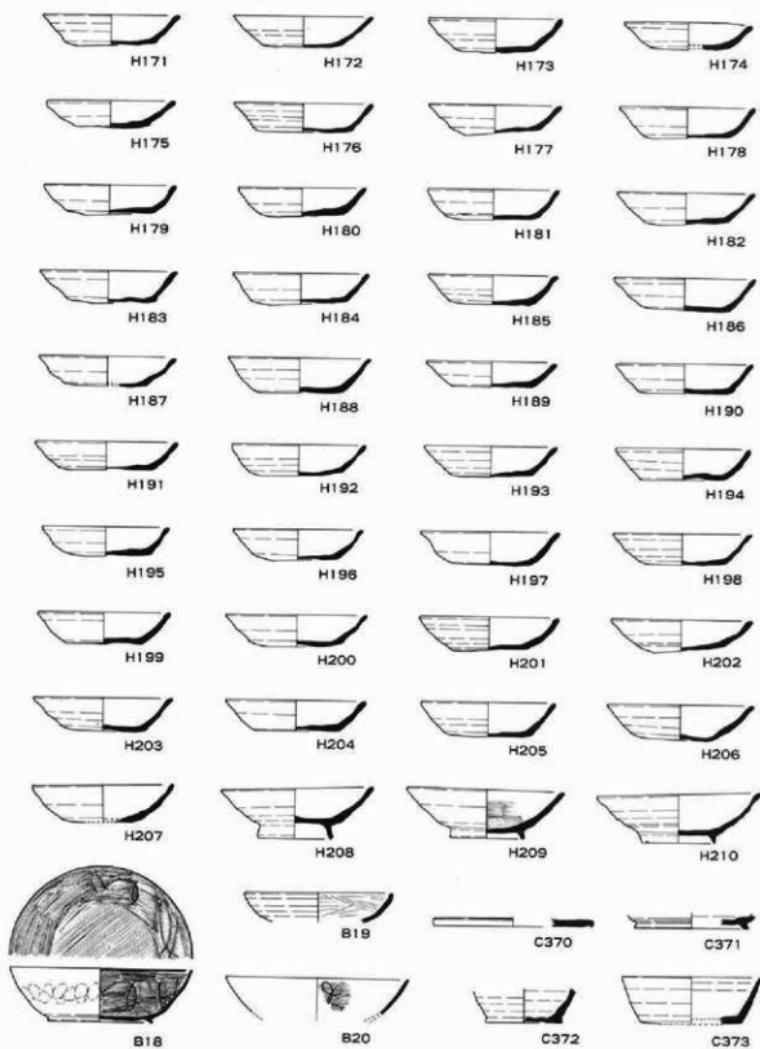


0 20CM

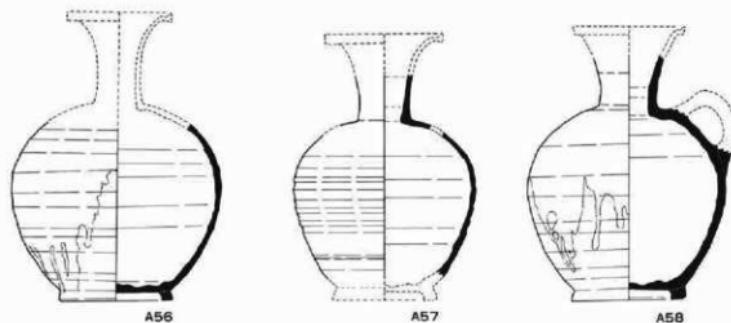
H123～H170(SE05 17層(III層最上層))

図版一  
三

出土遺物実測図

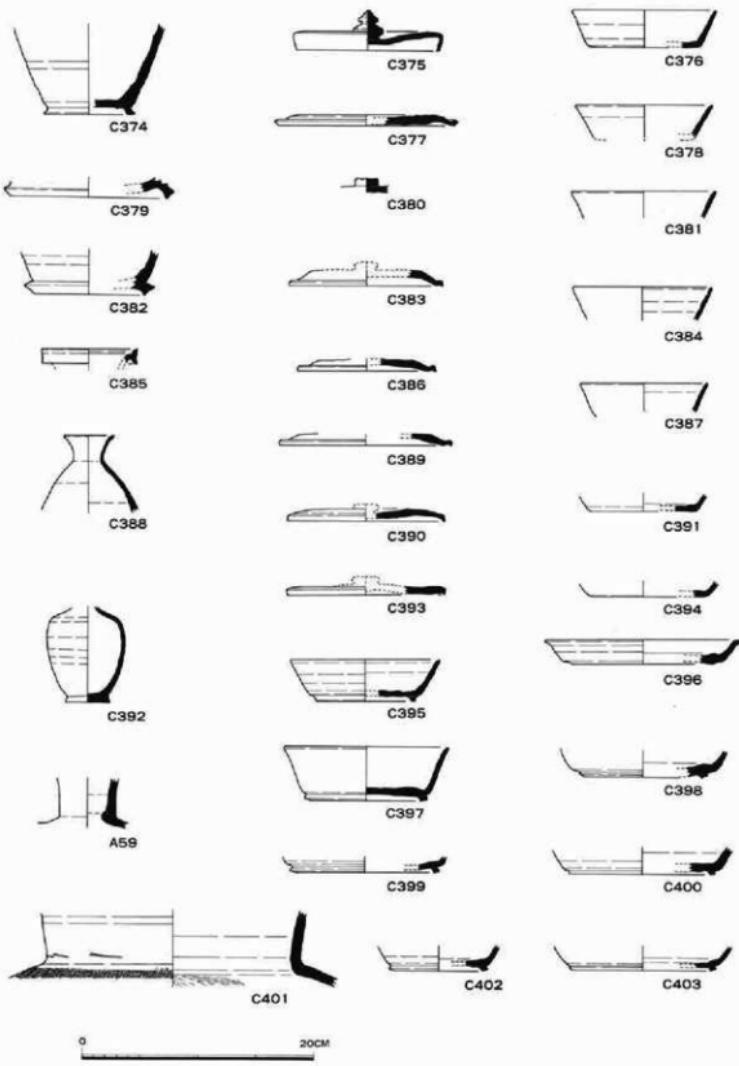


H171~H210・B018~B020・C370~C373  
(SEO5 17層(Ⅲ層最上層))

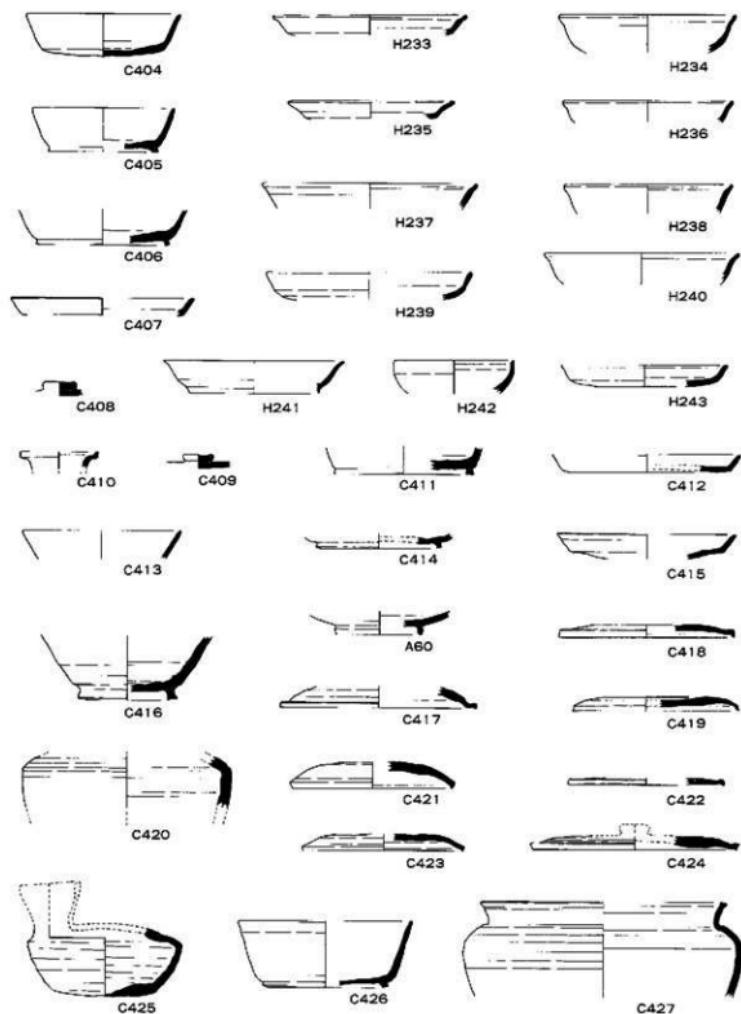


0      20cm

A57(17層〔Ⅲ層最上層〕)・A56・58(20b・c層〔Ⅲ層下層〕)  
 H211～214・218(18～20a層〔Ⅲ層中層〕)  
 H215～217・219～222(20b・c層〔Ⅲ層下層〕)  
 H223～232・B21～24(Ⅲ層)



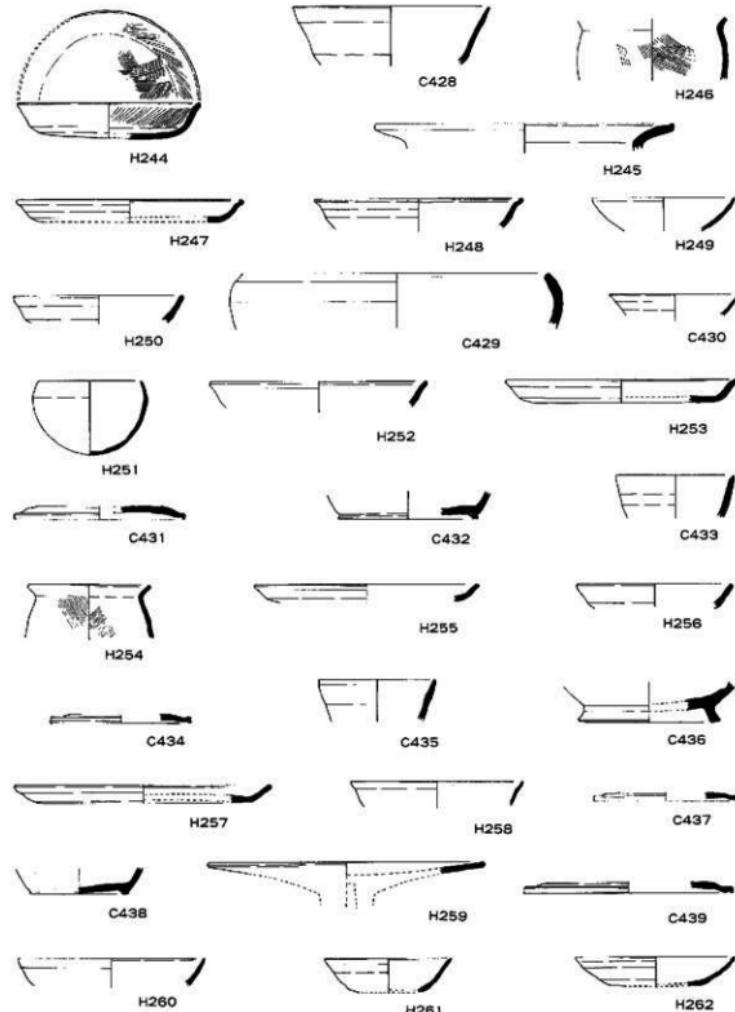
C374～C403・A059(SE05 18～20層(III層))



0 20CM

C425~C427(SD07)+C404~C406(SD08)  
H223~H243+C407~C424(SK48)

図版一七 出土遺物実測図

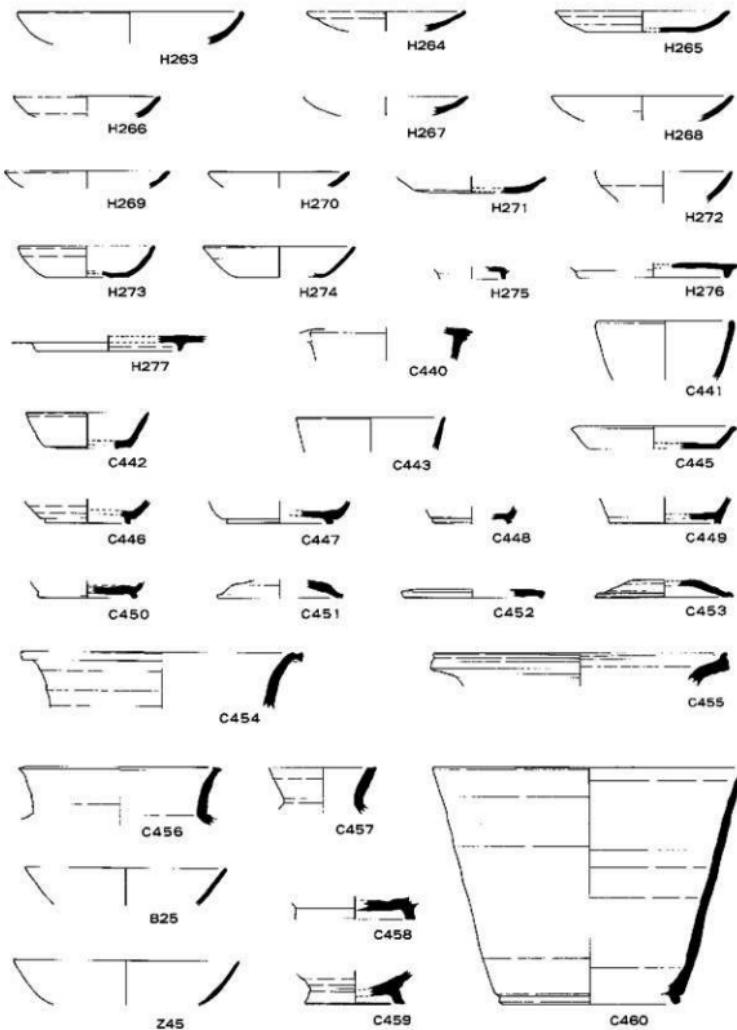


0

20CM

H251(SB25(P-5))-H252(SB25(P-7))  
 H258-C432-C436(SB25(P-8))-C431(SB25(P-9))-  
 C428(SB26(P-4))-H245-H247~H249(SB26(P-8))-  
 H246(SB26(P-9))-C429(SB27(P-2))-  
 C430(SB27(P-3))-H250(SB27(P-8))-H244(SB28(P-10))-  
 H254~H256(SP2)-H257-C433(SP6)-H258-  
 H259-C437~C439(SP7)-H260~H261(SP9)-  
 H262(SP12)

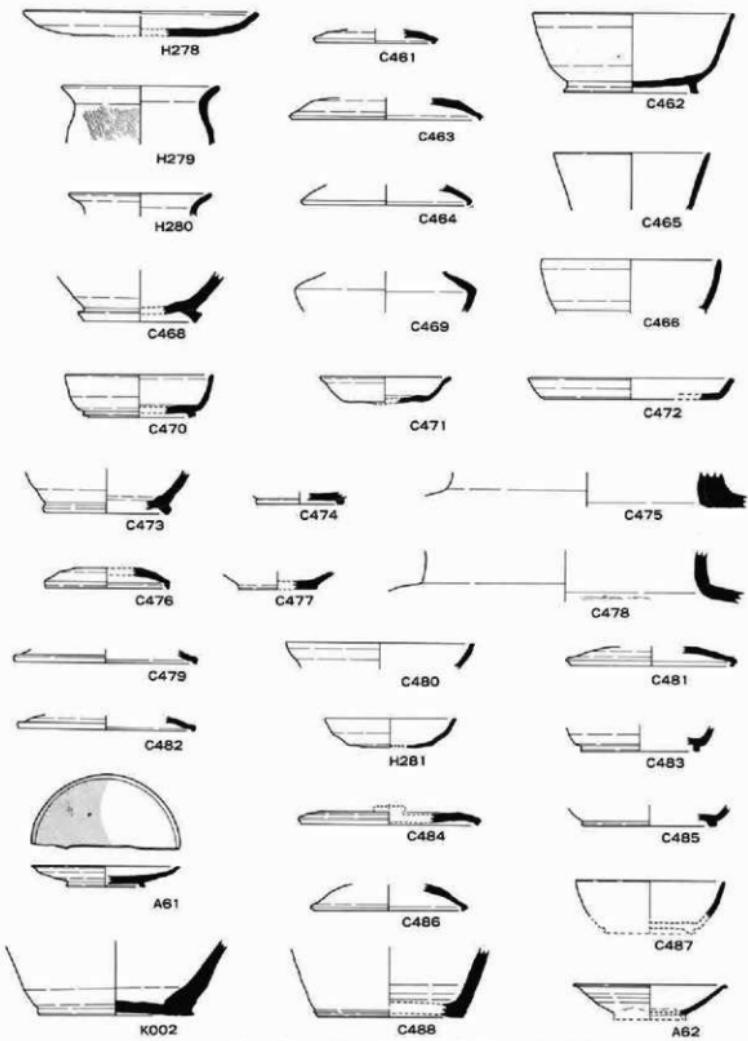
図版一八  
出土遺物実測図



0 20CM

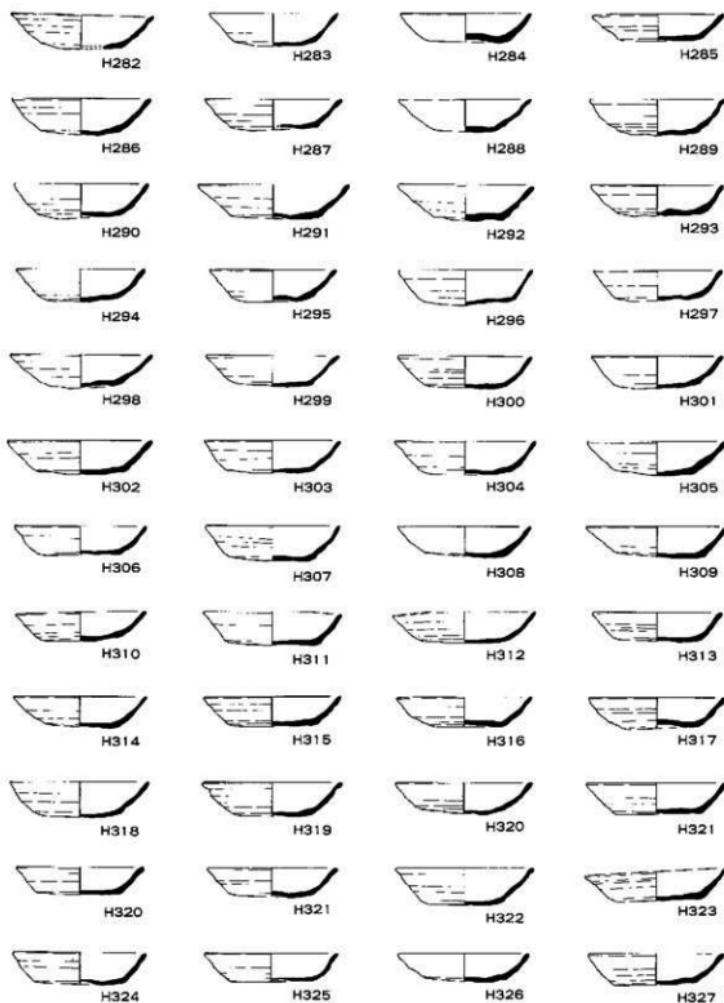
H263～H277・C440～C459・B025・Z045  
(D地区包含層(水田址))・C460(SX01)

図版一九 出土遺物実測図



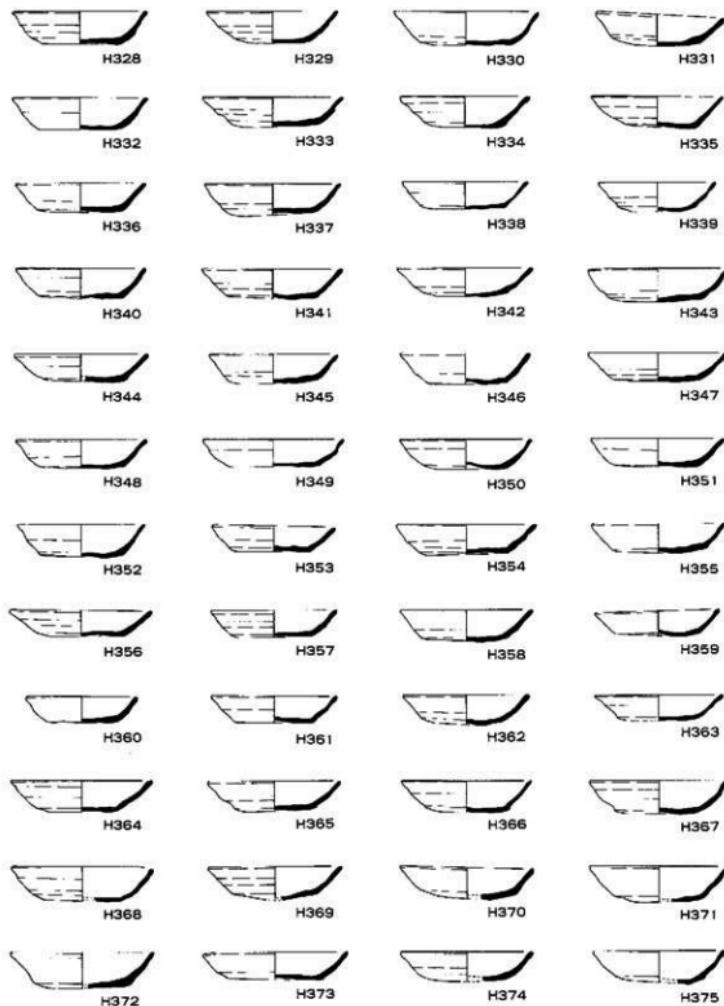
H278~H280・C461~C470(SD23)・C476・C477(SD17)  
 C471~C475・C478・C479(SD17)・C480(SB38(P-1))  
 C482・A61(SB38(P-3))・C481(SB37(P-2))・  
 H281・K002(SE06 1層下層(1層))・C483~C488・A62(SE06 15~22層(II層))

0 20CM



0 20CM

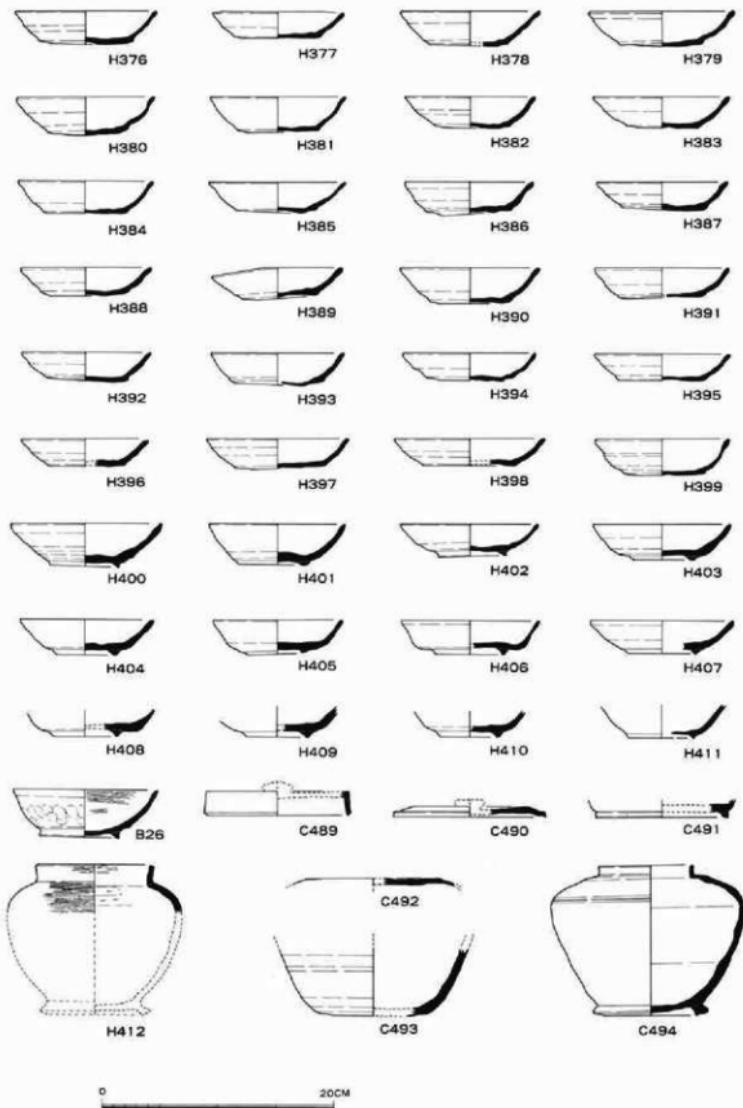
H282~H327(SE06 23層(IV層最上層))



0 20CM

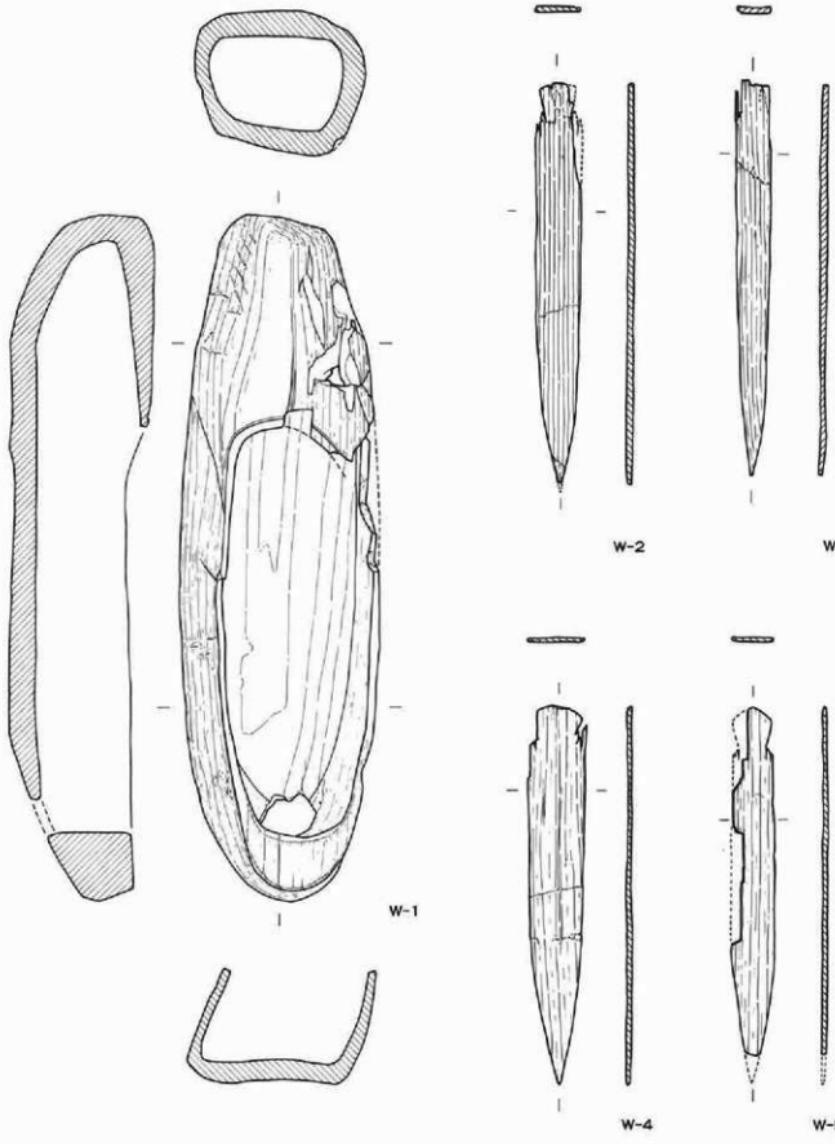
H328~H375(SE06 23層(N層最上層))

図版一三二 出土遺物実測図



H376～H411(SE06 23層(Ⅳ層最上層))  
H412・C492～C494(SE06 29層(Ⅴ層最下層))

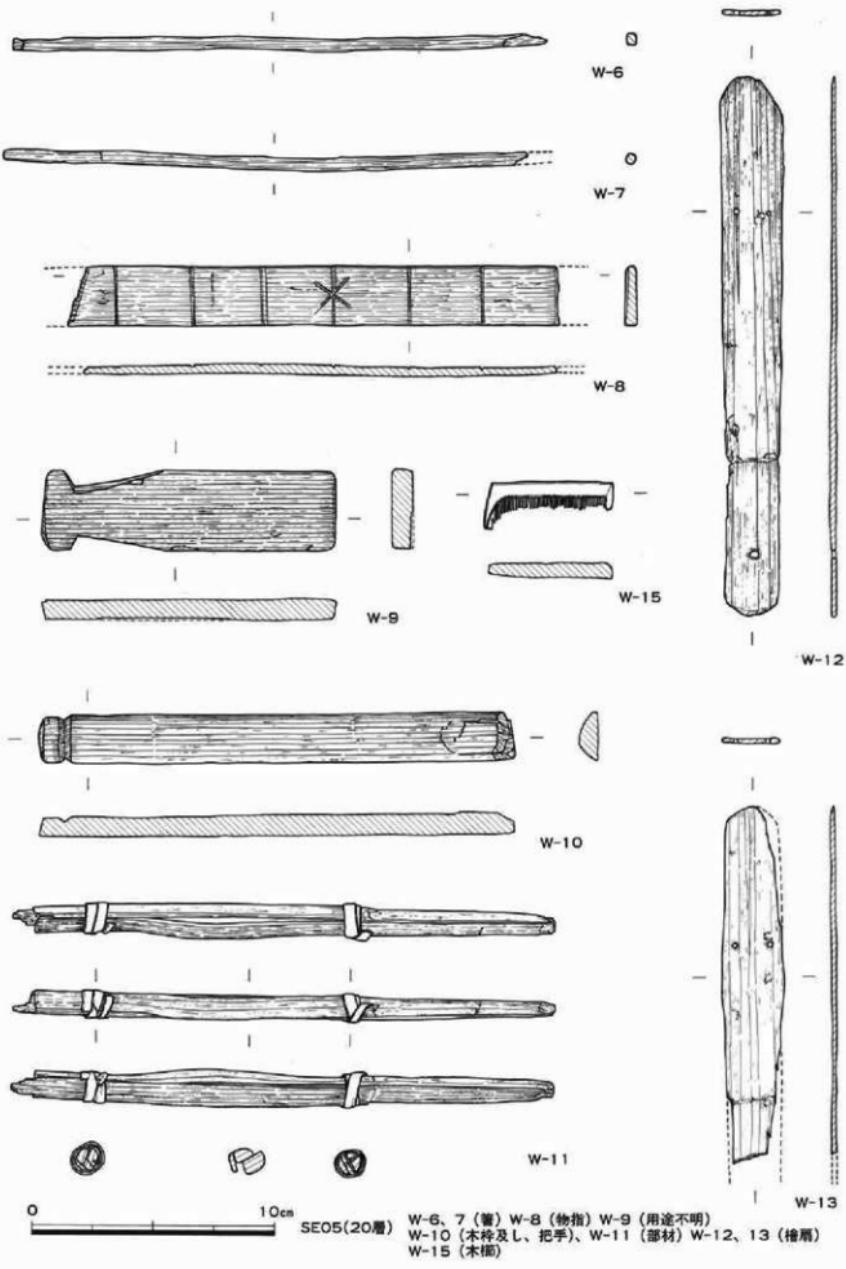
図版一二三 木器・木製品



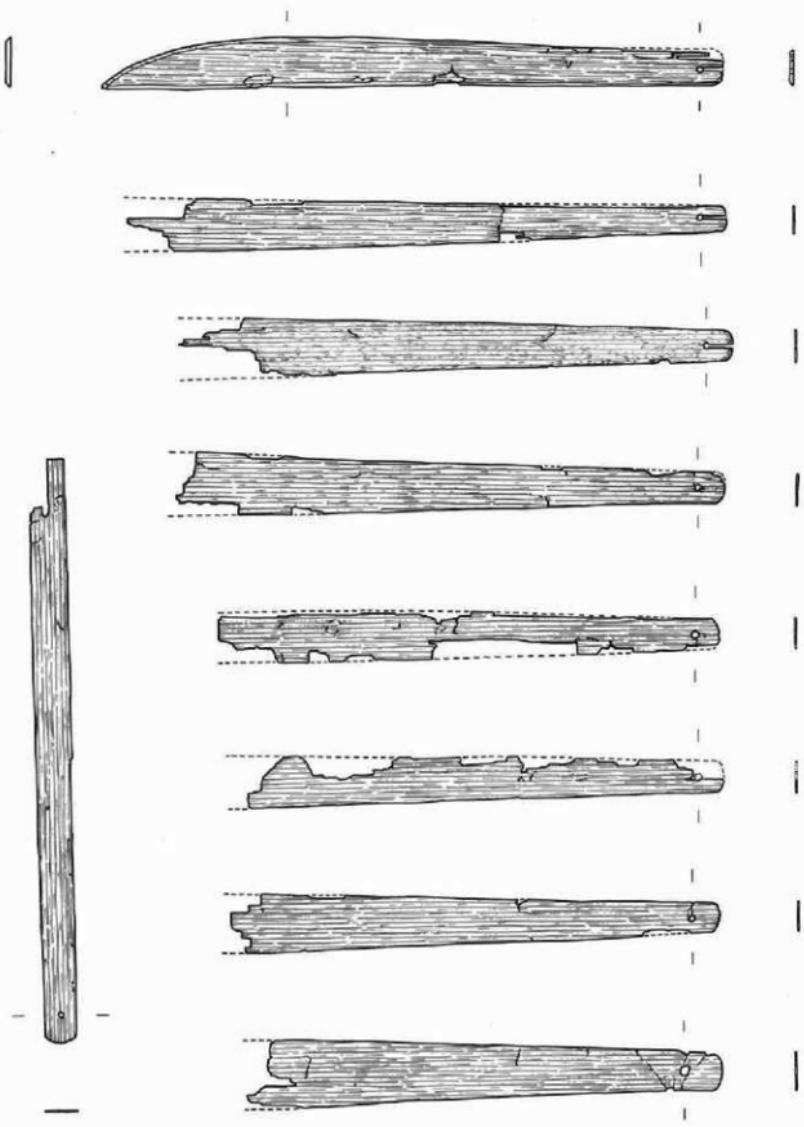
SE02 W-1 (木器)  
SE05(20層) W-2~5 (薪串)

0 10cm

図版一二四 木器・木製品

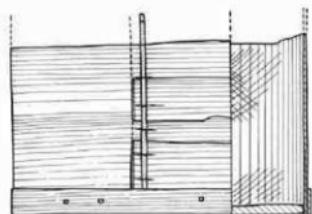
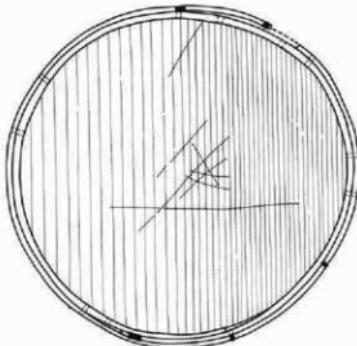


図版一二五 木器・木製品

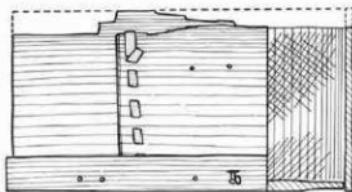


SEO5(20層) W-14 (柵構)

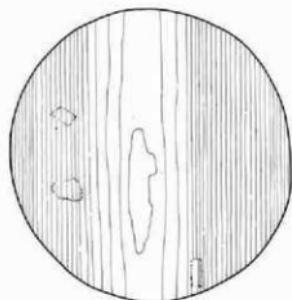
W-14  
0 10cm



W-16

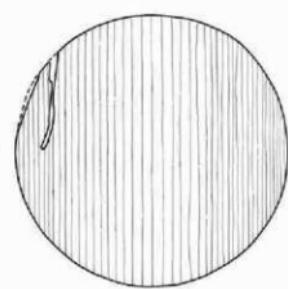


W-17



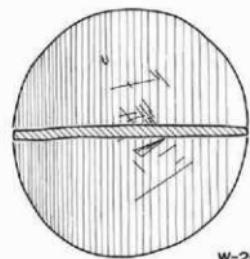
W-18

SE05(25層) W-16、17 (曲物)  
SE05(18層) W-18、19 (曲物、底板)

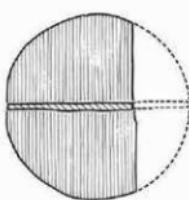


W-19

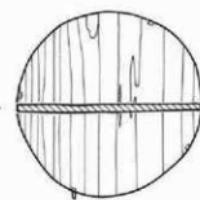
0 20cm



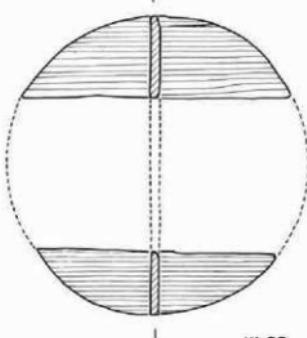
W-20



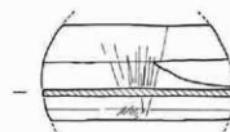
W-21



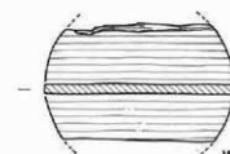
W-22



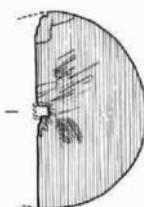
W-23



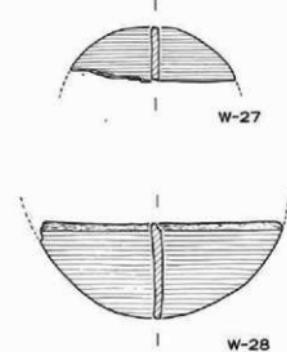
W-24



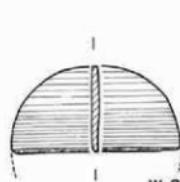
W-25



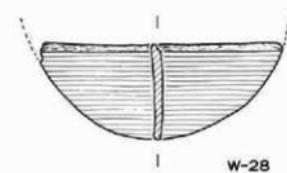
W-26



W-27



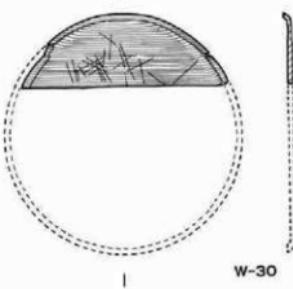
W-29



W-28



W-31



W-30

SE02(16層) W-20 (曲物、蓋板?)

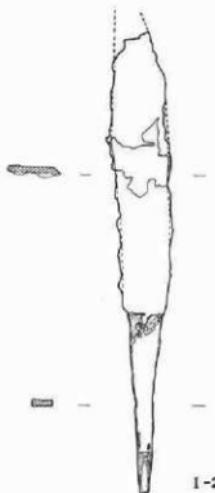
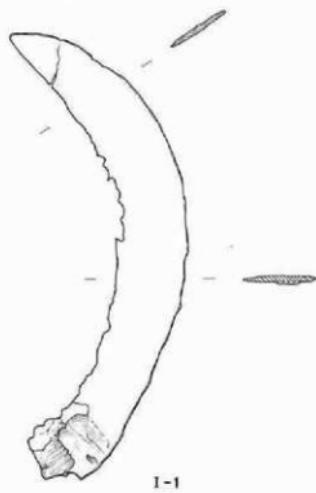
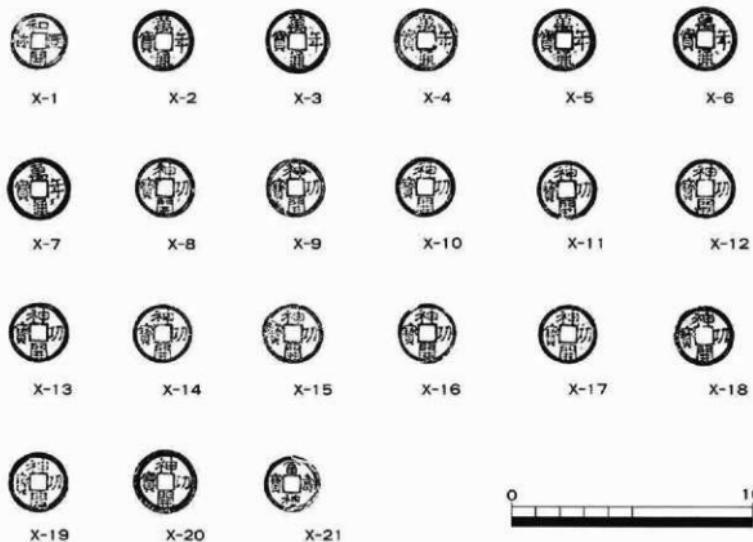
SE06(23層) W-21 (曲物、蓋板) W-22 (曲物、底板)

SE05(18層) W-23 (曲物、蓋板) W-24、25 (曲物、底板?)

SE05(20層) W-26 (曲物、蓋板) W-27~29、31 (曲物、蓋板?)

W-30 (挽物、木皿)





SE05 (X21、I-1、2)  
SE06 (X-1~20)

矢倉口遺跡発掘調査報告書  
—国道1号京滋バイパス間遺跡発掘調査報告書第3冊—

1987年3月

編集 滋賀県教育委員会  
草津市教育委員会  
発行 滋賀県教育委員会  
財団法人 滋賀県文化財保護協会  
印刷 宮川印刷株式会社

# 矢倉口遺跡発掘調査報告書

—国道1号京滋バイパス関連遺跡発掘調査報告書第3巻—

付図1 特別地区平面実測図

付図2 Z地区平面実測図

付図3 A地区平面実測図

付図4 B地区平面実測図

付図5 C地区平面実測図

